

寄	贈
鎌田元弘氏	平成 年月日

D B
457
1987
(H)

都市近郊農村地域における混住化に伴う
居住環境計画に関する研究

1987年

鎌田元弘

目次

はじめに

1 節 研究対象の捉え型	1
2 節 本研究の概要	3

第1章 研究の目的と方法

1 節 研究の背景	13
2 節 基本的認識	18
3 節 研究の目的	21
4 節 研究の方法とフロー	22
5 節 混住化に関する先行研究と本研究の位置づけ	29
(1) 都市計画学・農村計画学・建築学の立場から	29
(2) 農村社会学の立場から	33
(3) コミュニティ論の立場から	37
(4) 集落地理学の立場から	41
(5) 日本村落史学の立場から	44
(6) 民俗学の立場から	46
(7) 混住化に関する最近の研究動向	49
6 節 調査の枠組み	57

第2章 大都市周辺地域の混住化類型とその計画的課題

1 節 研究の目的と方法	67
2 節 混住化指標の抽出	68
3 節 広域レベルにおける混住化類型	76
4 節 混住地域区分とその特性	82
5 節 各類型の空間分布の検討	90
6 節 まとめ	95

第3章 集落レベルにおける混住化類型とその特性

1 節 研究の目的と方法	103
2 節 研究対象地域と事例調査について	107
3 節 居住者の属性と地域交流の実態	115
4 節 地域交流の「地域社会類型」別特性と評価	125
5 節 コミュニティ意識の特性	137
6 節 地域交流の実態とコミュニティ意識の関係	147
7 節 まとめ	151

第4章	集落の社会的特性としての「むら柄」の考察	
1節	研究の目的と方法	160
2節	調査について	162
3節	「むら柄」の仮説的定義	163
4節	新旧住民関係における「むら柄」の影響	166
5節	「むら柄」の定量的分析	168
6節	「むら柄」の定性分析	173
(1)	分析の方法	173
(2)	考察	174
7節	まとめ	190
第5章	新旧住民の居住地形態からみた混住化集落の特性	
1節	研究の目的と方法	196
2節	調査について	197
3節	集落形態のパターンと特徴	199
4節	新住民居住地形態の分類とその特性	202
5節	新旧両住民の居住地形態の組み合わせとその特徴	208
(1)	組み合わせのパターン	208
(2)	自然環境条件	217
(3)	施設配置と道路構成	230
第6章	混住化集落における居住環境整備について	
1節	各類型の相互関係	244
2節	実態指標からみた整備方式	248
3節	ストック指標からみた集落の評価と住宅地整備	253
(1)	旧住民から新住民への期待	253
(2)	新住民側の期待	254
(3)	「むら柄」による条件の違い	256
(4)	「集落形態」による条件の違い	257
(5)	「むら柄」と「集落形態」による集落の評価と整備方法	259
補論A	都市－農村計画の系譜	
1節	ハウードの田園都市とその前後の展開	268
2節	日本における都市－農村の関係の系譜	277
3節	現代における混住化への過程と課題	281
4節	まとめ	285
補論B	混住化コミュニティと空間形成	
1節	混住化の空間認識と空間構造	293

2節 混住化集落における空間的ストックの活用とコミュニティ形成	302
3節 宅地開発パターンとコミュニティ形成	306
付録資料	
① 調査地域概要	
・ 荃崎町の現況と沿革	312
・ 三和町の現況と沿革	314
② アンケート調査票	
・ 対象集落選定のための調査票	318
・ コミュニティ把握のための調査票	319
・ 集落の社会的体質把握のための調査票	328
③ 調査データ	
・ 「コミュニティ調査」プログラム	336
・ 「コミュニティ調査」データ	338
参考文献リスト	356
研究業績	359
あとがき	362

図表目次

第1章

図1-1	混住化の地域社会類型	24
図1-2	研究のフロー	26

第2章

表2-1	混住化指標の抽出に用いた指標群	69
表2-2	主成分負荷量と固有値	71
表2-3	各指標の地域別平均値	72
表2-4	類型区分と事例数	79
表2-5	類型区分と地域社会類型との対応	79
表2-6	代表指標の類型別平均値と事例数	81
表2-7	比較指標	83
表2-8	代表指標と各指標の相関係数	83
表2-9	各指標の類型別平均値	85
図2-1	内部非農家率の分布	92
図2-2	非農家集団率の分布	92
図2-3	S40~45年人口増加率の分布	92
図2-4	S50~55年人口増加率の分布	92
図2-5	5タイプの分布	93
図2-6	都市ゾーンと混住ゾーン	96
図2-7	首都圏のゾーン構成	96

第3章

表3-1	対象集落の概要とアンケート調査回収状況	110
表3-2	調査対象集落の概要, 調査票配布回収状況, 住民構成	111
表3-3	アンケート配布回収状況	113
表3-4	コミュニティ意識の調査項目	114
表3-5	居住者タイプ別属性指標の分布の差の検定	116
表3-6	居住者タイプ別職業・職種・勤務先	118
表3-7	居住者タイプ別世帯構成	119
表3-8	居住者タイプ別居住形態・住宅面積	119
表3-9	居住者タイプ別各指標の分布の差の検定	121
表3-10	地域活動の実態(肯定的評価の平均値)	123
表3-11	集落の類型化	126
表3-12	「地域社会類型」別評価指標の平均値	128
表3-13	全体及び「地域社会類型」別主成分負荷量	129

表3-14	「地域社会類型」別居住者タイプ別主成分得点の平均値	132
表3-15	新住民の期待と満足	135
表3-16	居住者タイプ別因子分析の負荷量	138
表3-17	居住者タイプ別各項目の平均値	139
表3-18	「地域社会類型」別因子分析の負荷量	141
表3-19	「地域社会類型」別各項目の平均値	142
表3-20	「地域社会類型」別居住者タイプ別因子得点の平均値	146
表3-21	地域交流とコミュニティ意識	148
表3-22	コミュニティ意識のT検定	141
図3-1	対象地域、対象集落の位置	108
図3-2	地域活動の実態	122
図3-3	「地域社会類型」別居住者タイプ別主成分得点セントロイド	132
図3-4	コミュニティ意識モデル	145
図3-5	「地域社会類型」別居住者タイプ別因子得点セントロイド	145
図3-6	「地域社会類型」別因子得点セントロイド	146

第4章

表4-1	ヒアリング調査項目	164
表4-2	集落の活動（新旧住民関係が良好な集落）	170
表4-3	集落の活動（新旧住民関係が悪化している集落）	170
表4-4	新旧住民の関係からみた集落活動の比較	170
表4-5	天宝喜集落	175
表4-6	山田集落	179
表4-7	主な年中行事（大字山田）	180
表4-8	間中橋集落	184
表4-9	主な年中行事（間中橋）	185
表4-10	城山団地	188
表4-11	主な年中行事（城山団地）	189
表4-12	事例集落の「むら柄」と要因	193
図4-1	集落の地縁関係	177
図4-2	N家の分家（山田集落）	181
図4-3	班構成（山田）	181
図4-4	U家の分家（間中橋）	186
図4-5	班構成（間中橋）	186
図4-6	「むら柄」モデル	193

第5章

表5-1	空間形態分類別主成分スコア、因子スコアの平均値	207
表5-2	空間形態分類別来住理由	207
表5-3	空間形態分類別近隣環境の満足	207

表5-4	新旧住民居住地形態の組み合わせ	209
図5-1	集落形態と新住民居住地形態の組み合わせタイプ	210
図5-2	昭和20年代の山田	211
図5-3	昭和20年代の東諸川	214
図5-4	平地林を残した開発	214
図5-5	昭和20年代の間中橋	215
図5-6	昭和20年代の諸川西部	214
図5-7	地形現況(山田)	219
図5-8	緑地分布(山田)	219
図5-9	地形現況(東諸川)	221
図5-10	緑地分布(東諸川)	221
図5-11	地形現況(間中橋)	223
図5-12	緑地分布(間中橋)	224
図5-13	地形現況(高崎・城山)	225
図5-14	緑地分布(高崎・城山)	225
図5-15	地形現況(諸川西部)	226
図5-16	緑地分布(諸川西部)	226
図5-17	施設配置(山田)	235
図5-18	施設配置(東諸川)	235
図5-19	施設配置(間中橋)	238
図5-20	施設配置(高崎・城山)	238
図5-21	施設配置(諸川西部)	240
写真5-1~13		

第6章

表6-1	集落類型・空間形態分類による開発計画上の留意点	249
表6-2	集落プロトタイプによる開発条件・開発方式	261
図6-1	各類型の相互関係	246
図6-2	集落プロトタイプによる整備形態モデル	261
図6-3	プロトタイプと実態指標の組み合わせ	262

補論A

図A-1	オーエンのコミュニティ構想(1817年)	270
図A-2	ハワードのダイアグラム	272
図A-3	ゲデスのヴァレー・セクション	275

補論B

図B-1	農村的空間と都市的空間	295
図B-2	コミュニティ意識と空間認識	299
図B-3(A)	新旧住民が積極的な場合	299

図B-3 (B) 新旧住民が消極的な場合	299
図B-4 各空間レベルにおける新旧住民空間の比較	305
図B-5 血縁新住民と来住新住民を組み合わせた例 (高崎集落)	308
図B-6 累積入居割合	308

(以上、49表、55図)

はじめに

はじめに

1、研究対象の捉え方

環境計画、環境デザインといった分野が他のデザイン領域と異なるのは、デザインの対象が「地域」という特殊性からくる。「地域」は社会性を持った空間領域で、他のデザイン領域ともっとも異なるのは、その領域が極めて広いこと。生活の全体を包含する全体性をもっていること。全くゼロの状況から出発するデザインは在り得ず、必ず計画対象としての「場所」があること。等があげられよう。特に3番目の「場所」について考えると、「場所」が地域固有のものであるという認識に立てば、デザインの対象は一般化しえないものとなり、科学的方法で成しうることは、「場所」に対する認識の方法を確立することと、一般化しえない「場所」をあえて「まとめる」という方向である。しかし近代都市計画の理念はこの「場所」を固有のものとして認識することは極めて不得意なことであつた。まったく白紙の状態（と認識した）の地域をデザインすることを中心としまたその体系が科学的方法として確立されてきた。

近年、地域の趨勢として、都市住民が農村に居住することが始まっている。一般的に言われる混住化現象である。これは従来都市に住んでいた住民がなんらかの都合で農村に住むことであり、都市住民が都市の周辺に無秩序に住みつくとする現象（スプロール）とは異なる。また計画論でも都市と農村がコミットした計画論・計画案は多数あるがいずれも都市的要素と農村的要素を組み込んだ新たな都市を形成する立場が中心で今日のように農村側に都市住民が居住すると言う計画理論は極めて少ない。混住化のような現象が生じたのは近年のことであり歴史上ほとんど前例がない。都市と農村の空間構造・社会構造は大きく異なる。このようなとき都市計画の計画理論は、地域に対する認識の経歴からしても、「場所」性、特に農村部の固有性を評価するような理論はほとんど持ちあわせていない。一方、農村計画という領域もあるが、農村計画学では従来は農村独自の固有性、地域のストックまたその読み取りと言った作業については多くの経験と成果があるが、都市住民を迎え入れて新たな地域を形成すると言う視点からは実績も計画理論も少ない。このように混住地域は、既成の都市計画分野にも農村計画分野にも入らない領域であり、中間的領域としてまったく新しい理念をもって問題に対応しなければならない。混住地域の計画論では農村と言う場所の固有性を尊重するということと、新たな居住地として一般化するとい

うことの矛盾した問題を乗り越えることが重要な課題である。

2、本研究の概要

本研究は、『都市住民の居住地を近郊混住農村地域に計画するための基礎的な整備方法を、農村地域の社会的・空間的ストックをいかしたコミュニティ及び居住環境の形成の立場から明らかにすること。』を研究目的としている。研究に先立つ基本的認識は、①均質化から個性化へ向けた計画論の重視、②実態（現状）分析とストック分析の組み合わせの重視、③空間レベルの段階性の重視、④人間－居住環境系としての捉え方の重視、以上の4点である。本論では単に都市と農村の関係に注目するだけではなく、都市住民を農村に迎え入れることの計画的視点を重視して、できるだけ抽象論をさけ、より具体的な手法の確立を念頭において進めた。そのため、計画論としての一般的合理性を得ることと、都市住民を受け入れる側の農村の特殊性、固有性を重視すると言う、相互に矛盾した問題を解決することが重要になる。そこで本論では地域的ストックの読み取りを重視しそれを類型化によって一般化することと、現状分析から得られる指標を複合的にもちいることの2つの側面を組み合わせることにより、混住地域を評価する指標としての安定性を獲得するという方法をとった。研究の手順は、混住地域の状況を第1に広域的な

観点から考察し、その論拠にもとずいて、研究対象事例地を選定する。第2に現実的な計画単位として有効であると考えられる集落を計画対象に据え、地理学・社会学的・民俗学・歴史学・建築計画学等の方法を用いながら多面的に分析し、その過程を通じて混住化地域の開発計画に有効な指標を抽出していく。以上から混住化集落の整備計画の基本的な視点を考察する。といった順で進める。以下に各章別の概要を述べる。

● 第1章

研究の背景を社会的状況から整理し問題の設定を行った。次に研究に対する基本的認識について述べ、研究の主たる目的を述べた。研究の前提として、作業仮説として「地域社会類型」の設定を行い、「旧住民型」「農家・新住民型」「各タイプ混合型」「新住民集団型」の4つのタイプを「混住地域における地域社会類型」とし（本論では以下「地域社会類型」と略称する）、本研究における「混住化」とはこの4つのタイプで表現される地域社会を形成している状況とすることを述べた。次に先行研究のレビューを行っている。ここでは、本論に直接関わる各学問領域から、主要文献を取り上げ本論の枠組みを設定し、次いで最近の混住化に関わる研究動向を概観し本論の位置づけを行っている。最後に、研究を進めるための調査の枠組みの概略を述べた。

● 第2章

広域レベルでは既存統計指標を用いて首都圏近郊の市町村を単位にして作業仮説である「地域社会類型」の設定を行い、類型の地域区分の特性について考察した。はじめに、広域における多次元の分析から複合的意味を持つ混住化を示す基本的指標の抽出を行い、次に人口指標・社会経済指標・空間指標から類型の妥当性を検証し、類型の分布特性および広域での計画的課題について考察している。類型の分布形態を観察することにより、首都圏における混住地域は圏域的な構成ではなく、市松模様をなして分布していることを明らかにし、広域レベルにおける混住ゾーンの計画課題を考察した。

● 第3章

集落レベルでは社会レベルと空間レベルに分けて考察を進めた。本章では集落社会レベルについて述べている。広域レベルでの研究成果を踏まえて、広域で有効性が確認された「地域社会類型」から、それぞれを代表する調査事例地を選定する。選定された集落の住民構成から居住者タイプを設定し、その組み合わせから集落レベルにおける「地域社会類型」を設定した。集落ではコミュニティ自体が居住者の人間性に直接係わることであるから単一の現象面からだけの分析では把握し難い面がある。そこで類型化の妥当性を検証するための実態指標として、居住者の行動的側面、心的側面の両面から

の分析を行った。まず、地域活動・住民交流などの実態を分析し各類型間に明確な特徴が観察されることから、「地域社会類型」がこれらのコミュニティの行動的側面における実態を表す指標として有効であることを確認した。次に、コミュニティ意識の把握の方法を検討し、その分析を行い各類型間に明確な特徴が観察されることから、「地域社会類型」がコミュニティの心理的側面を把握する指標としても有効であることを確認した。以上の分析から「地域社会類型」が複合的意味をもった類型であることを検証した。

●第4章

ここでは集落の社会的ストックとして集落の社会的体質の指標化を行った。集落の社会的体質を総体的に捉える指標として「むら柄」を仮説的に設定する。ここで「むら柄」は拘束力因子と展開性因子で形成されるものとする。分析の方法として第一段階では定量的方法から、拘束力が弱まり展開性が大きくなると新住民に対して協調性が見られることが観察された。次に第二段階の定性的方法から「むら柄」が多義的な意味を持つ指標であり、集落の歴史や基礎的な社会条件が「むら柄」の形成と関連があることがわかった。以上の分析から「むら柄」が社会的ストックの指標として有効であることを確認した。

●第5章

ここでは、集落の空間レベルから実態的指標とストック指標を抽出することを主な目的とした。新住民の住宅の配置形態から「新住民居住地形態分類」を設定し、この分類を用いて地域交流・コミュニティ意識・居住環境評価の分析を行った。その結果、各類型間に明確な特徴が観察され、空間レベルの実態指標としての有効性を確認した。次に空間的ストックの指標として「集落形態」に着目し、混住化の立場から分析した。その結果、「集落形態」により混住化の形態が規制を受けること。自然条件・施設利用状況にも特徴が見られることが観察された。以上から空間レベルの集落の総合的なストックを表す指標として「集落形態」が有効であることを確認した。

●第6章

ここでは結論として、以上の各レベルの分析からその有効性が確認された実態指標・ストック指標を、集落社会レベル・集落空間レベルのそれぞれから抽出し、それらの指標を用いて地域を典型的に考察し、混住化に伴うコミュニティ形成のための居住環境計画について考察した。第一に実態指標の「地域社会類型」「新住民居住地形態分類」の2つを用いて集落を分類しそれぞれのタイプの特徴から混住化に係わる整備計画上の留意点について考察を加えた。第二にストック指標の「むら柄」「集落形態」の2つを用いて集落を分類し、実態指標で得られた知見を加味しながら、より具体的な混住

化集落の整備条件・開発方式について検討を加えた。

以上、各章別に主な検討結果を記述したが、次に横断的に本論の主要なフレームを説明する（表0-1）。

本論では基本的にはいくつかの視点からの類型化を骨子としており、その類型化を用いて計画論を展開するという構成を持つ。まず類型化については、①広域レベルでの類型化 ②集落レベルの類型化、さらに集落レベルでは②-1実態指標による類型化、②-2ストック指標による類型化を社会レベル・空間レベルのそれぞれについて行った。計画論の展開については広域レベルの類型化を受けて広域レベルの計画課題をまとめ、集落レベルの類型化を受けて、実態指標から見た混住化集落の整備条件およびストック指標から見た整備条件の整理を行った。

表 0-1 本論のフレーム

	広域レベルの分析		計画論
総合指標	地域社会類型 (2章)		計画課題 (2章)
	集落レベルの分析		計画論
	社会指標	空間指標	
実態指標	地域社会類型 (3章)	新住民居住地形態 (5章)	整備条件 (6章)
ストック指標	「むら柄」 (4章)	集落形態 (5章)	整備条件 (6章)

2、本研究の意義

本研究の意義は、混住化を積極的に評価し、具体的に混住地域の評価を可能とするような手法を確立したことにある。その具体的な成果として、

(1) 広域レベルの分析を行い広域における混住化の状況を総合指標として簡便に分類する方法を示したこと。それにより①広域レベルのなかでの各市町村の混住化地域としての位置付けが可能になり、②混住化に伴う全体的な広域の計画課題の策定が可能になる。

(2) 広域レベルと集落レベルの分析が段階的になされており、広域レベルから選定された市町村について集落レベルの類型化を行ったこと。それにより市町村のなかで混住化地域整備に適合した集落の選定が可能になる。

(3) 集落レベルの類型化の方法として空間レベルと社会レベルの組み合わせによる類型化の方法を示したこと。従来、それぞれが独立した類型の設定は実例が見られるが、両者を組み合わせた類型の設定はあまり実例がなく、集落の社会レベルー空間レベルの一体的な評価が可能になること。また、本論では社会レベルとして行動面、意識面の両面から多層的な分析を試みていることにも特徴がある。

(4) 集落レベルの類型化の方法として実態指標による要素的分析とそれを補う意味でのストック指標による記述的、総体的な分析を

重合して用いていること。従来、集落レベルの現状分析から得られた実態的指標による評価は多数実例があるが、集落の持つストックを指標化し計画的視点から活用できるような簡便な方法がなかった。そこで本論では、簡便でしかも多義的意味をもつ指標をストック指標として確立した。

(5) 集落レベルにおいて、社会指標と空間指標、実態指標とストック指標の組み合わせとして、整備条件を具体的に整理したこと。

以上の5点があげられる。

第1章 研究の目的と方法

第1章 研究の目的と方法

1、研究の背景

1960年代から70年代前半にかけて我が国の高度成長に伴う大都市圏の爆発的な拡大は、都心を遠く離れた周辺農村地域にまで都市就業者の居住地を展開する結果となった。しかし、70年代後半からの低成長、安定成長の状況のなかで、都市化の傾向は一応の落ち着きを見せ始めており、その拡大規模も構造形態も、概念的には大枠が定まりつつあると言えよう。

このような状況の下で、首都圏を対象に見た場合、これからの都市開発の主たる任務は次の3つに大別して理解するのが適切と考えられる。第1は、首都構造を多核的複合体として再編しようとする首都改造の理念に対応して、これを空間的地域的に具体化していくための開発（核都市開発、軸状開発、群開発など）である。第2は、既存の開発の間に取り残された地域の整備（都市内部または蚕食的に開発された近郊地帯などの都市前線内部における、再整備、再開発を含む開発）であり、ここでの目的は、その地域の地域的熟成を実現していくことである。第3は、都市圏外縁部に広がる農村地域において摸索されるべき、都市と農村との間での調和ある発展を目

的とする開発である。

本研究は、上記の3番目のケース、農村地域に都市住民を導入し、これを定着させるための開発のあり方について検討し、こうした地域の環境整備計画の手法を探ろうとするものである。これら大都市圏外縁部の農村地域における住宅地開発は、受け入れ側の対応からも、これまで行われてきたような大規模開発を実施することは現在では極めて困難となってきている。また、上述したような安定成長下での住宅、宅地需要の実勢をみても、さらに事業主体にとっての採算上、経営上の判断から考えても、新しい計画の考え方、手法の展開が求められているのが現状である。

こうした地域での開発の在り方を考えたとき、受け入れ側の農村社会が置かれている現状や都市的要因の導入への期待、既存の地域施設の活用を中心とする一体的コミュニティの育成の可能性、特殊化する住宅地需要に対応する柔軟性などが重要な条件となるものと思われる。そしてこれらの要件を満足する開発方式として、小規模で地域になじんだ住宅地開発を念頭において、これからの農村地域における開発の在り方を探っていく必要があるものと考えられる。

80年代に入って、人々の価値観は多様化し、個人生活の拠点としての住宅に対する人々の要求もまた多様なものになりつつある。

その中には、子育ての期間に必要な環境として、自然度が高く広い空間を享受できる農村地域を選択する家族、退職後のゆったりした老後を送る場として、人情味豊かな田園生活を志向する老人世帯、また生活時間や勤務場所にあまり制約のない自由業の人たちなどがある。

こうした人々は、それぞれの要求が適度に満たされる住宅地が農村地域に供給されれば、間違いなくそこを生活の拠点として選択するであろう。彼らには、従来の画一的で大規模な疑似都市的な住宅地では彼らの要求を満足することができないのである。そして彼らは、条件が備わって農村地域に来住した場合は、定住的な地域との結びつきをもった生活を繰り広げることを期待するのである。現在の農村地域を注意深く観察すれば、数は少なくとも、このようなライフスタイルの人々を発見することができる。

一方、農村地域を考える場合、誤解のないようにしなければならないのは、それが急激に変化している、ということである。これまでの農村居住者についての伝統的な概念、すなわち彼らの多くは農業者であり農村的生活様式をもった人々である、という捉え方は既に成立しなくなっている。むしろこうした地域では、農村集落こそが生活空間の圧倒的な部分を占めていることは事実である。しかしその集落の居住者の多くは非農家であり、集落は近接地域に通勤す

る人々の居住地としての機能を強く持つようになってきている。

このことは、伝統的な村落共同体、すなわち生産と生活が深く結びつき構成員の利害が基本的に一致していることにもとづいて成立してきたコミュニティが変容しているであろうことを示唆している。全国的な農業の後退と他産業の進出、都市的生活様式の農村地域への浸透、地方都市への大都市からの人口の還流、内陸工業地域の形成、交通条件の改善と流動性の増大などの多様な要因の相乗作用によって、伝統的な農村像は大きく変化しているのである。

大都市圏の外縁部農村地域では、たとえ都市からの新住民の流入がなくても、在来の集落住民自体の就業の形態や生活様式が都市型のものへと変化し、それにつれて生活意識や社会組織の維持システムが変容し、コミュニティの結びつきはゆるやかなものになっている。集落という空間様式は変わらないまでも、その内容が変化し、依然として農業生産に生活の基盤を置く人々、都市に働きに出て集落を単なる居住としている人々が混在して生活しているのが実情である。

こうした状況を混住化（の一種）と呼び、混住化が起こっている地域を混住地域と呼ぶと、混住地域では、上述したように、もはや伝統的農村コミュニティをそのまま持続させることは不可能である。かといって、住宅需要圧力の減退が予想されるなかで、混住地域が

全面的に都市地域となり、都市的コミュニティが形成されることを期待することも現実的ではない。

混住地域において、近代化した農業が健全に維持され、しかも都市型の住民が定住できる居住環境を実現するためには、このような地域特有の新しいタイプのコミュニティの形成が必要条件となる。

この新しいコミュニティの可能性を検討し、それが形成されるための条件を明らかにすることは本研究の大きな目的である。そしてこの課題を追及するなかで、新住民を計画的に定着させる方法、すなわち開発方式についてこの展望を描くことが可能になると考えるのである。

2、基本的認識

研究に、先立って著者の基本的認識について述べる。

本論は、以下の4点の基本的認識に基づいて進められる。

- ①均質化から個性化へ向けた計画論の重視
- ②実態（現状）分析とストック分析の組み合わせの重視
- ③空間レベルの段階性の重視
- ④人間－居住環境系としての捉え方の重視

以下それぞれに若干の説明を加える。

①均質化から個性化へ向けた計画論の重視¹⁾

近代における科学的方法は合理主義を基盤としており、存在論よりも機能論を重視した立場をとっている。存在の全体を、機能を構成する均質的要素に分解し、各要素の関係を実体的に捉えるのではなく、関数関係で捉えようとする。このようにして得られた関数関係は、普遍的法則性を認められて一般化し、画一的パターンとして固定化される。地域計画、環境計画といった部門も例外ではなく、近代における計画論は、地域を均質的な対象として扱い、各要素に分解しその関係性を合理的に説明する方法がとられた。また、そのような計画理論に基づいて具現化された対象も均質的画一的なものとなった。こうした思考は、合理的・実証的手法として計画論の中核である再現性を説明するためには極めて都合が良かったし、実際

にすぐれた面もあることは否定できない。しかし、地域に関わる人間や社会などは、事象としても複雑で、個々を要素として機能論的分析で取り扱う方法では無理がある。これらの複雑な事象は要素間に複雑・多様な相互作用があり、変化が連続的ではなく、相互作用のある点を境にして全体の状態が一変してしまうこともある。またいくつかの条件を切り離して単純化すると、実体との隔たりが大きくなり事象の解明が難しくなる場合もある。しかしながら、現実には地域計画などに関わる理論は、このような機能論的思考が中心であり、特殊性を捨てて抽象的・画一的な認識をもたらすことになる。これは、多様な性格を持つ地域にとっては重大な問題であり、全体的な総体性の理解は困難になる。したがって、そのために失われる総体性の把握には、何らかの補完的思考が必要になる。

②実態（現状）分析とストック分析の組み合わせの重視

機能論的思考の補完のために本論では2つの分析の接近を試みる。一つは、実態把握のための統計的分析である。地域を均質化して把握せざるをえないという欠点もあるが、分析の項目として地域の質的な面を理解するために観念的、具体的項目を加え、また分析方法も解釈が部分的・画一的になることを避けるために、総体的で柔軟な判断を加えられるものを積極的に導入する（例えば主成分分析など）。次に地域の持つ特殊性、固有性といったものを要素に分解す

ると言う過程を避け、できるかぎり總体的に解釈する方法として、ストックの分析を考える。これは地域の歴史的集積の結果成立した人為的な「もの」や「こと」あるいは自然的立地条件などををストックとして位置付け、この分析をもう一方の大きな柱とする。これらはフロー型の論理においては合理的に捉えにくいことからその価値が見出されずに軽視されてきたものが多い。特に、従来農村地域では、特有の経済論理であったストック型経済の論理に基づくものがあり²⁾、これらの分析は地域の固有性を示す指標として有効であると考えられる。本論では、以上の2つの分析方法を組み合わせる用いることで地域の固有性を把握し、しかも計画論として一般化する方向を目指す。

③空間レベルの段階性の重視

空間には様々なレベルの設定が可能である。地域計画においても国土計画、広域地域計画、市町村計画、集落計画等数多くのレベルの計画案、計画論が存在する。しかし、計画論としてそれらが一連の構造を有するものとして体系的に把握されている例は少ない。広域における計画では、多分に地域が一般的抽象的に取り扱われ、各地域の特殊性が軽視され、そのためにいっそうフィージビリティの小さいものになる傾向がある。一方、集落計画などの狭域の計画では、地域の特殊性や利己的な部分が強調され将来的展望を欠くこと

が多く、それらを寄せ集めてみるとあまりに無秩序なものになりやすい。特に、計画自体がファッション的になり個性化をなくしている現在では、結果として似たような地域を国土全体に数多く産み出す結果ともなりかねない。本研究では、そのような反省から、日本国土全体のストックを高め、地域性を育む視点から、広域から狭域に至る連続性を重要視した計画論を進める。

④人間－居住環境系としてのとらえ方の重視

地域は、それが常にそれを取り巻く外部とも密接に関連しながら動いていく生活の拠点であり、全体的な視点を欠くことはできない。また、地域自体がひとつの生命体のように、一時点に停滞することはなく、その対応もダイナミックな指向性が必要とされる。さらに地域の居住者という主体とそれを取り巻く客体としての居住環境の相互作用が常に注目されなければならない。本論では、この点を重視し、人間と居住環境の関係を系として捉え、人間側の分析として行動的側面、意識的側面の2つの方向から接近し、居住環境側の分析としては社会的側面、空間的側面の2つの方向から接近し、これらが一体化したものとして地域を捉えていく。

3、研究の目的

本論の研究目的は、『都市住民の居住地を近郊混住農村地域に計

画するための基礎的な整備方法を、農村地域の社会的・空間的ストックをいかしたコミュニティ及び居住環境の形成の立場から明らかにすること』である。

研究の細部にわたる目的は、各章において記述する。

4、研究の方法とフロー

研究の方法は全体的に統一した方法を取り、はじめに混住化に関する作業仮説として仮説的類型を設定し、その仮説に基づいて混住化地域を構成する基本的な居住者および空間形態をいくつかのタイプで把握してその分析を行い類型の妥当性を検証する。次にその検証された類型を用いて整備計画論を展開するという方法をとる。

ここで本論における基本的命題であり研究全体における仮説でもある「混住化」について概念的に規定する。本論の立場のように、農村系の固有性に立脚するには、農村内部の居住者及び混住化に伴う来住者の様態の分析、及びそれらが一つの社会集団を形成する際の居住者集団間の相性とも言うべきものの検討は必須のことであり

またそれらの存立基盤（空間的混在条件、歴史的条件、社会的条件等）を解明することが重要になってくる。そこで本論では、混住化地域を構成する基本的な居住者タイプとその組み合わせに着目

して混住化を規定する。まず居住者を旧来からの地域居住者である旧住民と混住化の過程で地域に来住した新住民とに二分し、さらに旧住民については農業との係わりに関して農家旧住民と非農家旧住民に二分する。こうして混住化地域を構成する基本的な居住者タイプとしてとして農家・非農家・新住民をとりあげ、それらの組み合わせによって地域を次の4つのプロトタイプで示し作業仮説としての類型とする(図1-1)。本研究における「混住化」とはこの4つのタイプで表現される地域社会を形成している状況を言う。

農村地域が混住化に至る前段階として、農村地域の多くが農家である段階を「農家型」とすると、混住化の第一段階には2通りの方向が考えられる。1つは農村内部で農家の非農家化が進み階層分化が始まっている段階で、そのようなタイプをここでは「旧住民型」と呼ぶ。もう1つは農村地域内部では非農家化が進まず新住民の来住による混在化が進むものがある。そのようなタイプをここでは「農家・新住民型」と呼ぶ。混住化の第3のタイプは農村地域内部での農家・非農家の分化と外部からの来住が同時に観察されるものがある。ここではそのようなタイプを「各タイプ混合型」と呼ぶ。次に旧住民に新住民が加わるという現象だけ見れば「農家・新住民型」や「各タイプ混合型」と同じものであるが、新住民が集団的に来住し旧住民とは独立した集団を形成するという点では混住化の1つの

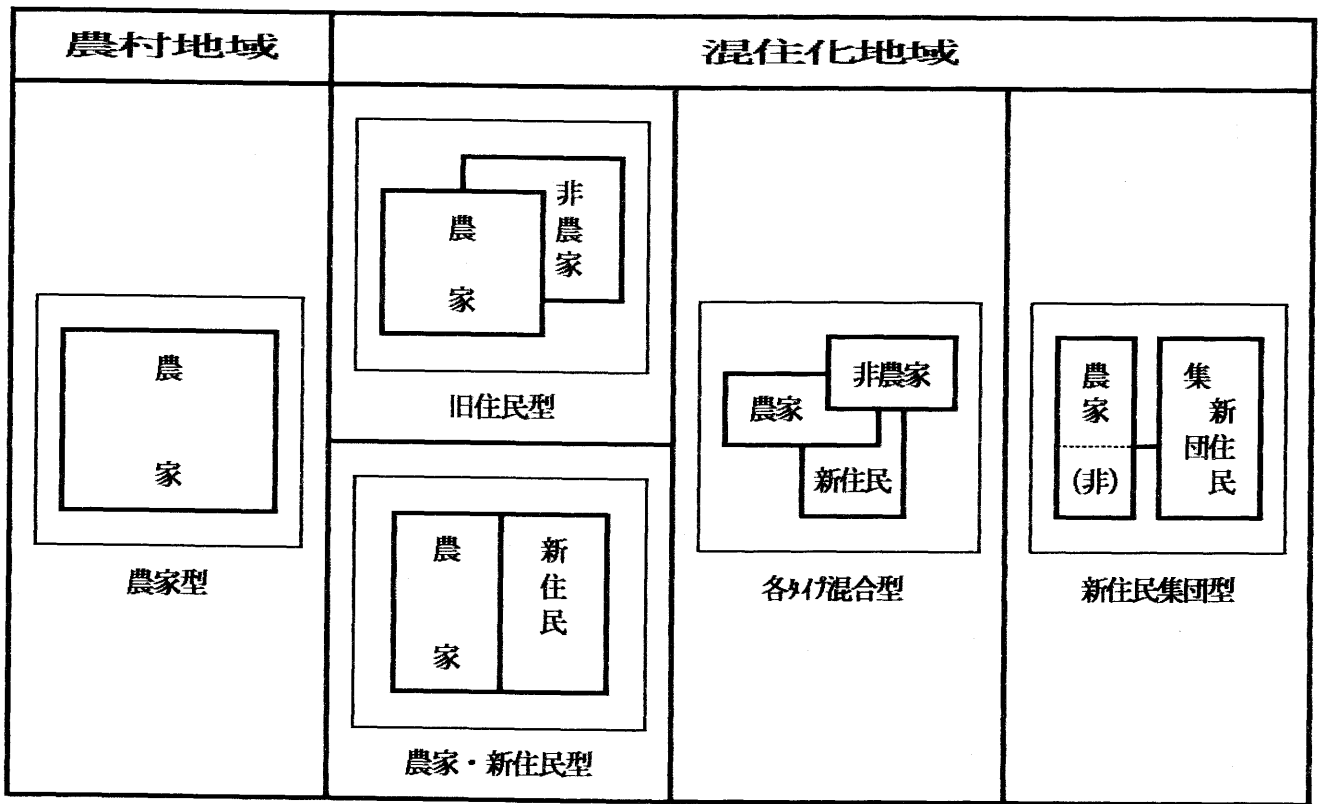


図1-1 混住化の地域社会類型

プロトタイプになるものがある。このようなタイプを「新住民集団型」と呼ぶ。以上の「旧住民型」「農家・新住民型」「各タイプ混合型」「新住民集団型」の4つのタイプを「混住化」として規定し、それらを「混住地域における地域社会類型」とする（本論では以下「地域社会類型」と略称する）。

次に、研究全体のフローを示す。まず基本的認識にそって、本論では図1-2に示したように研究を進める。

最初に基本的認識の③にそって、空間レベルを広域レベルと集落レベルに段階を分けて分析を進める。広域レベルでは既存統計指標を用いて首都圏近郊の市町村を単位にして作業仮説である「地域社会類型」の設定を行い、類型の地域区分の特性について考察する。次に人口指標・社会経済指標・空間指標から類型の妥当性を検証し、その類型を用いて広域レベルにおける混住ゾーンの計画課題を考察する。次にひとつの地域像として社会的、空間的領域性を持つ集落レベルでの分析を行い、大都市近郊の混住化農村のコミュニティを体系的に捉える。集落レベルでは基本的認識の④にそって、集落社会レベルと集落空間レベルに分けて考察を進める。まず集落社会レベルでは、広域レベルでの研究成果を踏まえて、広域で有効性を検討した「地域社会類型」から、それぞれを代表する調査事例地を選

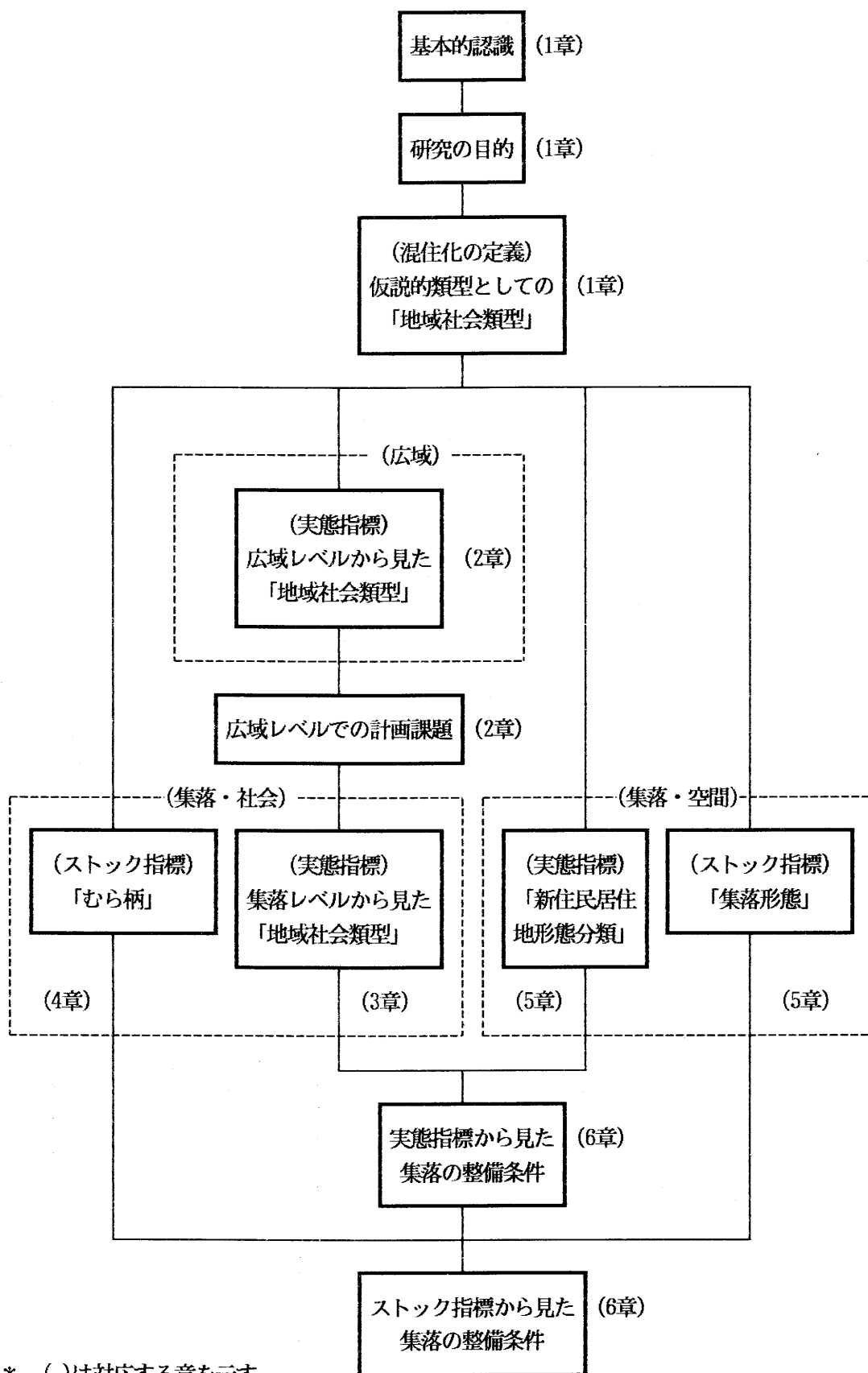


図1-2 研究のフロー

定し、選定された集落の住民構成から集落レベルにおける「地域社会類型」を設定する。集落ではコミュニティ自体が居住者の人間性に直接係わることであるから単一の現象面からだけの分析では把握し難い面がある。そこで類型化の妥当性を検証するための実態指標として、居住者の地域活動・個人の住民交流等の行動的側面、コミュニティ意識⁴⁾等の心的側面の2つを取り上げ、その両面から「地域社会類型」の妥当性を検証する。次に基本的認識の②にそって集落の社会的ストックとして集落（ここでは集落を旧住民集団として理解する）の社会的体質の指標化を行う（本論ではそれを「むら柄」と名付ける）。この有効性は集落の歴史的条件、社会的条件等を多層的に観察することにより検討する。

集落空間レベルでは、実態指標として新住民住宅地の集合の状況から「新住民居住地形態分類」を設定し、地域交流の実態及び居住環境評価から分類の妥当性を検討する。次に空間的ストックの指標として「集落形態」に着目し、集落空間の存立基盤としての条件を整理することにより類型としての妥当性を検討する。以上の各レベルの分析から集落社会レベル・集落空間レベルのそれぞれから実態指標・ストック指標を抽出し、それらの指標を用いて地域を典型的に考察し、混住化に伴うコミュニティ形成のための居住環境計画について考察する。

これらの分析の特色は基本的認識に基づいて、第1に広域レベルと集落レベルの分析が段階的になされていること。第2に集落の社会レベルとして行動面、意識面の両面から多層的な分析を試みていること。第3に実態指標による要素的分析とそれを補う意味でのストック指標による記述的、総体的な分析を重合して用いていること。の3点があげられる。

なお、本論では集落レベルにおいて、研究対象を中心集落には限定していないが、その理由は、混住コミュニティの形成には多様な展開が予想され、現実に混住化の進展の度合いが強く、施設・サービスの集積や人口規模の集積があるといった面だけから、中心集落だけに対象を限定することは、その展開の可能性を排除することにつながると考えるからである。

5、混住化に関する先行研究と本研究の位置づけ

本論ではいくつかの分野の中間的領域にかかわる事象を研究対象にしている。従って本論に関連する学問領域も拡大しており、研究へのアプローチが近い分野として都市計画学・建築学・社会学・地理学・村落歴史学・民俗学等の学問領域があげられる。具体的に各章との関連でみると、第2章の広域レベルでは広域圏の混住化の構造と特性を把握するために都市計画学の地域構造の理論に近いアプローチをとっている。3章の集落レベルの混住化類型では社会学の手法を用いている。特にここでは居住者の心理的側面を評価する方法としてコミュニティ理論の知見が有効になっている。4章の「むら柄」では農村社会学の「村社会」のとらえ方、民俗学の研究方法論・認識方法等が参考になっている。5章の集落空間では集落地理学における集落形態論、村落歴史学の村落形態論と起源論の視点、建築計画学の空間利用の視点を取り入れている。

本項ではこれらの各分野から主だった文献を取り上げ、本論の立場から批評を加える。さらに混住化に関する最近の研究動向からいくつかを取り上げ、本論の位置付けを行う。

(1) 都市計画学・農村計画学・建築学の立場から

この分野では、計画論としてはハワードをはじめとして都市と農

村の關係に着目した多くの計画論・計画案が存在する³⁾。しかしここではそれらの評価は割愛して本論に直接視点を与えるものとして2つの文献を取り上げそのレビューを行う。

第一に山森の『都市化にともなう農村地域構造の再編成に関する地域計画学的研究』を取り上げる⁴⁾。この研究は農村地域における都市化を「都市との相関關係にもとづく変容」であると規定し、都市化の経年的変容・都市との關係（特に空間距離を中心にすえて）の考察から地域を都市と農村が統合した地域的統一体として理解することに成功している。結論では具体的に空間のレベルによって、農村地域が依存する都市の人口集積規模による類型（第1次類型）、都市との依存關係による類型（第2次類型）、基礎生活圏内の集落關係にもとづく類型（第3次類型）のそれぞれを組み合わせた39の類型区分による「構造類型」を提案している⁵⁾。この研究の成果は、空間レベルを設定しておりそれぞれのレベルにおいて都市と農村の關係を考察していること。山森自身も言うように「農村地域構造の再編成」を在来の認識である「等質等方的な狭領域に限定される歴史的社會生活圏」に対置される地域概念としてとらえていることであり⁶⁾、極めて今日的な視座を与えている。現実に近郊農村においては日常生活都市の影響、最寄りの大都市の影響が地域開発・交通条件の急激な変化によりますます錯綜化してきている。また

農村内部にも都市化指向が見られ、従来のような単純な圏域構成としてはとらえられなくなっている。このようなときに空間レベルにより地域を整理し、それぞれのレベルにおいて類型を設定しその類型の組み合わせによって相対的な存在である地域を構造的に理解することは分析の方法として有益であり、本論においてもその視座を踏襲している。

第二に佐藤の『大都市周縁地域の土地利用の課題』を取り上げる⁷⁾。ここではR.J.Pryorの用語法に従って「大都市周縁地域」を規定し、その特性を考察している。このような地域における土地利用の課題として「計画的な市街地の拡大と優良農地の保全を図るための土地利用調整の重要性」及び「都市の外延的拡大圧力を遅減させる方向に都市政策を転換すること」2点をあげているが、何れも農村側の主体的な対応とは言い難く、佐藤が「農村の立場から大都市周縁地域の将来イメージを構築すること」と指摘するように、現状における農村の認識からは具体的決定的な方策に欠け、また農業自体の不透明さも手伝って農村計画の立場からこのような周縁地域の全体像を描くことを困難にしている。

第三に高橋の『大都市における地域的な生活空間の構造に関する研究』を取り上げる⁸⁾。この研究は混住化地域の問題を直接対象はしていないが、「人間やその集団の人間関係や行為や文化等にかか

わるものと、空間や形態の機能や社会的意味にかかわるものの二つを、（中省略）コトバの論理として記述」⁹⁾しており本論との視点は近い。この論文で注目されるのは、人間側の整理としてコミュニティ論を取り上げ社会学・計画学・運動論・文化論の立場から問題を整理し、空間に対する認識の問題として機能論的認識・意味論的認識の2方向から問題を整理しており、人間と空間を具体的調査事例の分析を通して有機的に関連づけることを意欲的に試みていることである。この論文は認識論的な立場からの考察が中心であり、「共同体の構造」を存在レベル・現象レベル・意味レベルの組み合わせとして明快なモデルとして示しており、計画論的にも有意義な基礎的な視座はあたえるが、これを具体的な計画論・政策論として提示するには至っていない。しかし、このように人間と空間の関係を多次元から接近する態度は、近代計画論には欠落していたことであり、大いに評価されるどころであるが、この種の論文の陥りやすい傾向として認識論・解釈論のような抽象的議論に留まり計画論的に展開しにくい、あるいは認識論に対して計画論とのギャップが生じやすいと言える。この種の研究成果がより具体的計画論・技術論につながることを望まれる。

佐藤や山森の文献からも明らかなように、農村地域の再編成が進み農村側からの積極的な計画論が期待し得ない状況にあって、都市

と農村の関係を具体的に解決しようとする計画論を考える時、農村側の論拠は依然として農業自体の先行きが不明なために明確にできない。しかし、農村を居住地域としてみると、現在のように都市側からの無秩序な流入が進むに任せず、農村地域を都市住民の受けざらとしてとらえ直し、農村地域の特性（農業の存続の可能性も含めて）を十分配慮した計画論の必要性が出てくるのである。また、このような都市と農村の共存は、大きく分けると土地利用の混在、居住地の混在の2つの側面が考えられるが、本論のように居住地の混在に注目した場合、高橋の主張するような人間側と居住環境の多面的な検討は欠かせないものになる。しかしこの場合も抽象的議論は役立たず、より具体的な問題解決の方向性をもった計画論が必要とされるのである。

（2）農村社会学の立場から

ここでは本論の立場から農村社会学について批評を加える。

農村社会学の取り組むべき問題として、蓮見は『現代農村の社会学理論』¹⁰⁾のなかで①階級構造および生活構造論、②集団および支配構造論、③農民意識論と運動論、の3つに分類し、「研究成果の多くは集団および支配構造論にかかわるものであった。そして、階級構造については若干の研究結果が示されているものの、生活構造

についての成果はきわめて乏しいといわねばならなかった。また、農民意識についてはその静態的分析は若干こころみられてはいるものの、（中略）動態分析についてはこれまでの研究成果は無に等しい」と指摘している¹¹⁾。このように多くの農村社会学はムラを全体社会と切り離して考えてきた傾向が見られ、このように農村社会学において社会の変化要因に対応した理論を構築することがすることが軽視されてきた。しかし、現実にはほとんどの集落で農村が農業を生業とする人だけの集団ではなくなっており、二宮が指摘するように「農村社会学」という学問領域を設定するにはあまりにも現実社会とはかけはなれており¹²⁾、むしろ、農村のなかで農業従事世帯だけに着目すると言う意味で「農家社会学」あるいは農業従事者だけに着目して「農民社会学」ともいうべきだ、との意見もあがっているほどである。

本論では農村社会の変動論に着目しており、農民階層の分解（いわゆる転職混住）と新住民の来住（転入混住）の両者が進む段階において、農村社会全体の変動を、時間的変動を地域差の変動に置き換えて農村社会の動態分析を行っている（第4章）。このような視点については蓮見も「農村外的なインパクトによって、地域の人口の増加ないし減少が生ずる場合、それが農民の階級的な性格、農村社会の様相を変化させるものであるか否か、という点について、農村

社会の階級構造および生活構造における変動論の一部としてそれを問題にすることが要求される。」と指摘している¹³⁾。

農民意識を変動論の立場から実証的に論述した数少ない著作のなかに福武編集の『農村社会と農民意識』がある¹⁴⁾。このなかで「先進的と評価された村が15年前に示していた村の諸特質は、当時において古い村落の典型といわれた村にまですでに一般化したということになる。しかしそれでは、村はその段階をこえてさらに大きく変化したかといえ、必ずしもそうだとはいえない。(中略)以前に比べて部落のまとまりのもつ意味が減退し、それが十全な統制力ないし統合力をもちうるものではないものとなってきていることは当然であるにしても、部落的なまとまりが全く解消されたわけではなく、農家の日常生活にとっても農政浸透のメカニズムの上でも、なお無視しがたい要素をなしていることをみなければなるまい。」と記されており¹⁵⁾、また、鈴木栄太郎も『日本農村社会学原理』のなかで、自然村には「一個の精神がある」と言っているように¹⁶⁾、変動期にあってもなお村社会特有のまとまりが残存することが指摘されている。このような村社会特有のまとまりのようなものを、本論では評価し社会的ストックとして位置づけているが、本論に重要な視点を提供したものとして、日本社会学の一つの分野である「社会的性格の研究」があげられる。これは松原の定義では「個人も

しくは個々のパーソナリティと社会構造をつなぐ分析の環として階級や階層的立場を共通にし、日常生活に示される様式を等しくするものに形成されるパーソナリティの共通部分を想定して、これに社会的性格 (social character) という用語を与えた。」としている¹⁷⁾。松原は『日本農民の社会的性格』から以下のような部分を引用して研究の流れの一端を紹介している。「人間のパーソナリティは、その多くのものが社会的環境によって形成されている。したがって、環境をひとしくする者は、そのパーソナリティにおいても、共通した性格をもってくる。たとえば、サラリーマン気質が語られ役人タイプが論ぜられるのは、このためである。われわれは、このような特定の階層や階級にあらわれるパーソナリティの共通性を社会的性格と考える。ここに農民の社会的性格と称するものも、農民がその社会的諸環境の中でもつに至った共通的性格にほかならない」¹⁸⁾。また、松原は、前掲書から下記の部分を引用して、「社会的性格の研究」では決して農民の社会的性格を固定的なものとしてとらえようとしたものではないことを指摘した。「むしろ、現代の農民は、前近代社会における村社会でつくりあげられた上述の性格を、今なお色濃く残しながらも、漸時解体させている。古い性格の残存と解体、新しい性格形成の萌芽、この両面的性格が、からみあい錯綜しているところに、現代の日本農民の性格が認められるのである。

しかも、その錯綜は、古い性格の強固さの故に、新しい性格形成を歪曲しており、いっそう農民の性格を複雑にしている」と述べている¹⁹⁾。

(3) コミュニティ論の立場から

都市の周辺農村地域への拡大は先進国に共通した現象であって、都市と農村が重なった部分を学術的には「Rural-Urban Continuum」と呼んでいる²⁰⁾。このような現象は伝統的農村社会学、都市学の何れの範疇にも入らず議論のあるところとなっている。この「Rural-Urban Continuum」への接近は①地理的空間における混在 ②社会的概念としての小地域での社会システムの混在 ③特定の人間的結合による混在 の3つの側面がある。日本では、このような現象を「混住化」と呼んでいるが、その定義は極めて曖昧かつ多義的に用いられており学術的に整理されていない²¹⁾。

都市近郊の農村地域においては、程度の差こそあれ、旧住民に加えて、都市から来住した新住民が混在しており、いわゆる混住地域を形成している。しかし、従来、混住地域の研究については、多くは、農業生産環境、及び従来からの農村居住者のための生活環境を保全する立場からの研究が中心であり、混住地域を都市住民の住宅地として積極的に位置付けている立場は多くはない²²⁾。また、都

市住民が定住できる居住環境を実現するためには、コミュニティの形成が必要であるが、コミュニティという用語自体、極めて多義的な意味を持ち、特にザイン（現実）としてのコミュニティとゾルレン（理想）としてのコミュニティに概念上の混同が見られることが指摘されている²³⁾。コミュニティの定義は規定し難い面もあるが、ゾルレンの立場のコミュニティ概念として一般的に共通するのは①内発的な秩序形成に支えられた「連帯性」、②活動の選択が何らかの形で制裁に担保された強制や、義務の観念に動機づけられず、統治への日常的手段にからめられない「主体性」、③日常生活上での行動の範囲が地域を基盤とする人たちが存在するような「地域性」の以上の3つの要件を満たすことであろう²⁴⁾。本研究でもコミュニティの概念として「連帯性」「主体性」「地域性」を採用するが、この規定はあくまでも仮説的なものであり、対象を整理する視点を与えるが、実態を考察するにあたって拘束を受けるものではない。ここでは概念とは実態を理論的に包括しているべきものとの判断から、コミュニティを検証する場は実態的に定めるべきであると考え、混住化に伴うコミュニティ志向の発展の可能性を見出すことに主眼を置いた²⁵⁾。特に本論のように研究対象を歴史上体験の少ない混住化社会に置く場合、コミュニティを限定して用いることは、混住コミュニティの可能性を見出すためには有効ではない。また、コミ

ユニティをキーワードとして用いる社会学者も、「コミュニティ形成運動の現在は、コミュニティの理念や価値観の内面化の段階」であると認識し、コミュニティの語義の規定が余りに厳密であろうとすると、その規定からこぼれおちたものの中に存在する「コミュニティの実相にふれる新しい可能性」を見逃すことにつながると指摘し²⁶⁾、コミュニティの視界と枠組みの拡がりを主張している。混住地域のコミュニティについては、奥田はその枠組みを①アーバンイズム型（直線的に都市的系の優位・支配を指向する。）、②サブアーバンイズム型（都市的系の優位・支配の方向にあって農村的要素の新しい意味付けを行う。）、③コミュニズム型（農村的系の固有性に立脚した脈絡と可能性を追及する。）の3点にまとめている²⁷⁾。本研究では、この枠組みのなかで第3のコミュニズム型の立場をとっている。

ここで本論（第3章）のなかで規定するコミュニティ意識にかんする研究領域のレビューを行う。コミュニティ意識は、奥田らによって定立された住民の居住地域に対する価値概念の一般的、理論的モデルである。奥田は『都市形成の論理と住民』のなかで²⁸⁾、コミュニティをまず「住民サイドにおいて提起される」ものであり「住民の主体化が主要な予件となる」と規定し、「地域生活過程における住民の意識と行動の新しい体系」としてとらえる。この「主体

化」は、「権利要求実現」という形での主体化ではなく、「生活の場における人間性の回復」を目指し、自らの所属する地域社会に主体的に関与し、住民が互いに協力して住みやすい地域社会を創出しようとするという意味である。この主体化の対極をなすものは「客体化」である。次にコミュニティは「普遍化の与件にある」と規定する。この普遍化はコミュニティにかかわりあう住民の価値が、普遍主義的価値に支えられ、「他のコミュニティとも交流し、連帯しうる価値を共有する」という意味において規定されるものである。この普遍的価値意識の対極をなすものが特殊的価値意識で、排他的な地元共同意識などが含まれる。この行動体系としての主体化～客体化の軸と、意識体系としての普遍的～特殊的の軸を組み合わせ、4つの象限を図式化し、この4つのモデル（①「地域共同体」モデル、②「コミュニティ」モデル、③「個我」モデル、④「伝統型アノミー」モデル）に対応させてパターン・イメージによる調査設問を設定している。

奥田のこのような理論に対して、鈴木広は『コミュニティ・モラルと社会移動の研究』のなかで²⁹⁾、次のような批判を展開している。第一に奥田モデルでは、行動体系と価値意識を区別した意味がなく行動体系の変数も事実上は価値意識として処理される。第二に4つの文章が4つの類型に対応していない。例えば「個我」の文

章は「コミュニティ」を指すものとも考えられる。第三にコミュニティ意識の質と量が、類型間の移行過程などの動態分析に適応することは困難である。以上の3点である。鈴木は「意識分析と行動分析、それらと要件分析や構造分析とを連動的に関連づけるためには、モラル視点の導入が不可欠であり、同時にコミュニティの要件分析および社会（行動と構造）分析との接合が要請される」と結論づけている。

本論では、このような議論に対して、第一の論点については、コミュニティ意識を完全に意識体系として理解しており、行動体系の評価軸とは分離して用いている（第3章参照）。第二、第三の議論は、どちらも「コミュニティ」の概念にモラル性が加味されていないことによって生じている議論である。この議論に対しては、鈴木が指摘する通りモラルによりコミュニティのもつ意味は大きく変動するが、本論ではコミュニティ意識を類型間の移行過程を論ずるような次元では用いず、コミュニティ自体の意味は問わず、単に類型の設定の確認作業の手段として限定的に用いている。

（4）集落地理学の立場から

集落地理学でいう集落は、

「居住の形態や人口集団の大小あるいは社会的機能などを基準とし

て、村落と都市との2大類型に分けることができる。すなわち、村落と都市とを総括して集落と名づけるのである。」（『集落地理講座』³⁰⁾より）とあるように都市を含めたものとして扱っており本論で述べる集落（農村集落）とは異なる。また、本論（5章）で用いる集落形態についても集落地理学では数多くの研究成果があり、

「集落を単純に家屋の集合体からなる居住の場所として機会的に考えるような見方からは、集落形態とはたんなる図形的なものによる集村や散村、あるいは路村や列村といった区別にすぎない。（中略）それはあくまでも集落形態という概念のうちの1つの面にすぎない。形態学としての地理学の立場からは、集落形態とは集落そのものである。地理学的な諸条件の総合的な、そして最終的な表現として形態を研究するという意味は、そのまま表現を変えれば、形態をアプローチとして地理学的な諸条件を追及するということである。」（『集落地理講座』より³¹⁾）と述べられており、これらが集落形態論または集落景観論の分野におけるドイツ学派の系統を継ぐものであり、集落類型を総体的意味を包含した類型として把握していることに特徴がある。

集落を集散の形態から最初に分類したのはDemangeonで、彼は「集落形態の成立とその分布に地理的因子が本質的に作用し、しかもその分布が地域の性格を示すものであると論じ（中略）集落を集合

型と分散型に分けその分布を明らかにし、それぞれの相違を自然的条件、社会的条件、および農業経済の影響などより考察すべきであるとして、農村社会の階層と集落形態との関連に注目を払い、富農層の居住に散在的傾向が存在すること」を指摘している³²⁾。日本でも散村研究が小川琢治によって先鞭がつけられてから、諸大家の研究が集落形態の問題に集中し、そのなかの一人である矢嶋は、『集落地理学』のなかで村落形態を集村 (agglomerated settlement) と散村 (dispersed settlement) に分類し、それぞれ集村を「民家がある場所にかたまって村落をつくる場合」、散村を「個々の民家が離れ離れになって存在し、広い場所にかなり分散して村落を形成する場合」と定義している³³⁾。さらに矢嶋はこのなかで2つの類型の漸移型・複合型が存在することを指摘し、それぞれに対する定義と類型別特性を『日本の集落』のなかで記述している³⁴⁾。

このように集落地理学では、集落形態として「集村」と「散村」の2類型を用いことはポピュラーな分類であり、また集落形態と社会階層の関連についても、この分野の研究の当初から議論されてきたものであることがわかる。本論においても、計画論という意味での視点の違いはあるものの、集落地理学における「集落形態」は、混住化集落を計画的に整備するための空間指標として有効であると思われる。

(5) 日本村落史学の立場から

歴史学の一分野である日本村落史では、村落の形態とその形成の起源、社会状況との関連等を歴史的視点から明確に浮彫りにしていく学問領域である。木村礎は、『日本村落史』のなかで日本村落史という領域について述べており、「勤労農民の生活の場を具体的に調査、復元し、そこに働いていた勤労農民の立場を基軸として歴史的事象を考察していくことを志す歴史研究」としている³⁵⁾。日本における村落史では本論で取り上げるような「混住化現象」は勿論観察されないが、木村の規定するような勤労農民の一般的（特殊でない）村落の歴史を紐解いてみることは、現代における農村社会を考える上に有効な示唆を与える。

たとえば村落の形態について木村は村落史の立場から整理し、以下のような例を引いている。

第一に柳田国男の『郷土史論』を取り上げている。柳田がそのなかで岡山藩の郷土誌である備陽記という書物について述べ、備前地方の村の形態分類に関して

「其名目は平場、山寄、川端、谷相、海辺、湊、川ノ中島、山ノ上などであって、更に川端山寄とか、海辺平場などと云ふものもあります。此等の分類は恐らくは著者の発明ではありますまい。（中略）

此場合に在っては更に右の如き地理上の差別が、村々の生活要件に影響することの大なるを知って、採用したことと思ひます。」

という記述があることに触れている。さらに

「ここに記されたような見分け方が、この時代においてもことごとく妥当であったかどうかは疑問であるが、地方巧者の長年の経験にもとづく貴重な知恵であったことは認めねばなるまい。(中略)このような村落の外見上の区別の仕方は地方役人として必須の知識であるとしていた。」

という指摘をしていることを取り上げている。

次に、大石久敬の『地方凡例録』の例を引いて、

「山方・浜方・野方とも一概にハ云難し能々心を付て村柄を見分べし、都て上辺よりハ見へ難きものなり、村柄の可否を見分るも経済の一端なり」

のような記述があることを紹介している³⁷⁾。

また新渡戸稲造の『農業本論』を取り上げており、このなかで「村落居住」の形態について述べられていることが指摘され、新渡戸が①沿道村落、②環状村落、③段階村落、④参雑村落、⑤散在村落、⑥田荘村落、の6つを主要村落類型としつつも

「撰述したる村落の形状考は徒らに好事家の腸を肥やすの材料に過ぎざるが如くなれど、反て是れ社会学の有要なる事柄を充すものに

して、且つ地方の農業組織に大小の影響を及ぼす者なり」と自問していることに触れている³⁸⁾。

これらの記述に見られるようにそれぞれの時代において、村落の形態や立地の類型からその土地の生活や村柄を読み取っている行為が、ドイツ流の集落地理学の成果が持ち込まれる以前に行われていたことが指摘されている。このような視点は今日の集落において、混住化の視点から考えるとき、その集落を総体的に認識する指標として、このような視座が十分役立ちうることを示唆しており、本論においても同様な視点から指標化を行っている。

(6) 民俗学の立場から

民俗の定義について、和歌森太郎(1972)は、民間伝承および民俗を「常民に文字を媒介とすることなしに日常的・集团的・類型的に3世代以上にわたって、くりかえし伝承して来た言葉や行為、また観念」あるいは「常民の生活体験のうちくりかえして累積してきた生活事実と文化的表現、またそれらに伴う観念や器具・造形物のすべて」であると定義した。このように「民俗とは、一切の階級・身分・出身・才能などの相違に関係なく、日本人であるならば、誰でもが無意識のうちに繰り返し表出する類型的行為の総体を意味し、いわば日本人をして日本人たらしめているもの(民俗研究ハン

ドブック)』である³⁹⁾。このように民俗学は常民の生活文化を浮彫りにすることを主な命題にしている。本論ではそのような常民の生活文化を評価して計画論として混住社会に位置づけることを研究の一つの柱にしている。本論では年中行事、むらの通過儀礼等を取りあげ、集落の社会的性格の計測を行っているが(第4章参照)、これらの調査項目の設定・その読み取り・研究方法にはこれら民俗学の手法から得るものが多い。特に研究の方法については、このように個別的な調査事項の結果を一般化して類型的に把握するためには、民俗学の研究方法が極めて有効になる。従来より民俗学の方法といえ、柳田が提唱したといわれる重出立証法があげられるが、柳田監修の『民俗学辞典』⁴⁰⁾には民俗学の方法について次のようなことが記されている。

「民俗学の資料である民間伝承の著しい特質はそれが記録によらないで受け継がれてきた点にある。長い年代にわたって伝承されていくうちに、少しずつ改変されていく。しかもこの改変は土地によって一様ではない。同一の事柄でも、あらわれる形は地方々々で千差万別であるのはこのためである。同種の民間伝承について各地の資料を数多く集める場合、その類似と差異が極めて重要な観点になる。資料の比較によってその伝承の変遷の過程が跡づけられる筈である。ここに民俗学が方法として比較研究法を用いる根拠がある。(中略)

或る伝承に関わる多くの資料をならべて比較してみると、幾分か重なる部分があり、そのずれた部分にまた他の一部が重なる。このように重ね写真式につなぎあわせて行くと、そこにその習俗の一つづきの変遷過程が現れてくることになるわけである。民俗学のこうした方法を重出立証法とも呼ぶことがある。」

このような方法は時間差を地域差に置き換えて分析しているもので、あくまでも置き変わることが前提となるため、民俗学の内部にもこのような方法に対する批判もある⁴¹⁾。しかし、集落のような個別性が強い地域単位ではこの比較研究法が有効で、本論でも4章において「むら柄」の把握のための主要な分析方法として用いている。

(7) 混住化に関する最近の研究動向

近年、混住化の研究については、上述のような各学問分野にとらわれない学際的方向からの研究が見られる。このような趨勢は混住化のようなテーマには望ましい状況にあるといえる。ここではそのなかからいくつかを取り上げ、研究動向の整理と本研究の位置づけを行う。

まず、混住化に対する問題提起がなされているものをいくつかとりあげる。

谷野は『都市・農村論と農村整備』のなかで、「都市と農村」の関係、および両者を取りまく計画論の系譜について、田園都市計画論・政策論・諸外国の実例などの面から効率よくまとめている⁴²⁾。このなかで、今日までの都市と農村の併存を主張する計画論はいずれも総論的立場からの議論が多いことを指摘し、単なる文明評論ではなく現実の整備計画に視点を向けることを主張している。また、諸外国の事例からは、都市・農村問題は都市や農村そのものが各国の地理的条件や歴史に深くかかわっているため、単純な比較やアナロジーは危険であることを指摘している。結論として「都市化は事実であり価値ではないこと」「農業と農村を同一視しないこと（農村を農業者だけのものとすることは現実的ではない）」「低密度居

住の農村に向けた整備技術を開発すること」の以上3点に要約しており、本論において、研究をすすめる背景として重要な示唆を与えられた。

蓮見は『混住社会の拡大』のなかで⁴³⁾、「どのような量と質の非農家が含まれるようになった場合に混住化社会というのかといった検討がなされるべきである」と指摘している。蓮見の言うようにこの種の研究のなかでは、総論的な計画論、調査報告のようなものについては研究成果の蓄積が見られるが、具体的な施策につながるような研究は乏しい。また、非農家の条件ばかりではなく、受け入れ側としての農家（集落）の条件の整理も当然なされなければならない。蓮見はさらにこのなかで非農家の増加による集落の変質にも言及しており、調査資料の精緻さには欠けるものの「農家率60%を境に集落のまとまりが悪くなる」「非農家が多くなると集落運営は合理的になる」等、具体的な興味深い考察をしている。

矢口は『農村地域とその実態』のなかで⁴⁴⁾、農家の交際は求心的であり非農家の場合は遠心的であるとして、混住化の進展が農家を逆に閉鎖的にしてしまう場合もあることを指摘している。

蓮見や矢口の指摘は農家と非農家の質と量を決定する指標が、一方からの視点からでは設定が難しいことを示唆している。

地域計画の実践的な問題提起をしているものとして相川らの『地

域計画・その理論と実験』がある⁴⁵⁾。特にこのなかの第5章（「むら」社会のしくみとそのとらえ方）には、混住化集落の社会のしくみを把握する方法として有効な視座を与える記述がある。ここではむらの再生のためにはむらの自己展開力をよびおこすことが重要であるとの認識から、農村社会学的側面からむら社会の構造分析のための調査の枠組みを提示している。本論ではこの枠組みが、計画論的立場からも有効であると考え、調査分析（本論第4章）にあたって重要な視点を提供された。

次に実証的な方向から混住化を研究課題に据えているものを取り上げる。

混住地域の実態分析を居住者の行動的側面、意識的側面から論求したものとして青木志郎らの『混住社会の形成、特に人々の行動を決定している要因に関する研究』がある⁴⁶⁾。この研究では「混住社会における問題を、住民自治と人間関係、農業生産に係わる問題、生活関連施設に係わる問題の3点にわけて、集落の住民を対象として調査している。その結果は住民自治と人間関係についての問題は、余り意識にのぼっていないこと、農業生産に係わる問題は、農家のみ意識され、非農家の意識には入っていないこと、生活関連施設に係わる問題は、農家と非農家の双方に強い問題意識があること、

以上のことが指摘されている。この研究から得られる視点は、農家、非農家がともに居住環境において強い問題意識をもつことが実証されたことである。従来、農村（計画）分野における研究では、農業生産環境にかんする問題意識が強かったが、谷野が指摘したように農村を農業者中心の領域として認識することが現実的でなく、一つの居住空間としての認識することの必要性があることを意味している。

混住化社会の類型化を行いつつ実態調査をすすめ、空間構成と社会構成のあり方まで言及したものとして相川らの『混住化する農村の整備方策』⁴⁷⁾および『農村地域における混住化の実態と空間構成にかんする調査報告書』⁴⁸⁾があげられる。この2点は一連の研究である。この研究は、研究の方法として、類型区分のための理論仮設の設定→類型化→類型を用いた実態分析→計画論への展開といった順序で進められており、本論と基本的には同一の方法をとる。また、類型化においても集落地理的接近、集落社会学的接近をこころみており、前者では基本的には、散居集落における集落内および集落周辺混在と、密居集落における住宅団地との混成形態の分類、後者では旧住民については農業への関与と、新住民については開発形式による分類を行っている。しかし、いずれも複合指標で、地理的類型では集落形態と混在形態が同一類型で示されており、社会的類型でも開発形式と住民構成が一つの類型で示されている。そのた

め混住化の結果としての集落の評価は可能であるが、計画論として
の予測指標としては向かない。そのため純粹に（混住化以前の）集
落のもつ空間的ストック、社会的ストックの評価がされていない。
これらを計画論的指標とするならば、それぞれ独立した指標として
設定すべきであろう。また、類型区分の妥当性の検証があいまいで
あることも類型化の説得力をなくしている。

混住化社会を「人間の結合」の変遷過程としてとらえている研究
として石見尚の『混住社会化に伴う農村集落の遷移過程』がある⁴⁹
）。このなかで石見は混住化の進展の状況を統計的指標（農業就業
人口率と他市町村流入人口率）で分類して、農業経営や住民生活の
分析を行い、その考察から人間結合の過程を整理している。すなわ
ち彼は、混住化前（地縁共同体結合）→混住化中期（利益共同社会
結合）→混住化後期（人間的な生活要求にもとづく結合）のように人
間結合の遷移過程をとらえた。そして集落がコミュニティの実体を
備えるためには「統合の原理」ではなく「相互補間の原理」成立し
ていなければならない。そのためには上記の変遷過程を経なければ
ならない。と結論づけている。石見の指摘するように、混住化集落
においても、その存在形式をけして固定化してとらえる必要はない。
しかし、このような変遷過程をたどることが社会法則であるとする
ればその過程をできるだけ円滑に促進するための基本的条件があるは

ずであり、このような命題に対する具体的な対応条件が整理されるべきである。

混住化社会の現状分析と課題について、コミュニティ形成の立場から多面的に取り組んだものとして二宮らの『混住化社会とコミュニティ』がある⁵⁰⁾。本論は、第1部「コミュニティの基礎的・理論的な研究」、第2部「混住化社会の社会構造」、第3部「住民意識と行動」、第4部「生産と生活基盤」、以上の4部構成からなる。本論は、従来の農村社会学・コミュニティ理論の成果をもとにして、非農家・非農村の部分をも加えて、一つの新しい地域を考えていこうという視点ですすめられており、混住化地域の抱える諸問題を多面的に実証的に検討したという点においては他書に類例はなく、本書の意義は十分に認められる。混住化社会の問題点として「共同体が完全に解体してしまったわけではなく、今なお機能している側面もあるがゆえに、これを現代の支配機構の中に位置づけ、温存利用せんとしている。」ことをあげ、「混住化社会における生産と生活をめぐる問題が、基本的には資本と住民の対立の過程で生ずるものである限り、住民が資本の運動を統制・管理しないかぎり問題を根本的に解決することは出来ないであろう。」と指摘している。しかし、その具体的な対応策については、部分的な政策的提案はあるが、全体的な著者の「混住化社会のイメージ」、また計画論的な視点が

明確ではない。この種の研究では仕方がないのかも知れないが、研究を前提として「混住化」の概念規定が抽象的であるために、全体がよりオムニバスな印象を受けるものと思われる。

計画論的な視点から、住民の生活意識意識構造の分析を行ったものに佐藤らの『都市周辺農村の居住地形成と住民の生活意識構造（緑農住区開発計画技術検討調査報告書）』がある⁵¹⁾。ここでは都市周辺農村での小規模な住宅開発の2形態（既存集落との関係において、開発住宅団地が別個である場合と一体であるような場合）の評価を、住民意識構造の面から明らかにしようとするものである。結論としては、「2つの形態に明確な差異は明らかではない」と報告されているが、住民意識のような微妙な差異を論ずる場合は、団地の規模・地域差・自治会の活動状況等によっても大きく異なるため、この事例調査の結果だけで結論づけるのは危険であるが、このようなコミュニティ意識の構造を計画論的に位置づけた先進例として評価される。

混住化社会における全体的構想を描出したものとして、石川らの『混住社会の定住構想』がある⁵²⁾。ここではビジョンを具体化した農村開発の構想を示し、コミュニティの組織化と活動の目標とその技術について言及している。このなかで農村生活コミュニティに触れているが、ここでは各属性別（子供・主婦・世帯主・老人）の

考察から生活コミュニティの規模を想定している。またコミュニティの性格について「農村の帰属社会は多様なグループにわかれ、かつ農業生産コミュニティ、生活コミュニティに二元化し、しかもコミュニティと呼ばれるゆえんは、農村が統制社会でないことはもちろんのこと、それとは反対の個の競争社会に解消するのでもなく、地域複合農業のシステムの中に協力原理が形成されていくからである。」としている。このような傾向は、本論における調査事例においてもその萌芽が認められ、結論で述べているモデルとも基本的には共通の認識を持つものである。混迷している混住化社会においてこのような到達目標を設定することは、混住社会を命題にすえる研究者にとっても、「混住化社会イメージ」の形成に資するものが多い。

集落整備の技法的な提示をしているものに、石光らの『緑農住区開発計画技術検討調査報告書（昭和61年）』がある⁵³⁾。内容は、土地利用計画、施設・用地計画の2部門から構成されるが、用地計画の中に「非農家の宅地計画の考え方」について言及しており、敷地計画のための調査・宅地パターン・新規戸数規模の日安・宅地規模・画区・住環境計画上からの配慮等の項目をたてて検討している。このような技法が固定化しマニュアル化するのは危険であるが、農村空間のデザイン手法の基本的考え方を提供するものとして有意義

である。

以上、本論文周辺の学問領域における研究成果の整理、および最近の混住化コミュニティにかんする主な研究成果の整理を行ったが、上記の記述のなかでも述べたように本論文で直接的・間接的に引用または参考にしている事項がある。ここであらためてその主なものをあげると、

- ・「コミュニティ意識」の概念および分析手法
- ・集落地理学および日本村落史の概念規定による「集落形態」
- ・農村社会学の概念規定による「社会的性格」（本論では「むら柄」という用語を当てている）
- ・民俗学の研究方法である比較研究法

などである。

また最近の研究動向の中の位置づけにおいては、本論のように、いくつかの視点から居住者の類型化およびそれらの空間的な形態分類を行いそれらを組み合わせて、具体的な計画論として、居住者の質と量または配置形態に言及している例は先行研究の中にも少なく、研究の意義が認められる。

6、調査の枠組み

研究を進めるにあたって、下記のようなⅠ～Ⅵの調査を実施した。

ここでは調査の概略を述べ詳しくは各章において述べる。

Ⅰ 広域レベルでの調査分析（2章）

①集落を単位とした町村レベルで農林業センサスから混住化に関する項目を選定し指標化を行う。

②広域レベルでの混住化の実態と特性を把握するために、首都圏域を対象として、農林業センサス、国勢調査等の既存統計資料から内部非農家率、非農家集団率、人口増加率の3指標を用いて類型化しその特徴について考察した。

③広域レベルと集落レベルの研究の連続性を持たせるために、広域レベルで抽出された類型から代表的な地域を選定し、下記の調査を実施した。

Ⅱ 調査対象集落選定のための調査（3章）

① 農業改良普及所の普及員により対象地域の全集落に対してアンケート形式で評価してもらい、その地域を代表するような集落を選定してもらった。

② 農林業センサス（集落カード）より、調査対象地における各集落の状況を把握する。

③ 普及員に対するアンケートと空中写真・地図情報、現地観察により非農家（新住民住宅を含む）の配置形態・規模を把握する。

Ⅲ 居住者属性・地域交流・コミュニティ意識・居住環境評価把握 のための調査（４章）

この調査は、主婦を対象としたアンケート方式により実施した。

調査項目は以下のとおりである。

① 居住者属性

家族構成、職業、宅地・住宅の所有形態、住宅規模、敷地規模、前住地、居住歴、地区内近親者の有無

② 居住環境評価

来住理由、居住環境に対する期待度と満足度

③ 地域活動の参加状況

共同作業、町内会・部落会等の総会や常会、まつり等の行事、スポーツクラブ、趣味の集まり、社会教育・ボランティア活動、PTA

④ 個人の住民交流

知人人数、相談相手の有無、子供の遊び相手の有無、頼りにしている家の有無、手伝いに行く家の有無

⑤ 地域運営への参加意志

地域役員の受入れ意志、地域問題の解決方法、定住意識

⑥ コミュニティ意識

Ⅳ 集落の社会的体質把握のための調査（５章）

この調査は、集落の代表者（区長）へのアンケート調査及びヒアリング調査からなる。調査内容は以下に示す通りである。

① アンケート調査項目

新旧住民別住民構成、混住化形態、新旧住民の交流状況、自治会運営や共同作業における新住民への対応、新旧住民別各組織の参加状況、集落の通過儀礼の変化、集落の年中行事と新旧住民の参加状況

② ヒアリング調査項目

集落の歴史、本家分家関係、班構成、近隣交流、年中行事の変化、新旧住民の要望、新住民の生活時間等

V 集落の歴史性把握のための調査（5章）

この調査は、主に文献調査である。

VI 集落の空間構成把握のための調査（6章）

調査対象集落の中から、空間構成上典型的と思われるものについて、空中写真及び地図の判読、現地踏査により調査した。調査項目は、新旧住民別の宅地配置、緑地分布、地形条件、施設配置、商店分布等である。

注・参考文献

1) 高橋 恒、大都市における地域的な生活空間の構造に関する研究、日本工業大学研究報告集第11巻、1981、10

- 2) 玉城 哲、日本の社会システム、むらと水からの再構成、農文協、1982
- 3) 詳しくは補論 - A参照。
- 4) 山森芳郎、都市化にともなう農村地域構造の再編性に関する地域計画学的研究、学位論文、1983
- 5) 山森芳郎、前掲書、p. 216 ~ 220
- 6) 山森芳郎、前掲書、p. 214 ~ 216
- 7) 佐藤洋平、大都市周縁地域の土地利用の課題、農業土木学会誌、第53巻、第7号、1985
- 8) 高橋 恒、前掲書
- 9) 高橋 恒、前掲書、p. 41
- 10) 蓮見音彦、現代農村の社会理論、時潮社、1970、p. 19
- 12) 二宮哲夫他、混住化社会とコミュニティ、御茶の水書房、1985
p. 7
- 13) 蓮見音彦、前掲書、p. 106
- 14) 福武直編、農村社会と農民意識、有斐閣、1972
- 15) 福武直編、前掲書、p. 385 ~ 386
- 16) 鈴木栄太郎、日本農村社会学原理、時潮社、1940
- 17) 福武直編、前掲書、p. 164
- 18) 日本農民の社会的性格、p 3

19) 日本農民の社会的性格、 p 3

20) Howard Newby, *International Perspectives in Rural Sociology*, 1978, p. 309に「都市と農村の対立でもなければそのいずれかの他方への支配でもない、まさに両者の融合したあらたな文明空間を創造すること、そしてそのために、『市民社会』原理が拓いてくれた普遍的世界のうえに『原始共同体』原理にもとづくエートスを復権せしめ、いわば『市民共同体』ともいうべきあらたな人格的連帯を樹立する」とある。

21) 混住社会という言葉が最初に使われたのは昭和47年度の農業白書であると言われている。

22) 詳しくは次項で述べている。

23) 磯村英一他、*コミュニティの理論と政策*、東海大学出版会、1983, p. 110

24) 奥田道大他、*コミュニティの社会設計*、有斐閣選書、1985, p17

25) コミュニティの形成については時系列的変化の分析は極めて重要である。しかし、現段階では、混住コミュニティが実態として科学的分析に耐えるほど十分に成熟し、豊富な事例が存在するとは考えられず、本論ではコミュニティ形成のための基礎的な条件を整理するのにとどまっている。今後、事例として取り上げたような地域

で、時間的経過に伴ってコミュニティ形成がどのように展開していくかは注目すべきことであり、今後の研究課題としたい。

26) 奥田道大他、前掲書、まえがき

27) 奥田道大、都市コミュニティの理論、東京大学出版会、1983、
p. 94

28) 磯村英一他編、都市形成の論理と住民、東京大学出版会、1971、
p. 135~142

29) 鈴木広編、コミュニティ・モラルと社会移動の研究、1978、
アカデミア出版会、p. 454

30) 木内信蔵他、集落地理講座、第1巻・総論、1957、p. 1

31) 木内信蔵他、前掲書、p. 131

32) Demangeon. A la Geographie de l' Habitat Rural Rapport
de la Commission de l' Habitat Rural,1928

33) 矢嶋仁吉、集落地理学、1956、p. 101

34) 矢嶋仁吉、日本の集落、古今書院、1967、p. 98

35) 木村 礎、日本村落史、弘文堂、1978、p. 1

36) 木村 礎、前掲書、p. 75

37) 木村 礎、前掲書、p. 76

38) 木村 礎、前掲書、p. 79

39) 上野和男他、民俗研究ハンドブック、吉川弘文館、1978、

p . 8

40) 柳田国男、民俗学辞典、1951、

41) 福田アジオ、歴史学と民俗学・民俗学評論8、三一書房、1972

42) 谷野 陽、都市・農村論と農村整備、明日の都市③、中央法規、
1980、p . 257

43) 蓮見音彦、混住社会の拡大、明日の都市③、中央法規、1980、
p . 85

44) 矢口光子、農村地域の混住化とその実態、明日の都市③、中央
法規、1980、p . 45

45) 相川哲夫他、地域計画・その理論と実験、農林統計協会、1978、
p . 156

46) 青木志郎他、混住社会の形成、特に人々の行動を決定している
要因に関する研究、農村生活総合研究センター、1978

47) 相川哲夫他、混住化する農村の整備方策、農村開発企画委員会、
1982

48) 相川哲夫他、農村地域における混住化の実態と空間構成にかん
する調査報告書、農水省構造改善局、1983

49) 石見 尚、混住社会化にともなう農村集落の遷移過程、農業経
済研究、第49巻4号、1978

50) 二宮哲夫、前掲書

51) 佐藤洋平他、都市周辺農村の居住地形成と住民の生活意識構造

(緑農住区開発計画技術調査報告書)、1983

52) 石川英夫他、混住社会の定住構想、農村開発企画委員会、1977

53) 石光研二他、緑農住区開発計画技術調査報告書、1986

第2章 大都市周辺地域の混住化類型とその計画的課題

第2章 大都市周辺地域の混住化類型とその計画的課題

1. 研究の目的と方法

本章での目的は、第一に、前章で作業仮説として設定した混住化の「地域社会類型」の4つのタイプを、既存統計データを用いて、混住化の進展しつつある広域レベルで実証的に示すこと。第二にそれぞれの類型の特徴を人口指標、社会経済指標、空間指標の各側面から考察することにより類型の有効性を検討すること。第三にそれを地理的空間上の分布として位置づけること。第四に、それらの知見に基づいて、混住化地域の計画課題を考察すること。以上の4項である。

研究の進め方は、つぎのような順序で行う。

- 1)はじめに仮説の検討に有効な指標の抽出を行う。そのために第一に集落を単位とした町村レベルで、混住に関するいくつかの指標を用いて、混住化現象を把握するための総合的な指標を主成分分析によってもとめ、その指標の構造を考察し、有効性を検討する。
- 2)つぎに、首都圏の市町村を中心とした広域レベルの分析を行う。分析は町村レベルで抽出された総合的指標から、いくつかの指標を

選定してそれを代表指標とし、それらを用いて「地域社会類型」を示す¹⁾。

3)実証的に示された類型について、比較指標を用いて特徴を検討し作業仮説の広域レベルでの有効性を確認する。次にそれぞれの類型の首都圏における分布形態を観察し、各類型の分布の特徴について検討する。

4)上記で有効性が確認された「地域社会類型」および類型別分布形態を用いて広域レベルでの計画課題について考察する。

2、混住化指標の抽出

はじめに、表2-1に示すように、農林業センサスから、集落の全体的な状況を表すものとして、内部非農家率・非農家集団率・総戸数・自営兼業農家率・生産年齢人口率、農業経営に関するものとして、専業農家率・二種兼業農家率・あとつぎ農家率・農業高収入農家率、空間変容を表すものとして耕作放棄地率²⁾・山林保有農家率・土地転用度の以上12項目を選定し、指標化を行い、それぞれ表の右欄に示すような意味として理解した。この指標の中で混住化現象を直接表す指標となるのは、内部非農家率と非農家集団率である。内部非農家率は農林業センサスでいう非農家集団を除いた非農家戸数を非農家集団を除いた集落戸数で示したものである。非農家集団

表2-1 混住化指標の抽出に用いた指標群

指標名称	定義	意味
内部非農家率	$\frac{\text{非農家集団を除いた非農家戸数}}{\text{非農家集団を除いた集落戸数}} \times 100$	内部混住化指標
非農家集団率	$\frac{\text{非農家集団戸数}}{\text{集落総戸数}} \times 100$	外部混住化指標
総戸数	集落総戸数	集落規模指標
自営兼業農家率	$\frac{\text{自営兼業農家数}}{\text{総農家数}} \times 100$	集落拠点性指標
生産年齢人口率	$\frac{\text{16~59才男子農家人口}}{\text{全農家人口}} \times 100$	集落定住性指標
専業農家率	$\frac{\text{専業農家数}}{\text{総農家数}} \times 100$	農業依存指標
二種兼業農家率	$\frac{\text{二種兼業農家数}}{\text{総農家数}} \times 100$	農業離れ指標
あとつぎ農家率	$\frac{\text{あとつぎ農家数}}{\text{総農家数}} \times 100$	農業維持指標
農業高収入農家率	$\frac{\text{200万円以上販売額農家数}}{\text{総農家数}} \times 100$	農業安定指標
耕作放棄率	$\frac{\text{耕作放棄面積}}{\text{経営耕地面積}} \times 100$	農業離れ指標
山林保有農家率	$\frac{\text{1ha以上山林保有農家数}}{\text{総農家数}} \times 100$	空間余力指標
土地転用度	住宅, 工場, レジャー用地の 転用有無	土地変動指標

とは、集落に來住した集團住宅の居住者だけで別の自治会、町内会を形成している集團であり、集落領域に含まれながらも別の集團としてみる事が出来る。内部非農家率はこの集團的非農家の影響を除くことによって、もともとの集落の混住状況を示す指標として考えることができる。実際にはこの指標は、農家が非農家化したものや、來住非農家のうち、分家非農家、Uターンなどの内部的、個別的なものによる混住状況を示す指標として有効であると考えられる。非農家集團率は非農家集團戸数を集落総戸数で除したもので、集落への集團的な來住による混住状況を示すものとして有効であろう。分析対象地域として、混住のさまざまな様相が見られる茨城県南地域のうち、集團的混住化の影響が強いと考えられる取手市周辺地域（66集落）、内部的混住化の影響が強いと考えられる三和町地域（46集落）、計画的混住事例と考えられる学園都市地域（87集落）、農業的色彩が比較的強いと考えられる猿島地域（49集落）、を取り上げ、集落を分析単位として上記の指標群を用いて主成分分析を行い、指標の総合化、またその総合指標を用いて地域の類型区分を行った。主成分分析にあたっては、軸の安定性の確認、各軸の意味を解釈するために全地域および地域別を分析対象として行い、いずれも固有値1.0以上の主成分について検討した。表2-2に各主成分の負荷量と固有値、表2-3に各指標の地域別の平均値と標準偏差

表2-2 主成分負荷量と固有値

	全 体				取 手 市				三 和 町				猿 島 町						
	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3				
内部非農家率	-.083	.243	.860	-.104	-.276	.060	-.001	.739	-.020	.051	.376	.825	-.442	.752	.044	.231	-.379	.719	-.194
非農家集団率	-.075	.784	-.249	.300	.096	.192	.928	-.069	.029	.830	-.032	.172	.164	.023	-.557	-.207	.075	.076	.926
総戸数	-.018	.769	.119	-.014	-.037	-.098	.910	.220	-.015	.505	-.170	.689	-.257	.765	-.168	-.218	.011	.584	.035
自営兼業農家率	-.136	-.014	.628	.448	-.121	.814	.273	.122	-.240	-.044	.637	.137	-.411	.300	.306	.412	-.333	.589	.009
生産年齢人口率	-.033	-.114	.058	.832	-.106	.883	-.079	.088	.017	.128	.721	.036	.239	.036	.041	-.121	-.209	.623	-.135
専業農家率	.793	.051	-.112	-.156	.680	-.437	.070	.097	.758	.012	-.265	.029	.799	.024	-.296	.177	.878	.013	-.199
二種兼業農家率	-.775	.059	.336	.101	-.832	.143	.152	.163	-.772	.269	.301	-.070	-.794	.380	-.016	.215	-.899	.133	-.118
あとつぎ農家率	.833	-.075	.104	.065	.777	.187	.107	.058	.821	-.055	-.019	.089	.782	-.067	.148	-.211	.850	.078	-.184
農業高収入農家率	.672	-.300	-.086	-.112	.517	-.341	.063	-.091	.373	-.488	-.280	-.214	.861	-.124	-.144	.035	.835	.104	.289
耕作放棄率	-.159	.308	.026	.503	.054	.287	.072	.549	-.158	.569	.404	-.295	-.033	-.078	-.004	.874	-.403	.263	-.132
山林保有農家率	.304	.186	-.303	-.075	.260	.350	.079	-.437	.766	.123	.182	-.269	.050	-.058	.866	-.158	.091	.636	.216
土地転用	-.085	.692	.157	-.087	.193	-.137	.129	.655	.014	.841	.042	.095	.180	.779	.026	-.020	-.054	.121	.885
固 有 値	3.14	1.79	1.26	1.12	3.08	2.05	1.33	1.29	3.36	2.19	1.23	1.17	3.85	1.65	1.26	1.14	3.57	2.28	1.69

□ は、0.4 以上の主成分負荷量を示す

表2-3 各指標の地域別平均値

	全 体 (集落数 248)	研究学園都市 (集落数 66)	取手市 (集落数 87)	三和町 (集落数 46)	猿島町 (集落数 49)
内部非農家率	36.3 22.8	43.5 19.0	27.6 21.5	46.0 24.2	32.7 22.3
非農家集団率	12.0 25.8	12.7 25.0	23.5 33.7	0.6 2.6	1.4 7.5
総 戸 数	118.0 201.6	114.6 154.6	152.3 304.4	108.0 73.0	70.8 33.8
自営兼業農家率	14.6 12.8	14.7 14.0	12.9 11.7	16.0 10.1	16.4 15.2
生産年齢人口率	30.7 3.2	30.0 3.9	31.0 3.0	30.8 3.2	31.2 2.7
専業農家率	11.1 11.2	13.9 10.1	7.4 11.0	8.1 7.8	16.6 12.4
二種兼業農家率	56.7 19.7	53.8 15.6	57.4 23.0	63.9 16.2	52.8 19.8
あとつぎ農家率	9.8 9.3	6.6 6.4	6.9 8.1	14.3 9.9	15.2 10.1
農業高収入農家率	26.6 18.9	18.9 15.2	22.4 19.0	31.8 16.4	39.6 17.7
耕作放棄率	1.5 4.1	2.0 6.0	2.0 4.4	0.7 1.3	0.4 0.6
山林保有農家率	6.1 8.4	8.1 9.3	6.4 10.2	4.5 5.9	4.4 4.5
土地転用	0.7 0.8	0.8 0.8	0.8 0.8	1.1 1.0	0.1 0.3

上段は平均値 下段は標準偏差を示す

を示した。

対象地域全体でみると、第Ⅰ主成分は、あとつぎ農家率、専業農家率、二種兼業農家率、農業高収入農家率の負荷量が大きく、これらはいずれも農業の維持、安定を示すものであり農業依存性と名付けることが出来る。第Ⅱ主成分は、非農家集団率、総戸数、土地転用の負荷量が大きく、これらは外因的混住、集落規模、土地の変動を表す指標で外部要因混住性と名付けることが出来る。第Ⅲ主成分は内部非農家率と自営兼業農家率がむすびついており、集落内部の非農家化、個別的な新住民の流入などを表すものと考えられ内部的混住性と名付けることができる。第Ⅳ主成分は生産年齢農家率、耕作放棄率、自営兼業農家率の負荷量が大きく、これらから、集落への定住性が増し、集落を生活の拠点としつつも、農業生産にかかわる空間的条件が減少していくという意味で、農業離れの集落拠点性と名付けることができる。以上の各主成分の解釈から、第Ⅰ主成分以外は、いずれも混住の性格を表すものと考えられ、これらの混住化が専業的農業との依存性とは独立であることが読み取れる。つぎに第Ⅱ主成分以下の主成分に注目してみると、第Ⅱ主成分からは、集団的混住化が集落規模を急激に増大させ、土地変動の大きな要因になっていることがうかがわれる。しかし、この場合は集落とは独立した計画的団地の形式を取る場合が多く、そういう意味では集落内

部の旧住民には、農業経営的側面では影響が大きいものの集落運営などのコミュニティの側面では直接的影響を及ぼすことは比較的少ないと考えられる。第Ⅲ主成分からは、内部的非農家化、個別的新住民の流入などは、総戸数や土地転用等の急激な変化につながっていないことが読み取れる。しかし、このような形態の場合は集落居住地内部あるいはその周辺での変化であり、集落旧住民に及ぼす影響は大きいと考えられる。農業との関係でみると、外部要因的、内部的混住のいずれの場合も専門的農業依存を示す指標との関連は薄く、すなわち、これらの混住化が直接専門的農業の弱体化につながっているとはいえない³⁾。第Ⅳ主成分からは、自営兼業農家においては、生産年齢層が農業に依存することは少なく、集落が住むための拠点となっても農業離れし、耕作放棄が進んでいることがわかる。

つぎに各地域別にみると、学園地域では第Ⅰ主成分に農業依存性を、第Ⅱ主成分に農業離れの集落拠点性を示し、それぞれ全体の第Ⅰ主成分、第Ⅳ主成分に対応するが、第Ⅲ主成分は外部要因混住性を示す指標であるが、全体の場合に比べてこの地域では土地転用の値が小さく、これは研究学園都市建設にあつたて、計画的宅地化がすすめられたという特殊事情による影響が強いと考えられる。第Ⅳ種成分は全体のいずれの主成分ともニュアンスが異なり、ここでは、

内部非農家率、土地転用度、耕作放棄率、山林保有農家率の負荷量が大きく、内部的混住が要因となって農業生産環境の土地利用変化が生じていることがうかがわれる。以上からこの地域では、農業離れの住民が集落を生活拠点としている一方、非農家集団の流入は急激ではあり、内部的混住化も農業生産の土地利用の変容につながっていることがわかる。

取手地域は、第Ⅰ主成分は農業依存性を、第Ⅱ主成分は外部要因的混住性を、第Ⅲ主成分は農業離れの集落拠点性を示し、それぞれ全体の第Ⅰ主成分、第Ⅱ主成分、第Ⅳ主成分に対応するが、第Ⅳ主成分は内部非農家率、総戸数の負荷量が大きく、全体の場合の第Ⅲ主成分とは内容が異なる。以上よりこの地域は、非農家集団等の外部要因による混住化によって集落の人口規模が拡大し土地転用、耕作放棄等の空間的変容にもつながっている一方、内部混住化も促進され、外的、内的混住が、同時に集落規模を拡大し、急激な地域変容の要因となっていることがうかがわれる。

三和町地域は、第Ⅰ主成分は農業依存性を、第Ⅱ主成分は内部的混住性を、第Ⅲ主成分は外部要因混住性を、第Ⅳ主成分は農業離れの集落拠点性を示している。この地域の特徴は第Ⅱ主成分において、内部非農家率、総戸数、土地転用が高い負荷量を示しており、内部の混住化が集落規模、土地利用の変容の要因になっていることがう

かがわれることである。

猿島地域は、第Ⅰ主成分は農業依存性を、第Ⅲ主成分は外部要因混住性を示し、全体の場合の第Ⅰ主成分、第Ⅱ主成分に対応するが、第Ⅱ主成分がほかの地域に比べてやや特殊で、内部的混住化と農業離れの集落拠点性を合わせたような内容であるが、ここではほかの地域に比べ生産年齢農家率がマイナスになっており、非生産年齢層が空間余力を保持しつつ、集落に拠点性を保ちつつ内部的混住化を進めていくと解釈でき、比較的農村的色彩を強く残す地域に特有な混住化の形態であろう。

以上、全体および各地域別の主成分を見てきたが、混住のさまざまな様相を異にするこれらの地域について、小さい内容の違いはあるもののおおむね「農業依存性」「外部要因混住性」「内部的混住性」「農業離れの集落拠点性」の4つの主成分で安定的に把握できることがわかった。特に混住化に注目すると外部要因的、内部的のふたつに分けることにより、地域を特徴づけている混住化の様態を知るための指標として有効であることがわかった⁴⁾。これはまた作業仮説において居住者タイプとして非農家（内部からの混住化）、新住民（外部からの混住化）を規定したことにも合致するものである。

3、広域レベルにおける混住化類型

つぎに広域レベルでの混住化の実態について述べる。分析対象ゾーンは、東京という巨大都市圏の拡大と、首都圏に分布する大小都市群による影響、という2つの混住化の影響が重なり合っていると考えられる首都圏100km圏とし、市町村を分析の単位としてすすめた。はじめに、前項の町村レベルの分析から混住地域をみるための指標として、その有効性が確認された4つの主成分の中から、特に混住に直接関係のあると思われる外部要因混住性および内部的混住性に注目し、それぞれの主成分の中で主成分負荷量も大きく、また、混住現象の実態と住民構成の対応を表すうえで有効であると考えられる内部非農家率と非農家集団率を取り上げた。さらに転入混住指標として、人口増加率を加え、それらの3指標を広域レベルでの仮説的類型を検討するための代表指標とする⁵⁾。さらにここでは、これらの3つの指標を組み合わせて用いることによって、実態としての作業仮説をより鮮明に把握できると考え、表2-4に示す6つの類型を設定した⁶⁾。ここに示す分類の区分基準は、数値そのものに理論的な裏付けはとぼしいが、数例の現地調査をふまえたうえで決めた。なぜならば、ここでは基準となる数値そのものに厳密な意味を問うのが目的ではなく、より仮説に適合した混住化類型の描写とその地理的分布を把握することが主な目的だからである⁷⁾。

Aタイプは内部非農家率が40%未満と低く、人口増加率も小さい

ことから居住者の構成からみて、農家が主体となっている構成である。Bタイプは内部非農家率が40%未満と低いが人口増加率は、高い類型で農家が主体の地域に新住民の来住が見られる地域である。Cタイプは内部非農家率が40%以上70%未満とAタイプの場合よりやや高く、非農家集団率、人口増加率が低い。これは来住新住民の流入を伴わずに、集落内部の非農家率が大きくなっていることであり、主として、従来の農家が非農家に変化したことによるものと判断できる類型である。Dタイプは、内部非農家率の割合はCタイプと同程度でやや高く、人口増加率は大きい、非農家集団率は小さい。これは主としてUターンなどを含めた個別的な来住新住民の割合が大きいと考えられる類型である。Eタイプは、内部非農家率は70%未満で農村的色彩を残しつつも、非農家集団率、人口増加率が高い。これは、農村地域でありながら、団地などによる集団的な来住新住民の割合が大きい類型である。Fタイプは、内部非農家率が高く、既成市街地に多くみられる類型である。以上、6つの類型を設定したが、ここで作業仮説である「地域社会類型」との対応を観察すると（表2-5参照）、農家型はAタイプ、旧住民型はCタイプ、農家・新住民型はBタイプ、各タイプ混合型はDタイプ、新住民集団型はEタイプにそれぞれ対応すると考えられる。Fタイプは仮説的類型の中では設定されていないがこのタイプは混住化を示す類型

表2-4 類型区分と事例数

	内部非農家率	非農家集団率	人口増加率	事例数(%)
Aタイプ	40%未満	——	10%未満	53(14.3)
Bタイプ	40%未満	——	10%以上	2(0.5)
Cタイプ	40%以上～70%未満	30%未満	10%未満	102(27.6)
Dタイプ	40%以上～70%未満	30%未満	10%以上	39(10.5)
Eタイプ	70%未満	30%以上	10%以上	15(4.1)
Fタイプ	70%以上	——	——	159(43.0)

表2-5 類型区分と地域社会類型との対応

類型区分による分類	地域社会類型	
	Aタイプ	農家型
Bタイプ	農家・新住民型	混住化類型
Cタイプ	旧住民型	
Dタイプ	各タイプ混合型	
Eタイプ	新住民集団型	
Fタイプ	——	都市的類型

ではなく都市的類型を表すものと考えられる。このなかで、農家型は農村的類型、旧住民型、農家・新住民型、各タイプ混合型、新住民集団型の4つを合わせて広域レベルにおける混住化類型といふことができよう。区分基準の設定においては、内部非農家率を農村的類型で40%未満、都市的類型で70%以上と、比較的都市的な類型が多くなるような区分基準を設定しているが、各類型の事例数（表2-4右欄）をみると、混住化類型が合計で42.7%にもなり、首都圏において、いかに混住化傾向が顕著であるかがうかがわれる。混住化類型のなかでは旧住民型、各タイプ混合型、新住民集団型、農家・新住民型の順に多くなっている。しかし農家・新住民型は全体でわずか2例しかなく広域レベルではほとんど観察されない。このことは市町村を分析単位とした広域レベルでみた場合、新住民の来住が見られる地域のほとんどで非農家化が進んでいることを示している。しかし、農家・新住民型が集落のような狭域の地域単位でみた場合に必ずしも観察されないとは言えない。広域レベルを対象とする以下の考察においては農家・新住民型は除外してすすめることにする。

表2-6に各類型の代表指標の平均値および標準偏差を示したが、5類型の中で混住化類型の旧住民型、各タイプ混合型、新住民集団型に注目してみると、内部非農家率では、各タイプ混合型の平均が

表2-5 代表指標の類型別平均値と事例数

	農村的類型	混住化類型			都市的類型	全 体	
		旧住民型	各タイプ 混合型	新住民集団型			
代表 指標	内部非農家率 (%)	31.3 6.2	53.2 7.9	59.3 7.9	53.9 14.9	86.6 8.8	64.8 22.1
	非農家集団率 (%)	2.0 3.8	3.1 4.6	5.6 8.4	46.2 11.3	19.6 17.9	12.2 16.7
	s.50~55人口 増加率(%)	1.7 3.9	2.2 4.9	16.4 8.7	46.4 33.2	13.0 15.0	10.3 16.2
	事 例 数 ()は%	55 (14.9)	102 (27.6)	39 (10.5)	15 (4.1)	159 (43.0)	370 (100.0)

代表指標の上段は平均値，下段は標準偏差

やや高く、旧住民型、新住民集団型ではほぼ同じ割合である。非農家集団率では、新住民集団型の平均が46.2%と都市的類型を上回る割合を示している。人口増加率では、旧住民型は平均が2.2%と農村的類型をやや上回る程度であるが、各タイプ混合型は16.4%と大きな割合となっている。また新住民集団型でも46.6%ときわめて大きい割合を示しており、これらのタイプが、短期間に多くの新住民を迎えており、その結果としての多方面に及ぼす変化の激しさが予想される。

4、混住地域区分とその特性

つぎに、各類型の性格を把握するために、表2-7に示すような人口指標、社会・経済指標、空間指標を用いて、5類型との関係性を考察する。はじめに3つの代表指標と人口、社会・経済空間の各指標との相関係数および、5類型と各指標の相関比を求め（表2-8）、代表指標および5類型と各指標との関係性の強さについて検討する。代表指標のうち内部非農家率と非農家集団率は、人口指標と高い相関がある。人口増加率については、集落総戸数、昭和40年から45年の人口増加率との相関が低い、類型別相関比では、人口指標とはいずれも安定的に高い相関関係があり、この類型化が、人口指標については有効であることがわかる。社会・経済指標につい

表2-7 比較指標

人口指標	集落総戸数*1, 人口増加率*2, 他市町村からの転入率*2, 出生時からの入居者割合*2, S50年以降の入居者割合*2
社会経済指標	男子生産年齢のいる農家率*1, あとつぎのいる農家率*1 3次産業人口率*2, 財政力指数*3
空間指標	住宅団地転用集落率*1, その他住宅転用集落率*1, 山林転用集落率*1 医療施設不便集落率*1, 市街化区域面積率*4, 住宅地地価*5

資料出所 *1農林業センサス(55年), *2国勢調査(55年), *3地方自治年鑑(59年)
*4都市計画年報(56年), *5各都県地価調査(58年)

表2-8 代表指標と各指標の相関係数

		代 内部非農 家率	表 非農家集 団率	指 人口増加率 標 (s 50~55)	類型別相関 比
人 口 指 標	集落総戸数	0.602	0.368	0.047	0.532
	s. 40~45人口 増加率	0.616	0.538	0.259	0.593
	他市町村からの 転入率	0.600	0.670	0.777	0.711
	出生時からの入居 者割合	-0.885	-0.641	-0.407	0.835
	s. 50年以降の入居 者割合	0.749	0.685	0.668	0.799
社 会 経 済 指 標	男子生産年齢 農家率	-0.090	0.020	0.171	0.122
	あとつぎ農家率	-0.008	0.099	0.147	0.126
	3次産業人口率	0.767	0.556	0.259	0.718
	財政力指数	0.606	0.422	0.166	0.581
空 間 指 標	住宅団地転用 集落率	0.423	0.553	0.348	0.439
	その他住宅転用 率	0.591	0.403	0.156	0.542
	山林転用集落率	-0.014	0.253	0.146	0.130
	医療施設不便 集落率	-0.169	0.084	-0.140	0.405
	市街化区域面積 率 地 価	0.729	0.545	0.124	0.650
		0.785	0.557	0.194	0.692

ては、男子生産年齢農家率、あとつぎ農家率では、いずれの代表指標とも相関が低く、類型別相関比も小さいが、3次産業人口率、財政力指数では相関比は大きく、これらについては類型化が有効であるといえる。空間指標においても、代表指標との相関は、内部非農家率、非農家集団率では、山林転用集落率、医療施設不便集落率を除いて相関係数0.4以上で、相関があるとはいえるが、人口増加率ではいずれの指標とも相関は低い。相関比は山林転用集落率を除いてはある程度の相関を持っており、空間指標との類型化の有効性が確認される。

表2-9は各指標の類型別平均値と標準偏差を表したものである。はじめに、人口指標を検討してみよう。集落総戸数は、一集落当たりの平均戸数を表したものである。都市的類型では、ほかの4つの類型に比べてばらつきが大きく、集落総戸数もきわめて大きく、内部非農家率の割合を合わせて考えてみれば、この類型では農家が全体量でもまた割合のうえでも非農家の中に埋没しており、ほかの類型とはまったく異なる性格を有しているといえる。混住化類型に注目してみると、新住民集団型が最も大きく、農村的類型の約2.5倍となっている。各タイプ混合型では、農村的類型の1.5倍程度である。これら二つの類型では、都市的類型程ではないにしても、農村的類型と比べると大きな値となっている。旧住民型では農村的類型

表-9 各指標の類型別平均値

	農村的類型	混 住 化 類 型			都市的類型	全 体	
		旧 住 民 型	各タイプ ^o 混合型	新 住 民 集 団 型			
人 口 指 標	集落総戸数 (戸)	70.4 35.2	88.5 37.6	111.1 46.1	178.6 69.0	624.7 639.4	320.7 493.8
	s.40~45年人口 増加率 (%)	-4.0 4.4	-1.0 8.8	4.0 5.7	13.7 16.0	30.9 30.4	13.2 25.9
	他市町村からの 転入率 (%)	8.8 5.2	9.6 3.0	18.4 5.1	34.0 11.6	23.2 9.5	17.3 10.5
	出生時からの居 住者割合 (%)	49.9 8.8	43.5 5.8	37.2 5.5	26.0 5.4	22.4 8.2	34.1 13.4
	s.50年以降の入 居者割合 (%)	11.8 6.7	15.5 4.7	24.7 5.3	40.9 10.7	34.1 9.1	25.0 12.5
	男子生産年齢 農家率 (%)	13.1 10.3	11.4 7.7	13.1 10.1	10.0 8.0	10.5 8.9	11.4 8.9
社 会 経 済 指 標	あとつぎ農家率 (%)	9.6 7.8	7.9 6.6	10.6 11.5	7.0 4.7	8.0 7.0	8.4 7.5
	3次産業人口率 (%)	35.0 9.9	40.8 7.4	40.2 6.8	53.0 10.9	55.9 8.7	46.8 12.0
	財政力指数	0.36 0.18	0.41 0.19	0.53 0.28	0.58 0.20	0.73 0.25	0.56 0.27
	住宅団地転用 集落率 (%)	3.9 5.3	6.1 7.7	14.3 15.9	23.1 16.3	19.1 17.7	13.0 15.4
	その他住宅転用 集落率 (%)	7.9 10.3	11.0 13.4	20.3 21.0	16.6 13.2	40.3 29.5	24.2 26.2
	山林転用集落率 (%)	29.0 21.3	30.0 21.2	25.1 23.1	43.5 29.1	29.6 26.0	29.8 24.1
医 療 指 標	医療施設不便 集落率 (%)	46.8 20.6	40.9 19.0	37.1 23.8	39.3 23.9	25.3 18.5	35.0 21.4
	市街化区域面積 率 (%)	6.0 19.1	3.1 6.0	5.9 6.4	12.4 9.8	41.1 30.6	20.6 28.4
	地 価 (千円)	28.8 52.0	29.0 16.4	46.5 21.7	67.9 23.8	117.9 60.7	70.9 62.3

上段は平均値，下段は標準偏差

よりやや上回る程度で規模そのものには大きな変化は見られず、内部の質的な変化に注目すべき類型である。昭和40年から45年人口増減率では、ほかの人口指標に比べ全体的にばらつきが大きい、平均値をみると都市的類型の増加率が大きく、昭和40年代では、都心周辺部の既成市街地の人口が増加していたことがうかがわれる。新住民集団型は昭和50年代の増加率にくらべるとかなり小さく、これらの地域の開発が近年短期間に行われたことを物語っている。各タイプ混合型は、50年代に比べると小さく、これらの地域は昭和40年代には、農村的類型あるいは旧住民型のような外部からの変化要因の少なかった地域であると思われる。旧住民型では、農村的類型とともに昭和40年代は人口が減少しており、これらの地域が当時はまだ、都心部への人口流出の過程にあったことがわかる。他市町村からの転入率では、いずれの類型をみても、昭和50年代の人口増加率の傾向に類似しており、これらの人口増加が、主にほかの市町村からの流入によるものであることがわかる。出生時からの居住者割合は、ほぼ旧住民の割合と考えることができるが、類型別にみると都市的類型が最も小さくなっている。混住化類型のなかでは、新住民集団型が小さく、急激な新住民の流入により相対的に旧住民の割合が低下していることがわかる。各タイプ混合型は37.2%と旧住民型と新住民集団型の中間位の値である。旧住民型はほかの混住化類型

に比べると旧住民の割合は大きく、農村的類型に近い割合になっている。農村的類型は5つのタイプのなかで最も大きいですが、それでも50%をきっており、近年の移住性の傾向を物語っている。昭和50年以降の入居者割合は、新住民の割合ともとらえることができるが、最も大きいのは、新住民集団型であり、都市的類型以上に大きくなっている。各タイプ混合型は、新住民集団型に比べると、値そのものは小さいが、新住民集団型では集落居住者とは別に計画的に開発される場合が多いのに対して、各タイプ混合型は集落内で個別的、分散的に開発される場合が多いため新住民、旧住民が直接接触する機会が多く、現実でも最も問題の多い類型である⁸⁾。旧住民型は、15.8%と農村的類型の11.8%に近く新住民による変化要因が少ない類型である。

つぎに社会・経済指標に注目してみよう。男子生産年齢農家率は、各類型とも大きな差は見られない。あとつぎ農家率は、集落レベルでの分析では農業依存性を示す主成分の中でみられた指標であるが、各類型別にみても都市的類型、混住化類型、農村的類型で大きな差は見られず、農村的類型だからといって大きな割合を示すわけではない。しかし、こまかくみると、いくつかの傾向が読みとれ、混住の類型の中では各タイプ混合型が農村的類型以上に大きく、ついで旧住民型、新住民集団型の順になっている。このことから、広域レ

ベルの指標からみても、混住化の進展がそのまま農業の弱体化には
直接つながっていないことがわかる。 3次産業人口率をみると農村的類型、混住化類型、都市的類型の順に大きくなっており、コーリ
ンクラークの法則⁹⁾で指摘されるように、経済発展につれて1次産
業から2、3次産業への移行していく様子が認められる。混住化類
型に注目してみると、3つの類型とも、農村的類型より大きな値にな
っているが、3類型の中では新住民集団型が大きく、各タイプ混合
型と旧住民型は、ほぼ同じくらいの値を示している。これは、新住
民集団型では、大都市通勤サラリーマンがその主体となっているこ
とを示すと考えられる。一方、各タイプ混合型では来住者層が、新
住民集団型と異なり2次産業従事者の割合が大きいことを示してい
ると考えられる。旧住民型は、農村的類型に比べやや大きくなって
おり、非農家化が来住者の増加を伴わなくても3次産業へ増加して
いくことがわかる。財政力指数は、各地方自治体の財政的な潜在力
を示す指標であるが、やはり農村的類型、混住化類型、都市的類型
の順に大きくなっている。混住化類型の中では、新住民集団型、各
タイプ混合型、旧住民型の順に大きい、そのレベルは都市的類型
に比べるとかなり小さく、これらの地域では混住化がすすみ、人口
増加が急激であるにもかかわらず、自治体の財政基盤が整わず、各
種の対応、整備が後追的にならざるを得ないことが予想される¹⁰⁾

つぎに空間指標を検討してみよう。住宅団地転用集落率、その他住宅転用集落率、山林転用集落率のいずれも、各市町村の中で、それぞれ、農用地および山林の転用があった集落の数を全体の集落数で除した値であり、地域の土地利用の変容の度合いを表している。住宅地転用集落率では全体的にばらつきが大きく、平均値をみると混住化類型の中では当然、新住民集団型においてその割合が高いが、各タイプ混合型においても、14.3%とやや大きくなっている。逆に、その他住宅転用集落率の場合は、ばらつきは大きい平均値では、都市的類型において大きい割合を示しており、混住化類型の中では、各タイプ混合型が一番大きく、それぞれの種類の土地利用変化の特徴を物語っている。山林転用集落率では、都市的類型では、農用地の転用より小さくなっている。これは、このような地域では山林そのものが減少しており、また市街化区域内の農用地が多いためであると考えられる。しかし、農村的類型、混住化類型では、農用地の転用に比べ、全体的に大きな割合を示し、特に農村団地型では43.5%と大きく、これらの開発が山林に大きく依存していることがわかる。医療施設不便集落率は、各市町村で、最寄りの医療施設までの距離が2km以上ある集落の割合であるがこれによって、各地域の生活環境の利便性を知るおおよその目安とする。類型別にみると都

都市的類型、混住化類型、農村的類型の順に大きくなっており、農村部ほど、生活利便性が低いことがわかる。混住化類型では3類型とも大きな差はみられないが、都市的類型に比べ10から15%も小さく、これらの地域が人口の増加あるいは急増地域であることを考えれば、
実際の不便さは、さらに、大きいと思われる。市街化区域面積をみると、ばらつきは大きいものの平均値では、都市的類型と混住化類型、農村的類型との差が大きく、混住化類型の中では新住民集団型がめだって大きくなっている。各タイプ混合型は農村的類型とほとんど変わらない割合であり、この類型が来住新住民が多いにもかかわらず、農振白地地域などの法的規制が緩いところで開発がすすみ、
もっともスプロールの素地を生んでいることがわかる。地価をみると都市的類型が最も高く、新住民集団型の2倍、各タイプ混合型の約3倍、農村的類型の約4倍の価格である。逆に見れば、たとえば、新住民集団の地域で見れば都市の1/2,各タイプ混合型で見れば、都市の1/3で宅地が購入できることであり、持家志向の強い住民が急に流入していることを裏付けている。

以上の分析から作業仮説として設定した「地域社会類型」が広域レベルにおいて有効であることが確認された。

5、各類型の空間分布の検討

それぞれの代表指標の首都圏での分布状況をみると、内部非農家率の分布（図2-1）では70%以上の都市的地域は、従来、指摘されるように¹¹⁾都市化発展の3つのパターン、すなわち、東京都心を圏心とする首都圏全域との圏構造的関連、セクター構造の関連、首都圏全域に分布する大小都市群と多くの近郊都市圏、遠郊都市圏との間に成立する挟域の圏構造的関係、が読み取れる。非農家集団率（図2-2）では、40%以上を示すのは、ほぼ首都圏60km圏内に限られている。昭和50年から55年の人口増加率（図2-4）をみると、昭和40年代に比べ（図2-3）、首都圏中心からみていっそう外延化しており、都心周辺部は人口の増加傾向が弱まり、60km圏をこえる周辺の都市でも、いくつかの急増地域がみられる。これらの地域では、周辺の中核都市で人口の鈍化がみられる一方、中核都市周辺の市町村で人口増が大きく、地域の若年層の定着が進み、社会増を示していることがうかがわれる¹²⁾。

つぎに、地域社会類型による類型区分を用いてマップ化を行い、各類型の分布状況を観察すると（図2-5）、都市的類型は首都圏の既成市街地を中心に分布し、さらに主要鉄道沿線にのびて周辺の都市まで至っている。この類型は東京都心部を中心とした連続的な圏域構造を持っているのが特徴で、ほぼ40km圏までは面的都市化圏を、それ以降は交通路線に沿った線的都市化圏と周辺の中核都市を

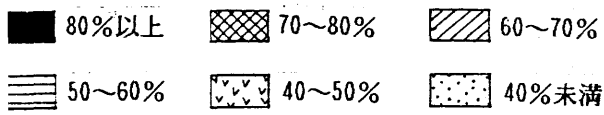
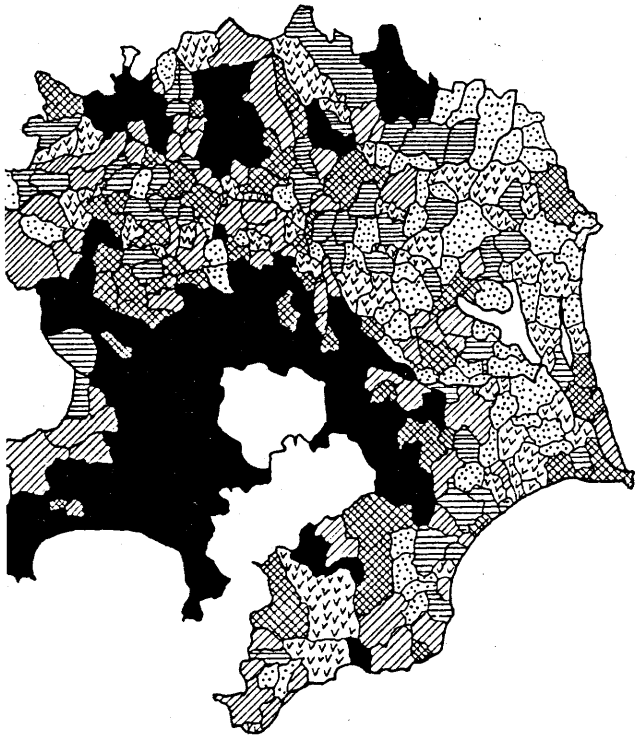


図2-1 内部非農家率の分布

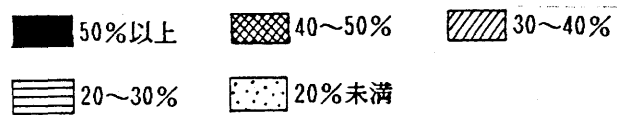
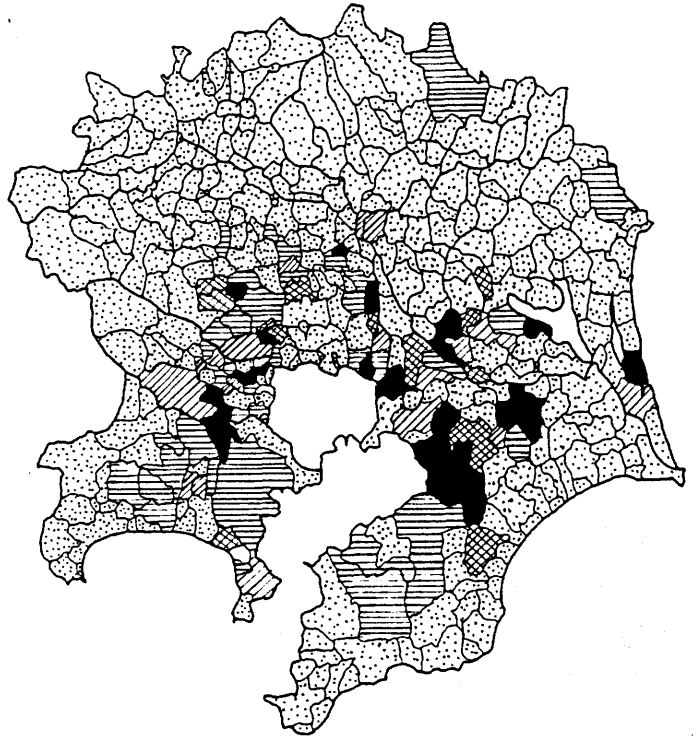


図2-2 非農家集団率の分布

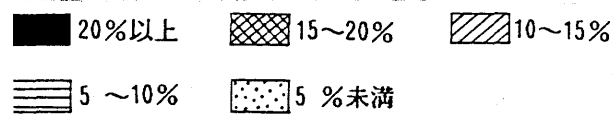
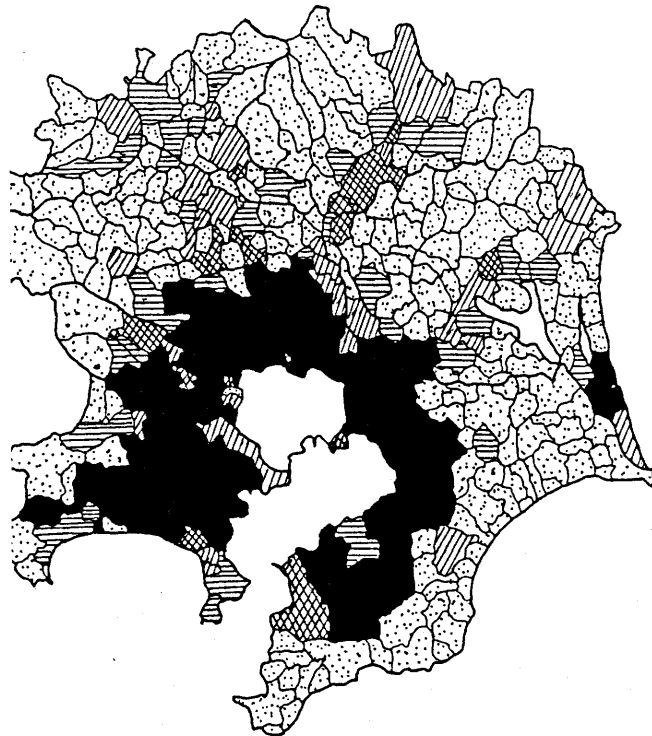


図2-3 S40~45年人口増加率の分布

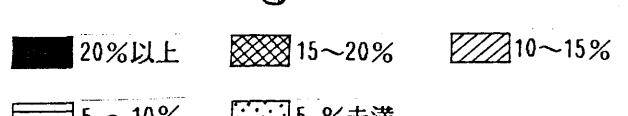
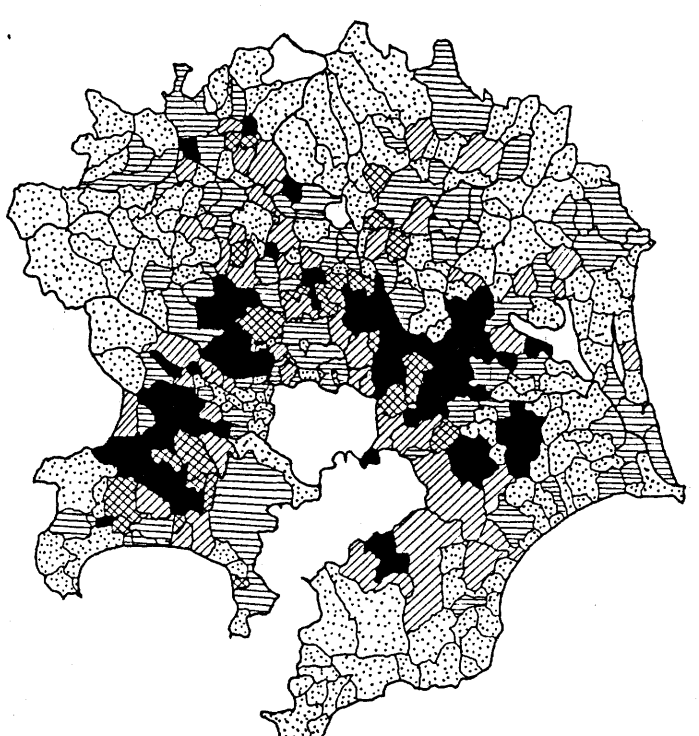
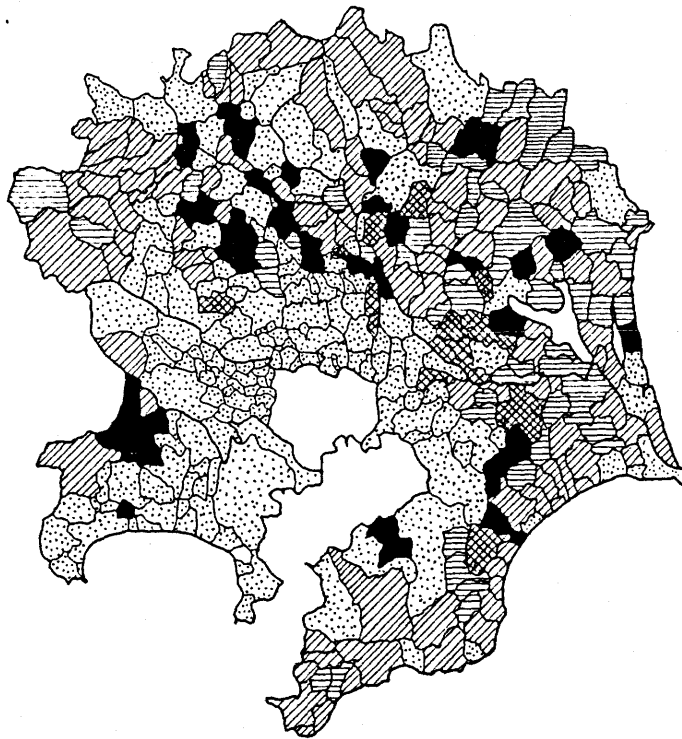


図2-4 S50~55年人口増加率の分布



都市的類型
 新住民集居型
 各々が混合型

旧住民型
 農村的類型

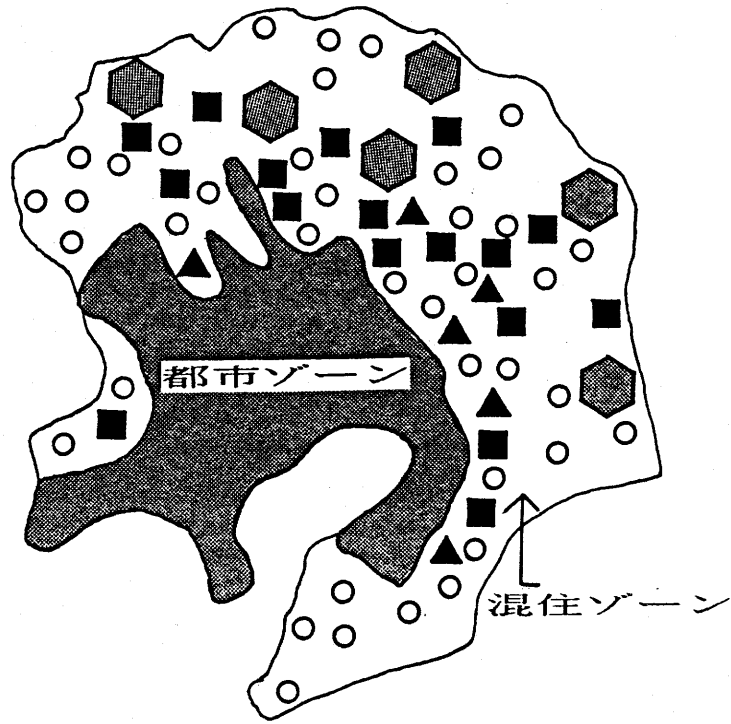
図2-5 5類型の分布

拠点とした点的都市化圏を形成しており、アメーバー状の形態となっている。新住民集団型は、50km圏の外にはあまりみられず、都市的類型の外縁部に分散している。各タイプ混合型も、ほぼ40km圏以遠の面的都市化圏の外側から見られ新住民集団型と混じり合いながら分布している。しかし、このタイプは、新住民集団型が50km圏内に限定されるのに対して、周辺部まで拡大しており、主要鉄道沿線の都市的類型の周辺を囲むようなかたちでほぼ全域に渡って分布している。旧住民型は、面的都市化圏の外側の地域全体に広がっており、平野部においては、農村的類型および新住民集団型、各タイプ混合型と混じり合って、市松模様をなして分布しており、周縁の山間部においても農村的類型と混り合いながら分布している。以上、5類型の分布を観察することにより、つぎの二点にまとめることができる。第一に都市的類型は一体的な圏域構成をなすこと、第二に都市的類型の圏域外は、混住化類型である旧住民型、各タイプ混合型、新住民集団型の3つと農村的類型が市松模様をなし、単純な圏域構成をとっていないこと、である。

6、まとめ

以上、本論で述べたことは、つぎのようにまとめることができる。

まず、町村レベルの分析において、内部的混住性と外部要因的混住性はそれぞれ独立に解釈でき、混住地域を分析するための指標として有効であること、また、それらの指標は、混住化の様態を示す指標として複合的意味を持つことが明らかになった。つぎに、それらの総合的指標の中心をなす内部非農家率と非農家集団率に、来住者層の流入の程度を示すと考えられる人口増減率を加えて代表指標とし、それらを組み合わせて類型化を試みた。その結果対象地域が、5類型（農村的類型、旧住民型、各タイプ混合型、新住民集団型、都市的類型）に区分された。さらに上記累計を用いて首都圏のゾーン区分を行った結果、図2-6の模式図の示すように、いくつかの特徴がみられることがわかった。首都圏地域は大きくは都市ゾーンと混住ゾーンにわかれ、都市ゾーンは圏域的、画的な拡大の形態をとっている。一方混住ゾーンは、旧住民型はゾーン全域に常態としてみられ、各タイプ混合型は、山間部を除いて全域的に分散しており、特に都市周辺には多く見られる。新住民集団型は都市ゾーン周辺に、各タイプ混合型、旧住民型とも混じり合って分布している。このように、混住ゾーンの内部では、3つのタイプと農村的類型の地域が市松模様をなして、分布しており、都市ゾーンのように、圏域的形



都市型
 各々混合型
 新住居集団型
 旧住民型

図2-6 都市ゾーンと混住ゾーン

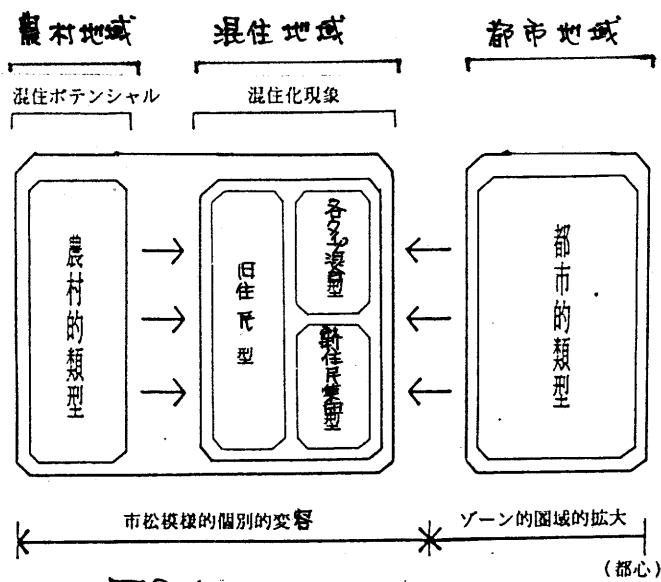


図2-7 首都圏のゾーン構成

態を成さず、分散的、個別的形態をとるのが大きな特徴である（図2-7参照）。

このように混住化が常態としてみられ、各市町村が混住ゾーンのなかで個別的な変容過程をたどるであろう時、混住化現象を都市化の過渡的形態と考えることは有効ではなく、一つの地域像として、従来、都市圏で議論されたような圏域的思考ではなく、混住ゾーンのなかで市町村が個別にその在り方を考えるべきであろう。このとき、それぞれのもつ混住化の類型はどのような形態を持つか、または、持たせるかを見定めたいうえでゾーン全体、および類型ごとに計画課題を決定すべきである。本研究では、そのためのひとつの知見として、以下の点を明らかにした。

①人口指標の側面からみると、昭和40年代から50年代にかけて、首都圏全体が混住化に大きく移行し、農村が非農家化し、非農家化から各タイプ混合型、新住民集団型へと、多様な様相を示すにいたっている。集落の戸数規模も農村的類型から旧住民型、各タイプ混合型、新住民集団型と移行するのに従って増大し、各タイプ混合型は農村的類型の1.5倍以上に、新住民集団型は農家型の2倍以上になっており、その大部分は新住民の流入である。今後の課題としては、これらの各タイプを一律に扱うのではなく、それぞれの戸数規模、住民属性などの特徴を踏まえたうえで、混住ゾーンの多様な居住形

態として選択できるよう計画すべきであろう。

②社会・経済指標からみると、農業経営においては、特に専門的経営では、各類型間の差が認められず、混住化への移項が必ずしも中核的農業の疎外要因にはなっていないと考えられる。また、3次産業人口率、医療施設不便集落率にみられるように、新住民集団型では、都市的サービスがある程度充実する反面、各タイプ混合型では、新住民の来住が多いにもかかわらず、依然として、従来の農村的サービスのレベルにとどまっている。これらのことから農村的環境の利点と問題点を、類型ごとに整理し、混住ゾーンのなかでの農業の積極的な位置付け、既成市街地とのネットワークなどを類型の特性に応じて考えるべきであろう。

③空間指標からみると、宅地化は都市から相対的に地価の安い混住ゾーンへとすすみつつある。それは、また法規制の面からいえば、農振白地地域などの法的規制が緩い地域、あるいは、市街化調整区域に、前者は個別的に、後者は大規模に開発が進んでいることを示している。また、その結果、耕地や山林の転用につながることになる。このように、空間的変化は、多様な事象の結果として、表れることが多いが、類型別の現象を比較観察することによって、それぞれの直接的、間接的対応を検討することが可能となる。

以上、本研究では主として広域レベルの混住ゾーンの描写およびそ

の計画課題について考察を加えたが、次章以下では、これら混住ゾーンの各形態において、それぞれどのような個別的問題、計画課題をもつかを、よりブレイクダウンしてとらえ、広域レベル、市町村レベル、集落レベルといった形で一貫連続性をもたせて明らかにしていく。

注・参考文献

1) 広域レベルでの類型化については「鎌田元弘：都市近郊農村地帯における環境計画の研究，日本建築学会学術講演梗概集」で一部発表している。

2) 耕作放棄率の母数は、経営耕地面積であるが、標本実測調査による耕地面積と経営耕地面積との誤差は、全国計で4.7%（農林水産省情報統計部：1980年世界農林業センサス茨城県統計書，1982、参照）であり、ここでは、既存統計資料を用いるという簡便さを考慮して許容範囲であると考えた。

3) ほぼ同様の見解が「日本建築学会農村計画委員会：大都市近郊農村の特質とその計画的課題，昭和55年秋季大会研究協議会資料，1980」によっても指摘されている。

4) 分析の単位を旧村単位にした場合でも、ほぼ類似した結果が、「滝沢雄三：首都近県混住地域の類型化に関する研究，日本建築学

会学術講演梗概集，198」によって得られている。

5) 広域レベルにおいても、町村レベルと同様の分析過程を踏まえる事も考えられるがここでは広域レベルと同じ指標で分析できることが望ましいため、町村レベルの分析で有効性が確認された指標を代表指標とした。

6) ここでは、混住的類型を抽出することが主な目的であるため、混住的類型では3指標を使い、農村的類型、都市的類型では内部非農家率だけで分類するにとどめた。

表-3の空欄は、農村的類型、都市的類型のそれぞれの内部非農家率の区分を満たす0から100%までの全サンプルを含むことを意味している。

7) 分類区分を行っている研究としては「石見尚：混住社会化にもなう農村集落の遷移過程，農村経済研究，1978」などがあるが、理論的根拠を伴うものは少ない。

8) 土肥博至ほか：都市近郊地域におけるコミュニティを保全し、活性化する都市開発条件調査，(社)日本住宅協会，1985

9) Colin Clark: The Conditions of Economic Progress, London, 1940

10) 山崎不二夫ほか：現代日本の都市スプロール問題(下)，大月書店，1978

11)服部二郎：都市化の地理，古今書院，1973

12)これらの傾向は、L.H.Klaassenらの理論モデルとも合致する。

第3章 集落レベルにおける混住化類型とその特性

第3章 集落レベルにおける混住化類型とその特性

1. 研究の目的と方法

本研究では、第1章の先行研究で述べたコミュニティの枠組みのなかで第3のコミュニナリズム型の立場を取る。前章¹⁾において首都圏域における混住化のタイプを内部非農家率、非農家集団率、人口増加率の3指標を用いて仮説的類型である混住化「地域社会類型」を検討し、その特徴について考察した。この広域レベルでは、旧住民型、農家・新住民型、各タイプ混合型、新住民集団型の4つの混住的類型に農村的類型、都市的類型の2つを加えたものを検証した。本章ではその研究成果を踏まえて、広域で検証された混住化「地域社会類型」について、ひとつの地域像として社会的、空間的領域性を持つ集落レベルで検討し、これらを通して大都市近郊の混住化農村のコミュニティを体系的に捉えようとするものである²⁾。

本章の研究目的は以下の4項である。本章では仮説としての「地域社会類型」を構成する3つ（農家・非農家・新住民）に独特な集団を形成するものと考えられる集団新住民を加えた4つの居住者タイプにもとづき以下の分析を行う。

① 居住者タイプ別の属性や地域活動・住民交流を分析し、その特徴を考察し分類の妥当性を検討する。

② 居住者タイプの構成から集落レベルにおける「地域社会類型」の設定を検討し、類型別に地域活動・住民交流を分析し、類型の適合性を検討する。

③ 住民のコミュニティ意識を分析しその捉え方を把握し、心理面からの「地域社会類型」の適合性を検討する。

④ 以上から集落レベルにおいて行動の系としての地域交流の実態と心理の系としてのコミュニティ意識の関係を「地域社会類型」別に考察する。

本章で行う考察は、前章の研究の方法の中から、主に居住者アンケート調査の分析によるもので、研究の具体的方法は次の通りである。

① 集落レベルでの居住者タイプの分類

属人的な居住者について「地域社会類型」における農家・非農家・新住民・新住民集団の分類を行う。ここで新住民に関しては地域における人間的結合の程度を考慮して血縁新住民（集落に血縁関係を持つ新住民）とそれ以外の新住民に細分する。具体的には、アンケートの調査項目を用いて、第一に時系列的に新住民であるか旧住

民であるか、第二に農業に依存しているか否か、第三に同一集落に血縁者がいるか否か、の3点の組み合わせを基準として分類し、居住者タイプとする。

② 居住者タイプ別居住者属性及び地域交流の特性

次にこの居住者タイプ別に居住者属性を調べ、それぞれのタイプについてその特性を考察する。また、地域交流については2つの場合を想定している。一つは組織、サークルを通じての集団の中での交流（以下地域活動と記す。）であり、一つは個人対個人の交流（以下住民交流と記す。）である。ここでは、アンケート調査の実態分析より居住者タイプ別にそれらの特徴を把握し、合わせて分類の適合性を検討する。

③ 集落レベルにおける「地域社会類型」の適応

一つの集落の中での各居住者タイプの構成及び新旧住民の構成比から混住化集落における「地域社会類型」の設定を検討する。

④ 「地域社会類型」別の地域交流の特性

「地域社会類型」を用いて、属地的単位でもある集落という一つの住民の集合体が、どのような地域交流の特性を持つかを明らかにし、そこから「地域社会類型」の適合性を検討する。また、新住民の住民交流に関する評価を「地域社会類型」別に分析し、交流実態との関係を考察する。分析の具体的な手順は、地域活動・住民交流

についての評価から有効な分析軸を抽出するために、「地域社会類型」別の主成分分析を行う。さらにこの主成分分析から得られた主成分スコアを用いて、居住者タイプ、「地域社会類型」別のセントロイドを描き、「地域社会類型」別特性を把握する。

⑤ 「地域社会類型」別コミュニティ意識の特性

「地域社会類型」を用いて、属地的単位でもある集落という一つの住民の集合体が、どのようなコミュニティ意識の特性を持つかを明らかにし、そこから「地域社会類型」の適合性を検討する。なお、本研究におけるコミュニティ意識とは、社会学において定義される「コミュニティ意識」を指すもので、これを主に住民意識把握の指標として用いる。コミュニティ意識は、奥田、菱山らによって定立された住民の居住地域に対する価値概念の一般的、理論的モデル³⁾であり、地域の居住者を対象としてコミュニティ意識を捉えるアンケート調査を行い、その結果を用いて居住者のコミュニティ意識⁴⁾の構造を明らかにするものである（第1章参照）。

分析の具体的な手順は、コミュニティ意識についての評価から潜在的な因子軸を抽出するために、居住者タイプ、「地域社会類型」別に因子分析を用いて分析する。さらにこの因子分析から得られた因子スコアを用いて、居住者タイプ、「地域社会類型」別のセントロイドを描き、類型別特性を把握する。次に地域交流の実態分析と

このコミュニティ意識の類型別特性を比較検討し、類型別に行動の系と心理の系の構造的な分析を行う。

2、研究対象地域と事例調査について

本章以降で行う事例研究の調査対象地域は、広域レベルとの研究の連続性を持たせるために、広域レベルでの「地域社会類型」から、以下のような地域を選定した（図3-1）。

① 東北線沿線のベッドタウンとして、近年ミニ開発による宅地化が急激に進んでいる地域で新旧住民の間に地域コミュニティに関する様々な問題が顕在化している地域として茨城県猿島郡三和町（各タイプ混合型として）。

② 常磐線沿線のベッドタウンとして大規模開発とミニ開発による宅地化が進み、農村的色彩も比較的強く残している地域として茨城県稲敷郡莩崎町（新住民集団型として）。

③ 筑波研究学園都市という近年急激に高度な都市基盤整備が進んできたという特殊条件の中で宅地化が進んできた地域として茨城県筑波郡谷田部町（新住民集団型として）⁵⁾。

④ 来住型の新住民による混住化はあまり見られず、農家の非農家化、血縁を持つ新住民による混住化が中心で、純農村的色彩も強く残る地域として茨城県猿島郡猿島町（旧住民型として）⁶⁾。

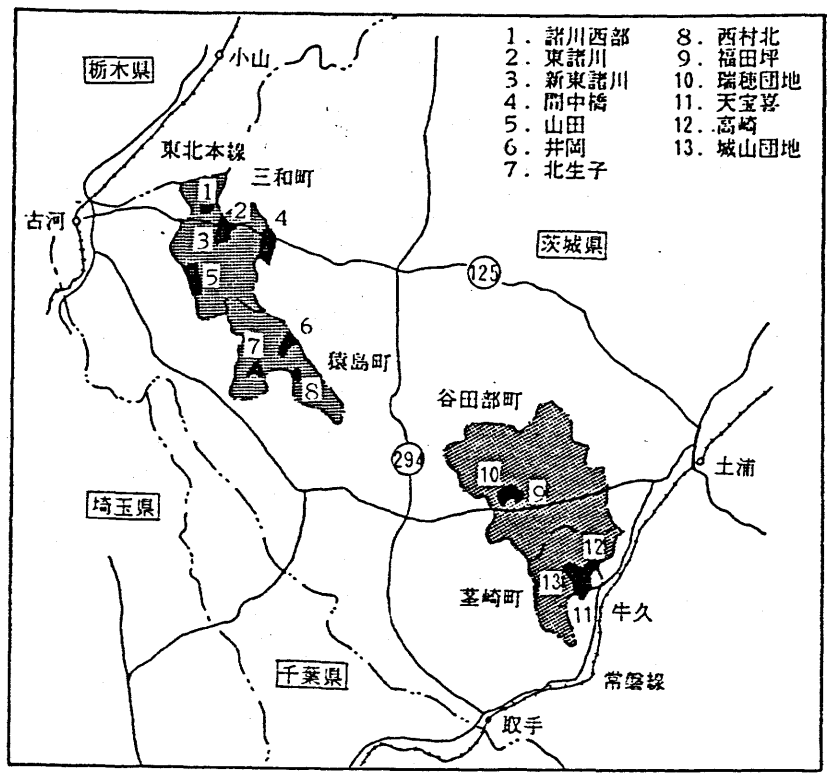


図3-1 対象地域，対象集落の位置

また、以下に述べる「調査集落選定のための調査」により選定された13の調査対象集落の概要を表3-1および表3-2の左欄に示す。

●調査対象集落選定のための調査

① 集落の状況と問題点を包括的に把握していると考えられる農業改良普及所の上記の各地域担当の普及員2名以上の合議で、対象地域の全集落の混住化の程度、混住化の形態などをアンケート形式で評価してもらい、さらにその中から広域レベルでの類型に対応し、地域を代表するような集落を選定してもらった。

② 農林業センサス（集落カード）より、基本指標（総戸数・非農家率）を使用し、調査対象地における各集落の状況を把握する。

③ 普及員に対するアンケートと空中写真・地図情報・現地観察により非農家（新住民住宅を含む）の配置形態・規模を把握する。

④ ①～③より集落区分を行い集落を選定する。

●居住者アンケート調査（居住者属性・地域交流・コミュニティ意識・居住環境評価把握のための調査）

この調査は、アンケート方式により実施した。調査は、集落の全世帯（一部は抽出⁵⁾）に実施し、地域交流、日常生活の中で地域とのかかわりあいの機会が多いという理由から主婦を対象とした。調査は昭和59年11月に実施し、配付・回収は各地区の区長に依頼し留

表3-1 対象集落の概要とアンケート調査回収状況

	集 落 名	非農家率 (%) 総戸数	混住化形態	選 定 理 由
三 和 町	諸川西部	95.6 48.1		コミュニティ評価高 オピニオンリーダー の存在
	東 諸 川	40.0 101		新住民とのトラブル
	新東諸川	0 25		東諸川から独立 新住民だけの自治会
	間 中 橋	44.0 237		生産環境の評価高 集落のまとまり強
	山 田	27.3 116		生産環境の評価低 集落のまとまり弱
猿 島 町	イイ オカ 井 岡	33.8 72		住民活動の評価高 コンクール入選
	キタ オイ ゴ 北 生 子	63.0 91		まとまり強 農村的景観の評価高
	西 村 北	62.5 83		猿島町の中心部 血縁非農家多
谷 田 部 町	福 田 坪	22.4 82		コミュニティ良好 谷田部町中心部に近隣
	瑞穂団地	0 87		集落に隣接 団地型
荃 崎 一 町	天 宝 喜 (団地含)	91.2 375		団地に隣接 集落空間の活用高
	高 崎 (団地含)	90.3 652		住民活動活発 生活の利便性良
	城 山	0 416		住民活動活発 まとまり強・団地型

新住民 ○ 旧住民

表3-2 調査対象集落の概要、調査票配布回収状況、住民構成

集落名	所在地	* 集落 形態	* 非農家 率%	総戸数	** 開発方式	開発年度	有効票	回収率 %	住 民 構 成 (%)				
									1. 農家旧住民	2. 非農家旧住民	3. 血縁新住民	4. 来歴新住民	5. 団地新住民
猪川西部	三和町	散	95.6	481	スプロ	S.50~	342	73.6	1.9	4.0	27.6	66.6	0.0
栗猪川	"	列	40.0	101	-	S.55~	85	94.1	35.7	34.5	19.0	10.7	0.0
新栗猪川	"	-	-	25	団小	S.55~	25	100.0	4.2	0.0	25.0	0.0	70.8
間中橋	"	散	44.0	237	スプロ	S.50~	181	84.4	23.7	14.2	27.8	34.3	0.0
山田	"	塊	27.3	116	スプロ	S.50~	86	85.3	32.9	31.7	13.4	22.0	0.0
北生子	袋島町	塊	63.0	91	2.3男住	S.40~	72	74.7	10.4	44.8	37.3	7.5	0.0
井岡	"	散	33.8	72	-	-	53	97.2	46.0	40.0	6.0	8.0	0.0
西村北	"	塊	62.5	83	2.3男住	S.40~	80	95.2	9.2	46.1	34.2	10.5	0.0
榎田坪	谷田部町	塊	22.4	82	-	S.52~	69	90.2	37.9	25.8	18.2	18.2	0.0
深野団地	"	-	100.0	87	団中	S.52~	77	92.0	0.0	0.0	8.0	0.0	92.0
天宝峯	荻崎町	塊	53.6	57	-	-	42	78.9	25.0	47.5	10.0	17.5	0.0
高崎	"	列	80.4	270	スプロ	S.50~	100	100.0	20.0	16.0	20.0	44.0	0.0
城山団地	"	-	100.0	416	団大	S.50~	94	95.0	0.0	0.0	7.5	0.0	92.5

* 散は散居村、列は列状村、塊は塊状村、一印は団地を表す。
** スプロはスプロール、団小・団中・団大は計画的住宅団地開発の小中大规模、2・3男は次三男の新築住宅を表す。

置方式で行った。回収状況は表3-3に示す通りで、全体の回収率は約85%、有効回答1,306票を得た。アンケートの具体的な調査項目は次の通りである（付録資料に調査票を記載した）。

① 居住者属性

家族構成、職業、宅地・住宅の所有形態、住宅規模、敷地規模、前住地、居住歴、地区内近親者の有無

② 居住環境評価

来住理由、居住環境に対する期待度と満足度

③ 地域活動の参加状況

共同作業、町内会・部落会等の総会や常会、まつり等の行事、スポーツクラブ、趣味の集まり、社会教育・ボランティア活動、PTA

④ 個人の住民交流

知人人数、相談相手の有無、子供の遊び相手の有無、頼りにしている家の有無、手伝いに行く家の有無

⑤ 地域運営への参加意志

地域役員の受入れ意志、地域問題の解決方法、定住意識

⑥ コミュニティ意識

表3-4に示す18項目の設問について、「そうだと思う」「まあそうだと思う」「どちらともいえない」「まあそうではないと思う」「そうではないと思う」の5段階評価を行い価値概念として構成さ

表 3-3 アンケート配布回収状況

行政区名	戸数	回収戸数	有効票	回収率(%)
諸川西部	481	354	342	73.6
東諸川	101	95	85	94.1
新東諸川	25	25	25	100.0
間中橋	237	200	181	84.4
山田中	41	37	28	90.2
山田南	75	62	58	82.7
北生子	91	68	72	74.7
井岡	72	70	53	97.2
西村北	83	79	80	95.2
福田坪(一)	35	34	32	97.1
“(二)	47	40	37	85.1
瑞穂団地	87	80	77	92.0
高崎	100(抽出)	100	100	100.0
城山	100(抽出)	95	94	95.0
天宝喜	57	45	42	78.9
計	1,637	1,384	1,306	84.5

れたコミュニティ意識の実態を把握した。

表3-4 コミュニティ意識の調査項目

1. 地域社会の中で生活していくには長いものにまかれるしかない
2. 地域社会は住民が協力して住みよくするように心がけるべきだ
3. 地域社会は自分の生活のよりどころである
4. 今住んでいる地域はたまたま生活しているにすぎない
5. 住民は生活防衛のために連帯すべきだ
6. 地域社会は一定の自治性を持つべきだ
7. 各自が自己の身分をわきまえてもめごとのないよう心がけるべきだ
8. 自己の生活と地域社会とは別の問題だ
9. 自分の生活上の不満や要求はできるだけ行政に働きかけるべきだ
10. 人と人との和は大切にすべきだ
11. 近隣とのつきあいは面倒だ
12. 地域的な問題は自分がかかわらなくても誰かがよくしてくれるだろう
13. 個々人のプライバシーは充分に守るべきだ
14. 旧来からのしきたりを大切にすべきだ
15. 今住んでいる地域には関心や愛着はない
16. 住みよい地域社会にするために自ら進んで活動をしようと思う
17. 町内会または区会などのつきあいはやめたほうがよい
18. 近隣関係などは何の意味もない

3、居住者の属性と地域交流の実態

居住者タイプの具体的な分類は、アンケートの調査項目の中から、「農業専業または1種兼業であるか否か」、「居住歴」、「集落内に近親者がいるか否か」の3項目を用いて行う。第一に農家旧住民タイプで、昭和40年前から住んでおり⁷⁾、家計を支える主な職業が農林業であるケース、第二に非農家旧住民タイプで、同じく昭和40年前から住んでいるが、主な職業が農林業以外であるケース⁸⁾、第三に血縁新住民タイプで、昭和40年以降に来住し、親、兄弟が近くに住んでいるケース、第四に来住新住民タイプで、昭和40年以降に来住し、血縁関係はなく旧住民と同一集落内に住んでいるケース、第五に集団新住民タイプで、来住新住民と同じく昭和40年以降の居住者であるが血縁関係は持たず、集落居住者とは別に新住民だけで集団（団地）を形成して、独立した自治会、町内会等を持ち、新集団を形成しているケース、の以上5分類である⁹⁾。表3-2 右側に各調査集団別の居住者タイプの構成比を示した。

つぎに、この居住者タイプ別に、居住者の属性を調べ、それぞれのタイプの特性について検討する。検討する項目は、職業、職種、勤務先、世帯構成、住宅の種類、住宅面積等である。表3-5に5つの居住者タイプ別の諸指標の分布の差の検定を示したが、これを見ると、いずれの指標もカイ二乗値は高く、有意水準1%以上で、

表3-5 居住者タイプ別属性指標の分布の差の検定

指 標	カテゴリー数	サンプル数	X ² 値	d f	有意水準
職 業	4	1231	1204.2	12	◎
職 種	7	749	132.0	18	◎
勤 務 先	5	768	182.0	12	◎
通勤時間	6	765	158.4	15	◎
住宅の種類	5	1233	133.1	16	◎
住宅規模	6	1025	300.1	20	◎
敷地規模	7	1026	863.5	24	◎
世帯構成	9	1170	501.2	32	◎
世帯主の年齢	6	1246	351.8	20	◎
前 住 地	5	746	214.5	8	◎

◎は有意水準 0.01

各タイプ間に明確な差があることがわかる。各タイプ別の属性を観察すると、まず、新住民のタイプと旧住民のタイプで、断層が見られ、旧住民である農家と非農家では、就業形態（表3-6）は大きく異なるものの、世帯構成（表3-7）、住宅規模（表3-8）等では近似している。新住民のタイプの中では、血縁新住民が異質であり、世帯構成、住宅の規模では、来住新住民や集団新住民と同質であると言えるが就業形態では、非農家旧住民に似た傾向を示し、地縁性が強く、全体的には新住民の中にありながら、旧住民的な性格も持ち合わせているといえる。来住新住民と集団新住民では、全体的には大きな差は見られないが、集団新住民は公務員が多く、就業においても地縁性は小さく、前住地からも読み取れるように都市指向的傾向が強い集団であることが察せられる。

次に、居住者タイプ別の地域交流の特徴を把握する。地域活動では、居住者集団における自律的、自治的活動としては、「どぶさらい・草むしり等の共同作業」と「自治会・町内会などの総会や常会」を取り上げ、集団全体での共同行事として、「祭りや運動会」、また、自治会の下部組織や各種サークルとして「テニスやゲートボール等のスポーツクラブ」「音楽・芸術等の趣味の集まり」、社会教育や子供のための活動として「ボランティア活動への参加」「PTAの集まり」を取り上げて、「よく参加する」「ときどき参加する」

表3-6 居住者タイプ別職業・職種・勤務先

居住者タイプ	業			職						種*			勤務			先*	
	勤め	農林業	自営業	その他	職			種*			地区内	町内	県内	東京都	その他		
					事務職	パート職	労務職	技術職	管理職	公務員						その他	
1. 農家旧住民	0.0	100.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2. 非農家旧住民	64.3	0.0	25.3	10.4	3.8	10.5	44.4	8.3	3.8	18.8	22.3	28.8	31.7	8.6	8.6	8.6	
3. 血縁新住民	68.8	3.3	21.9	5.9	8.3	16.6	32.0	18.2	2.2	14.4	15.6	30.6	29.4	11.1	13.3	13.3	
4. 来住新住民	81.3	0.8	12.8	5.1	10.5	16.1	20.3	27.6	5.9	11.5	10.7	11.4	27.4	28.4	22.1	22.1	
5. 集団新住民	87.7	0.0	5.3	7.0	8.7	12.8	6.0	21.5	4.7	42.3	6.0	20.9	4.7	59.3	10.1	10.1	
サンプル数	782	207	172	70	63	109	184	155	33	147	100	159	186	206	117	117	

* 農林業を除く。

表3-17 居住者タイプ別世帯構成

居住者タイプ	世帯構成								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1. 農家旧住民	2.2	1.1	0.0	3.9	16.7	0.6	63.9	7.2	4.4
2. 非農家旧住民	6.8	0.5	1.0	4.9	19.5	1.0	55.1	4.4	6.8
3. 血縁新住民	6.7	9.0	9.4	33.7	23.5	0.8	11.0	0.0	5.9
4. 来住新住民	6.6	7.7	8.3	42.1	17.6	1.9	8.8	0.3	6.6
5. 集団新住民	13.2	3.0	5.4	38.3	26.3	1.2	6.6	0.0	6.0
サンプル数	81	59	65	320	238	14	299	23	71

凡例 1. 単身世帯(未婚のみ) 2. 単身世帯(長子0~3歳) 3. 単身世帯(長子4~6歳)
 4. 単身世帯(長子7~15歳) 5. 単身世帯(長子16歳~) 6. 単身世帯(長子年齢不明)
 7. 複身世帯(2世帯) 8. 複身世帯(3世帯) 9. 単身世帯

表3-18 居住者タイプ別居住形態・住宅面積

居住者タイプ	居住形態			住宅面積								
	持地* 自家	借地 自家	借地 他家	借家	社宅	その他	20坪 未満	20~ 30坪	30~ 40坪	40~ 50坪	50~ 60坪	60坪 以上
1. 農家旧住宅	99.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.9	15.4	21.1	28.0	21.1	7.4
2. 非農家旧住宅	94.2	5.8	0.0	0.0	0.0	0.0	7.3	19.9	23.3	28.6	13.6	7.3
3. 血縁新住民	77.8	6.3	14.8	0.7	0.4	0.4	17.0	39.0	27.5	8.0	4.5	4.0
4. 来住新住民	84.3	0.8	10.1	4.3	0.5	0.5	29.1	47.1	13.5	6.9	1.7	1.7
5. 集団新住民	96.5	0.0	2.3	1.2	0.0	0.0	9.0	58.7	24.5	5.2	1.9	0.6
サンプル数	1093	35	82	20	3	3	159	372	217	152	82	42

* 土地、建物ともに所有していることを示す。

「ほとんど参加しない」の3段階に分類し、参加状況を比較分析した。

個人の住民交流では、旧住民との交流、新住民との交流の2つの面からとらえる。交流の内容としては、「知り合い人数」「相談相手の有無」「子供の遊び相手の有無」「頼りにしている家の有無」「手伝いに行く家の有無」の5つの指標によって分析した。

表3-9に居住者タイプ別の各指標の分布の差の検定を示した。

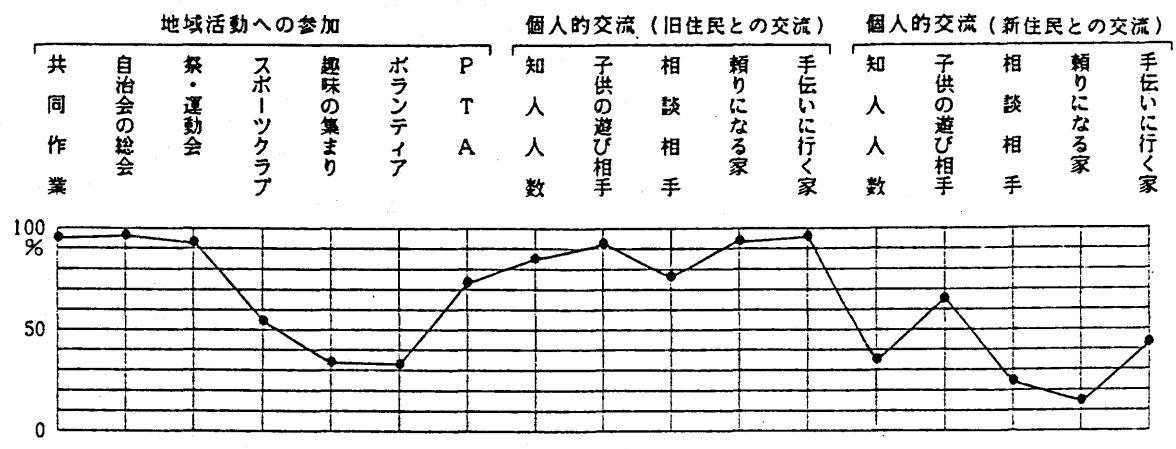
「PTAの集まり」を除いては、いずれの指標も有意水準1%で分布に差があると認められ、居住者タイプによる分類が地域交流の特性を明確にするものとして有効であることを裏付けている。図3-2および表3-10はタイプ別の各指標について、肯定的回答（「よく参加する」「ときどき参加する」、知り合い人数が多い、相談相手がいる、等）の比率を示したものである。地域活動、住民交流の特性を総括的に見ると、農家旧住民では、従来、村落共同体に特徴的に表れた共同体運営、共同労働などの自律的、自治的活動の傾向は強い反面、個人的自発的活動への参加はそれ程高くはない¹⁰⁾。また個人の交流でも旧住民間の相互扶助的機構は強固であることがうかがわれるが、新住民に対しては、「手伝い」等の儀礼的交流は行うものの、全体的には強いつながりがあるとはいえない。非農家旧住民になると、自律的、自治的活動や相互扶助的交流は、農家に

表3-9 居住者タイプ別各指標の分布の差の検定

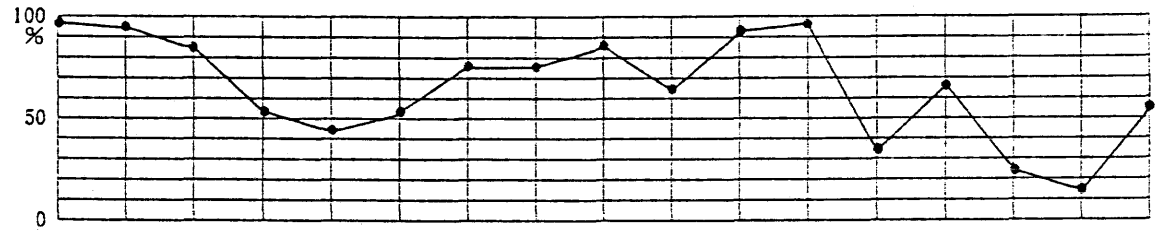
指 標	カテゴリ数	サンプル数	X ² 値	d f	有意水準
共同作業	3	1142	41.0	8	◎
自治会の総会	3	1093	100.3	8	◎
祭・運動会	3	1086	76.0	8	◎
スポーツクラブ	3	1037	103.5	8	◎
趣味の集まり	3	1000	68.2	8	◎
ボランティア	3	989	78.5	8	◎
P T A	3	993	11.7	8	
知 人 人 数 (旧住民との交流)	6	1133	494.8	20	◎
知 人 人 数 (新住民との交流)	6	1019	47.4	20	◎
相 談 相 手 (旧住民との交流)	2	1034	330.0	4	◎
相 談 相 手 (新住民との交流)	2	935	56.1	4	◎
子供の遊び相手 (旧住民との交流)	2	678	169.2	4	◎
子供の遊び相手 (新住民との交流)	2	644	25.1	4	◎
頼りにしている家 (旧住民との交流)	2	1086	472.9	4	◎
頼りにしている家 (新住民との交流)	2	963	108.6	4	◎
手伝いに行く家 (旧住民との交流)	2	1106	527.2	4	◎
手伝いに行く家 (新住民との交流)	2	1001	30.8	4	◎

◎は有意水準 0.01

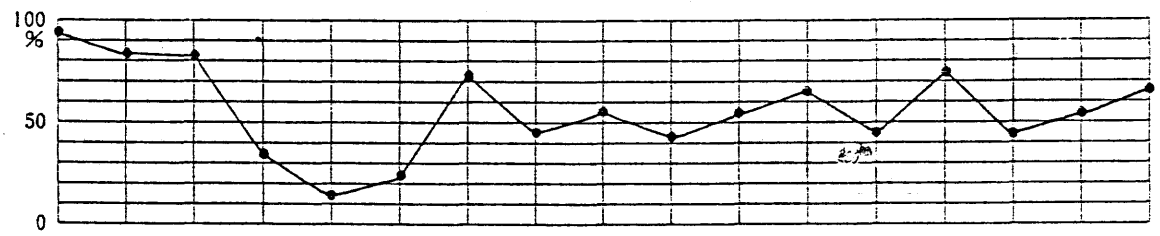
1) 農家旧住民



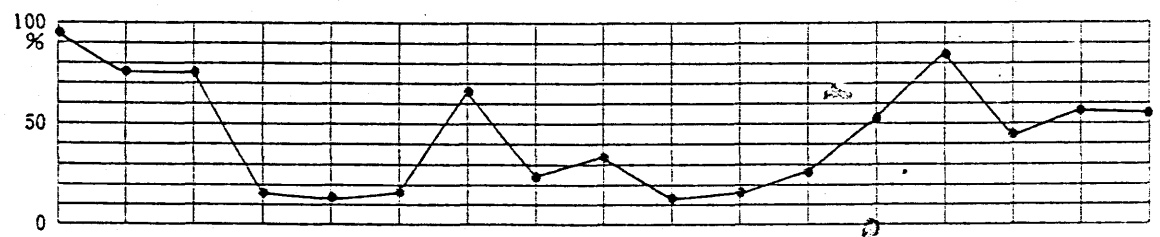
2) 非農家旧住民



3) 血縁新住民



4) 来住新住民



5) 兼住新住民

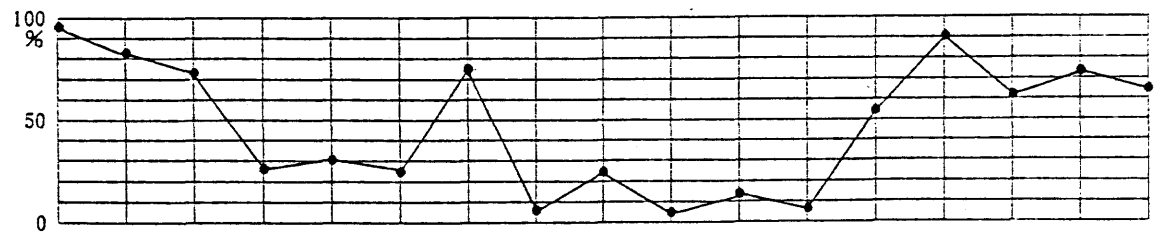


図3-2 地域活動の奥態

表3-10 地域活動の実態 (肯定的評価の平均値)

	地域活動への参加						個人的交流 (旧住民との交流)						個人的交流 (新住民との交流)					
	共同作業	自治会の総会	祭・運動会	スポーツクラブ	趣味の集まり	ボランティア	P T A	知 人 人 数	子 供 の 遊 び 相 手	相 談 相 手	頼 り に な る 家	手 伝 い に 行 く 家	知 人 人 数	子 供 の 遊 び 相 手	相 談 相 手	頼 り に な る 家	手 伝 い に 行 く 家	
農家 旧住民	171 (98.8)	154 (98.7)	146 (93.6)	72 (54.1)	39 (32.8)	49 (41.6)	94 (74.0)	145 (88.4)	75 (91.5)	119 (79.9)	154 (94.5)	167 (98.2)	55 (37.7)	51 (68.0)	27 (24.5)	29 (24.6)	55 (41.4)	
非農家 旧住民	210 (96.1)	193 (96.0)	166 (86.9)	91 (51.4)	74 (44.6)	82 (50.3)	130 (77.4)	168 (78.9)	97 (87.4)	123 (66.8)	191 (91.0)	209 (98.1)	65 (32.7)	69 (69.7)	38 (25.0)	40 (25.5)	96 (55.2)	
血缘 新住民	244 (94.2)	208 (83.9)	201 (80.1)	92 (34.7)	41 (17.0)	58 (24.5)	172 (71.9)	125 (48.3)	93 (55.4)	103 (42.7)	139 (55.8)	171 (67.6)	109 (46.2)	125 (77.2)	103 (46.6)	126 (54.3)	151 (64.3)	
来住 新住民	314 (95.4)	254 (77.9)	252 (76.8)	64 (19.8)	48 (15.3)	57 (18.1)	212 (68.4)	81 (24.4)	72 (32.7)	36 (11.7)	59 (19.2)	90 (28.7)	144 (50.4)	185 (86.0)	142 (46.7)	178 (58.7)	205 (67.0)	
集住 新住民	162 (97.0)	131 (80.8)	115 (71.9)	42 (26.6)	49 (30.8)	40 (25.5)	111 (74.5)	14 (8.5)	24 (24.7)	11 (7.3)	21 (13.4)	15 (9.6)	83 (54.6)	84 (90.3)	89 (60.1)	110 (71.9)	100 (65.4)	

上段は平均値 () 内は標準偏差を示す

比べ僅かに低下するものの、趣味の活動やスポーツのサークルなどの個人の自発性が原則となるような活動の傾向は高まる。しかし、新住民に対する対応の態度は農家とほとんど変わらない。 血縁新住民では、農家旧住民や非農家旧住民に比べ地域活動への参加は低下するが、個人の交流では新旧住民のいずれとも同じような程度で交流しており、新旧住民の交流という面から見れば、旧住民と新住民との仲介者的役割を担うことが期待される。 来住新住民及び集団新住民では、地域活動の参加をみると、集団新住民のほうやや盛んである。来住新住民の住む集落では旧住民と同一の自治会または町内会である場合が多く、地域活動のイニシアチブも旧住民が持つ場合が多い。そのため来住新住民の立場からすれば、新住民独自の自主性が育まれにくくなり、地域活動が促進されにくいことのひとつの要因になると考えられる。個人の交流をみると、旧住民との交流では、来住新住民と集団新住民を比べると来住新住民のほうが高く、新住民同志の交流では、集団新住民のほうが高い。この場合も、地域活動と同様に来住新住民の場合では、旧住民と同一の自治会や町内会の形態をとることが、住民交流の機会の増大につながる要因になっていると考えられる。しかし、このような場合にも旧住民側に積極的な働きかけがなければ新旧住民相互の交流も促進されないことになろう。集団新住民では、旧住民とは自治会や町内会は別で、

居住地域も独立していることが多い。そのため旧住民とは接触する機会が少ないが、新住民同志の住民交流は新たに形成され、旧住民の干渉を受けにくいことから自主的になり交流も促進されることが考えられる。

4、地域交流の「地域社会類型」別特性と評価

以上の分析から、「地域社会類型」を構成する農家旧住民、非農家旧住民、血縁新住民、来住新住民、集団新住民の5つの居住者タイプは、属性、または地域活動、住民交流の面から見て、それぞれ明確な特性を持つことが分かった。次に、この居住者タイプを用いて集落レベルにおける「地域社会類型」の設定を行う。設定の方法は、表3-2の右欄に示すような居住者タイプ別の構成比及び新旧住民別の住民構成の割合からみて、旧住民が多い場合、新旧住民が同位の場合、新住民が多い場合の3つに分類する。以上の視点から「地域社会類型」の設定を行った結果を表3-11に示す。即ち、表3-2の右欄の住民構成をみると、井岡、天宝喜、東諸川のような集落は、農家旧住民及び非農家旧住民の割合が大きく、これらの集落は主に集落内部からの混住化、即ち農家の非農家化が進んでいるものと考えられ、このような集落は旧住民型に対応する。同様に、山田、西村北、北生子のような集落は、非農家旧住民の割合は大きい

表3-11 集落の類型化

類 型	類型を構成する主な集団				新住民の量的関係と集落の類型化		
	旧住民		新住民		1 (旧>新)	2 (旧=新)	3 (旧<新)
A旧住民型	農家	非農家	-	-	A-1	/	/
B各タイプ混合型	農家	非農家	血縁新	来住新	B-1	B-2	/
C農家・ 新住民型	農家	-	血縁新	来住新	/	C-2	C-3
D新住民集団型	-	-	-	集団 新住民	/	/	D-3

うえに、血縁新住民または来住新住民の割合も大きく、このような集落は各タイプ混合型に対応する。間中橋、高崎、諸川西部のような集落は、非農家旧住民の割合が小さく血縁新住民、来住新住民の割合が大きい集落である。このような集落は農家・新住民型に対応する。新東諸川、瑞穂団地、城山団地のような集落は、集団新住民が突出した集落である。このような集落は新住民集団型に対応する。さらに、集落レベルにおける「地域社会類型」では新旧住民別住民構成の割合で、表3-11右欄のように分類する¹¹⁾。

次に、「地域社会類型」別の地域活動・住民交流の特性を分析する。また、新住民の住民交流に関する評価を「地域社会類型」別に分析し、交流実態との関係性を考察する。まず、前項で用いた、地域活動、住民交流に関する指標17項目を用いて、主成分分析を全体及び「地域社会類型」別に行った。表3-12に各項目の平均値（「よく参加」を1、「ときどき参加」を2、「参加しない」を3とした場合の平均値）を、表3-13に主成分数を3にした場合の各主成分の負荷量と固有値を示した。固有値をみるといずれも1.5以上と大きく、この結果から「地域社会類型」別の地域活動や住民交流の実態を読み取ることができる。調査対象全体でみると、第I軸から第III軸まで極めて明確に分かれる。第I軸は固有値4.39と大きく、軸の構成は、旧住民との住民交流を示す項目でいずれも負荷量が

表3-12 「地域社会類型」別評価指標の平均値

	A-1	B-1	B-2	C-2	C-3	D-3	全体	
地域活動への参加	共同作業	2.87 0.41	2.82 0.47	2.85 0.41	2.80 0.52	2.93 0.31	2.74 0.51	2.83 0.46
	自治会の総会	2.67 0.59	2.67 0.59	2.55 0.66	2.34 0.78	2.41 0.72	2.26 0.76	2.43 0.72
	祭・運動会	2.46 0.73	2.59 0.59	2.48 0.75	2.34 0.76	2.21 0.76	2.10 0.80	2.30 0.77
	スポーツクラブ	1.64 0.82	1.50 0.76	1.89 0.84	1.65 0.83	1.32 0.60	1.43 0.73	1.52 0.76
	趣味の集まり	1.47 0.74	1.20 0.43	1.45 0.68	1.36 0.61	1.16 0.43	1.43 0.70	1.33 0.61
	ボランティア	1.59 0.75	1.36 0.59	1.66 0.80	1.41 0.67	1.23 0.51	1.31 0.58	1.38 0.65
	PTA	2.34 0.86	2.21 0.87	2.48 0.83	2.31 0.84	2.14 0.87	2.21 0.85	2.25 0.86
個人的交流へ旧住民との交流Ⅴ	知人人数	5.19 1.38	4.94 1.39	4.89 1.45	4.41 1.79	2.91 1.60	2.48 1.38	3.94 1.86
	子供の遊び相手	1.84 0.39	1.86 0.35	1.71 0.46	1.66 0.47	1.28 0.45	1.25 0.43	1.54 0.50
	相談相手	1.60 0.49	1.62 0.49	1.49 0.50	1.46 0.50	1.19 0.39	1.10 0.30	1.38 0.49
	頼りになる家	1.83 0.38	1.78 0.42	1.76 0.43	1.61 0.49	1.25 0.43	1.16 0.37	1.52 0.50
	手伝いに行く家	1.92 0.27	1.74 0.44	1.93 0.26	1.60 0.49	1.43 0.50	1.14 0.35	1.59 0.49
個人的交流へ新住民との交流Ⅴ	知人人数	3.34 1.61	3.53 1.80	3.34 1.49	3.81 1.70	4.34 1.61	4.16 1.71	3.85 1.69
	子供の遊び相手	1.67 0.47	1.87 0.34	1.61 0.49	1.80 0.40	1.86 0.35	1.89 0.32	1.79 0.40
	相談相手	1.24 0.43	1.33 0.47	1.37 0.48	1.42 0.49	1.50 0.50	1.58 0.50	1.43 0.50
	頼りになる家	1.21 0.41	1.38 0.49	1.41 0.49	1.49 0.50	1.63 0.48	1.69 0.46	1.51 0.50
	手伝いに行く家	1.43 0.50	1.38 0.49	1.69 0.46	1.58 0.49	1.74 0.44	1.66 0.47	1.61 0.49

上段は平均値 下段は標準偏差を示す

表3-13 全体及び「地域社会類型別」主成分負荷量

指 標	集落類型												全 体								
	A-1			B-1			B-2			C-2			C-3			D-3			全 体		
	F1	F2	F3	F1	F2	F3	F1	F2	F3	F1	F2	F3	F1	F2	F3	F1	F2	F3	F1	F2	F3
共同作業	0.40	.28	-.10	-.05	●.61	.23	.15	○.42	.03	-.01	●.73	.17	.09	.28	.33	.01	.02	●.67	-.01	●.57	.10
町内会の総会	●.55	.20	-.06	-.09	●.60	.13	●.57	○.43	-.21	.30	●.69	.02	.16	.17	●.65	-.02	.07	●.69	.17	●.68	.01
祭・運動会	●.66	.28	.01	-.10	●.77	.05	●.55	.30	.03	.32	●.72	-.04	.05	.22	●.71	.07	○.46	.15	●.71	.03	.03
スポーツクラブ	●.76	.12	-.20	.21	●.64	.11	●.52	○.45	.15	●.50	○.46	-.04	.13	-.00	●.63	.04	-.15	●.53	.20	●.64	-.02
趣味の集まり	●.63	.15	.15	.18	●.50	.07	●.51	.15	.20	.26	.36	.10	.04	-.06	●.55	.32	.16	.39	.14	○.48	.11
ボランティア	●.80	.00	.06	-.12	●.57	.12	○.45	○.44	.11	.39	.37	.08	.11	-.05	●.61	.12	.09	●.56	.19	●.61	.00
P T A	●.60	.01	-.21	.25	●.58	.01	.10	●.75	-.00	.18	●.72	.06	-.09	.27	●.59	.22	.09	●.53	.06	●.62	.17
知人人数 (対旧住民)	.15	●.63	-.05	.10	.09	●.69	.23	●.73	-.01	●.63	○.49	.09	●.64	.07	.08	.07	●.69	.13	●.74	.26	-.07
知人人数 (対新住民)	-.06	.24	●.52	●.68	.02	.17	-.25	●.55	○.40	.04	○.43	○.46	.06	●.67	.14	●.71	.01	.09	-.05	.14	●.62
相談相手 (対旧住民)	.05	●.62	.12	.05	.18	●.76	●.68	-.02	.26	●.82	.07	.08	●.75	-.04	.05	.02	●.63	.09	●.78	.10	.00
相談相手 (対新住民)	.28	-.02	●.59	●.76	-.01	-.26	.12	-.19	●.81	.04	-.05	●.76	-.02	●.69	.07	●.76	-.07	.06	-.04	.04	●.76
子供の遊び相手 (対旧住民)	.27	●.74	.07	○.47	-.04	.30	○.40	○.49	.00	●.70	.15	.03	●.68	.11	.03	.08	○.49	.01	●.77	.14	-.01
子供の遊び相手 (対新住民)	.02	-.02	●.60	●.60	-.03	.06	-.03	.23	●.66	-.07	.20	●.58	-.03	●.72	.02	●.64	-.06	.18	-.06	.05	●.65
頼りになる家 (対旧住民)	.15	●.75	-.00	-.19	.21	●.75	●.77	.07	.07	●.89	.18	.03	●.80	.05	.07	-.06	●.82	.03	●.87	.16	-.03
頼りになる家 (対新住民)	-.05	-.28	●.73	●.81	.12	-.30	.04	-.10	●.88	-.02	.05	●.85	.04	●.79	.00	●.81	.08	.01	-.10	-.00	●.81
手伝いに行く家 (対旧住民)	.12	●.72	-.09	-.13	.19	●.84	●.60	.09	-.21	●.84	.26	-.04	●.75	.03	.21	-.00	●.79	.03	●.81	.22	-.11
手伝いに行く家 (対新住民)	-.04	.06	●.63	●.80	.18	-.16	.16	.12	●.59	.19	-.00	●.73	.17	●.64	.15	●.75	.18	.12	.04	.11	●.71
園 有 価	4.04	2.13	1.75	3.68	3.32	1.71	4.40	2.51	1.50	5.51	2.39	1.49	3.80	2.42	1.82	3.40	2.46	1.81	4.39	2.91	1.56

● 因子負荷量 0.5以上 ○ 因子負荷量 0.4以上

大きく、対旧住民交流性と名付けることができる。第Ⅱ軸は、地域活動を示す項目で負荷量が大きく、地域活動性と名付けることができる。第Ⅲ軸は、第Ⅰ軸とは反対に新住民との交流を示す項目に、大きい負荷量をもつものが、集まっており、対新住民交流性と名付けることができる。以上の各主成分の解釈から、旧住民や新住民との個人で行われる交流と、地域活動のような集団での交流は独立であることが読み取れる。各軸に着目してみると、第Ⅰ軸では、居住者タイプ別での分析でも明らかであったように、旧住民間の交流は活発である。これは旧住民と新住民との交流が少ないことから、明確なかたちで、第Ⅰ主成分として表れたものと考えられる。第Ⅱ軸の地域活動性は、ここに含まれる地域活動の各項目が、自律的項目、自治的項目、個別的項目等、多様であっても、全体的にみると地域活動性というひとつの総合的尺度でとらえられることを示している。第Ⅲ軸からは、第Ⅰ軸と同様、新住民との個人的交流にもその段階や程度があるものの、それらは、相互に結び付いており、対新住民交流性というひとつの総合的尺度でとらえられることがわかる。「地域社会類型」別にみると、旧住民が多くを占める集団（A-1）では、地域活動のような集団単位での交流が主軸となり、逆に新住民の多い集団（C-3、D-3）では個人的交流が主軸を形成する。新旧住民が混在しているような中間的な類型（B-2、C-2）では、集団的

交流と個人的交流が同程度の関係になるか、または、集团的交流と個人的交流が独立的にはならず、主軸のなかに混合してあらわれる。すなわち、地域活動や住民交流の実態からみると、混住化集落は、伝統的共同体のように、連带的傾向を強く表すものから地域集団に束縛されずに個別性を志向するような傾向を表す集団までいくつかの段階に分かれることがわかる。

次に、全体の主成分分析の結果を用いて、対象集団の特性を検討する¹²⁾。図3-3および表3-14は、主成分得点の「地域社会類型」別居住者タイプ別平均スコアによるセントロイドである。ここでは、第Ⅰ主成分と第Ⅱ主成分の結果についてのみ示した。A-1では、農家と非農家がほとんど同じ座標にプロットされ、ともに地域活動性、対旧住民交流性のいずれも高く、両集団が地域交流の面からみると同質的集団であることがわかる。B-1は、農家、非農家の2つの集団が第一象現にプロットされ、来住新住民は第二象現である。第一象現のなかでは、非農家のほうが、対旧住民交流性、地域活動性ともに高くなっている。農家では、対農家交流性は高いものの地域活動性がやや低くなっている。B-2は、主な居住者タイプは、農家、非農家、血縁新住民の3集団であるが、いずれも対旧住民交流性、地域活動性のどちらも高い。C-2は、農家、血縁新住民、来住新住民の3集団であるが、いずれも異なった象現にプロットされ、

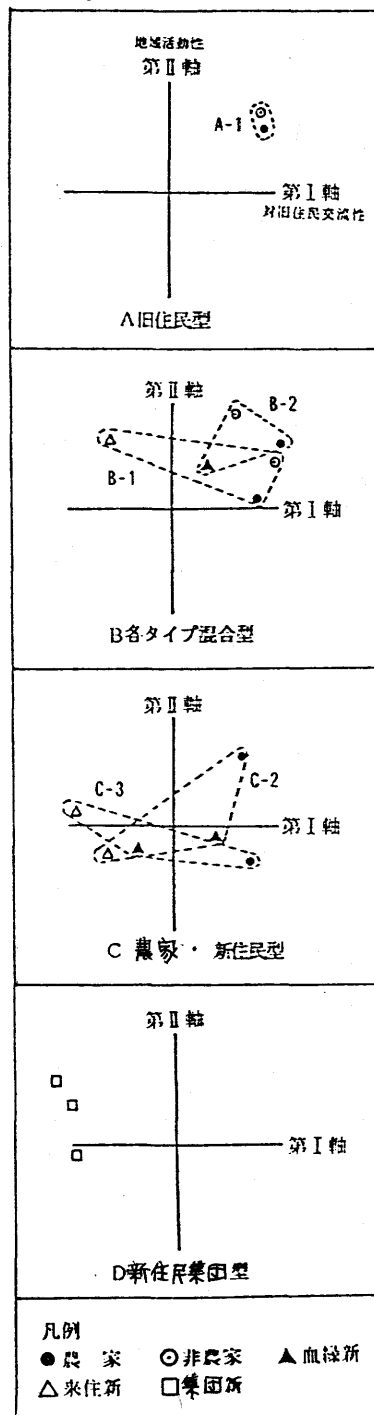


図3-3 「地域社会類型別」居住者タイプ別主成分得点セントロイド

表3-14 「地域社会類型別」居住者タイプ別主成分得点の平均値

	A-1		B-1		B-2		C-2		C-3		D	
	F-1	F-2	F-1	F-2	F-1	F-2	F-1	F-2	F-1	F-2	F-1	F-2
農家	0.89	0.54	0.78	0.08	1.10	0.55	0.72	0.70	0.74	-0.39	-	-
非農家	0.89	0.60	1.01	0.45	0.61	0.92	-	-	-	-	-	-
血縁新	-	-	-	-	0.31	0.41	0.43	-0.18	-0.33	-0.18	-	-
来住新	-	-	-0.57	0.59	-	-	-0.61	-0.23	-0.91	0.08	-	-
集団新	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-1.03	0.10

農家は対旧住民交流性、地域活動性がともに高く、血縁新住民では地域活動性はやや低いものの対旧住民交流性は、農家程ではないが高くなっている。来住新住民では、対旧住民交流性、地域活動性のいずれも低くなっている。C-3は、C-2と同じ住民構成であるが、新住民の割合が、多い集団である。このタイプでも3つの集団のいずれも、異なる象現にプロットされるが、ここでは、農家は対旧住民交流性は高いが、地域活動性は低く、来住新住民では反対に対旧住民交流性は極めて低い。3集団のなかでは、地域活動性が一番高くなっている。血縁新住民は、農家と来住新住民の中間的位置にプロットされ、対旧住民交流性は、来住新住民ほど低くはないが、地域活動性はやや低くなっている。D-3は、ほとんど集団新住民だけで形成される集団である。図には集団の規模別にプロットしたが、3集団とも対旧住民交流性はいずれも極めて低い。また、規模が最も小さい集団が、地域活動性は一番高く、大規模になるにつれて地域活動性が低くなる傾向が読み取れる。

以上、各集団特性を「地域社会類型」別に観察すると、A-1のような新住民の来住がほとんどみられないような旧住民型では、農家、非農家の地域交流に関するパターンは、極めて類似している。各タイプ混合型では、B-1のような来住新住民が混ざった場合とB-2のように血縁新住民が混ざった場合では大きく様相が異なる。いずれの

タイプも、農家と非農家は、パターンが類似しているが、前者では、来住新住民は少数でありながらも農家や非農家とは極めて異なったパターンをとり、後者では、血縁新住民は農家や非農家と類似したパターンを持つ。農家・新住民型では、C-2のように新旧住民の割合が同じ位である場合には農家が活発な地域交流を示すが、新住民は対照的に低調で、血縁新住民は、両者の中間的傾向を示す。C-3のように新住民の割合が大きいタイプでは、旧住民の地域交流は低調になり、逆に来住新住民では、やや活発になる傾向が読み取れる。ここでも血縁新住民は、ほぼ中間的な傾向を示す。新住民集団型は単一の住民集団で形成されていることから、集団は均質的で、居住者集団間の摩擦が生じることはないが、逆に農村集落居住者との接触は極めて限定的になると考えられる。

次に新住民の住民交流の評価について検討する。表3-15は新住民の、交流についての来住前の「期待」と来住後の「満足」について、居住者タイプ別「地域社会類型」別の平均値を集計したものである。アンケートでは、「期待」と「満足」のそれぞれを4段階評価で聞いているが、ここでは、「期待」は「大いに期待」と「やや期待」、「満足」は「満足」と「どちらかといえば満足」を合わせた割合（%）を示した。住民交流の評価からみても、B-1のように旧住民の集団の中に異質の行動形態をもつ来住新住民が混在してい

表3-15 新住民の期待 と満足

		旧住民との交流		新住民との交流	
		期待	満足	期待	満足
血縁新	B-2	52.5	77.5	65.2	80.0
	C-2	56.6	72.7	62.3	61.7
	C-3	40.0	58.5	61.6	69.5
来住新	B-1	50.0	30.8	66.7	75.0
	C-2	40.9	61.5	53.6	69.3
	C-3	25.4	52.8	60.0	65.3
集団新	D-3	39.1	54.8	58.0	78.1

単位は%

るようなタイプでは、旧住民との交流に対する新住民の評価は低く、疎外感を感じていると考えられる。しかし、この疎外感は、血縁新住民の場合は全くみられない。しかし、同様に異質の居住者が混在していても、混住化がある程度進んだ場合で、C-2のように農家が活発に地域交流を行っている場合は、新住民の評価も高くなっている。しかし、来住新住民の占める割合が極めて高い場合（C-3）には、旧住民がコミュニティ形成の母体とはならないことから、新住民の評価も相対的に低下すると考えられる。

以上の分析から地域交流の実態と評価を示す指標として「地域社会類型」の有効性が確認された。

5. コミュニティ意識の特性

ここでは、コミュニティ意識の面から「地域社会類型」の妥当性を検討する。表3-16に調査によって得られた18項目の設問に対する5段階評価について居住者タイプ別及び全体として因子分析を行った結果を、表3-17に各項目別の平均値を示す。ここでは固有値1.0を目安として、因子の打切り条件を3因子までとした場合の負荷量を掲げる。

全体でみると第一因子は、「たまたま生活しているにすぎない」「自己の問題と地域社会とは別の問題」「近隣とのつきあいは面倒」「誰かがよくしてくれる」「関心や愛着はない」「つきあいはやめたほうがよい」「近隣関係などは意味もない」等の項目で構成され、これは地域への関与についての消極的意識（軸の対極は積極的意識）を示すもので、ここでは消極的-積極的の軸と呼ぶ。第二因子は、「住民が協力して住みよくする。」「生活のよりどころ」「住民は連帯すべき」「自治性を持つべき」等の項目で構成され、これは地域住民間の関係についての意識であり、連帯的意識（軸の対極は個我的意識）を示すもので、連帯感-個我感の軸と呼ぶ。第三因子は、「長いものにまかれる」「しきたりを大切にすべき」の項目で前近代的価値意識で構成され、前近代-近代の軸と呼べるものである。3つの因子の固有値をみると1軸が3.54、2軸が1.13、3軸が0.65

表3-16 居住者タイプ別因子分析の負荷量

質問	農家旧住民			非農家旧住民			血縁新住民			来住新住民			集団新住民			全体					
	F1	F2	F3	F1	F2	F3	F1	F2	F3	F1	F2	F3	F1	F2	F3	F1	F2	F3			
Q1 地域社会の中で生活していくには長いものにまかせるしかない	.08	.06	.50	.02	●	-.70	.52	.17	-.03	.34	.15	.04	○	.44	.52	.18	.01	.41			
Q2 地域社会は住民が協力して住みよくなるように心がけるべきだ	.50	-.11	-.23	○	.47	-.14	-.10	-.33	.31	.24	-.34	○	.48	-.06	-.14	●	-.33	○	.04		
Q3 地域社会は自分の生活のよいところである	.53	.01	.01	○	.41	-.31	.09	-.28	○	.42	-.21	●	.53	.14	-.37	.10	-.26	○	.43		
Q4 今住んでいる地域はたまたま生活しているにすぎない	.05	.35	.37	-.06	.30	.61	.61	○	.48	-.02	.05	●	.50	-.14	.38	.13	●	.53	.04		
Q5 住民は生活防衛のために連帯すべきだ	○	.48	-.02	.29	○	.41	-.02	.05	-.20	●	.58	.32	-.26	●	.53	.09	-.09	-.28	○	.44	
Q6 地域社会は一定の自治性を持つべきだ	●	.52	-.03	.16	.34	-.04	-.07	-.27	○	.48	.33	-.19	●	.59	-.05	-.08	○	-.40	●	.68	
Q7 各自が自己の身分をわきまえてもめごとのないよう心がけるべきだ	.36	-.06	.02	●	.63	.03	.11	.06	.19	○	.46	.23	○	.43	.07	-.19	-.08	.12	-.00	.39	
Q8 自己の生活と地域社会とは別の問題だ	.01	.19	.34	-.16	.29	○	.48	○	.48	-.08	.22	○	.41	-.19	.02	.25	.19	-.03	○	.41	
Q9 自分の生活上の不満や要求はできるだけ行政に働きかけるべきだ	.15	.00	.29	.06	.05	.16	.16	.07	○	.48	-.11	.08	.09	-.12	-.00	.16	○	.41	.13	.22	
Q10 人と人との和は大切にすべきだ	○	.49	-.15	-.09	○	.42	-.12	-.00	-.26	.28	.14	-.28	○	.43	-.11	○	.40	-.28	.07	-.25	
Q11 近隣とのつきあいは面倒だ	-.19	○	.42	.37	-.35	○	.44	.03	.67	-.03	-.16	.81	-.15	.10	.56	.34	●	.61	-.16	.00	
Q12 地域的な問題は自分がかかわらなくても誰かがよくしてくれよう	-.31	.23	○	.49	○	.42	.09	.28	○	.47	-.01	-.09	○	.43	.20	●	.82	.15	-.07	○	.42
Q13 個々人のプライバシーは十分に守るべきだ	.28	-.05	.26	.06	-.06	.06	-.20	.05	○	.42	-.02	-.03	.23	-.14	-.15	-.05	○	.44	-.00	.25	
Q14 旧来からのしきたりを大切にすべきだ	.34	-.12	.36	.17	○	.43	○	.44	-.07	-.01	.54	-.13	.08	●	.57	○	.44	.17	.19	-.18	
Q15 今住んでいる地域には関心や愛着はない	-.15	○	.48	.24	-.03	●	.74	.02	.60	-.11	-.07	.68	-.07	-.20	.51	.15	-.06	●	.67	-.07	
Q16 住みよい地域社会にするために自ら進んで活動しようと思う	.32	-.29	●	.53	○	.46	-.21	-.06	-.35	.29	.35	-.33	.33	.06	○	-.46	-.12	.34	-.34	.37	
Q17 町内会または区会などのつきあいはやめたほうがいい	.21	●	.76	.01	-.13	○	.49	.14	.63	-.18	.03	.66	-.30	-.16	.17	●	.62	.08	●	.65	
Q18 近隣関係などは何の意味もない	.27	●	.63	.02	-.10	○	.46	.19	.66	-.07	.04	.68	-.15	.18	.21	●	.62	-.16	●	.62	
固有値	3.25	2.45	1.39	.34	1.98	1.54	1.54	4.17	1.98	1.43	4.36	1.72	1.48	4.13	1.72	1.59	3.54	1.14	0.66		

●印 因子負荷量0.5以上 ○印 因子負荷量0.4以上

表3-17 居住者タイプ別各項目の平均値

	農家 旧住民	非農家 旧住民	血縁 新住民	来住 新住民	集団 新住民	全 体
1. 地域社会の中で生活していくには長いものにまかれるしかない	3.08 1.38	2.95 1.33	3.14 1.19	2.94 1.19	2.77 1.32	2.99 1.26
2. 地域社会は住民が協力して住みよくするように心がけるべきだ	4.86 0.39	4.81 0.46	4.60 0.66	4.58 0.63	4.75 0.52	4.68 0.59
3. 地域社会は自分の生活のよりどころである	4.21 0.97	4.24 0.90	3.86 1.06	3.81 1.06	4.07 0.84	3.96 1.04
4. 今住んでいる地域はたまたま生活しているにすぎない	2.04 1.50	2.29 1.59	2.79 1.50	3.02 1.40	2.76 1.46	2.70 1.52
5. 住民は生活防御のために連帯すべきだ	4.11 1.00	4.15 0.96	3.94 0.97	3.93 0.96	4.21 0.90	4.03 0.97
6. 地域社会は一定の自治性を持つべきだ	4.20 0.99	4.25 0.92	3.94 0.90	4.01 0.90	4.23 0.74	4.09 0.92
7. 各自が自己の身分をわきまえてもめごとのないよう心がけるべきだ	4.48 0.98	4.41 0.99	4.15 1.06	4.11 1.08	4.35 0.98	4.25 1.04
8. 自己の生活と地域社会とは別の問題だ	2.71 1.55	2.61 1.41	2.77 1.28	2.66 1.31	2.28 1.30	2.67 1.37
9. 自分の生活上の不満や要求はできるだけ行政に働きかけるべきだ	3.30 1.45	3.20 1.42	3.29 1.31	3.35 1.23	3.56 1.20	3.36 1.31
10. 人と人との和は大切にすべきだ	4.87 0.49	4.89 0.50	4.78 0.53	4.79 0.47	4.75 0.65	4.81 0.51
11. 近隣とのつきあいは面倒だ	1.69 1.19	1.67 1.11	2.12 1.22	2.19 1.20	1.96 1.06	2.00 1.21
12. 地域的な問題は自分がかかわらなくても誰かがよくしてくれるだろう	1.94 1.21	1.87 1.15	2.06 1.12	1.93 1.06	1.77 0.93	1.94 1.10
13. 個々人のプライバシーは充分に守るべきだ	4.54 0.96	4.70 0.74	4.58 0.81	4.70 0.62	4.66 0.70	4.66 0.74
14. 旧来からのしきたりを大切にすべきだ	3.88 1.08	3.66 1.20	3.10 1.22	2.73 1.13	2.85 0.90	3.13 1.24
15. 今住んでいる地域には関心や愛着はない	1.69 1.17	1.64 1.07	2.34 1.19	2.43 1.17	2.35 1.18	2.18 1.21
16. 住みよい地域社会にするために自ら進んで活動をしようと思う	4.00 0.95	3.93 0.94	3.50 1.07	3.35 1.03	3.64 0.97	3.61 1.04
17. 町内会または区会などのつきあいはやめたほうがよい	1.45 0.84	1.58 0.94	1.95 1.05	2.15 1.14	1.60 0.56	1.89 1.08
18. 近隣関係などは何の意味もない	1.38 0.83	1.21 0.56	1.60 0.90	1.58 0.93	1.29 0.58	1.49 0.88

上段は平均値 下段は標準偏差を示す

と概ね1軸と2軸の二つの軸で解釈できることがわかる。

次に居住者タイプ別の因子軸の構造、特に、連帯感－個我感の軸と消極的－積極的の軸が各タイプによってどのように入れ替わるかに着目する。農家旧住民、非農家旧住民はいずれも連帯感－個我感が第1軸で、2軸に消極的－積極的の軸がくるが、血縁新住民、来住新住民、集団新住民の新住民の各タイプは反対に1軸に消極的－積極的の軸が来て、3タイプとも固有値も大きくなっている。すなわち、旧住民では、住民関係のような集団の在り方の意識が強調され、新住民では、個人的な地域への関与の在り方の意識が強調されるという傾向が見られる。各タイプ別に見てもこの2つの軸でコミュニティ意識がほぼ安定的に捉えられることが明らかである。表3-22はコミュニティ意識の1軸、2軸の因子スコアの居住者タイプ別の平均値の差を検定したものであるが、特に1軸において明確な有意差があることが認められ、コミュニティ意識の分析にあたって、居住者タイプによる類型化が有効であることが分かる。

次に集落を類型の構成単位とする「地域社会類型」を用いて、各居住者タイプの住民を含むそれぞれの類型が、集落全体としてどのようなコミュニティ意識の特徴を持つかを把握する。表3-18は「地域社会類型」別因子分析の負荷量を示したものの、表3-19は各項目別の平均値を示したものである。旧住民型のA-1は、居住者が

表3-22 コミュニティ意識のT検定

		農家	非農家	血縁新	来住新
F1	非農家 血縁新 家新	× ◎ ◎	◎ ◎ ◎	◎ ◎ ◎	◎ ◎ ◎
F2	非農家 血縁新 家新	× × ×	× ◎ ◎	× ◎ ◎	× ◎ ◎

×印 有意差なし ◎印 有意水準1%
○印 有意水準5%

表3-18 「地域社会類型別」因子分析の負荷量

質問	A-1			B-1			B-2			C-2			C-3			D-3		
	F1	F2	F3	F1	F2	F3	F1	F2	F3	F1	F2	F3	F1	F2	F3	F1	F2	F3
Q1 地域社会の中で生活していくには良いもの にまかれるしかない	.08	.20	.57	.20	.44	.11	.30	-.32	.33	.07	.01	.50	.07	.00	.38	.22	-.15	.07
Q2 地域社会は住民が協力して住みよくなるよ うに心がけるべきだ	.57	.01	-.03	.45	.41	.23	-.31	.28	.17	.51	.31	.06	-.36	.39	.07	-.28	.54	.22
Q3 地域社会は自分の生活のよくなるよ うに心がけるべきだ	.54	-.10	.16	-.26	.29	.51	-.05	.58	.08	.41	.28	.09	-.22	.48	.34	-.34	.25	.20
Q4 今住んでいる地域はたまたま生活している にすぎない	.07	.50	.22	.55	-.07	-.11	.40	-.35	.22	.45	.13	.08	.44	.07	-.06	.54	.02	-.10
Q5 住民は生活防衛のために連携すべきだ	.80	.11	.14	-.26	-.12	.45	-.13	.18	.63	-.26	.63	-.16	-.30	.47	.34	-.22	.54	.09
Q6 地域社会は一定の自治性を持つべきだ	.45	-.04	-.05	-.12	.02	.86	-.10	.30	.22	.21	.88	-.01	-.29	.61	.23	-.12	.70	.17
Q7 各自が自己の身分をわきまをききまえてもめごとの ないよう心がけるべきだ	.58	-.06	.05	-.13	.46	-.02	-.00	.12	.54	-.07	.30	.06	.08	.43	.22	.07	.18	.98
Q8 自己の生活と地域社会とは別の問題だ	-.08	.44	.25	.46	-.17	-.03	.20	.53	.38	.36	-.02	.28	.46	-.04	.03	.34	-.07	.05
Q9 自分が生活に不満や要求はできるだけ 行政に働きかけるべきだ	.04	.20	.08	.16	-.20	.14	.10	.01	.29	.11	.25	-.03	.05	.20	-.02	.06	.34	-.11
Q10 人と人との和は大切にすべきだ	.42	-.02	-.11	-.36	.72	-.13	-.07	.37	.19	-.35	.29	-.04	-.26	.46	-.08	-.39	.34	.23
Q11 近隣とのつきあいは面倒だ	-.40	.45	.30	.56	-.13	-.02	.74	.04	-.02	.62	-.08	-.02	.69	-.07	.03	.56	-.09	-.13
Q12 地域的な問題は自分がかかわらなくても推 かかよくしてくれよう	-.20	.21	.53	.53	-.18	.30	.57	-.17	-.02	.40	-.14	.36	.48	-.23	.24	.44	-.13	-.16
Q13 個々人のプライバシーは十分に守るべきだ	.28	.02	.02	.03	-.08	.13	-.04	.20	.05	.01	.26	.04	.02	.42	-.20	-.18	.42	-.05
Q14 旧来からのしきたりを大切にすべきだ	.34	-.25	.41	.08	.31	.26	-.09	.05	.39	-.28	.10	.49	-.11	.08	.57	-.10	-.03	.28
Q15 今住んでいる地域には関心や愛着はない	-.04	.70	-.14	.86	.15	-.28	.88	-.34	-.02	.84	.00	-.11	.63	-.03	-.15	.54	-.10	-.06
Q16 住みよい地域社会にするために自ら進んで 活動しようと思う	.52	-.22	-.12	-.05	.10	.37	-.27	.15	.20	-.49	.19	.15	-.34	.33	.20	-.38	.34	.11
Q17 町内会または区会などのつきあいはやめた ほうがよい	-.12	.57	-.00	.49	-.13	-.14	.74	-.18	-.06	.86	-.12	.05	.67	-.16	-.23	.60	-.20	-.07
Q18 近隣関係などは何の意味もない	-.05	.59	.04	.72	.15	-.07	.78	-.01	-.07	.58	.02	.14	.67	-.18	.10	.52	-.33	.00
固有値	3.50	2.49	1.51	3.88	1.91	1.87	4.07	2.10	1.53	4.11	1.72	1.49	4.42	1.91	1.47	4.38	1.60	1.39

◎印 因子負荷量0.5以上 ○印 因子負荷量0.4以上

表3-19 「地域社会類型」別各項目の平均値

	A-1	B-1	B-2	C-2	C-3	D-3
1. 地域社会の中で生活していくには長いものにまかれるしかない	2.90 1.37	2.94 1.23	3.18 1.25	3.14 1.29	3.00 1.21	2.69 1.21
2. 地域社会は住民が協力して住みよくするように心がけるべきだ	4.78 0.57	4.66 0.66	4.78 0.44	4.72 0.54	4.56 0.67	4.67 0.63
3. 地域社会は自分の生活のよりどころである	4.11 1.04	3.87 1.09	4.03 0.96	4.02 1.07	3.77 1.09	4.02 0.93
4. 今住んでいる地域はたまたま生活しているにすぎない	2.41 1.63	2.73 1.58	2.58 1.51	2.66 1.53	3.05 1.45	2.63 1.42
5. 住民は生活防御のために連帯すべきだ	4.09 0.95	4.03 1.07	4.04 1.05	4.12 0.91	3.87 1.04	4.11 0.83
6. 地域社会は一定の自治性を持つべきだ	4.30 0.81	4.03 1.07	4.04 0.97	4.17 0.89	3.92 0.97	4.18 0.80
7. 各自が自己の身分をわきまえてもめごとのないよう心がけるべきだ	4.26 1.15	4.28 1.04	4.29 1.07	4.31 0.97	4.19 1.01	4.18 1.08
8. 自己の生活と地域社会とは別の問題だ	2.68 1.50	2.80 1.37	2.58 1.39	2.62 1.37	2.85 1.32	2.38 1.30
9. 自分の生活上の不満や要求はできるだけ行政に働きかけるべきだ	3.39 1.44	3.32 1.37	3.41 1.23	3.22 1.39	3.38 1.26	3.32 1.25
10. 人と人との和は大切にすべきだ	4.88 0.43	4.82 0.58	4.85 0.49	4.85 0.49	4.78 0.48	4.73 0.65
11. 近隣とのつきあいは面倒だ	1.84 1.22	2.18 1.48	1.86 1.24	1.98 1.21	2.21 1.20	1.96 1.08
12. 地域的な問題は自分がかかわらなくても誰かがよくしてくれるだろう	1.92 1.24	2.10 1.21	1.82 1.06	1.88 1.05	2.02 1.09	1.86 1.02
13. 個々人のプライバシーは充分に守るべきだ	4.75 0.73	4.55 0.88	4.55 0.90	4.65 0.79	4.72 0.59	4.62 0.71
14. 旧来からのしきたりを大切にすべきだ	3.63 1.23	3.32 1.42	3.35 1.20	3.18 1.24	2.77 1.25	2.89 0.91
15. 今住んでいる地域には関心や愛着はない	1.81 1.19	2.25 1.34	2.05 1.23	2.05 1.12	2.60 1.20	2.11 1.11
16. 住みよい地域社会にするために自ら進んで活動をしようと思う	3.77 1.06	3.67 1.02	3.72 1.11	3.76 1.00	3.31 1.07	3.59 0.93
17. 町内会または区会などのつきあいはやめたほうがよい	1.70 1.06	1.83 1.11	1.68 1.07	1.78 0.98	2.29 1.20	1.71 0.88
18. 近隣関係などは何の意味もない	1.46 0.93	1.38 0.72	1.37 0.80	1.43 0.85	1.71 1.01	1.35 0.69

上段は平均値 下段は標準偏差を示す

ほとんど旧住民であるため、因子軸の構成は明快で第1軸に連帯感—個我感、第2軸に消極的—積極的の軸がくる。B-1、B-2、C-2、C-3は、新旧混在となった類型であり、コミュニティ意識の構造も複層的である。第1軸は内容的にはいくつかの項目は入れ替わっているが基本的な構成は、消極的—積極的の軸になるのが特徴的である。2軸、3軸ではA-1を除くいずれのタイプでも軸の評価項目は異なっている。このような地域ではコミュニティ意識が極めて錯綜していることを示しており、集落全体としてのコミュニティ意識の構成が新住民の来住によって大きく影響されることがわかる。

次に、全体の因子分析で得られた2つの軸を用いてコミュニティ意識についてのモデル化を試みる（図3-4参照）。第1象限の消極的関与・連帯感として表れる意識は、地域に対して関心が薄いにもかかわらず、居住者の関係は協力的でなければならないとするもので、主体性が欠如し、周囲の流れに動かされるという意味で追従（的意識）モデルと考えられる。第2象限は積極的関与・連帯感であるからコミュニティ（的意識）モデルと言える。第3象限は積極的関与・個我感で、主体性はあるものの個別的、利己的であり、個我（的意識）モデルであると言える。第4象限は消極的・個我感であるからアノミー（的意識）モデルである¹³⁾。

「地域社会類型」別居住者タイプ別因子スコアのセントロイド（図3-5、表3-20参照）を観察すると¹⁴⁾、旧住民型では、農家旧住民、非農家旧住民のいずれも積極性を示し、2軸では、非農家ではやや小さいが、いずれも連帯性を示している。コミュニティ意識に関するパターンは類似しており単純であると言える。各タイプ混合型ではB-1、B-2のいずれも農家、非農家、新住民のそれぞれが異なった象限にあり、これらの集団が同じ集落の中で混在していることを考えると、コミュニティ意識が錯綜していると言える。この場合、非農家は、良好なコミュニティの状況にあり、反対に新住民が血縁、来住を問わずアノミー的傾向を示している。農家は、積極的な意識を持ちつつも個我感を感じている。この類型では、かつては、伝統的共同体の傾向を示していたであろう農家が、内部的な混住化の進展と外部からの新住民の流入により徐々に疎外感を感じている様子を示し、反対に非農家が絶対数の増加にともなって集団の中で主体性をもっていく様子を示すものと思われる。農家・新住民型では、集落の中での新住民の割合による違いが顕著に表れると思われる。農家の場合では、連帯感は大きな差は見られないが、1軸においては、新旧住民の割合が拮抗している集落のほうが積極的関与を示す度合いがかなり高くなっている。また、新住民は血縁、来住のどちらも追従的傾向をしめし、このような類型の集落にあっ

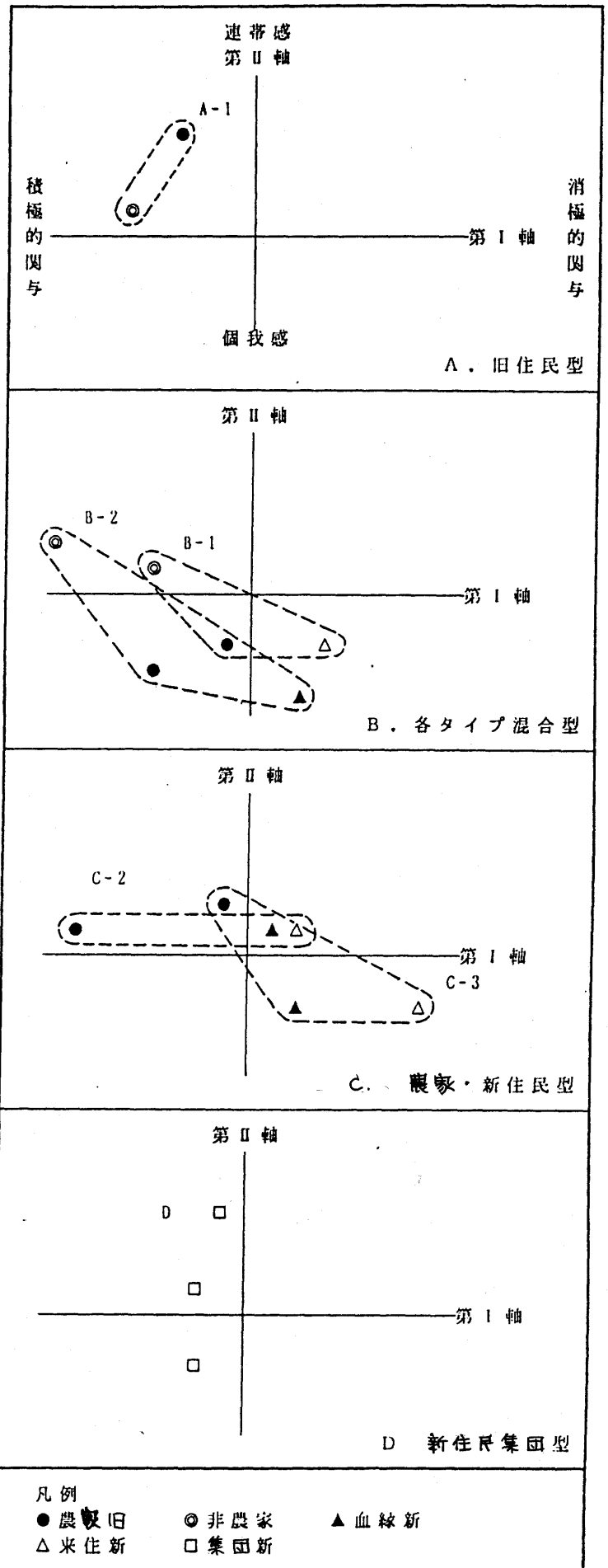


図3-5 地域社会類型別居住者タイプ別因子得点セントロイド

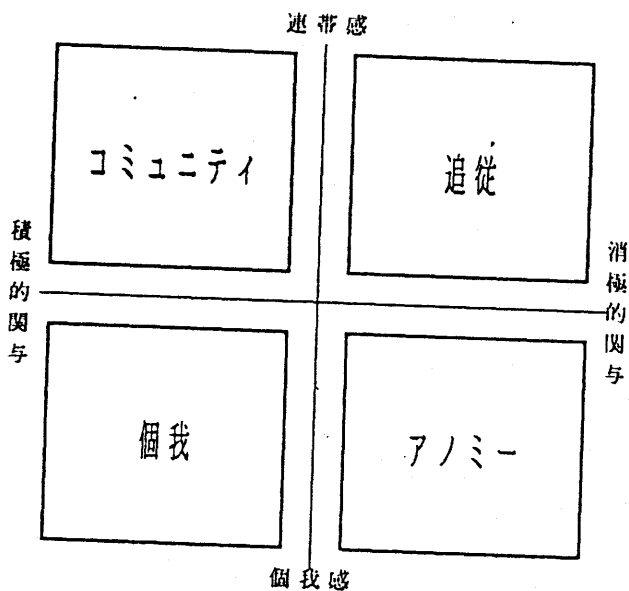


図3-4 コミュニティ意識モデル

表3-20 「地域社会類型」別居住者タイプ別因子得点の平均値

	A-1		B-1		B-2		C-2		C-3		D	
	F-1	F-2	F-1	F-2	F-1	F-2	F-1	F-2	F-1	F-2	F-1	F-2
農家	-0.21	0.27	-0.08	-0.20	-0.29	-0.13	-0.62	-0.01	-0.01	0.08	-	-
非農家	-0.46	-0.00	-0.34	0.07	-0.67	0.18	-	-	-	-	-	-
血縁新	-	-	-	-	0.15	-0.31	-0.02	0.08	0.18	-0.18	-	-
来住新	-	-	0.22	-0.20	-	-	0.13	0.03	0.44	-0.18	-	-
集団新	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-0.16	-0.02

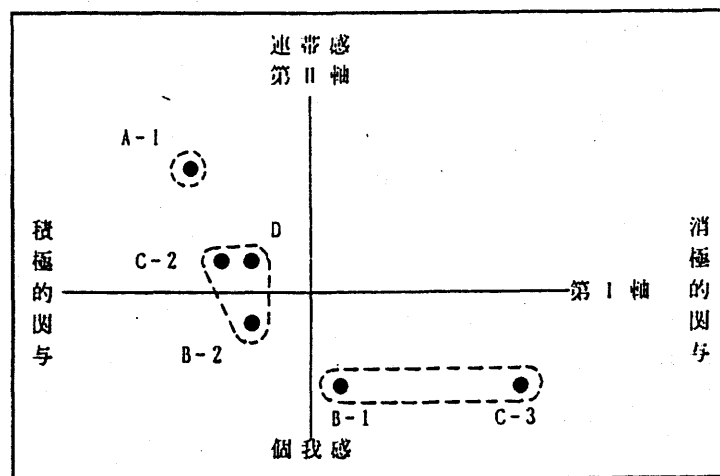


図3-6 「地域社会類型」別因子得点 セントロイド

ては、意識のうえでも農家が牽引者としての役割を担っているであろうことが伺われる。C-3のように混住化が進展し、新住民の割合が大きくなると農家は積極性を失い、新住民は血縁、来住のいずれもアノミー的傾向を示し、このような類型の集落にあっては、意識のうえではコミュニティ形成の核となるものが見られず、全体としても最もアノミー的傾向を示す。集団新住民型はいずれも1軸では積極側に位置づけられるが、2軸では団地の規模（戸数）によって異なり、規模が小さいほど連帯感を強く表す。「地域社会類型」別のセントロイドを見ると（図3-6参照）、A-1が最も良好なコミュニティ意識を示しており、B-1，C-3にアノミー的傾向が見られ、とくにC-3においてその傾向が強い。B-2，C-2，Dは、いずれも地域への関与について、ある程度の積極性をもっているが、2軸は0に近く、自己の生活を充足するために地域に積極的に関心を持つもので、良好な郊外住宅地にも同様の傾向が見られる¹⁵⁾。Dについては、団地の規模がコミュニティ形成に関係し、小規模な団地では連帯性が高まる傾向にある。

6. 地域交流の実態とコミュニティ意識の関係

次に、行動の系としての地域交流の実態と心理の系としてのコミュニティ意識の関係性を考察する。表3-21は、「地域社会類型」

表3-21 地域交流とコミュニティ意識

	地域交流		コミュニティ意識	
	1軸 (対旧住民交流性)	2軸 (地域活動性)	1軸 (消極的-積極的)	2軸 (連帯性-個性性)
A-1 農家 非農家	+	+	+	+
B-1 農家 非農家 来住新	+	+	+	-
B-2 農家 非農家 血縁新	+	+	+	-
C-2 農家 血縁新 来住新	+	+	+	+
C-3 農家 血縁新 来住新	+	-	+	+
D 禁団新	-	+	+	+

符号は各軸のプラス側にプロットされるものを+としたが、コミュニティ意識の1軸は、符号を入れ替え、マイナス側(積極的を示す)にプロットされるものを+で示した。

別居住者タイプ別に図3-3及び図3-5¹⁶⁾におけるコミュニティ実態のセントロイドの座標の位置を示したものである。A-1では、農家、非農家のどちらも実態及び意識の何れも+側で、行動の系と心理の系が一致しており、最も良好な類型である。B-1では、非農家は実態、意識のどちらも+であるが、農家では意識の2軸が-になっており、連帯感は薄れる傾向にあり、行動面では活発であるものの意識の面から伝統的コミュニティの解体が見られることが読み取れる。来住新では地域活動のような集団的活動でのみ+を示し、意識ではアノミー性を示し、旧住民に表面的にだけ追従している様子が伺われる。B-2では非農家及び農家は、B-1と同様の傾向をしめすがすが血縁新では行動は2つの軸とも+、意識ではいずれも-を示し、行動の系と意識の系が完全に別れている。すなわち、行動では、旧住民と同じような行動をとりながらも、心理の系ではアノミー的であり行動と心理の二重性が認められ、表層的な追従の様子が伺われる。C-2では農家は実態、意識ともに+である。血縁新は実態、意識ともに+-の両方を持っている。来住新は意識の2軸のみ+で他はすべて-である。この類型では血縁新、来住新ともに1軸では消極性を示しており心理面において農家に依存していることが伺われる。来住新と血縁新は、対旧住民交流性では異なるが、実態の2軸、意識の1、2軸では同じ傾向を示す。特にどち

らも意識の2軸が+であることから時間の経過とそれに伴い他の要件が整うことにより、農家、血縁新、来住新が一体となったコミュニティ形成の可能性も考えられる。C-3では、農家は意識が1軸、2軸ともに+であるが、C-2の農家に比べ積極性はかなり小さい。実態では2軸が-で、意識が実態に投影されないことを示している。このような集落では農家数が総体的に小さくなっていることもあり、集落の中で牽引者としての役割を担うには無理がある。血縁新、来住新は、意識が1軸、2軸ともに-で、行動も来住新の2軸を除いて-になっており、このような類型では全体としても意識、行動ともに極めてアノミー性が強く、良好なコミュニティに成長する条件に欠けていると考えられる。Dは実態の1軸のみ-であり、社会的ストックを生かすための新旧住民の交流には問題が残るが、他は、意識、実態ともに+であり、社会集団としてはあまり問題がない。

以上の分析から、地域交流・コミュニティ意識の両面から「地域社会類型」の有効性が確認された。

7. まとめ

以上のように「地域社会類型」により、地域交流の実態とコミュニティ意識との多層性が確認された。すなわち、行動面では活発な地域交流を示している、意識面では必ずしもコミュニティ傾向を示すとは限らないような場合があることがわかった。このように「地域社会類型」により住民関係の概略を知ることが可能であり、混住化の進展過程も整理できることがわかった。混住化が常態としてみられる現在、混住化地域における住宅地計画は、物的、空間的環境の計画だけではなく、社会的関係を育成させるような計画が必要であると考えられる。その際に混住の様態を、新住民と旧住民、あるいは農家と非農家というような単純な構成として考えるべきではなく、以上見てきたように、農家、非農家、血縁新住民、来住新住民、集団新住民等、各集団の集団的体質としての特性を把握し、その混在としての在り方を考えることが有効であろう。

「地域社会類型」別に見ると、旧住民型では、集落外部からの混入が少なく、内部的混住ともいえるタイプであるが、農家と非農家では、生業形態は異にしているものの、地域活動、住民交流などにおいては近似した傾向を示しており、同質的集団の混在としてとらえることができる。この様な集団では集落自治の運営上は、極めて安定的であるといえる。各タイプ混合型では、新住民が血縁新住民

と来住新住民の場合で異なる。血縁新住民との混合の場合は、血縁新住民が住民属性としては旧住民とは異なる集団であっても、地域交流の実態では、旧住民と異なった傾向を示すことが少なく、たとえば、血縁新住民の割合が大きくても、集団全体としては、同質的で安定的であるといえる。しかし、来住新住民との混合になると、その規模が小さくても、旧住民と来住新住民では、住民属性も、地域交流の様態も異質であり、一つの集落としての自治の運営は複雑になると考えられる。来住新住民としては疎外感を感じ、旧住民としては旧住民間で地域交流における行動パターンが同質的であるため、新住民に対しては、住民交流の評価からも伺えるように対立的感情を生むような素地がある¹⁷⁾といえる。このことから、旧住民型の集落が外部からの居住者を迎える場合、血縁新住民の場合は摩擦が生じるとは考えにくい。来住新住民の場合は、慎重な対応が必要で、例えば、時間的スパンをもたせて段階的に新住民を迎える、新住民の来住以前に集落自治運営の情報を公開し、新旧住民の調停を行う、等の方策が有効となるだろう。農家・新住民型では、旧住民、血縁新住民、来住新住民の3者が相互に、住民属性でも地域交流の実態から見ても、それぞれ大きく異なった集団である。しかし、このタイプでは、安定的ではないものの、ダイナミックな関係としてみた場合、相互に影響し合いながら、より高次元のコミュニティ形

成につながる可能性も考えられる。このタイプでは混住化の程度によって様相が異なる。新旧住民が量的に同じ位である場合には、農家が中心になって活発な地域活動を展開し、血縁新住民も農家に同調し、これらが集落全体としての牽引者の役割を果たす。そして、これに來住新住民が同調するといった形で、コミュニティ形成が進んでいくと考えられる。この様なタイプでは、今後、従来培われてきた集落の伝統的共同体としての体質に加え、新住民の時間的成熟に伴って、新住民の合理的、近代的性格をも有したコミュニティ形成が計られることが重要な計画的課題となるであろう¹⁹⁾。しかし、混住化が進み旧住民の比率が相対的に低下する場合には、旧住民の地域活動は低調となり、反対に、新住民間の交流が増し、新住民の地域活動もやや活発になる。この場合、來住新住民は旧住民に追従するのではなく、自主的にコミュニティ形成に関与していくと考えられ、血縁新住民も來住新住民に同調していくと思われる。このタイプでは、時間的成熟とともに、來住新住民がコミュニティの中で牽引者的な役割を果たし、旧住民や血縁新住民を引き込んで、新たな市民的コミュニティが形成されることが望まれる。新住民集団型では、旧住民との交流は極めて少ない。地域活動の面から見ると、その状況は集団の大きさに左右され、集団が小さく独立的であるほど地域活動が活発なことが認められる。このタイプは、農村地域に

立地しながら、社会的つながりとしては、旧住民との関係は発生しにくく、政策的対応として、新旧住民の共同の行事やサークル活動の育成、集会施設などの新旧住民の共同利用等、限定的なところから旧住民との交流を促進させていくことが混住コミュニティの育成に有効であろう。また、集団の規模や構成の面から考えると、従来行われていたような画一的な大規模開発を避け、周辺の集落と調和したものが有効となるであろうし、団地の構成から言えば、居住単位、団地の居住者属性の構成等がコミュニティ形成の重要な課題となるであろう。

注・参考文献

- 1) 鎌田元弘、大都市周辺地域の混住化類型とその計画的課題に関する考察、日本建築学会計画系論文報告集、1987
- 2) 「相川哲夫他、混住化する農村の整備方策、農村開発企画委員会、1982」および「相川哲夫他、農村地域における混住化の実態と空間構成にかんする調査報告書、農林水産省構造改善局、1983」では、地域レベル及び集落レベルの分析が行われているが両者の対応は必ずしも明確ではない。
- 3) 「奥田道大、コミュニティ形成の理論と住民意識、磯村英一他、都市形成の理論と住民、第Ⅲ章第1節、p139、東大出版会、1971」および「菱山謙二・岡本行雄、筑波研究学園都市住民の意識調査研究－コミュニティ意識の研究－（下）、都市問題Vol172、No9、1981」参照。
- 4) コミュニティ意識は住民の個人レベルでの意識であるが、それぞれの意識タイプの住民の混合のされ方の結果として、集団特性を表す指標とみることができる。
- 5) 谷田部町は、広域レベルの分析では、農村型であるが、筑波研究学園都市建設に伴う大規模住宅団地なども見受けられる。また、ここでは、集落単位で対象集団を選んでいるため、農村団地型に含めて考えた。

6) 猿島町は、昭和55年度の資料の分析では、非農家集団率、人口増加率が低く、内部非農家率が36.9%と農村型であるものの、非農家型に極めて近く、また昭和60年度の資料では内部非農家率が上昇し、非農家化型になると考えられ、ここでは、非農家化型として扱う。

7) 本地域の調査対象地域は、文献*8に示すように首都圏における農村の混住化の最先端地域であり、新住民の来住が昭和40年代後半から急激に進んでいる地域である。ここではコミュニティを中心課題に据えていことから、新住民の来住がひとつの契期になると考え、昭和40年を区切りとした。

8) 本論では、調査対象地域が混住化が進展している地域であり、概して第2種兼業農家は、農業への依存が極めて小さく、非農家の旧住民に近いという判断から分類を明確にするため、専業農家、第1種兼業農家を農家旧住民タイプとし、第1種兼業農家は非農家旧住民タイプに含めた。

9) 同様の視点からの類型が、相川哲夫他「農村地域における混住化の実態と空間構成にかんする調査報告書、農林水産省構造改善局、1983」「重村力他、家族・地域関係からみた農村の混住化と居住者類型、日本建築学会大会学術講演梗概集、1986」等においても行われているが、前者においては、分析にあたって、非農家旧住民の位

置付けが明確ではない。また、ここでいう来住新住民と団地新住民は、属人的には、同一の基準で表されるが、居住形態が異なるという点で別の区分とした。

10) 部落会・氏子組織・檀家組織等の伝統集団、老人会・PTA・子供会等の地域集団の加入率からみた場合、農家では、共に高いという指摘が「青木志郎他、混住社会の形成、特に人々の行動を決定している要因に関する研究、農村生活総合研究センター、生活研究レポート、1978」によってなされているが、本論のように参加率からみると、個人的自主的活動の場合は、農家旧住民よりも、非農家旧住民の方が活発である。

11) 各タイプ混合型で血縁新住民および来住新住民が多く占める集落(B-3)は存在するであろうが、C-3との違いは大きくないと予想される。

12) 本研究のような社会的研究事象を主成分スコアを用いて解析する場合、分散の度合いが大きくなる傾向がある。ここでも、集落類型別の分散は大きく、資料上の限界はあるが、各類型の平均を見ることで全体的な傾向の概略を把握することは可能であると考ええる。

13) コミュニティ意識のモデル化については、郊外住宅地の場合ではあるが「土肥博至他、住民のコミュニティ意識からみた郊外住

宅地の特性に関する考察、昭和60年度都市計画学術研究論文集、1985」に詳しい。

14) コミュニティ意識を因子スコアを用いて解析する場合、分散の度合いが大きくなる傾向がある（菱山謙二・岡本行雄、前掲書および、土肥博至他、前掲書参照）。ここでも集落類型別の分散は大きく、資料上の限界はあるが、各類型の平均値を見ることで全体的な傾向の概略を把握することは可能であると考ええる。

15) 土肥博至他、前掲書参照。

16) 「鎌田元弘、都市近郊混住化集落の集落類型とその特性に関する考察、その1 地域交流からみた集落の特性、日本建築学会計画系論文報告集、1987」参照。

17) この点についてはヒヤリング調査においても確認している。

19) これらの具体的な先進事例地が「小山智士、ルポ混住列島をゆく、家の光協会、1982」に詳しく紹介されている。

第4章 集落の社会的特性としての「むら柄」の考察

第4章 集落の社会的特性としての「むら柄」の考察

1、研究の目的と方法

伝統的共同体という永くひとつの小集団を形成してきた集落は、人間各人の性格・人柄が異なるように、歴史的永続性の中でそれぞれ個性を持った社会的体質が形成されてきたと考えられる。実際、地域の中にはいると「あそこは閉鎖的な場所柄（土地柄）だから」というような言葉はよく耳にする。前述したように近年の農村集落の変化は著しいものがあるが、これらの社会的体質は近代化の過程において弱まったとは言え、永年熟成されてきたものが短期間で簡単に消失するとは考えられない。特にこれらの集落で、異なった生活スタイルをもつ都市住民が外部から来住するとき、集落の社会的体質は新住民との対比でより鮮明に表れる。旧住民にとってはむかしながらの社会的体質が再現あるいは増幅され、新住民にとっては集落の体質が把握できずに戸惑いを感じるようなことがしばしば生ずる。この社会的体質を新旧住民が共に知り得ないことが時には住民間で大きな問題のもとになる。旧住民にはあたりまえのことであり説明の余地のないほど日常化した問題であっても、新住民には生

活に甚大な影響を及ぼすことすらある。それは社会生活ばかりではなく集落の空間利用にもあらわれ、社会的体質が閉鎖的なために集落空間の利用が規制を受けるような場合もある¹⁾。本章ではそのような集落の社会的体質を「むら柄」と定義し、「むら柄」をできるだけ総体的に把握することにより、混住化を計画的に進めるにあたって、その適合具合を予測し、問題点を事前に解決するための総合的な指標として位置付けることを目的とする。

具体的な研究の進め方は以下のように行う。

- ① 「むら柄」を仮設的に定義する。
- ② 新住民の来住にあたって、新旧住民関係にトラブルが生じた事例をとりあげ、混住化における「むら柄」の影響について考察する。
- ③ 「むら柄」の定義に基づいて集落の年中行事・集落のとりきめ事項（アンケート調査の結果）を定量的に分析し、新旧住民の関係に「むら柄」が及ぼす影響について考察する。
- ④ いくつかの事例の詳細な分析から、③の傾向を再確認し、さらに「むら柄」を形成する要因について考察する。要因としては集落の基礎的社会関係と集落史を取り上げる。
- ④ 以上の分析から社会的ストックの指標としての「むら柄」の有効性を確認する。

2、調査について

本章で用いる調査は、定量的分析で用いるための調査として集落の代表者（区長）へのアンケート調査、新旧住民関係の分析および定性的詳細事例分析で用いるための調査としてヒアリング調査・文献調査を行った。下記に具体的な調査の内容を示す。調査対象地域及び対象集落は3章と同様で茨城県猿島郡三和町、同稲敷郡莒崎町の各集落である。

① アンケート調査

調査対象集落は三和町全行政区で、町役場を通じて配付・回収を行い、配付数62票、回収率79.0%を得た。調査は昭和60年10月に実施した（付録資料に調査票を記載した）。

・調査項目

新旧住民別住民構成、混住化形態、新旧住民の交流状況、自治会運営や共同作業における新住民への対応、新旧住民別各組織の参加状況、集落の通過儀礼の変化、集落の年中行事と新旧住民の参加状況

② ヒアリング調査

ヒアリング調査は、アンケート調査を補完する目的で実施し、アンケート調査集団の中から選定して行った。調査対象集落は「むら

柄」が新旧住民関係に顕著に影響している事例として三和町諸川西部・東諸川・新東諸川の3集落を取り上げ、「むら柄」を観察するための事例として歴史が古く混住化も進展していない集落である荃崎町の天宝喜集落、歴史が古く閉鎖的な「むら柄」の傾向を示し混住化が進展している集落である三和町山田集落、歴史は比較的新しく開放的な「むら柄」の傾向を示し混住化が進展している集落である三和町間中橋集落、また以上の3集落の比較対象として新住民だけの大規模な団地である荃崎町城山団地を取り上げた。調査内容は下記の表4-1に示す通りである。

③ 文献調査（集落の歴史性把握のための調査）

三和町における大字別の立地条件、開発史、社会史を郷土誌²⁾及び地名辞典³⁾を用いて調査した。

3、「むら柄」の仮説的定義

はじめに、「むら柄」のとらえ方について考えてみたい。「むら柄」と言っても一義的に定義付けるのは大変困難である。本研究では仮説的に次のように定義する。

①小規模な社会集団における「むら柄」を拘束力、展開性の2因子の組み合わせで捉えることができるものとする。これらはあくまで集団全体としての特性を記述する因子であり、その構成単位個々の

表4-1 ヒアリング調査項目

	諸 川 西 部	東 諸 川	新 東 諸 川	天 宝 喜	山 田	間 中 橋	城 山 団 地
外部圧力との利害関係			○				
旧住民の支配構造	○	○					
本家分家関係				○	○	○	
班構成				○	○	○	○
年中行事				○	○	○	○
共同活動の変化				○	○	○	○
通過儀礼の変化				○	○	○	○
新旧住民の要望	○	○	○	○	○	○	○

特性を言うものではない。さらに、それら2因子で形成された「むら柄」は、混住化の状況下においては 協調性（の有無、大小）として現れるものとする。従って、拘束力・展開性と協調性の関係を明確にすることができれば、この2因子の状況から新住民に対する協調の程度が予測できることになる。ここで2つの因子及び協調性は次のように規定されるものとする。

1)拘束力とは、社会集団のまとまりを意味するものとする。それは、自治組織としての社会集団としての管理運営面でどれだけ自己規制力が貫かれているかが目安となるものとする。

2)展開性とは社会集団の自己展開力の一つの現れとして捉えることができる。社会集団の内部で生みだされてくるいろいろな共同活動あるいは組織やグループの種類や活動状況に具体的に現れるものとする。

3)協調性とは社会集団が外部圧力または変化要因に対応するときの対応の柔軟性をあらわすものとする。通過儀礼・しきたりの変化・共同活動を行う上での他集団（ここでは特に新住民集団）への対応等のなかに見い出せるものとする。

② 2つの因子の形成要因として基礎的社会関係と集落史を考える。
基礎的社会関係として本家・分家等の血縁関係、組または班等の地縁関係を取りあげる。集落履歴では、集落の形成時期・現在に至る

履歴を取り上げる。

4、新旧住民関係における「むら柄」の影響

はじめに、新住民が大多数を占めながら独立した自治会を持たず、旧住民主導の運営が行われている諸川西部集落を事例として旧住民の支配構造を探る。次に当初は旧住民と同じ自治会に属しながら新旧住民の間にトラブルが生じ旧住民から独立して自治会を持つに至った新東諸川集落を取り上げて住民関係の基本的問題点を考える。

諸川西部集落は、旧住民の数はほぼ40戸で新住民の1/10程度である。旧住民内の血縁的結合が強く特に一つの姓（S家）が大きな割合を占めている。自治会組織の区長はS家から選ばれており10年以上連続して務めている。区長は土建会社社長、町会議員を兼務しており、同族のバックアップを受けてボス的な存在となっている。地域活動への参加は強制的で出不足金（地域の行事に欠席したときの反則金）は、新旧住民の区別なく一律3000円と高額である。また、選挙の時も強制的で旧住民側の決めた候補者に対しての応援活動を強いる。これらの「しきたり」に反すると旧住民側から新住民に対して強い圧力がかかる。新住民側は大きな不満は持っていないが、①昼間不在の家が多く積極的な活動が出来ないこと。②

来住者の数が多くほぼ同時期に来住したため全体がまとまりにくいこと。③住宅も分散的形式で建てられていることもあり顔見知りも少ないこと。④既存集落の一部に混在して形成されているため、計画的住宅団地のように役所やディベロッパーが自治会づくりに積極的ではないこと。等の理由により新住民独自の自治会はできていない。一方、旧住民にとっては新住民を支配しているような意識はほとんどなく、これが従来からのやりかたであり、このようにして今までうまくやってきたという意識が強く、自分達が一生懸命新住民の為に尽くしているのに新住民はなかなか靡いてこないということをお口にす。

新東諸川集落では当初数軒の新住民の時は東諸川集落の自治会に所属し旧住民に従って行動していたが日頃のむらの「しきたり」に新住民の不満はつのもり、神社の掃除を強制されたのをきっかけに対立が表面化し新住民は自治会を脱会してしまった。その後3年間はどこの自治会にも属さず行政連絡は役場から直接受けた。町主催の運動会にも、運動会が行政区単位で行われるため出場できなかった。子供も行政区が定まらないため学校区が決まらず、隣の行政区に寄留して校区を決める始末だった。3年後に新たに隣接した土地でミニ開発が行われ13軒の新住民が転入してきた。この時を契機として独立自治会の結成のため、地元町会議員に働きかけ役場と交渉を

重ねた。その結果僅か25戸であるが一つの自治会として承認された。この新住民の旧住民への不満は次の3点にまとめられる（ヒアリングによる）。①新住民の意見を聞き入れず、無条件に従わせること。②引っ越しのときの挨拶回りや葬式・共同作業等の集落の行事への出席は強制的で個人の都合が認められない。③これらの「しきたり」についての説明はほとんどされずどのように対応してよいか解らないこと。

この2つの例に見られるように、集落の社会的体質（「むら柄」）が新旧住民に与える影響は甚大である。もし「むら柄」を評価する方法が確立され、混住化が進む以前に情報化されるならば、混住地域のコミュニティ計画に大いに役立つと考えられる。

5、「むら柄」の定量的分析

つぎに「むら柄」に関するアンケート調査の結果から「むら柄」と旧住民の新住民に対する協調性について考察を進める。

ここでは、具体的に調査項目のなかから拘束力の尺度として共同作業における出不足金制度の有無、展開性の尺度として集落の年中行事の種類と回数を取りあげた。出不足金とは共同作業にでられないときに個人が自治会あるいは区会などに対して支払うペナルティで、集団の自己規制力を示す指標の一つと考えられる。また年中

行事の種類は、行政に関するもの・伝統行事・共同作業・レクリエーションの4分類とし、これらの回数をカウントすることで共同活動の活発さを表す指標を示すと考えた。分析の対象は、まずアンケートの有効票の中から新旧住民の関係に関する質問項目で、「良好である」と答えた集落群と、「問題がある」あるいは「つきあいはない」と答えた集落群に分け、両集落群の比較を行う。これによって協調性のある集落とない集落の比較をすることになると考える。具体的に分析を進めるにあたり、出不足金の有無・年中心事の種類と回数に加え、自治会の取り決めに文章化した規約の有無について調べた。これは新住民に対応する際の集落の合理化の状況を示すもので、これも協調性の尺度の一つになると考えられ、4節の事例でも見られたように新旧住民の関係を定める一つの要因になるものと考えられる。

表4-2に新旧住民関係が良好な集落の活動の状況を、表4-3に新旧住民関係が悪化している集落の活動の状況を示した。表4-4は両者を比較したものである。関係が良好な集落では出不足金がなく、規約はある集落が多く、関係が悪化している集落はこのような例は1集落しかない。表4-4からも明らかなように良好な集落においては出不足金がなく、規約がある集落が多い。反対に悪化している集落では良好な集落群に比べ出不足金がある集落の割合が多

表4-2 集落の活動（新旧住民関係が良好な集落）

落名	出不足金の有無		規約の有無		年中行事の種類と回数				
	有▲	無○	有○	無▲	行政	伝統	共同作業	レクリ	計
M S	▲		▲		3	4	7	5	19
S Y	▲		▲		14	13	9	4	40
M M	▲		○		5	2	1	5	13
K K	▲		○		11	2	7	2	22
A M	▲		○		3	3	13	2	21
K W	○		▲		10	10	4	27	51
E E	○		○		15	4	3	3	25
O S	○		○		10	6	14	4	34
K K	○		○		6	16	7	6	35
S U	○		○		9	4	13	7	33
S M	○		○		10	0	8	14	32
S O	○		○		9	2	1	4	16
S S	○		○		6	12	1	4	23
O T	○		○		5	4	5	2	16

表4-3 集落の活動（新旧住民関係が悪化している集落）

落名	出不足金の有無		規約の有無		年中行事の種類と回数				
	有▲	無○	有○	無▲	行政	伝統	共同作業	レクリ	計
K G	▲		▲		15	2	2	2	21
A K	▲		○		5	2	2	6	15
A D	▲		○		9	2	3	1	15
A M	▲		○		13	1	2	4	20
S K	○		▲		2	2	1	4	9
V D	○		▲		1	0	1	2	4
S H	○		▲		2	0	1	3	6
V K	○		▲		4	15	1	12	32
K N	○		○		1	2	1	2	6

表4-4 新旧住民の関係からみた集落活動の比較

旧住民の係	出不足金無割合	規約有割合	行政(平均)	伝統(平均)	共同作業(平均)	レクリ(平均)	計(平均)
良好	0.64	0.79	8.3	5.9	6.6	6.4	27.1
悪化	0.56	0.44	4.7	2.9	1.5	4.0	14.2

く、規約のある集落が少ない。特に、悪化している集落群の場合は出不足金のない集落では年中行事の共同作業の回数自体が非常に少ない。以上からその傾向が示す意味を考えると出不足金があることは拘束力が強いことを意味し、規約があることは自治会の運営が合理的であることを意味するから、これらを総合して考えると協調性のある集落群では拘束力は弱く合理化されている集落が多い。協調性がない集落では拘束力が強く合理化されていない集落が多いと言える。

次に年中行事に注目してみると、平均回数では合計で2倍近く良好な集落群が上回っており、部門別でもいずれも良好な集落群の回数が上回っている。また、集落別に各部門への分散の状況をもみても良好な集落群では各部門に回数が分散している集落が多いのに対して悪化している集落は行政連絡や伝統行事などの1部門あるいは2部門に集中している集落が多い。このように年中行事の回数が多く各部門に分散していることを展開性があることだと解釈すると、新旧住民の関係が良好な集落群では展開性が強く、悪化している集落群では、展開性が弱い集落が多いと言える。

以上の分析から、概ね、拘束力が若干弱まり展開性のある集落は協調性があり、反対に拘束力が強く展開性の小さい集落ではあまり協調性が見られないことが確認された。このように集落の活動状況

から「むら柄」の概要を把握することが可能であることがわかる。

6、「むら柄」の定性的分析

(1) 分析の方法

前節では定量的・簡便な方法として「むら柄」をとらえ、その有効性を確認したが、ここではいくつかの詳細事例から、集落の諸活動について多面的に聞き取り調査した結果を整理し、本章1節で確認した「むら柄」が集落の中で、実際にどのような具体的な状況を呈するのかを観察し、「むら柄」のもつ多義性について考察する。

具体的な聞き取り調査の項目は、本章3節の「むら柄」の仮説的定義にしたがって①拘束力に係わることとして、自治会の活動・相互扶助・通過儀礼・風俗等、②展開性に関連することとして、共同活動・集落の組織、③協調性に係わることとして、新住民との関係、とした。つぎに集落の基礎的社会関係と集落史の面から「むら柄」を形成する要因について考察する。集落の基礎的社会関係としては地縁性と血縁性の状況を、集落史としては集落の形成時期またはその後の集落の経歴・履歴を観察することにより「むら柄」がどのように形成されてきたを概観する。以上の考察から「むら柄」がより多義的な指標であることを確認する。詳細事例集落は、混住化が余り進展せず伝統的共同体に近いと思われる集落として天宝喜集落、混住化が進展し歴史は古く協調性に欠けるとと思われる集落として山田集落、混住化が進展し歴史が浅く協調性があると思われる集落と

して間中橋集落を取り上げる。また、比較のために農村集落ではないが新住民のみによる集団の例として城山団地を取り上げる。分析の方法は、聞き取り調査の結果をできるだけ具体的に示し、それに基づいて考察を進める。下記に聞き取り調査で得られたそれぞれの集落の概況を示す（表4-5、4-6、4-8、4-10）。

（2）考察

各詳細事例集落別にその特徴を観察してみると、天寶喜集落では拘束力として、自治会の活動ではいくつかの行政連絡がされる程度で決して活発ではない。この集落では、自治会自体が単に「うえから来たものを伝達する」という機能だけを持っており、そのような面から見ると機能的で、フォーマルな面では合理的自治会になっていると言える。しかし、相互扶助・通過儀礼・風俗等を観察すると伝統的な相互扶助や風俗が、近年になって多少簡略化はされているものの今でも数多く残っており、インフォーマルな面での集団の自己規制力・統制力は大きいものがある。展開性として、共同活動の種類や数に着目してみると、近代的なレクリエーション種目に比べ、伝統的な種目が多く見られる。集落内の組織でも行政的な機能集団的側面をもった（うえからつくることを要請されたような）組織であっても、この集落では実質上、伝統的な集団がその母体となって

表 4 - 5 天寶喜集落

●混住化の概況

総戸数は57戸で、その内農家は27戸、非農家が30戸である。農家もすべて第2種兼業農家になっている。この数年間に来住したのは3戸であり、いずれも来住新住民である。

●集落史

この集落の形成時期は明確ではないが、伝説によると、元和5年(1619年)の巻きものに次のようなことが記されているという。「僧曰く、『これ弁財天女なるも天造の妙剣既にこの地にあり。故にこれこの地に祀るべき宿縁の尊像なり』と。而して郷民に託し去る。天から降った宝剣を得て郷民多に喜び、里の名を天寶喜と呼ぶ」。集落内の巖島神社は通称「弁天様」と呼ばれているが、その創建は大同年間(806~810年)とも弘仁3年(812年)とも言われており、それが事実かどうかはともかく、この集落の発生の古さが伺われる。集落の履歴を見ると江戸時代から幕末期まで牛久藩領。村高は118石余(天保郷帳)。牛久宿の助郷村であった。天保6~7年にかけて同じ牛久藩領の3か村と入会秣場の採取権をめぐって争っていたが、当村の百庄は3か村を相手どって老中に駕籠訴し、天保8年4か村で示談が成立した。

●基礎的社会関係

1) 血縁関係

3戸の新住民以外は、1世代または2世代以上前の分家かまたは姻戚の関係であり、「組」の關係に組み込まれている。

2) 地縁関係

組の關係は5つに分かれており、各組名はその組の中心になっている家の姓をとっている(図4-1)。組は相互扶助の基礎単位となっている。

①自治会の活動

・区会の班は7班に分かれているが、そのうち離れた位置にある2戸は区長の直轄となっている。区としての独自の活動は余りなく、ほとんどは役場との対応関係で役場の末端的役割のほうが大きい。この集落では出不足金の徴収はなく、また、集落の規約もまとまったものはない。

②相互扶助・通過儀礼・風俗等

- ・以前は組を単位とした農作業での相互扶助を行っていたが、現在は農用地の縮小、機械化などによってなくなった。
- ・冠婚葬祭での扶助や病人が出たときの手伝いなどは組が今も機能している。
- ・様々な風俗が残っており、七五三の祝いなどは昔以上に派手になっている。おひな様や5月の節句では今でも組の主婦層がどこかの組内の家に集まり、お祝いをする。お盆は今でもまごもで作った馬を子供達が引き歩き、墓までもっていく。
- ・結婚式は、今は式場で行うが仲人は新婦側と新郎側とから2組で。
- ・子供が生まれると、お祝いをもらった家々の主婦を呼び、御馳走をする。おおよそ20名くらいになる。
- ・若者の集まりとして「おはやし」や「おみこし」があったが、そのときには酒1升位を持ちより酒盛りをしていたが今はやっていない。
- ・葬式は、以前は組で4日間くらいかけてやっていたが、今は2日間くらいで終わるようになった。

③共同活動・集落の組織

- ・共同活動は区としての独自の活動は、次のようなものである。
- 1月3日の初集会、これが区の総会にあたり親睦も兼ねている。その後、特に毎月定期的な会合はない。必要に応じて召集する。
- ・区独自の大きな行事としては、9月9日と10月9日の巖島神社(弁天様)の祭りと7月最後の日曜日に行われる同神社の掃除(御手洗払い)である。9月9日は「万灯」と呼ばれ各戸の門口に自作のちょうちんを掲げ、灯明をともし、境内にも同じような多数灯明をともし。この時には夜店が多くでるが、いずれも露店商によるものである。また、夜には花火もあげられるがその費用はすべて氏子(区会の会員全員)から集める。10月9日は「秋祭り」といわれており、新米で甘酒を造り地区内全員にふるまっていたが、今は行われてず子供達に菓子袋を与える程度である。以前はこの日は当番の家で同じ組の主婦が料理を造り、その当番の家(宿の家)で酒盛りをしていたが、今は集会所で行うようになった。料理も折り詰めの弁当になった。
- ・集落の組織の一つとして子供会育成会が近年発足した。子供会育成会は、すでに行政からの呼び掛けで近在の新住民地域の団地では組織化されていたが、天寶喜でこの会が結成されたのは昨年のものである。この天寶喜には昔から小学校に入学すると「天神講」に入る仕組みになっており集落内の大きな家を「富の家」と呼んで、そこで子供達独自の集まりが行われていた。この習慣は現在もある程度続いており上級性が下級生の面倒をみるようになってきている。今では集会所で行っているがこれがそのまま子供会育成会として変容した。新組織になり親と子のレクリエーションや花壇造りなどの活動が行れるようになり、天神講のときよりも活動は盛んになっている。
- ・区会とは関係なく昔から主婦層による子安講が続けられており現在も毎月集会所で行っている。最近では婦人会の組織が対応するようになり、婦人会に入っていないと子安講に入れなくなった。子安講は、地区内の主婦層の娯楽の場であり、婦人会に入りたくないが子安講には入っていたいという人もおり、伝統行事と新しい行政システムとがうまく対応しきれていない。

④新住民との関係

- ・天寶喜へ最近来住した新住民が、積極的なリーダーとしての大きく働いており、天寶喜自体もそうした新住民を受け入れ相互に親密な交流を行っている。また、この新住民も天寶喜の伝統そのものと対立するようなことはなく、旧住民も内部の新住民に対しての不満はない。それは内部の新住民が天寶喜の地域的な活動と対立することがないからである。
- ・不満はむしろ近在の団地新住民に向いている。団地新住民には勝手に林に入り込み木を庭木として持って行ってしまっている。引っ越ししてきても旧住民への挨拶がない。等である。これらの新住民は集落外部の団地に住むため、直接対立するような表面だった行動は見られないが心理的な対立感情は大きく、そのことがまた日常的なつきあいを拒んでいるものもある。

いる。協調性では、この集落は内部の新住民とは特に問題はない。それは新住民の数自体が極めて少なく、またそれらの新住民は、集落の社会集団に新たな要素を持ち込むことなく旧住民側の論理に合わせているからであると思われる。しかし集落外部の新住民団地に対しては反発感情があり、これは同じ自治会内ではないことから直接対立することはないものの、新住民社会集団の体質とはあまりにも異なることから発していると思われる。「むら柄」の形成要因として集落史や基礎的社会集団に着目すると、まず歴史ではこの集落の形成時期がいわゆる中世集落以前の集落であり、集落内の寺社に見られるように空間的にもまたそれに伴う風俗等も伝統的なものが数多く残っている。集落の履歴をみると集落自体の格式は宿場の助郷村で高くはないが、集団で周辺の集落と対抗するなどかなりのまとまりを見せていた。基礎的社会集団を見ても塊状の集落居住域に血縁性と地縁性が重合しており（図4-1参照）、現在でも相互扶助の基礎的単位となっている。このような点から考察すると集落の履歴・基礎的社会関係の伝統と形態から派生して、現在の「むら柄」が形成されてきたであろうことは容易に考えられることである。

山田集落では、自治会の活動をみると行政区の活動よりも行政区が形成される以前の大字を単位とした活動が活発である。活動内容を見ても役員組織は長老・顔役の仕事であり、役職も伝統的なもの

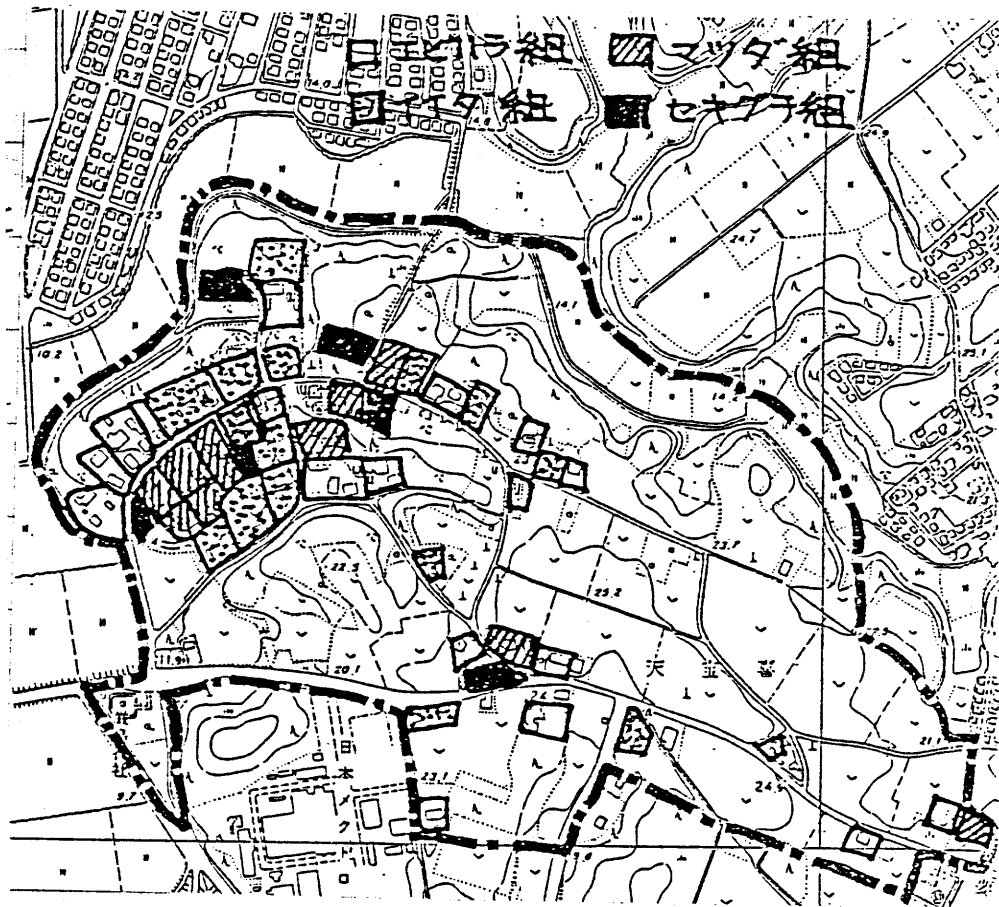


図4-1 集落の地縁関係

を反映している。自治会の経営においても民主的論理よりも、前近代的共同体的論理が優先している。自治会の機能も行政の末端機関としての機能以上に、ひとつの独立した自治を行っているという印象が強い。自治会の組織自体が「うえから形成されたもの」ではなく、もともとあったものに、行政的機能が加わったというような形態である。そのような意味からすればフォーマルな自治組織ではなくインフォーマルな組織がフォーマルに進展してきたような状況であろう。相互扶助・通過儀礼・風俗等を見ると伝統的なものが多く残っている。天宝喜集落に比べ、それらが消失または簡略化されることが少なく現在では儀礼的にならざるを得ないが存続している。共同活動の種類と数に注目すると（表4-7参照）、伝統的な宗教行事が多く、いずれも大字の単位・血縁関係を活動の基礎的単位としている。これらの伝統的種目が活発なのに比べて、近代的なレクリエーションに関するような項目は極めて少なく、町の行政主導の行事に参加する程度である。協調性は、新住民に対しては様々な面でほとんど配慮を示さず、逆に新住民に対して旧住民の伝統を強制する。新住民に対しては支配意識が強い。「むら柄」の形成要因では、集落の歴史を見るとこの集落は天宝喜と同じく中世以前にその名が見られ、戦国時代には城もあったと言われ格式も高く、集落住民の誇りは今でも高いものがある。集落内の寺はその当時から続い

表4-6 山田集落

●混住化の概況

総戸数は118戸で、32戸が農家、非農家のうち来住新住民が27戸である。昭和40年頃から、ミニ開発により集落の一部で新住民の来住が始まった。

●集落史

山田の起源は古くは平安期に既にその名が見える(新撰姓氏録)。中世では豊前氏の知行地であった。豊前氏は古河公方家臣であり、永禄年間以降、小田原北条氏と政治的活動を行っている。この頃山田には、山田城があり城主山田泰藏忠正が天文23年(1554年)柳橋合戦に参戦している。集落内の曹洞宗久昌院はもと城内にあったと伝えられる。近世では下野壬生藩領。村高は787石余(天保郷帳)。大字内で集落移転を行っており、集落を台地上に移した。理由ははじめに集落があった土地が肥沃であったためである。移転の年次は明確ではないが屋敷林の状況からみてもかなり初期の頃の移転と考えられる。久昌院は安永4年春10世禅灯のとき現在の地に移転した。同じく集落内にある香取神社は明治5年現在の地に移転した。現在でも小字名の中にいくつかの庄屋の屋号が残り、もともとは格式の高い集落であったことが伺われる。

●基礎的社会関係

1) 血縁関係

山田では来住新住民の27戸を除いたほとんどは旧住民・血縁新住民を含めて何らかの姻戚関係を持っている。これらは9つの姓からなっており、特にN家の35戸が際立っている。図4-2はN家の姻戚関係の状況を示したものであるがいくつかの本家筋からブランチ状に分家が広がっている様子が観察される。来住新住民(図中の△印)は、集落の端部に血縁集団と独立して分布している。

2) 地縁性

山田は現在山田北・山田中・山田南の3つの行政区からなっている。もともとは大字山田として様々な活動をいっしょに行っていた。現在でも行政区の機能はほとんど行政連絡が中心で共同活動の多くを大字として行っている。図4-3は行政区(山田中と山田南)の中の班構成を示したものであるが、来住新住民は独立した班を形成している。

①自治会の活動

・自治組織の役員は、行政区では行政区長1名の他に各班の班長が区会議員と称して、行政区での仕事のほかに大字の役員を兼務する。大字の役員には、大字三役として大字区長・副大字区長・会計がいる。他に氏子総代2名・大世話人1名・当世話人1名がいる。任期は氏子総代は4年であり、その他の役員は全て1年である。役員の出選方法は区会議員は持ち回りで、その他は特定人物の間の輪番制である。大字の3役には、大字の長老が選ばれ3役を一通り経験して一人前とされる。自治会の運営費は1戸当たり500円/年で、他に全戸徴収の消防費と納税奨励金を当てている。納税奨励金は税金を集落全体が一括納入することで奨励金として支給されるもので、班単位で納税組合ができてはいるが、新住民の班では個人で納めるため奨励金はない。そのため新旧住民間で実質上、運営管理費の負担に差が生じている。集落には公民館があるが大字の会合以外の使用には1回1000円の使用料を徴収する。山田は共同作業の出不足金の制度はなく、文章化された規約はない。

②相互扶助・通過儀礼・風俗等

- ・葬式や祝いごとは行政区や班が単位とはならず血縁集団の中で行っている。日常のつきあいにおいても班は違っても同族同士で行っている。
- ・引っ越しのときの挨拶回りは新宅を出す場合には血縁者一族すべてに挨拶に回る。来住新住民は班内を回るだけですませる。
- ・葬式の方法は血縁者一族を中心に行われ班員がこれを補佐する。葬式のときには床づくり(墓の準備)が伝統的風習として伝わり、大字の役員は床帳を記帳しており新旧住民の区別なく床番が割り当てられる。香典は新旧住民の区別なく1戸当たり200円が徴収される。金額は棺を買える程度として継承されている。
- ・一族の誰かが婿取りのときは、本家が婿をつれて挨拶に回る。
- ・墓地は4箇所に分散しておりそのうち3箇所は、血縁集団ごとに本家あるいは本家筋に近い旧住民だけの共有墓地である。その他の旧住民・血縁新住民・来住新住民は一括して寺に墓地を持つ。

③共同活動・集落の組織

・集落の共同活動として行っている年中行事を表4-7に示す。山田には格式の高い寺と神社があり、年中行事でもそれらに関係するような伝統的な宗教行事が多い。それらは主として大字の範囲で行うものと血縁者を中心に行うものがあるが来住新住民は関係しない。各血縁集団は独自の守護仏をもっておりそれにかかわる行事が行われる。その他の行事では墓の掃除・公民館の掃除・氏子大払いなどの共同作業に関するもの、新年会・運動会・秋の大祭等の親睦的な行事があるが、共同作業に関するものは主に役員や下部組織が行い、親睦的なものは全員参加を原則としている。下部組織としては子供会・若妻会・老人会・消防団・交通安全母の会等がある。

④新住民との関係

- ・新住民の旧住民への紹介は、何かの行事のときに行政区長が名前を伝える程度で顔と名前はほとんど一致しない。新住民と旧住民の個人的交流は近所同士で行われる程度である。
- ・年中行事では伝統的行事が多く行事の日時が固定化されており、新住民の都合は配慮されていない。また、共同作業においても新旧住民の区別なく参加が義務づけられるうえ、曜日や時間は旧住民の都合で決められる。
- ・旧住民は何百年もこの土地に暮らしており、高々数年の新住民が大きな顔をされては困ると言ういしきが強い。

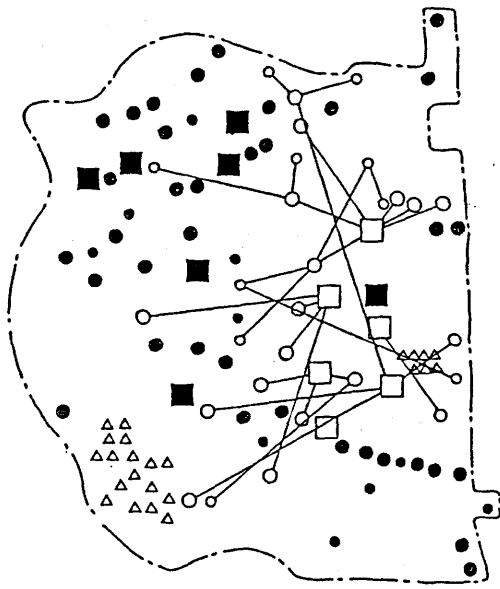


図4-2 N家の分家 (山田集落)

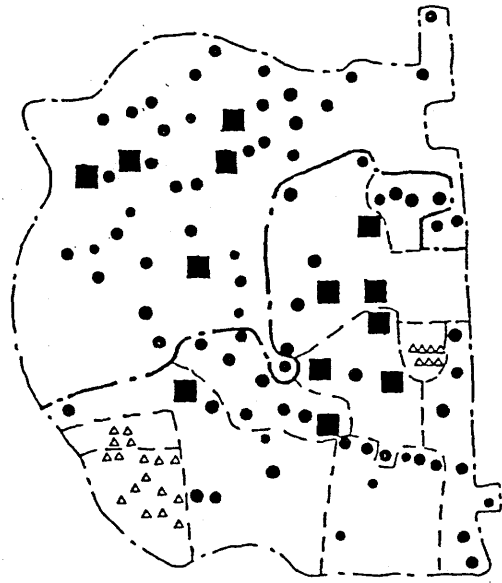
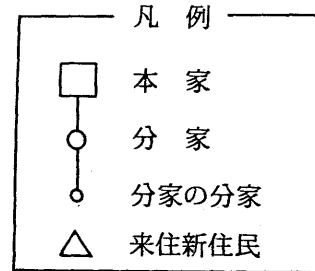
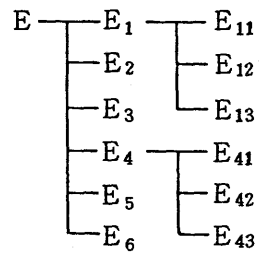
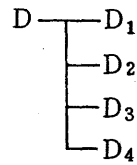
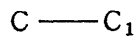
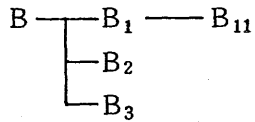
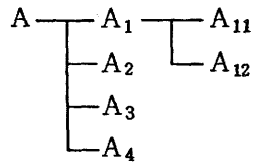


図4-3 班構成 (山田)

N家の分家状況



ている名刹で集落住民との関係が今でも続いていることを思うとその結びつきは古く強いものであると考えられる。血縁地縁関係を見ても集落は幾つかの本家筋を核にした血族関係が強く（図4-2参照）、それが集落が塊状であることも手伝い地縁関係とも重合し強力な結びつきとなっている。このように集落史・基礎的社会関係の面から見てもこの集落の歴史の重みとその伝統・むら人の結束に支えられて今日の「むら柄」が形成されているものであることがわかる。

間中橋集落は、自治会の活動は、旧住民が主体の自治会にあってはかなりの民主的運営が成されている。自治会における新住民への対応も柔軟であり、旧住民だけが自治会運営を独占するような指向は見られない。自治会の活動は全体的に見ても活発であるが活動の内容は単に行政連絡を伝達する機能だけではなく、さらにブレイクダウンして班に至るまで伝えコミュニケーションを図る努力が成されている。この集落は天寶喜や山田と異なり、自治会の活動自体が合理的方向に向かっており、前近代的共同体的な面は薄れつつある。このような傾向は相互扶助・通過儀礼・風俗等からも明らかに読み取れ、伝統的な集落住民間での自己規制的側面・自己管理の傾向が大きく変わりつつある状況にある。展開性としての共同活動・集落の組織をみると（表4-9参照）、伝統的行事と近代的行事がみら

れ、また伝統行事のなかにも宗教行事とまつり・甘酒会等の親睦的な行事が残り、近代的な行事でも花壇づくりのような共同作業のようなものとスポーツ・レクリエーション等があるなど、その内容は新旧のものを取り混ぜてバリエーションに富んだ構成になっている。協調性については、新住民が都市への通勤者が多くコミュニティ形成が進みにくい面もあるが、旧住民側は集落の運営に新住民を強制的に引き入れるようなことはしない。あくまで新住民の立場を理解したうえで集落の運営が進んでいるように思われる。集落の歴史を見るとこの集落は近世の開拓集落で天宝喜や山田に比べてもかなり新しい。当時は異郷の地から開拓者が住みつき、苦難の未定着した住民である。そのようなことから住民気質としては、集落の格式のようなものはなく、また異郷の地から集まった者同士が力を合わせることによって、協調の気質と合理的な勤労意識が育まれたと思われる。さらに当時の幕府による心学の普及なども「むら柄」形成の基礎を成していると考えられる。基礎的社会関係を見ても、他の2集落に比べ血縁関係は強くなく、地縁関係との重合性も強くない（図4-4、図4-5参照）。地縁関係は集落の合併前の単位（大字）にこだわらず、あらたに行政的にしかれた班構成が相互扶助の新たな単位になるなど、かなりの柔軟性が見られる。このようにこの集落においても、集落の歴史や基礎的な社会条件と「むら柄」との関

●混住化の概況

当集落は町内最大の専業農家地域を形成しており、集落域も南北に2km、東西に1kmと、広大である。総戸数は240戸で、そのうち約半数が来住新住民である。当集落は散居村であり昭和30年代から徐々に混住化が進展し、その多くは小規模なミニ開によるものである。

●集落史

宝永3年(1706年)仁連町ほか16か村の名主の連印で飯沼開発についての取替証文が作成された。しかし古堀周辺の村々が反対して実現せず、結局飯沼の開発は享保7年(1722年)から本格化する。享保9年幕府は紀州流の治水技術者を派遣した。工事費のために幕府から借用した1万両の返済は困難を極め、分地された水田を売り渡し負担を肩代わりする村も現れた。仁連町の場合は野州間中村名主長左エ門に売却されて長左エ門新田となった。いずれも享保期の開発である水口新田・恩名新田・成田新田・大戸新田は五新田と称し、いずれももと幕府領であった。天明3年の大飢饉は当地域にも大変な荒廃をもたらした。夫婦親子は四方に離散してしまい3、4戸を残すのみになってしまった。長左エ門新田では寛政4年復興のために北陸農民の入百姓を迎え入れた。幕府は心学の普及とその講談による教化にも力を入れた。入植者の努力で赤松を主体とした混合林で覆われていた土地が次第に開拓されていった。土壌は稲作には向かず3町歩もの耕地を耕作するため勤労の伝統が育った。合理的に働ききちんと休む習慣は受け継がれており、明治期以前から農休日が実施されている。長左エ門新田・水口新田・恩名新田は三新田と称され、三和町の合併に際して統合され間中橋となった。当時から「平間太鼓に大戸そば」のことわざも残るほど協調関係は強かった。

●基礎的社会関係

1) 血縁関係

総戸数240戸のうち86戸が同じ集落内に血縁関係を持つ(図4-4)。86戸は16の姓から成っており、一つの姓が占める数は最大でU家の14戸である。集落の歴史も浅いためブランチも比較的単純で、新宅は本家の近くだけに限らずかなり大きい広がりを持っていることが観察される。

2) 地縁関係

間中橋の合併当初の三新田(長左エ門新田・水口新田・恩名新田)の単位は実質上ほとんど機能していない。班構成は20班から成り立つが、最近の南部のほうの班(14・19・17・20班)を除いては、新住民だけの班はなく新旧住民が入り混じった班構成となっている(図4-5参照)。

①自治会の活動

・自治組織の役員は区長と各班の班長で構成される。区長は任期一年で選出方法としては各班で候補者をたてるか否かの検討を行い、候補者がいる場合には選挙を行う。自治会の運営費は戸当たり500円/年であとは納税奨励金でまかなっている。この集落では農業生産性が高く納税額が大きいので奨励金も多く自治会の大きな財源となっている。奨励金の一部は各班にも分けられ、募金や班の活動などに使われている。新住民だけの班では奨励金がないため班の中で積み立てを行い募金や班の活動等に使われている。自治会の活動としては、区長が必要に応じて班長を召集し、かつ年10回程度公民館で班長会議を行い行政連絡・集落の行事等の打合せを行う。共同作業などへの参加は決して強制されず不足金を支払うこともない。集落の規約は明文化はされていないが区長が新住民の班の集まりに出掛けて行って説明をするなどの努力をしている。

②相互扶助・通過儀礼・風俗等

・引っ越しのときの挨拶回りは、昔は全戸回っていたが今では班内のみに回る。
・葬式は昔は部落単位(合併前の3つの新田単位)で血縁者が中心になって行っていたが現在では班単位に行っている。新住民の場合の葬式では区長が行って指揮をとる。葬式の通知は班長を通じて各戸にされる。以前は、各班から代表者がきて団子づくり等の手伝いをしていたが現実合わなくなってきたため、数年前より300円/戸の香典を当番が届けることでそれに代えている。

③共同活動・集落の組織等

・共同活動では(表4-9)、毎月定期的に行っているものと年中行事に分けられる。定期的なものとしてお茶のみ会・班長会議・農休日がある。お茶のみ会や班長会議は特定の日が決まっているわけではなく参加者の都合に合わせて夜に行うので出席は良好である。班長会議は行政連絡と懇親会を兼ねている。年中行事には、伝統的行事として報恩講・観音講、親睦的な行事としては新年会・甘酒会・秋祭り・七夕・盆踊り等の伝統的なものと、花壇づくり・ソフトボール大会などのレクリエーション的なものがある。

④新住民との関係

・共同活動では伝統的な宗教行事を除いては新旧住民が共に活動している行事が多い。行事は平日の夜や休日に行うものが多く、また平日の昼間に行う場合でも夜まで続けるなど、勤め人の多い新住民にとっても参加しやすいようになっている。新住民の参加は活発ではないが各行事への参加は自由である。

表4-9 主な年中行事（間中橋）

日時（曜日・時間）	活動内容	活動場所	集まる人数（旧住民・新住民）
1月	・報恩講（浄土真宗） ・行政区新年会 ・1日、15日農休日 ・おちゃのみ会（夜）	向養・会食 会食 会食（女性のみ）	長命寺 公民館 当番制 浄土真宗信仰者（ほとんど旧住民） 新旧住民ほぼ全員参加 新旧住民の区別なし。出席率良好
2月	・観音講（朝から夜中まで） ・おちゃのみ会（夜） ・1日、15日農休日 ・ンバヤキ・野ネズミ駆除 ・班長会議（夜）	向養・会食（女性のみ） 会食（女性のみ） 行政連絡	長命寺 当番制 公民館 主に旧住民、夜から新住民も参加 新旧住民の区別なし。出席率良好 新旧住民の班長全員参加
3月	・1日、15日農休日 ・公民館花だんづくり ・おちゃのみ会（夜） ・班長会議（夜）	会食（女性のみ） 行政連絡	当番制 公民館 婦人会 新旧住民の区別なし。出席率良好 新旧住民の班長全員参加
4月	・溝さらい（平日昼） ・おちゃのみ会（夜） ・班長会議（夜）	農用水のそうじ 会食（女性のみ） 行政連絡	集落内の水路 当番制 公民館 農家のみ参加（出不足金あり） 新旧住民の区別なし。出席率良好 新旧住民の班長全員参加
5月	・1日、15日農休日 ・おちゃのみ会（夜） ・班長会議（夜）	会食（女性のみ） 行政連絡	当番制 公民館 新旧住民の区別なし。出席率良好 新旧住民の班長全員参加
6月	・1日、15日農休日 ・おちゃのみ会（夜） ・班長会議（夜）	会食（女性のみ） 行政連絡	当番制 公民館 新旧住民の区別なし。出席率良好 新旧住民の班長全員参加
7月	・神社の清掃、墓地の清掃 ・1日、15日農休日 ・おちゃのみ会（夜） ・班長会議（夜）	会食（女性のみ） 行政連絡	神社・寺 当番制 公民館 老人会が中心になって行う。老人会には新住民の年寄（主におばあさん）も何人か含まれる。 新旧住民の区別なし。出席率良好 新旧住民の班長全員参加
8月	・ソフトボール大会（日曜） ・七夕、盆おどり（夜） ・1日、15日農休日 ・おちゃのみ会（夜） ・班長会議（夜）	3部落対抗年齢別 行政区主催、体育振興会協力 会食（女性のみ） 行政連絡	北総高校 昔→畑、現在→広場 当番制 公民館 新旧住民出席（新住民の出席率良好） 新旧住民参加、他の集落からも集まってくる。 新旧住民の区別なし。出席率良好 新旧住民の班長全員参加
9月	・二百十日（朝から夜まで） ・甘酒会 ・1日、15日農休日 ・おちゃのみ会（夜） ・班長会議（夜）	会食（3部落毎に行う） 1日中甘酒をのんで話す（材料はもちより） 会食（女性のみ） 行政連絡	部落によって異なる（出荷所・施設・当番制） 愛宕神社 当番制 公民館 新旧住民出席（新住民は夜から参加） 新旧住民出席 新旧住民の区別なし。出席率良好 新旧住民の班長全員参加
10月	・運動会の練習 ・レントゲン検診 ・永代経 ・1日、15日農休日 ・おちゃのみ会（夜） ・班長会議（夜）	米と金を納めて読経 会食（女性のみ） 行政連絡	広場・畑 公民館 長命寺 当番制 公民館 新旧住民参加 浄土真宗信仰者（ほとんど旧住民） 新旧住民の区別なし。出席率良好 新旧住民の班長全員参加
11月	・胃の検診 ・秋まつり ・ニイナメ祭 ・1日、15日農休日 ・おちゃのみ会（夜） ・班長会議（夜）	会食（3部落毎に行う） あまさけをのみながら会食 会食（女性のみ） 行政連絡	公民館 部落によって異なる（出荷所・施設・当番制） 町農協 当番制 公民館 新旧住民参加 新旧住民参加 品評会・売出しなどに新住民も参加 新旧住民の区別なし。出席率良好 新旧住民の班長全員参加
12月	・1日、15日農休日 ・おちゃのみ会（夜） ・班長会議（夜）	会食（女性のみ） 行政連絡	当番制 公民館 新旧住民の区別なし。出席率良好 新旧住民の班長全員参加

*班長会議の決定事項は、各班で会合がもたれ（当番制）伝えられる。

*1日、15日の農休日他に、お天気祭り、おしめ祭りなどを、当番が決めて（随時）タイコをならして臨時の農休日とする。

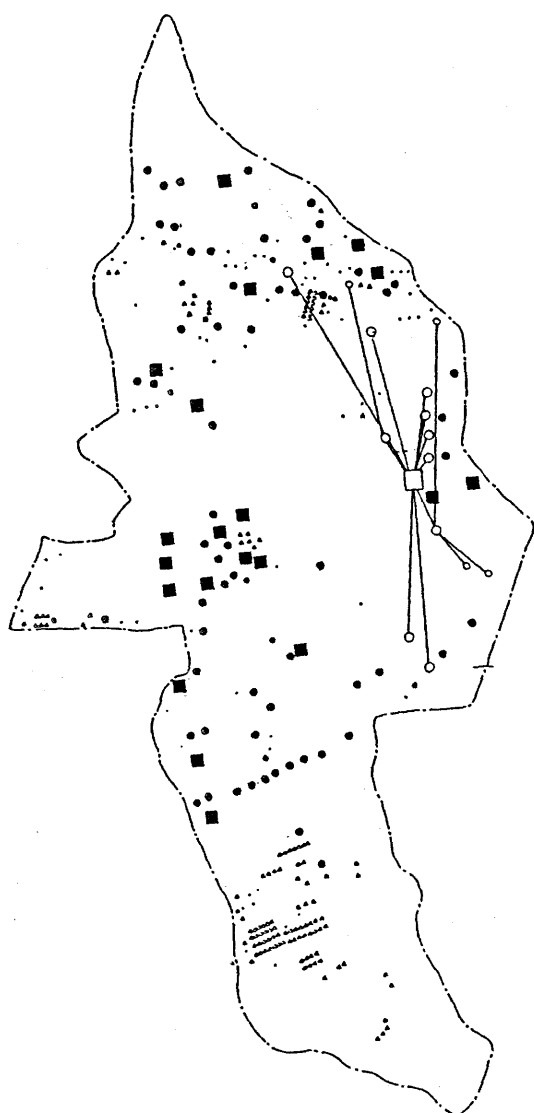


図4-4 U家の分家 (間中橋)

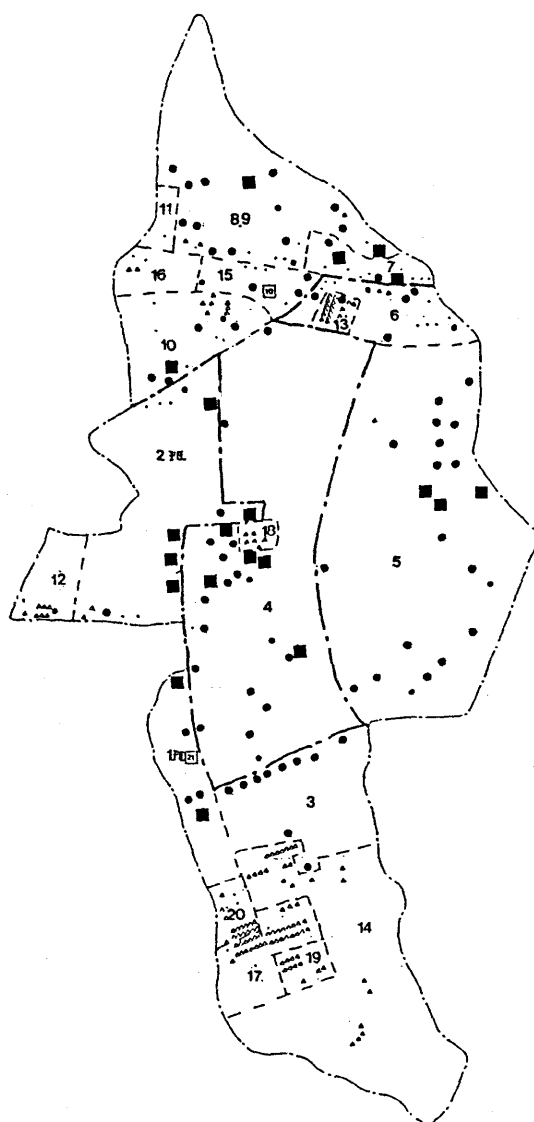
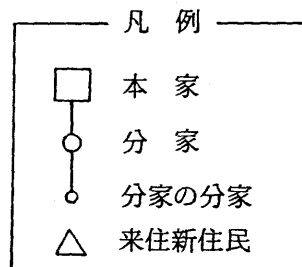
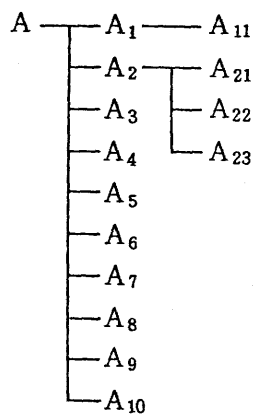


図4-5 班構成 (間中橋)

U家の分家状況



係は確認される。

旧住民集落との比較のために新住民だけの集団である城山団地を
観察してみると、自治会の運営では、活発で民主的な運営が成され
ており、個人が平等な立場で自らの管理運営にあっている。自治
会は合理的に組織化されており、活動に対して強制はされない。相
互扶助・通過儀礼・風俗等では、旧住民集落のように「何々をしな
ければならない」と言うようなことはなく、原則として個人が尊重
され個人の意思に任せられる。相互扶助も個人的なつきあいは自由
であるが、集団としては最低限の事務的対応が中心である。共同活
動の種類と数を見ると（表4-11参照）、全体としてかなりのバ
リエーションと数がある。その内容はすべて新しく企画されたもの
ばかりであるが、祭りや盆踊りなど旧住民集落では伝統的行事であ
るものが、ここでも巧みに取り入れられている。宗教行事などはな
いが、クリスマスをやるなど本来の宗教性は排除して年中行事とし
て柔軟に取り入れている。ひなまつりなどもここでは、風俗として
伝わるものではなく、自らアレンジして行事に取り入れている。こ
のように新住民だけの集団であっても単にレクリエーションのよう
な種目だけでなく、疑似的な伝統とも言うべき種目を創出して
いるところに特徴がある。共同作業についてもけして強制されるよう
なことはないが出席率は良好である。特に居住環境の維持・管理に

●混住化の概況

集落とは自治会が別で空間的にも独立した住宅団地である。現在総戸数は416戸であり、典型的な中流サラリーマン層の新興住宅地域である。

●団地の歴史

入居が始まったのが昭和51年頃で、ほとんどが建て売り分譲である。

●基礎的社会関係

団地のなかで血縁関係を持つ新住民はいない。自治会の組織構成は、班が全体で34班。3～4班で1ブロックを形成し全部で10ブロックある。

①自治会の活動

・各ブロックでは2名のブロック委員を選出し、その内の1名が「ヘッド」になる。この20名のブロック委員の互選により12名の自治会役員が選出される。会長はこれらと全く別に出選されるが受手がないのでその年度の役員がこれと思う人のところへ依頼に行く。12名の自治会役員は次のような役職につく。副会長2名・会計2名・婦人部3名・子供会育成会3名・高年部2名の合計12名である。生活部と文化・体育部は兼務である。こうした役員は基本的には互選であるがなり手がいないので、前もって同好会等の人脈を使って根回ししておく。班長とブロック委員は名目上は互選になっているが実際は輪番制になっている。自治会費は年間4000円/戸で3か月ごとに1000円ずつ集めている。共同作業等への参加は自由で出不足金のきまりはない。自治会の活動については文章化された規約がある。

・選挙に関しては2年前にこの自治会から町会議員をだし最高得点で当選している。

②相互扶助・通過儀礼・風俗等

・引っ越しのとき近隣関係が手伝いをするようなことはない。その家の友人や職場の人が手伝いに来ている。
・隣近所への挨拶も簡単なもので、自治会としても事務的な対応しかしない。
・旅行に行ったり結婚式で頂き物をしたときなど近隣におすそわけをすることはあるが普段は会えば挨拶を交わすぐらいで積極的な行き来をするわけではない。

・必ずしも近隣とは限らないが個別に友人になったりして家族ぐるみで食事をするようなことはある。

・子供が生まれたときも結婚式があったときもそれは個別のことであり、近隣や自治会の班が何らかの対応をするようなことはない。

・葬儀の時には手伝いに出たりすることはない。葬儀のときには自治会から花輪と香典を出すのが両方合わせて2万円程度である。

③共同活動・団地の組織等

・入居が開始されて4～5日目頃に団地の開発業者に交渉して無料で公民館を建設してもらった。現在、水道施設の維持管理費として一戸当たり12万円ずつ集めた費用が開発業者側にあり、この費用を自治会へ移管してもらうための交渉が行われている。

・毎月定期的に行われている行事は、役員会議で、第2と第4の土曜日夜7時半から行われている。また、毎月第一土曜日には廃品回収、最終日曜日には公園・道路などの清掃が行われている。全体に協力的で少なくとも2/3ぐらいの世帯が積極的に対応している。

・老人クラブも毎月定例の会議を開いており、独自のプレハブの集会所をもっている。この中の2名が自治会の高年部の役員になっている。高年部は60才以上の自由参加で現在35名が加入している。

・年中行事は表6-10に示すようなものがあり、内容は多彩で生活を行う上での基本的な公的行事と親睦的な行事がうまく対応している。内部的な人間関係は、特に親密な関係ではないが、各種行事への参加は良好である。

・団地の組織では、いくつもの同好会が結成され、目的別の集団が存在している。習字・生け花・茶道・写真・手芸・ソフトボール等の同好会がある。同好会の数は10～13くらいあるがいずれも自治会の行事には積極的に対応している。

④旧住民との関係

・地形的にも旧住民地区とは隔絶したような形になっており、内部的にもまとまりがよくほとんど旧住民とのつきあいはない。つきあいのある家は3～4戸にしかすぎず、またその数戸も特に親密につきあっているわけではない。

・団地内部としては今までのところトラブルはない。しかし、団地外部とのトラブルはいくつか発生している。旧住民からの苦情としてよくあるのは団地住民のペットの犬が田畑を荒らして困る。林などにゴミを捨てる。といった問題である。一方、新住民側の苦情としては子供の通学路近くの畑で消毒が行われていること。ゴミ置き場が団地近くに設置されたこと。等が最近問題になった。

表4-11 主な年中行事(城山団地)

日時(曜日・時間)	活動内容	活動場所	対象・参加状況
1・新年会 月(1日午後)	会食	公民館	大人100名 子供50名位
2 月			
・ひな祭り 3(3日) 月・バザーと文化祭 (初旬の土日)	菓子を配る 会食・展示 売り上げ寄付	公民館 公民館	女子100名位参加 子供会育成会 団地住民の半分以上 婦人部
4・自治会総会 月(中下旬の日曜)	会議 代議員制	公民館	代議員の総数は102 名であるが、8~9割 出席
5・樹木の害虫駆除 月・下水道浄化槽掃除	自治会主催	団地公園 団地内	
6・ソフトボール大会 月(中旬日曜) ・老人の会(町主催)	自治会主催 町主催、会食・親睦	町の施設 町の施設	ブロック毎の対抗戦 家族も応援に出る 老人クラブが参加
7・城山カーニバル準備 月(すべての土日曜)		公民館 各自の家等	
8・城山カーニバル 月(中旬の土日曜)	神輿(大人2、子供3) だし・鼓笛隊・阿波踊り 夜店(15~16店)	団地内	団地の殆どの人が参加 周辺の団地・区会・消 防署にも招待状を出す
9・敬老福祉大会 月	町主催	町の施設	自治会全体 子供会
10・町民運動会 月	町主催	町の施設	応援を含めると団地の 1/3位が参加
11・老年会旅行 月・日帰り旅行	町主催 自治会主催		老人クラブが対応 170名位参加
12・クリスマス会 (23日) 月・下水道浄化槽掃除	会食・懇親 自治会主催	公民館他 団地内	400名近い参加

*毎月定期的に行われるものとして、役員会議(第2、第4土曜・午後7時から)、廃品回収(第1土曜)、公園・道路の清掃(最終日曜日)がある。
全体に協力的で2/3位の世帯が対応している。

は熱心であり、その獲得のためには集団となって外部に交渉や対抗をする場合もある。団地の組織も多彩なものがあり、特に同好会のようなものが多数結成されている。自治会をフォーマルな社会関係とすると同好会はインフォーマルな社会関係でありこの両者の対応関係のなかで縦と横の社会関係がうまく構成されている。また、自治会自体も完全なフォーマル集団ではなく、徐々にインフォーマルな関係を形成する方向に機能するものも多くなってきている。しかし、同好会を含めてのインフォーマルな関係が各世帯単位間を相互に密接に結び付けることはない。そこに参加する個人の間だけの関係である。以上のような人間関係を軸として構成される社会構造は、当然のことながら伝統的共同社会の構造とは大きく異なっている。

7. まとめ

第5節で「むら柄」を仮説的に定義し、「むら柄」を「拘束力」と「展開性」としてとらえ、単純な指標からその概略を知る方法を示した。6節では、具体的な事例を詳細に観察することにより、「むら柄」が複合的・多義的な意味を持つ指標であることを確認した。さらに「むら柄」形成の要因として集落史と基礎的社会関係を取り上げ「むら柄」との関係を観察したが、いずれの事例においてもこ

れらが「むら柄」と深い因果関係にあることがわかった。以上の分析をもとに、もう一度「むら柄」の定義にもどり、総括的に拘束力と展開性の持つ意味を考えると（表4-12、図4-6参照）、事例からも明らかのように、拘束力は伝統的共同体に見られるような慣習的・観念的論理に従う強力なものと、新住民団地に見られるような合法的・事務的論理に従う弱いものに分けられる。同様に展開性の意味も大きいものと小さいものに分けられる。前者は民主的市民的論理で地域社会集団を展開していこうとするものである。後者は伝統的共同体にみられるもので前近代的論理のなかで地域社会集団を展開していこうと指向するものである。しかし、実際は前近代的論理自体が閉鎖的で展開性の小さいものであるからこの場合は表面的には小さい展開性として写る。また、拘束力・展開性のどちらの因子も連続的な変化をするものであると考えられる。そこで「むら柄」をこれらの意味をもった2つの軸で示すと、図4-6のような図であらわすことができる。図のA点は強い拘束力と小さい展開性で説明される座標で、事例では山田集落のような集落が該当する。一方、B点は弱い拘束力と大きい展開性で説明される座標で事例では城山団地のようなものが該当する。ここで「むら柄」が時間的変化にともなって変化するものであるとすると、A地点の集落はA'地点に向かって進み、B地点の集落はB'地点に向かって進み、こ

の線上にそれぞれの「むら柄」が位置付けられると考えられる。すなわち調査事例の分析からも明らかなことは、伝統的集落の場合は起点は展開性が小さく拘束力が強い点に位置すると考えられ、展開性が大きくなるのに伴い拘束力も暫時弱まる傾向が認められることである。一方、新住民だけの集団では起点において、展開性は最初からある程度大きく拘束力は弱い点に位置すると考えられるが、この場合は、時間的変化にともなって拘束力は若干強くなる傾向が認められるものの、展開性の減少は小さいと考えられる。このように新旧の何れも展開性と拘束力には相関が見られ、特に伝統的集落では拘束力の変化の幅に対して展開性の変化の幅は大きいと考えられる。伝統的集落では、歴史があり格式の高い山田のような集落の場合は現在の位置（A）に留まるポテンシャルが強く働く。間中橋のような集落ではポテンシャルは弱くA'方向に移動しやすい。一方、城山団地の例にも見られたように新住民だけの集団であっても、時間的な経過にともなってわずかではあるが拘束力の崩芽（例えば選挙以前に役員候補を根回し工作する等）が見られるなど、BからB'に進むと考えられる。これらを混住化と言う視点でみるならば旧住民集落側はAからA'に以降するプロセスにおいて、新住民側はBからB'に移行するプロセスにおいて協調性が備わってくるものと思われる。すなわち図において旧住民集団と新住民集団の距離が協

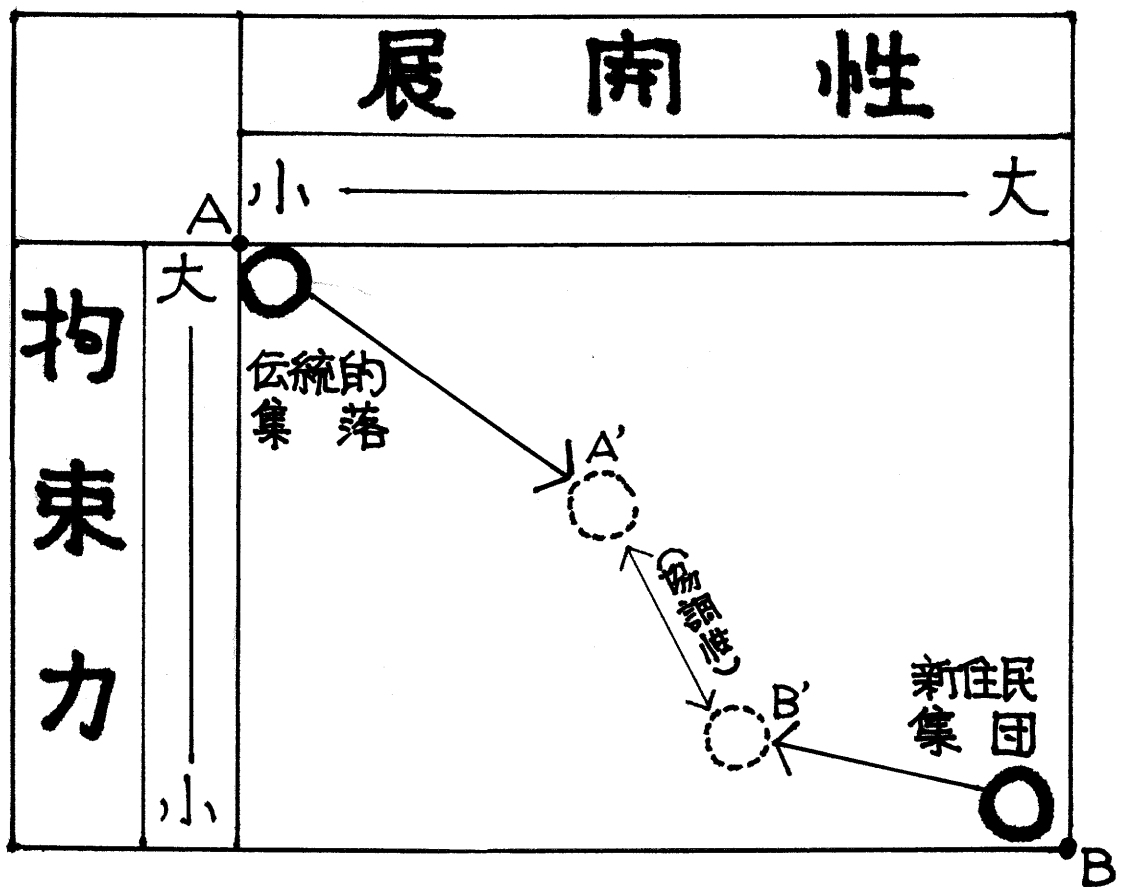


図4-6 「むら柄」モデル

表4-12 事例集落の「むら柄」と要因

		天寶喜	山田	間中橋	城山	
集落史	形成時期 集落履歴	母集落で中世以前 対抗の歴史	母集落で中世以前 格式が高い	開拓集落で近世 協調の気質	昭和51年 —	
基礎的 社会 関係	血縁関係 地縁関係	強固 血縁関係と重合	強固 血縁関係と重合	やや弱体 均質的關係に移行中	なし 均質的關係	
む ら 柄	自律性	自治会の活動 相互扶助等	合理的・不活発 伝統的・維持	合理的・やや活発 伝統的・柔軟	合理的・活発 近代的・事務的	
	展開性	共同活動の種類 共同活動の数	伝統的・単純 少ない	伝統的・多様 やや多い	伝統・近代混合的 多い	
	協調性	新住民への対応	対抗	支配	柔軟	対抗 (対旧住民)

調性を表すものと考えられる。従ってこの距離が小さいほど両者の協調関係は良好になると言うことができる。しかし実際には新住民の場合は、最初からBにあり実際に来住した後の時間的な経過をともなって初めてBからB'に移行し始めるから、「むら柄」によって協調性を期待するには旧住民における現時点での「むら柄」の位置（展開性が大きく拘束力が弱い地点に近い集落が好ましい）で選ぶことが前提となる。

以上のように混住化を考えるにあたって「むら柄」は集落の性格を計る一つの総体的指標として有効であることが確認される。

注・参考文献

- 1) このことは第5章にて詳しく考察する。
- 2) 「中村俊夫、三和郷土誌、著者発行、1977」を参照
- 3) 「杉山 博他、茨城県地名辞典、角川書店、1983」を参照

第5章 新旧住民の居住地形態からみた混住化集落の特性

第5章 新旧住民の居住地形態からみた混住化集落の特性

1、研究の目的と方法

本章では集落の空間レベルにおける空間的ストック指標、集落の実態指標の分析の分析を行う。具体的な研究目的は次の4項である。

①空間ストック指標として集落形態に注目し、集落形態の歴史的形成過程から形態別の特徴を整理する。これはすなわち旧住民の居住地形態の特徴を表すものである。

②実態指標として、集落における新住民住宅の分布の状況を新住民居住地形態として分類し、その分類の有効性を形態別の個人交流、コミュニティ意識、居住環境評価の分析を通じて確認する。

③旧住民の居住地形態である集落形態と新住民居住地形態の組み合わせを分析し、

1)集落形態を反映する組み合わせの在り方について考察する。

2)自然環境条件の関係を分析し、自然環境条件を生かす組み合わせについて考察する。

3)施設配置および施設利用の状況を分析し、施設利用を促進する組み合わせについて考察する。

④以上から集落形態が空間的ストックの指標として有効であること

を確認する。

研究の方法は、実態指標の抽出、空間的ストック指標の抽出のいずれも、指標の仮説的設定→指標の妥当性の検証といった手順を進める。分析の方法は、実態指標の場合は統計的方法を用い、ストック指標の分析は地図情報、実態観察などを通じて記述的方法で分析する。

2、調査について

調査資料の収集は下記の2種類の調査に因る。

●集落の空間構成把握のための調査

調査対象集落の中から、空間構成上典型的と思われる以下の項目について、空中写真及び地図の判読、現地踏査、聞き取り調査により調査した。

①基本資料

- ・集落単位の基本地図——国土基本図（1/2.5千、1/5千）

住宅地図

- ・過去の地形図（1/2.5万）

②空中写真及び地図の判読、現地踏査による資料

- ・緑地分布図（生産緑地は除く）
- ・地形現況図

- ・施設配置、商店分布図

- ・事例写真

③聞き取り調査による資料

- ・新旧住民別の宅地配置図（居住歴21年以上を旧住民、20年以下を新住民とした）

●居住者の居住環境評価・来住理由・個人交流・コミュニティ意識把握のための調査

この調査は調査集落・調査対象・配布回収状況のいずれも3章のアンケート調査に準じている。調査項目は下記の通りである。

- ・個人交流、コミュニティ意識に関しては3章の調査項目と同様。
- ・居住環境評価は以下の項目について「満足」「どちらかと言えば満足」「どちらかと言えば不満足」「不満足」の4段階で聞いている。

「新住民との交流」「旧住民との交流」「スポーツ・余暇活動」

「家庭菜園・土いじり」「田園風景・自然環境」

「子供の遊び場」「くらし全般について」

- ・来住理由に関しては以下の項目について尋ねた。

「親戚や知人が多かったから」「通勤に便利だから」「老後の環境としてふさわしい」「子育ての環境としてふさわしい」「広い敷地や住宅を得られたから」「財産として価値が上がると思った

から」「その他」

3、集落形態のパターンと特徴

集落形態は、様々な視点からの分類が考えられているが、矢嶋は集落の地理学的研究に当たって集落形態を集村と散村とに分け、さらに集村を塊村と列村に分けて、その形成の理由を考察している³⁾。本論でもその分類に従う。しかしここでは散村、集村に対して集落の居住地が集落空間の中でどのように配置されているかという視点から①散居村、②集居村と名付け、また集居村を細分類した②-1塊村、②-2列村をとりあげそれぞれについて空間的特徴、歴史的背景を整理する。

散居村は、古代の条里制の遺構や近世における新田集落の中にしばしばみられるが、これら散居形式の居住地が形成された理由については①扇状地にあって水利に恵まれ、どこにも集落の立地が可能である場合、②新田開発により、長い間無居住地域であったところが用水路の整備などによって水利の便を得た場合、③「地割り制度」などの政策により配置条件が決定される場合、等が考えられている。いずれも、集落立地の基本条件として水の採取の難易が、居住様式の形成に大きな影響を与えてきた。これらの散居形式の集落景観を特徴づけているのは個々の民家をめぐる防風林の存在であり、それ

は季節風に対する備えや防火の役割を果たしてきたものである。

塊村については、居住地の集まり方や居住の様式などは、土地の事情や民俗性の違い、あるいは歴史的背景の同異によって様々であるが、これを概括的に見ると、自然発生的な集落については不規則な形態のものが多いのに対して計画的集落は、規則正しい形態を持つものが多い。一般に道路を軸としてそれに沿って居住地が並列し、細長い集落が形成された場合、これを列状村落と呼ぶがその中に街村と路村の2つの類型がある。街村は主要街道などに沿って居住地が密集して並列し、そこの住民の生活が街道への依存が大きく商業・交易的機能を有する場合を言い、路村は比較的狭い街路に沿って居住地がその片側または両側に並列し、街路への依存が小さく主として農業集落として形成されているものをさす。集落立地の特性を歴史的経過の中で考えてみると、山地が多く地形の起伏に富む日本では、古くから農耕を主な生産生活の基礎としたので、集落の立地には、水田の経営に便利な低湿地域が早くから選ばれた。長い歴史時代を通じて、沖積平野が、生活を支える主な生産の場となり、その周辺の居住地化が進められていった。その後の展開として、上代における墾田開発や中世より近世にかけて行われた大規模な新田開発が進んだ。古い集落は主として自然堤防上にあり、塊状の集落形態を示すものも多く、このような集落景観は水が多くて、その災害

予防を主眼とした居住様式として共通性をもつ。次に見られる段階として、台地の周縁の侵食崖の所や、台地や扇状地の末端などに湧水があったり、地下水面の浅い地域などがあり、それが根拠となって自然発生的集落が発達した例が多い。このようなところは塊村が多い。台地面や扇状地の扇央の部分は、地下水位が低く飲料水やその他の用途に供する水が乏しく、長い間居住地域として注目されることはなかった。このようなところの開発は、近世における新田開発によって開かれたところが多く、開墾技術の進歩によるところが大きい。新田集落は自然発生的集落とは異なり、一般に整然とした形態を持つものが多い。開拓の当初は、土地所有の均分化を建前として入植させたものも多く、各戸の所有する宅地や耕地および山林の面積もほぼ均等であり、集落の配置や土地利用、水の利用などについても平等の建前で新集落を形成した例が多い。これは、幕府や諸藩が主体となって開発した「官営集落」の場合は特に明瞭であるが、農民や町民が主体となって開発した「民営新田」の場合にも見られる。入植者は、当初は何れも零細農家あるいは、農家の次三男等が多く、新田に入植してはじめて土地を所有するような者が多かった。これらの入植者たちは、土地所有にしてもその他の社会関係からみても、平等関係をもって定着して、新たに近隣集団が形成されていった。

以上のように集落は、歴史的にみても成立条件に適合した立地条件が選択されており、その自然条件と人間の営みのなかで集落形態が形成されていったことがわかる。

4、新住民居住地形態の分類とその特性

ここでは、新住民の住宅の集合状況に着目して、仮説的な空間の集合形態（新住民居住地形態と定義する）として分類し、各類型別の空間構成の特性を整理する。次に新住民居住地形態別に個人交流、コミュニティ意識の特性、居住環境に対する評価を分析し、新住民居住地形態の妥当性を検討する。

新住民住居の集合状況により混住化の形態は、大きく分けて、3つに分類できる。一つは集落域全体にパラパラと分散的に形成されるケースで、散居村の集落に形成され易いもの。一つは集落居住域の一部にあるまとまりをもって形成されるようなケースで、集居村の集落に形成され易いもの。一つは集落居住域とは空間的にも独立しており、戸数も大きくまとまっているものである。ここでは第一番目のものを「分散型」、二番目のものを「集合型」、三番目のものを「団地型」と名付け、これらを仮説的分類とする。以下、この新住民居住地形態を用いて分類の有効性を検討する。ここでは新住民住居の類型化を行うのが主な目的であり、集落形態と新住民居住

地形態の関係については、次節において述べる。

はじめに、各混住化の新住民居住地形態別の個人交流の実態、コミュニティ意識、居住環境評価について考察する。ここでは、混住化による変化の主要因となる来住新住民を主な分析の対象¹⁾にする。個人交流（表5-1左欄参照）では、団地型が新住民同志の交流が最も活発で、逆に新旧住民間の交流はもっとも低調である。集合型では、団地型に似た傾向を示しており、新住民間の交流は活発であるが新旧住民間の交流はそれほど大きくはない。分散型では、新住民間の交流は他の2つのタイプに比べて小さいが、旧住民との交流は大きくなっている。以上の結果を各混住化形態別の空間構成の特性と比べてみると、何れも空間的關係が直接的に個人的交流に影響していることがうかがわれる。すなわち、団地型では旧住民と空間的に独立した形態をとっていることが交流の面でも表れているものと思われる。集合型では空間的には旧住民の住む領域と独立はしていないものの、領域的には、旧住民の大きな集団の中で新住民が小さくまとまった形態をとっており、新住民の目は旧住民のほうへは向きにくく、新住民間の交流が促進され易くなることに関係すると思われる。分散型では、新住民住宅の周辺では新住民の住宅のほか旧住民の住宅も市松模様をなして分布しており新旧住民の双方と、交流が進む大きな要因となっていると思われる。次にコミュニティ

意識について見ると（表5-1右欄参照）、やはり空間形態との関係性は読み取れ、空間的に独立している団地型が一番積極的であり、次いで集合型、分散型の順になっている。連帯性を見ると小さい集団ながら旧住民集団と拮抗した形態を取る集合型において大きくなっており、次いで分散型、団地型の順になっている。以上から、コミュニティ意識においても、集合型は分散型に比べて消極性はやや薄れ、連帯感も高まっている様子がかがわれ、空間形態上の新旧住民集団の緊張した関係を反映していると思われる。団地型では、積極的になるものの、同質的な集団であることから、緊張関係も発生しにくく、連帯感はやや薄れ、集合型や分散型に比べて個我的志向が強まる。

居住環境評価では、まず、居住者の来住理由（表5-2参照）をみると、団地型は生活環境、住宅条件などを住宅地選定にあたっての条件にしている。親戚知人の存在（地縁性）は分散型より集合型のほうが大きい。それ以外の項目では集合、分散のどちらも大きな違いはない。空間形態別の近隣環境の満足（表5-3参照）では²⁾、新住民同志の交流は、集合型のほうが分散型よりも高い。これは集合型では新住民が集団化しているため交流は高まるが、それが直接、評価に反映していることを表している。一方、旧住民との交流をみると、血縁新住民の場合では、集合型が大きく、来住新住

民の場合では、集合型、分散型のどちらも余り変わらない。これは、血縁新住民のように最初から交流の縁故がある場合は、分散型よりも集合型のほうが空間的距離から見ても交流が深まり、それが直接、評価につながるものと考えられる。しかし、来住新住民では、分散型のほうが旧住民と接触する機会は多くなるが、その分、圧れきも増し、旧住民との交流の満足度は小さくなる場合も考えられ、集合型や団地型で旧住民との交流そのものの頻度が小さく、この評価が数値に表れているのものとは、意味が異なると考えられる。スポーツ・余暇活動は、集団新が最も高く、集合型では血縁新が高くなっているが、来住新では、分散型の血縁新や来住新と同程度である。団地では施設面の充実が見られる上、組織の点でも新住民だけの組織であるため、時間の調整、趣味志向等が一致しやすい。分散型および集合型では、新旧混在の居住者集団であるため、施設面での未整備もあるが、その運営が多くは旧住民の手に委ねられているため新住民主体のコミュニティが形成されずに満足が小さいと思われる。また、住民属性から見ても集合、分散の両型では、団地型に比べて共稼ぎが多く、スポーツや余暇活動にあてる時間が少ないと思われる。家庭菜園・土いじりなどの項目では団地型の評価が大きく、集合型、分散型の間には大きな違いは見られない。田園風景・自然環境では団地型が一番評価が高く、次いで集合型、分散型では血縁・

来住の差は小さく、両者を比較すると集合型のほうが評価が高い。

これは、団地型や集合型では新住民居住者が空間的に集団化しているために周辺を農地や平地林が残存しており、分散型のように、農地や平地林が虫喰い的に宅地化している場合とは評価が異なるものと思われる。子供の遊び場に関しては、集合型、団地型、分散型の順であり、分散型の場合は、子供の遊び場などは特定のもの以外にも分散的に配置されているため、新住民にとっては認識されにくいこともありうる。

以上から、新住民の居住地形態を分類する類型として「新住民居住地形態」のの妥当性が確認された。

表5-1 新住民居住地形態別主成分スコア、因子スコアの平均値

居住地 形態	個人交流		コミュニティ意識	
	対旧住民交流性	対新住民交流性	消極的関与－積極的関与	連帯感－個我感
集合	-0.983	0.339	0.030	0.059
分散	-0.609	0.139	0.133	0.029
団地	-0.998	0.381	-0.162	-0.047

表5-2 新住民居住地形態別来住理由

居住地 形態	来住理由 (%)					
	親戚知人	立地条件	生活環境	住宅条件	住宅資産価値	その他
集合	9.1	20.5	22.7	31.8	2.3	13.6
分散	3.1	25.1	23.0	34.1	3.9	10.9
団地	0.8	18.6	29.2	41.9	2.1	7.2

表5-3 新住民居住地形態別近隣環境の満足

単位は%

居住地 形態	居住者 タイプ	新住民と の交流	旧住民と の交流	スポーツ 余暇活動	家庭菜園 土いじり	田園風景 自然環境	子供の 遊び場	全般的
集合	血縁新	72.5	75.0	63.3	75.6	76.9	56.8	61.6
	来住新	71.8	51.5	46.7	75.9	78.1	53.1	39.4
分散	血縁新	64.9	64.2	49.5	75.0	72.3	37.6	51.6
	来住新	66.5	55.8	46.1	66.9	75.5	33.2	40.6
団地	集団新	78.2	54.8	69.6	85.2	89.4	50.7	48.4

5、新旧両住民の居住地形態の組み合わせとその特徴

(1) 組み合わせのパターン

ここでは、①新住民居住地形態が前節で述べた集落形態との組み合わせによってどのような空間的な特徴を持つか。②それぞれの場
合において、規模条件・配置条件についてどのような問題点が存在
するか。の2点から新旧住民居住地形態の組み合わせを決定する。
組み合わせのパターンは表5-4に示したように散居村の場合は分
散型の新住民居住地形態となり、集居村の場合には集合型の新住民
居住地形態が対応する場合が多いと考えられる。また集落形態が集
居村の場合では混住化はそれ程進展しないと考えられるが、散居村
の場合は混住化が進展しやすいと考え、右欄のような事例集落を選
定した。

図5-1に、本研究において調査対象とした集落の新旧住民居住
地形態の諸特性を示す。

1タイプは、母集落の形態は、集居村で塊状形式をとり（図5-
2）、新住民居住地形態は集合である。台地斜面のフリンジ部に近
い台地面上に集落が発達し、圃場は台地低位面に広がる。このタイ
プでは、集落居住地が広く、屋敷林、台地斜面緑地は発達している
が、平地林としてのまとまりがなく、混住化しにくい形態である。

表5-4 新旧住民居住地形態の組み合わせ

集落形態	新住民居住地形態	組み合わせタイプと事例集落		
		旧 > 新	旧 = 新	旧 < 新
散居	分散	—	間中橋 (2タイプ)	諸川西 (3タイプ)
集居	集合	山田 東諸川 (1タイプ)	—	—
—	団地	—	—	城山 (4タイプ)

組み合わせタイプ	I タイプ	I' タイプ	2 タイプ	3 タイプ	4 タイプ
集落形態	集居(塊村)	集居(列村)	散居	散居	一
新住民居住地形態	集	合	分散	分散	団地
新旧住民の量的関係	旧 > 新	旧 > 新	旧 = 新	旧 < 新	旧 < 新
平面モデル					
断面モデル					
地形立地	台地のフリンジ	台地面	台地面	台地面	低地面
新旧住民別住宅分布					
	0 500m	0 500m	0 500m	0 500m	0 500m
	■旧住民 □新住民				

図5-1 集落形態と新住民居住地形態の組み合わせタイプ

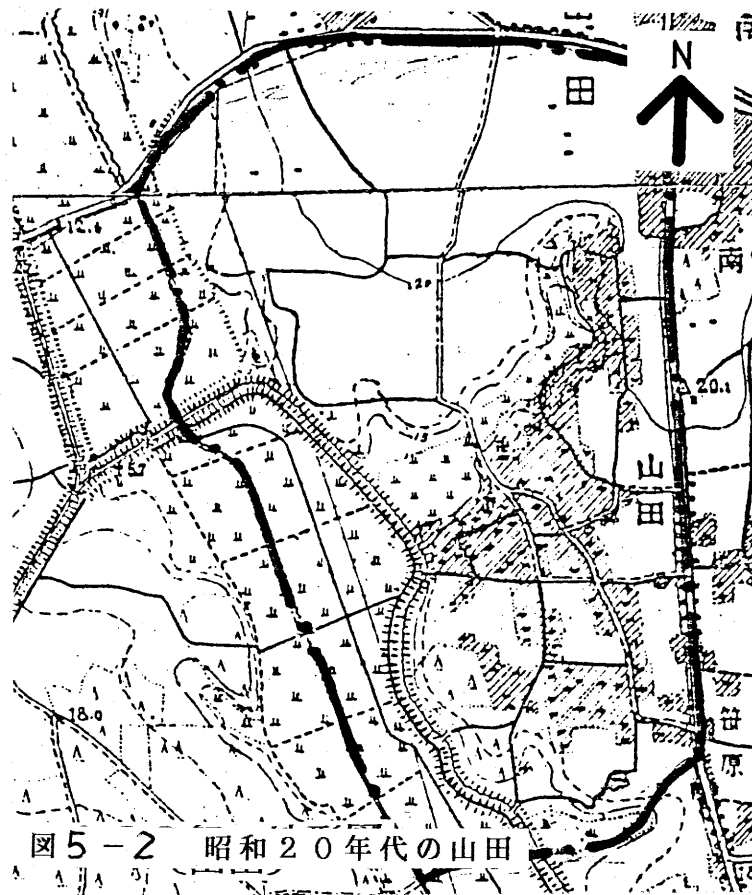


図5-2 昭和20年代の山田



混住化がすすむ場合にも、その位置、規模が空間的に大きく規制され、当集落においても、集落居住地の端部に小規模な新住民居住地が建設されているにすぎない。景観的には、集落の居住地との景観的連続性は失われるものの、集落外からの中景、遠景においては、斜面緑地が残されて開発されているために、集落空間としてのまとまりは維持されている（写真5-1参照 台地面上の新住民住宅より、斜面緑地を写す）。

1'タイプは、集落形態・新住民居住地形態は、1タイプと同じく集居村・集合であるが、列状形式の新田集落であり（図5-3参照）、集落は台地フリンジ部の台地面上に立地する。新旧住民の居住形態の組合せとしては、旧住民居住地在街道沿いに集居的に発達しているため、集落居住地のなかには、新住民の住宅が建てられることがなく、街道に沿って集落居住地からやや離れたところに新住民の小規模な居住地が見られる。集落周辺部には集団的な新住民住居の開発は見られず、血縁性を持つ非農家が分散的に見られる程度である。この要因としては列状形態を取り、また新田開発集落にしばしば見られるように集落居住地の裏側に圃場を持っているため宅地化が抑制されてきたことが考えられる。当集落における新住民居住地は街道沿いに建てられているものの、街道側の平地林の一部を残しているため農村景観と新住民居住地との緩衝的役割を持って

いる（図5-4）。

2タイプは、集落形態は、散居形態をとり（図5-5参照）、台地上位面に立地し、新住民居住地形態は分散である。当集落は江戸時代後期の新田開発集落で比較的新しい。新旧住民の居住地形態の組合せとしては、分散的に小規模な新住民居住地が、旧住民居住地と入り混ざる形をとっている。さらに近年宅地化がすすみ、平地林を開発した中規模程度の宅地造成が見られる。当集落は、新田開発としては、比較的分散的な開拓が進められ、集落の中に部分的に平地林が残され、また、一部分ではあるが大きい規模の平地林が残された。それらが、混住化がすすむにつれて、新旧住民の混合的住宅配置形式のもととなり、中規模程度の宅地化につながったと考えられる。

3タイプは、集落形態は小規模集団（ほとんどが血縁）による散村であり（図5-6参照）、集落立地としては台地斜面のフリンジに立地し、新住民居住地形態は分散である。台地斜面にも広大な平地林を保有し、水田を低地部に所有していた。混住化の形態としては旧住民を取り囲む形で大規模なミニ開発（無計画なミニ開発の集合体）が、台地斜面上にすすんできた（写真5-2参照）。さらに集落居住地の周辺部にも開発が進み、現在では母集落の形態はほとんど埋没している。開発がこのようにすすんだ要因を考察すると、

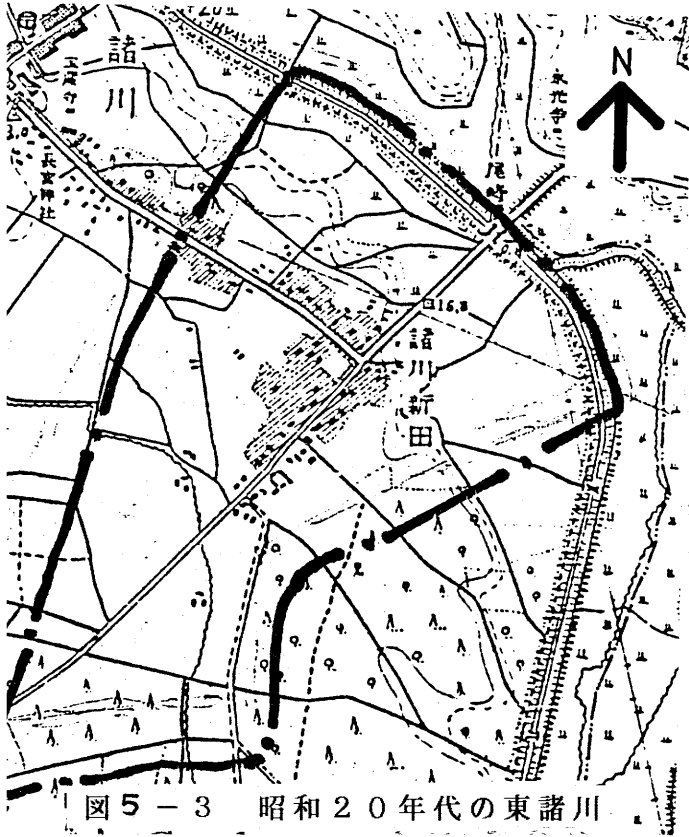


図5-3 昭和20年代の東諸川

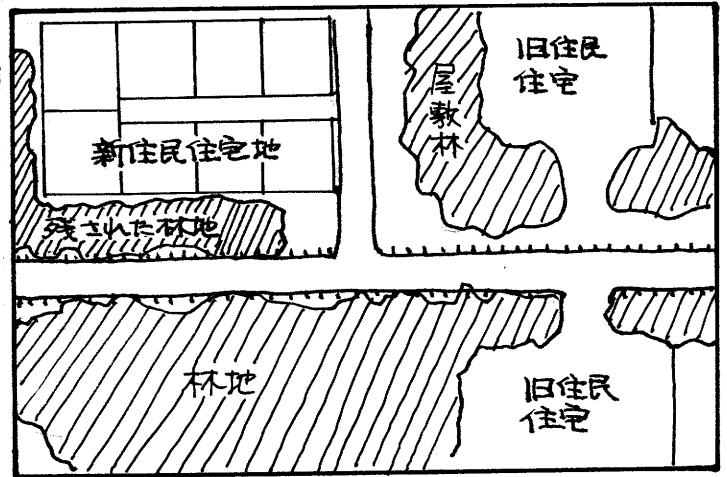


図5-4 平地林を残した開発

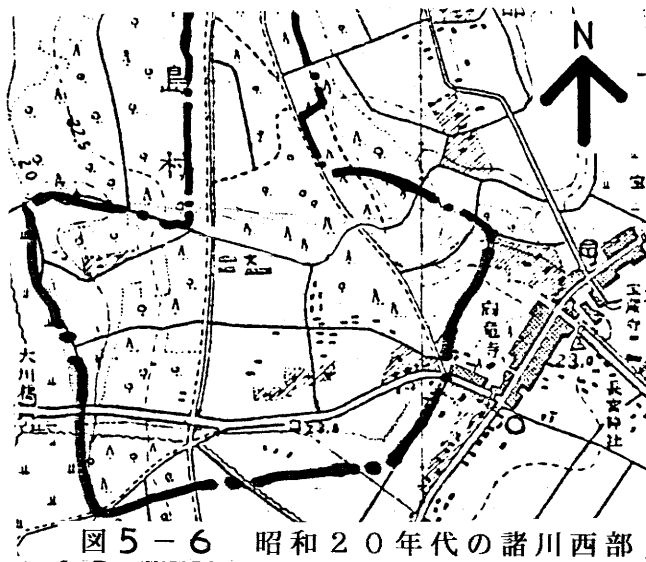
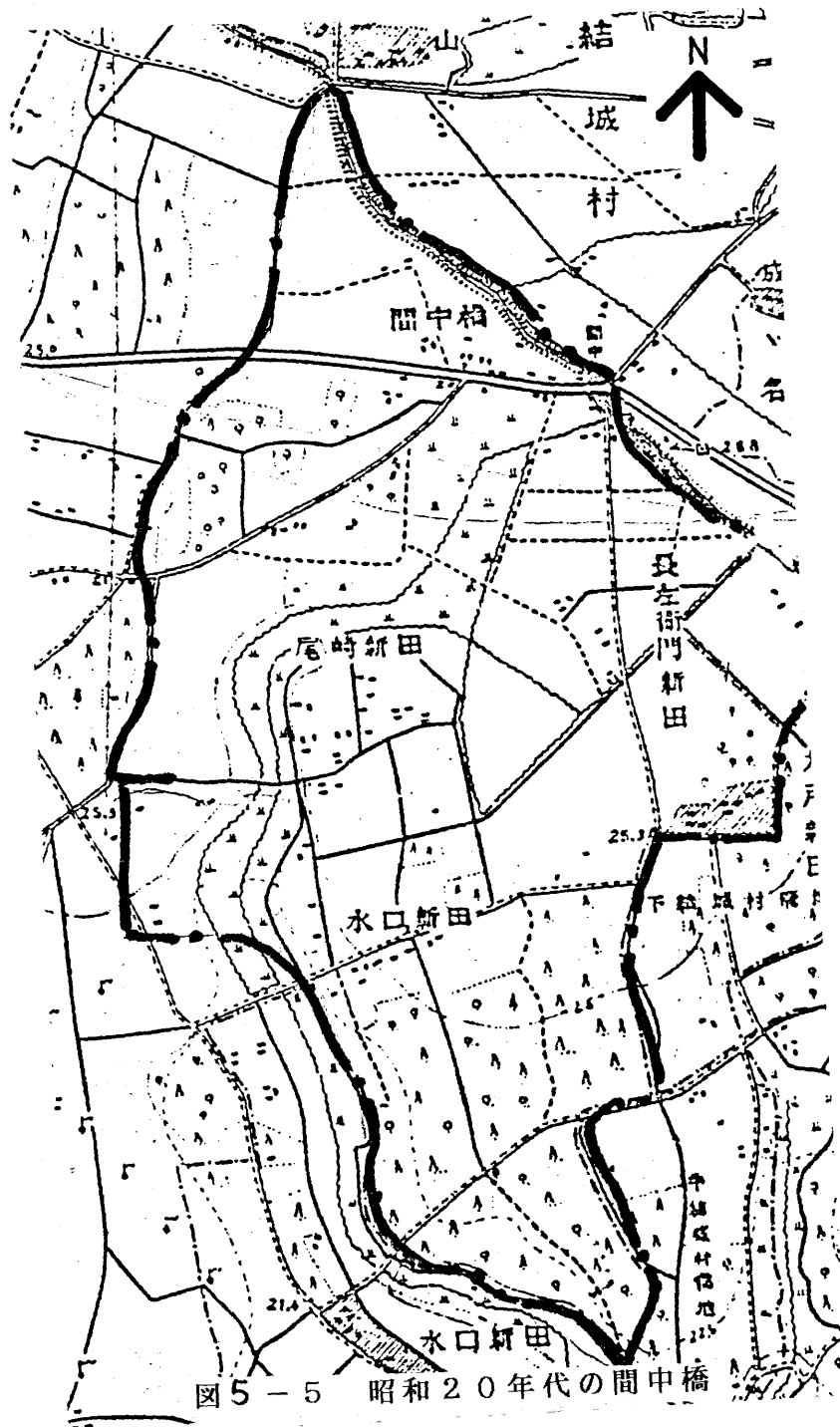


図5-6 昭和20年代の諸川西部



写真5-2



第一に当集落が市街地に近かったこと、第二に集落の居住地周辺に圃場が分散的にしかなく大部分が平地林であり、法的にも規制されにくく、大規模な開発が可能であったことがあげられる。空間的には、台地斜面上の緑地が大部分削られ宅地化するため景観的にも、周囲の農村景観と異質な性格を呈している。さらにこれらの居住地群が台地斜面上にしかも農地と接しているため従来の生態系は分断され、下水、汚水等による農用水の汚染も懸念されている（当地は下水の処理は浸透式である）。

4タイプは、集落の形態にかかわらず、旧住民居住地とは、地形的に独立した位置に、空間的にまとまった平地林、山などが存在し、その場所に大規模で空間的にも完結性をもった新住民居住地が形成される。この場合、両者の関係は希薄であり、空間的にも独立しているので問題は顕在化されないが、新住民居住地の規模が重要となり、過大な規模の開発が行われた場合、景観的にも母集落が埋没するばかりか、地域環境を一変させ空間的ストックを活用できなくなる危険性を持つ。

以上、各タイプ毎に見たように新旧住民居住地形態の組み合わせは、新住民の住宅群が団地のような大規模なものである場合を除いては、母集落の形態に大きく影響を受ける。母集落の形態はいろいろな形態が考えられるが、集落形態を大きく散居村と集居村に分

けると、散居村の場合は、集落居住域に圃場や林地が含まれているため、集落居住域の住居密度が低く、集落内に分散的に新住民の住宅が形成されやすい。また、空間的まとまりがある場合にはある程度戸数の多い住宅群も形成される。しかし、散居村の場合でも新住民の来住が大規模になると集落形態は埋没してしまう。一方、母集落が集居村である場合には、集落居住域と周辺圃場とは比較的明確に分離している。このような集落に新住民の住宅地が形成される場合は、集落居住域に空間的なゆとりが少ないため、新住民の住宅群は小規模に成らざるを得ない。また、集落居住域とは分離して周縁部の圃場や林地に形成される場合も考えられるが、実際には集居村集落は集落居住域の周縁部は圃場で囲まれていることが多く、宅地化は規制を受ける。。住宅群の戸数が大きくなる団地のような場合は、母集落の形態にはほとんど関係なく、独立した新集落を形成することになる。

(2) 自然環境条件

本項では、前項で述べた新旧住民の居住地形態の組合せが、集落の持つ自然環境条件とどのような関係にあるかという点について考察を加える。ここでは、自然的環境条件として緑地環境を通して考察する。

集落の自然環境の保全、育成には、集落形態、新旧住民の居住地形態の組合せと大きなかかわりがあると考えられる。ここでは、集落形態・新旧住民の居住地形態の組合せのパターンの組み合わせによってどのような問題点が存在するかあるいは存在する可能性があるかを、調査事例を通じて考察する。前項にしたがって表5-1の分類パターンに従って考察を加えていく。

1タイプである山田は、台地端部に立地する塊状形式の集落であり、台地斜面下に水田が広がり台地面には畑地が散在する。まとまった形としての平地林は見られないが、集落居住地には屋敷林が良く発達し、居住地周辺の畑地と一体になり豊かな緑地環境を保持している。水系の環境としては、南西部の新住民居住地が台地斜面に建てられ、水田と接する位置にあるため、農用水汚染が問題になったが、近年生活排水と農用水を分けたため、その問題は解決している（図5-7、図5-8参照）。この集落も塊状であることから集落居住域に入れる新住民は限られており、旧住民住宅が連担していることから自然環境は比較的良好に保たれている。

1'タイプである東諸川では、諸川西部とは対象的に集落の土地利用において台地下部と台地面が二分され台地下部は主とし農用的土地利用、台地上は集落居住地と広大な緑地（平地林）が残り台地斜面をも覆っている。列状の集落居住地には季節風のふく北西

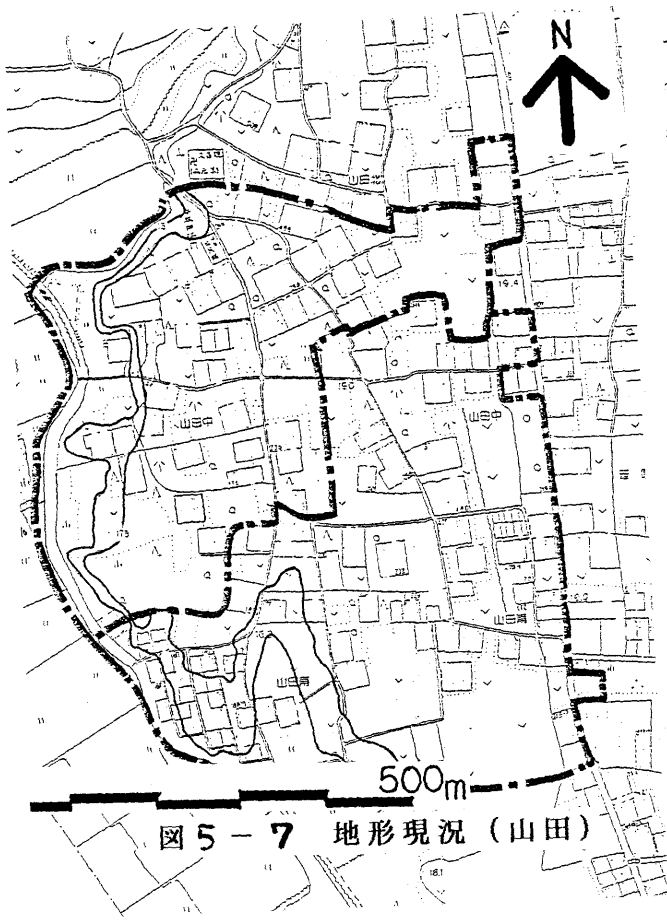


図5-7 地形現況 (山田)

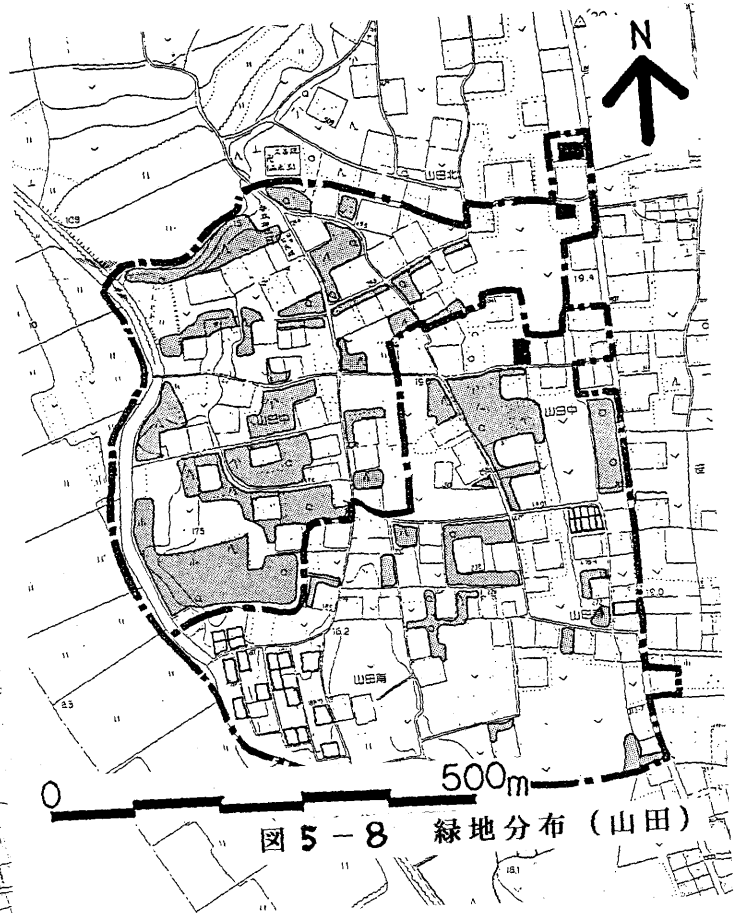


図5-8 緑地分布 (山田)

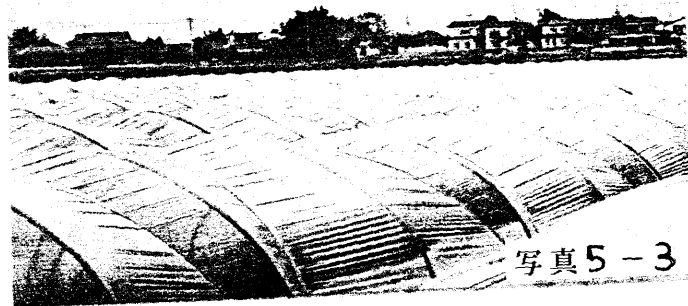
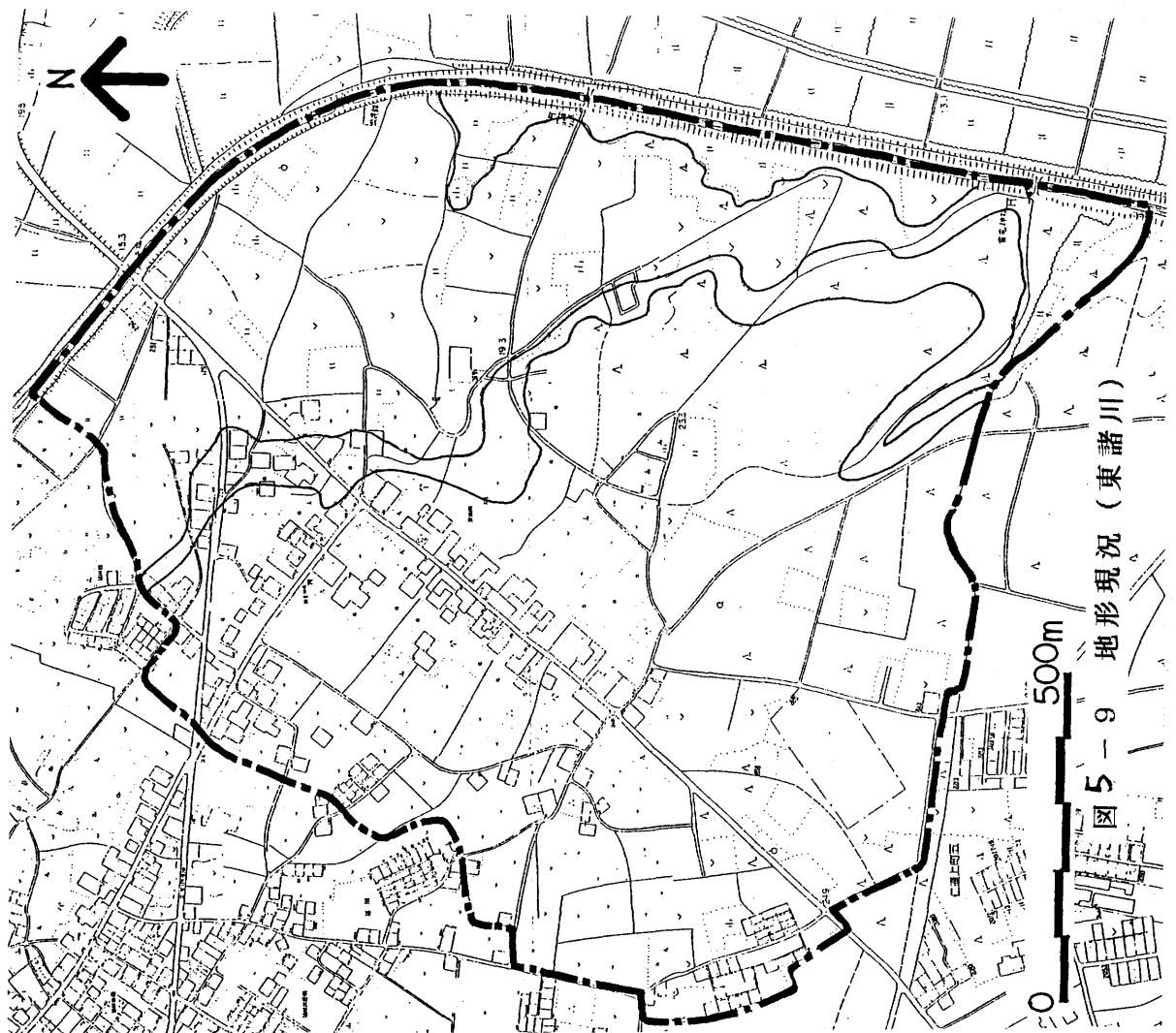
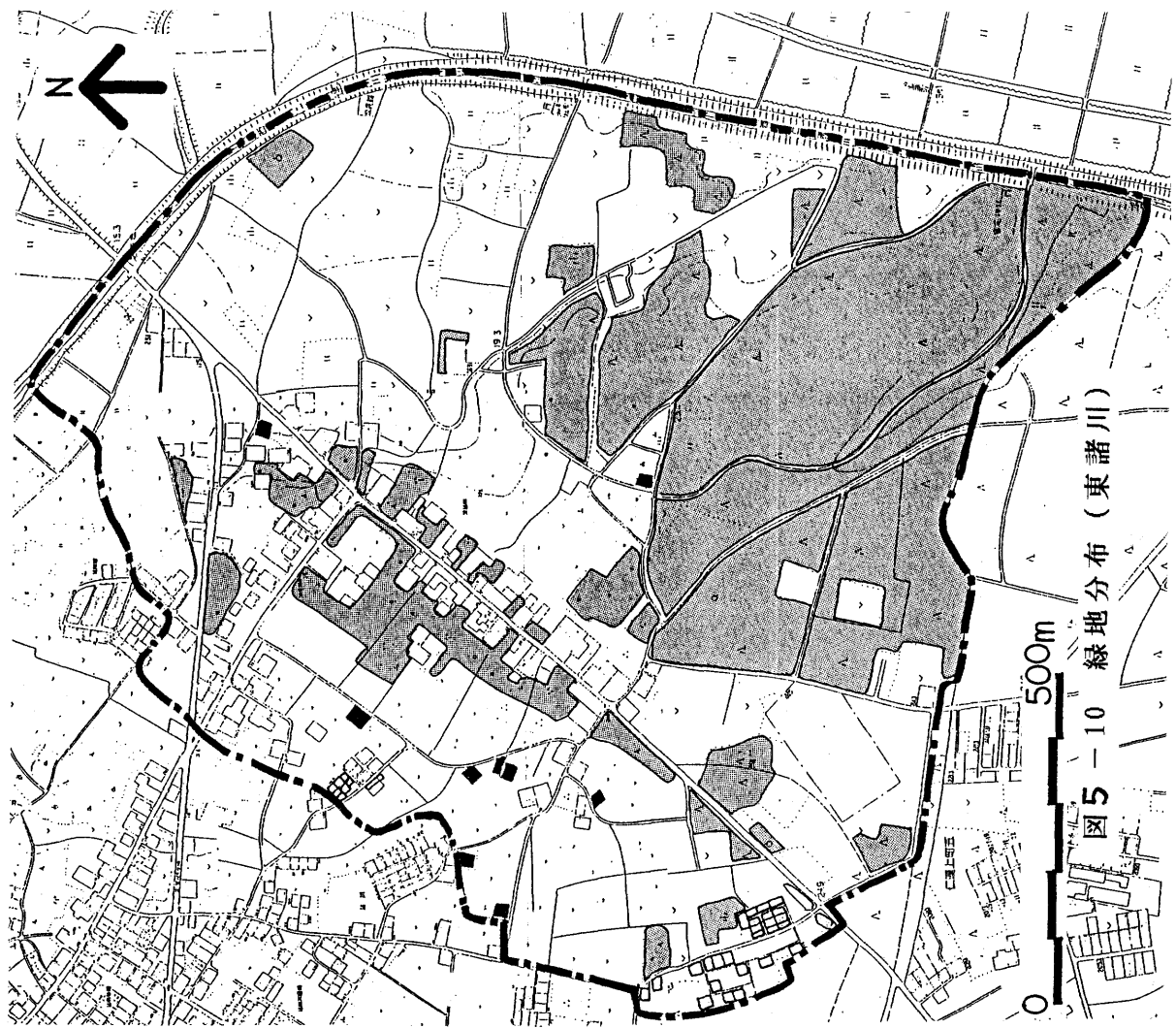


写真5-3

側に屋敷林を保ち、風土性を保った形態を維持している。新住民居住地については、その規模は小さく（25戸）道路に面したところには部分的に平地林が残され、街道との緩衝林として役立ち、また街道から新住民住宅が直接視覚に入らないため道路景観の連続性にも役立っている。また周辺には、多少平地林が残されているため、空間的まとまりが醸しだされ、また屋敷林としての役割を担っている（図5-9、図5-10参照）。このような列状集落では旧住民居住地が沿道にまとまっており新住民住宅が建設されることがないため居住域周辺の自然環境は比較的保持されやすい。またこの集落は新田集落でもあることから、整然とした農地が広がりそれも集落の自然環境の保全に役立っている。

2タイプの一つである間中橋は、ほぼ平坦な台地面上に居住地が分散的に広がり中央部のやや低い部分に水田がある。緑地の残存状況を見ると、まとまったボリュームの緑地としては、南部に見られるのみで他にはほとんど見られない。南部も近年開発が進み平地林が大きく削られている。農家を中心に北側に屋敷林を持つが新田開発であり集落の歴史が浅く樹齢は若い。旧住民と入り混じった状況で新住民住居が見られるがこれら周辺には平地林がなく、旧住民居住群とは異質な景観を呈する（写真5-3参照）。農用水汚染の問題は、当集落においてはさほど大きな問題となっていないが、そ



これは当集落が畑作中心であり集落面積も広く容量が大きいためであろうが、今後南部を中心に宅地化が進めば3タイプの諸川西部と同様な問題が生じる可能性がある(図5-11、図5-12参照)。このタイプでは、散居村で新住民の住宅も点在しているが、旧住民住宅が多数残っており、この集落が台地面上に立地する畑作中心の集落であることから3タイプのように集落全体で自然環境が低下するような状況にはなっていない。

同じく、2タイプである高崎は、台地が岬状に突き出た部分に発達した集落である。集落形態としては列村的であるが街道が四方に伸び、それぞれクラスター状の形態をなし、また集落面積も広く周辺部に新住民の小規模な集団が分散的に混入していることから、散居村的な印象を受ける。緑地環境の特色としては、谷地田を取り囲む台地崖に沿って斜面緑地が発達している。屋敷林は集落居住地を取り囲む形で発達しており、斜面緑地が屋敷林として機能している(図5-13、図5-14参照)。この集落は新住民の来住も多く分散的であるが、旧住民住宅がまとまっているため屋敷林がまとまって残り、台地の斜面緑地も残されているために自然環境は保たれている。

3タイプである諸川西部は、台地の端部に立地する(図5-15参照)。現在の残存緑地をみると斜面緑地はほとんどなく、かわって

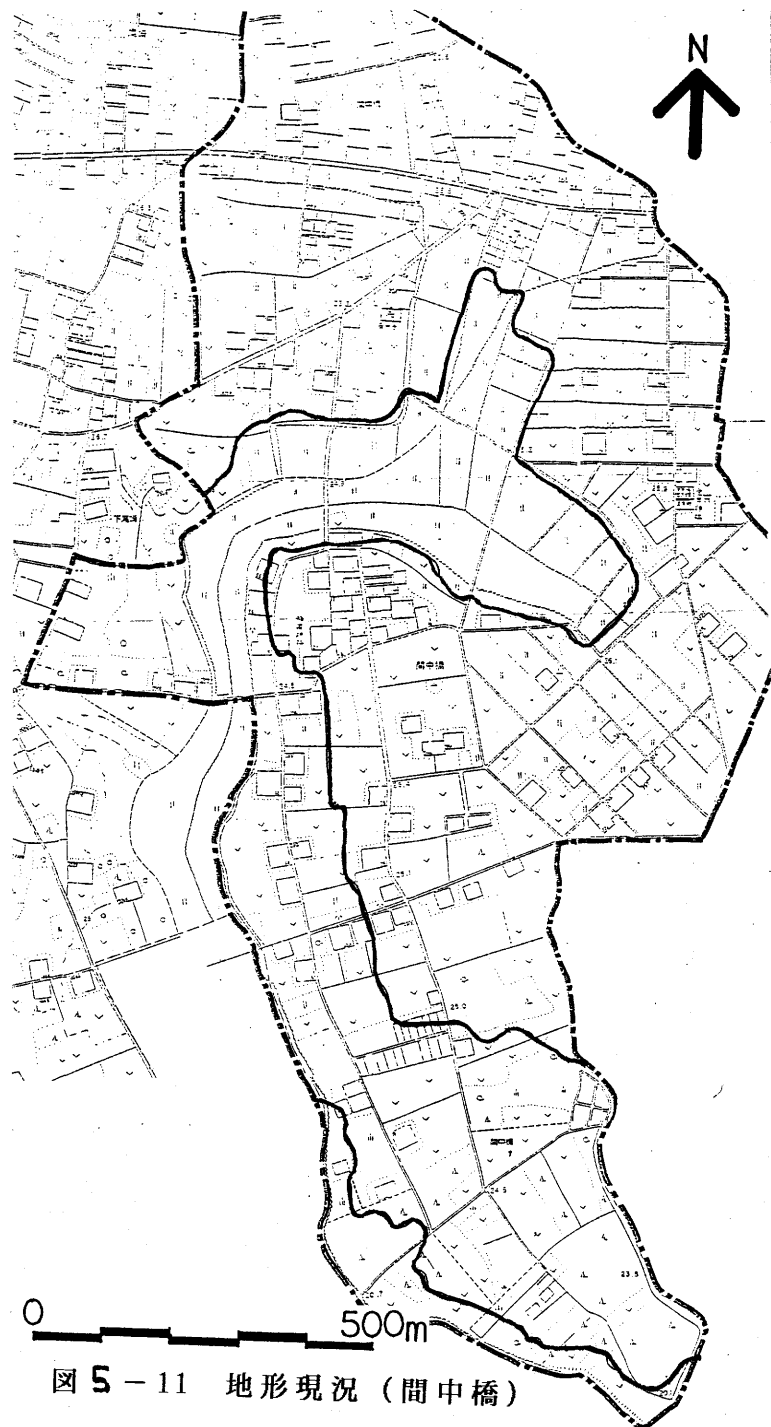


図 5 - 11 地形現況 (間中橋)

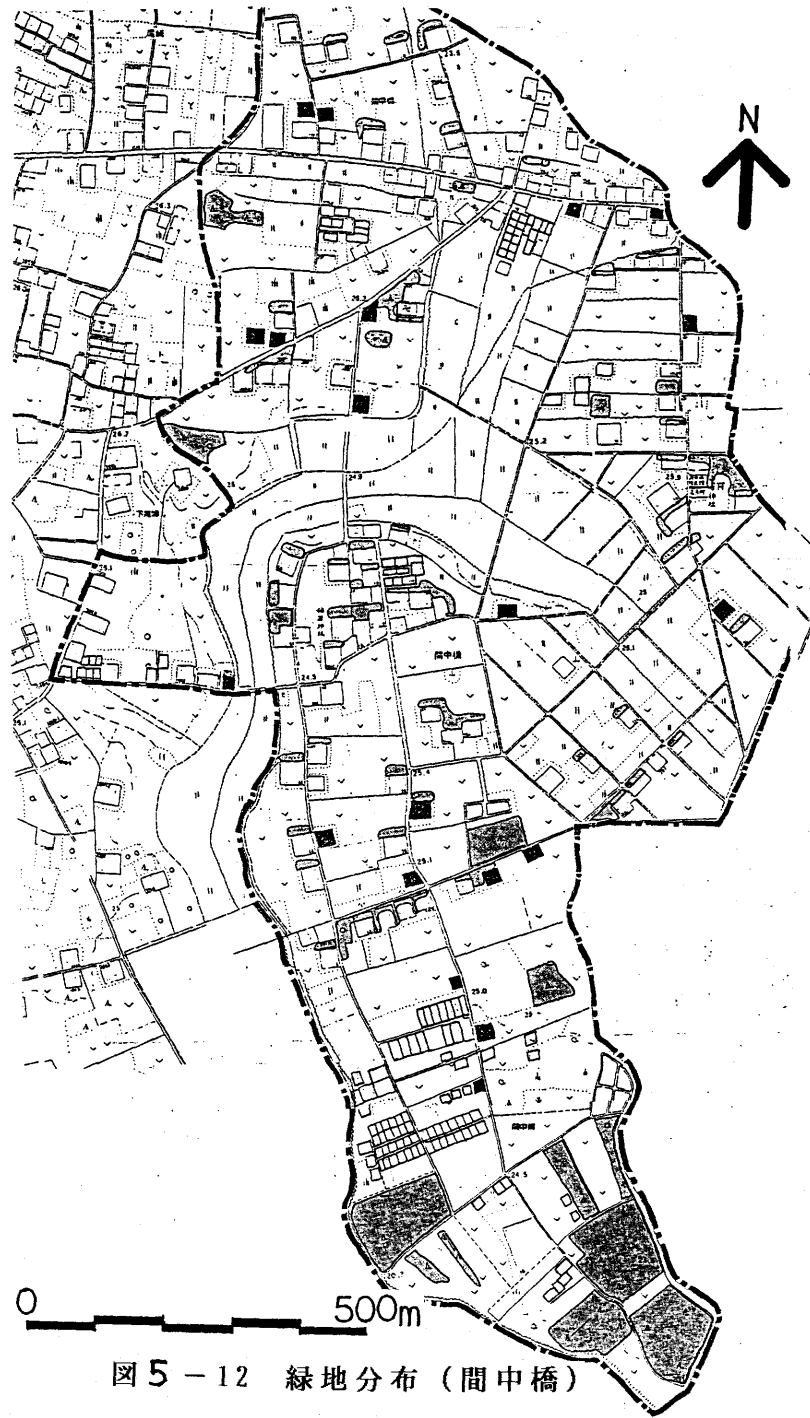


図5-12 緑地分布 (間中橋)

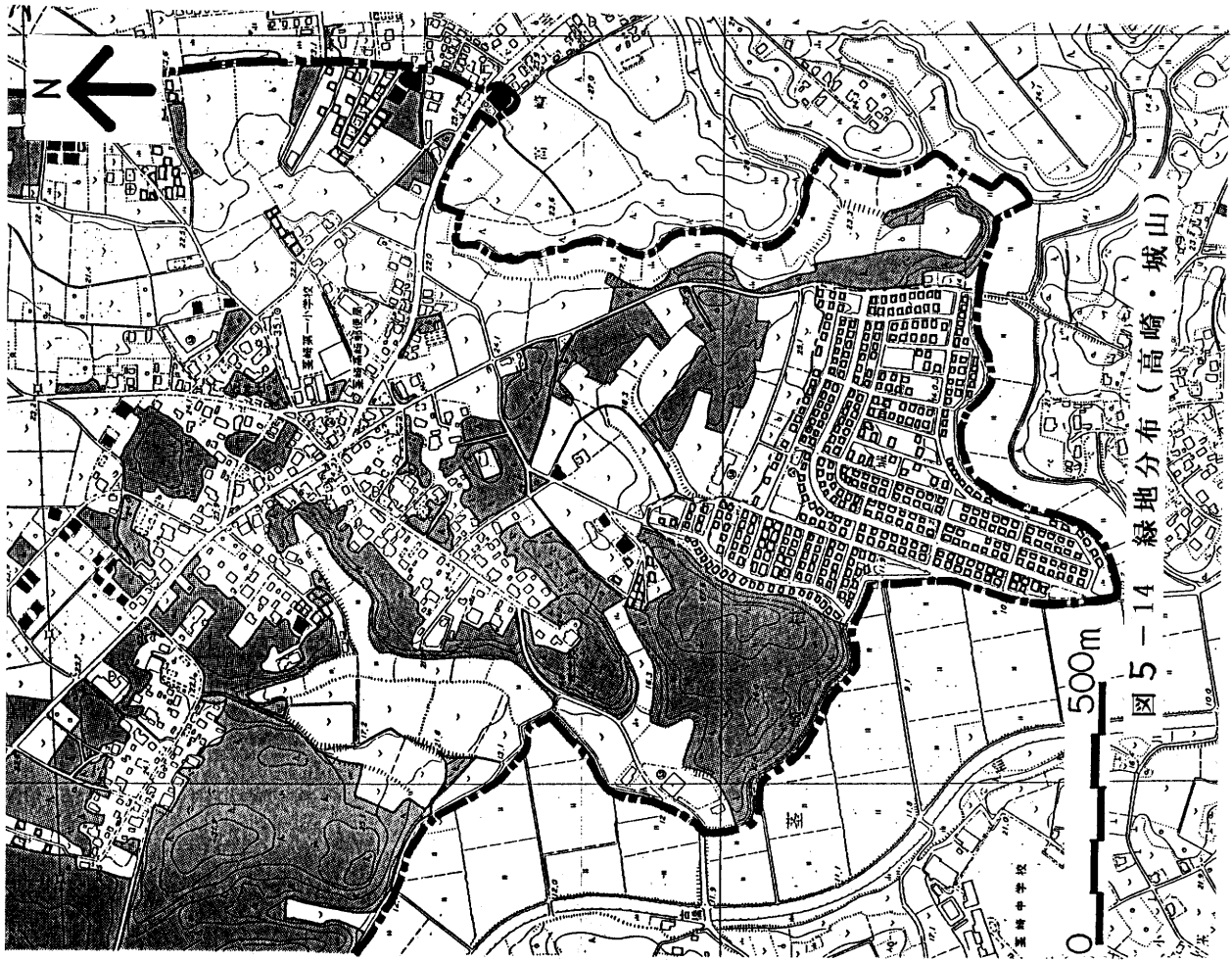


图 5-14 绿地分布 (高崎・城山)

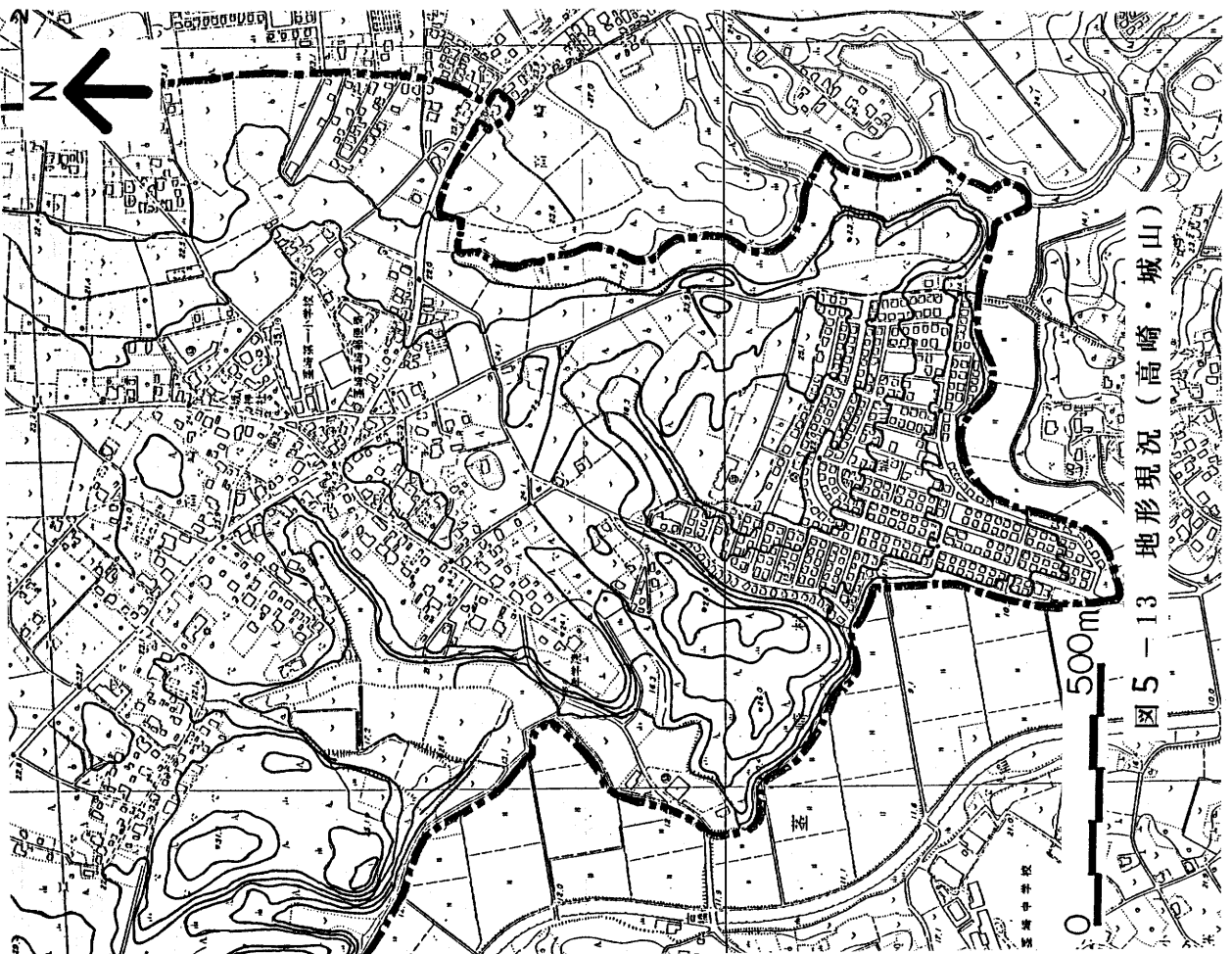
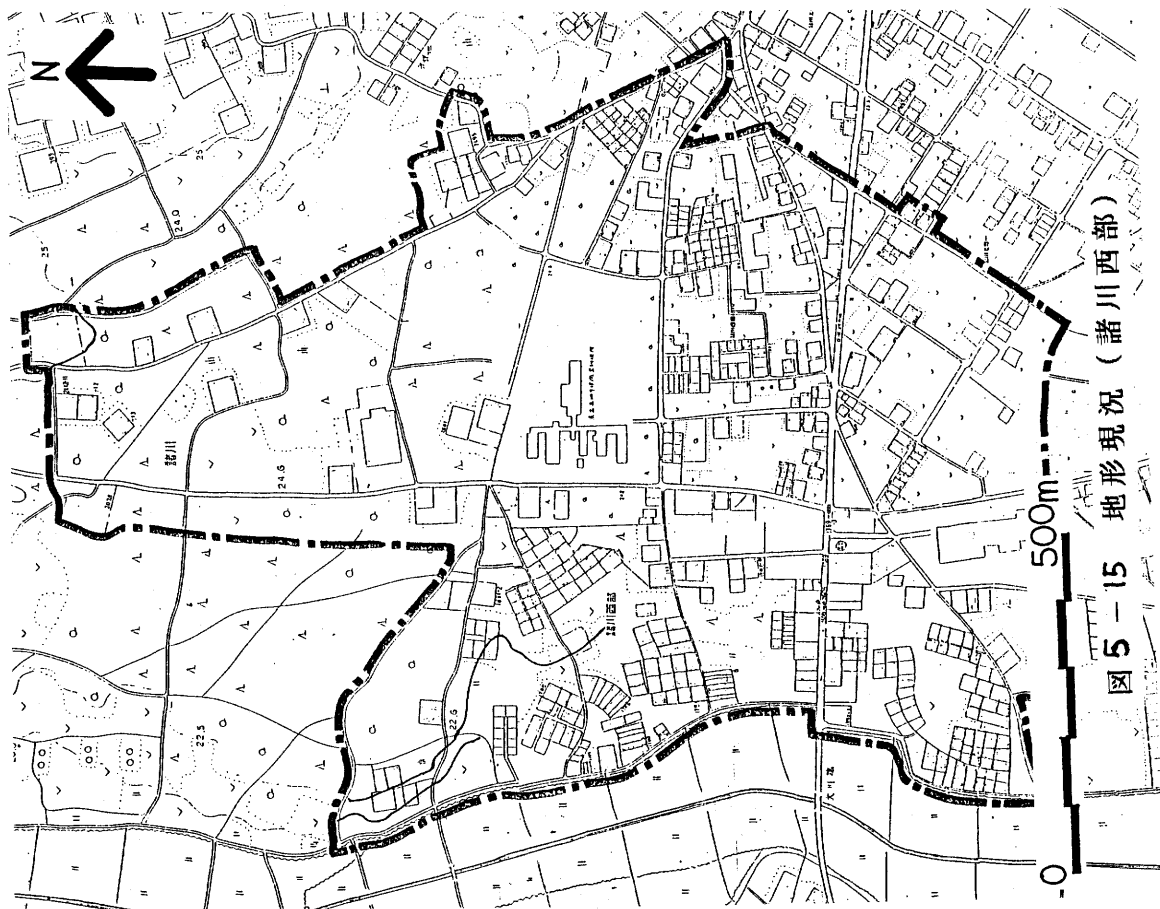
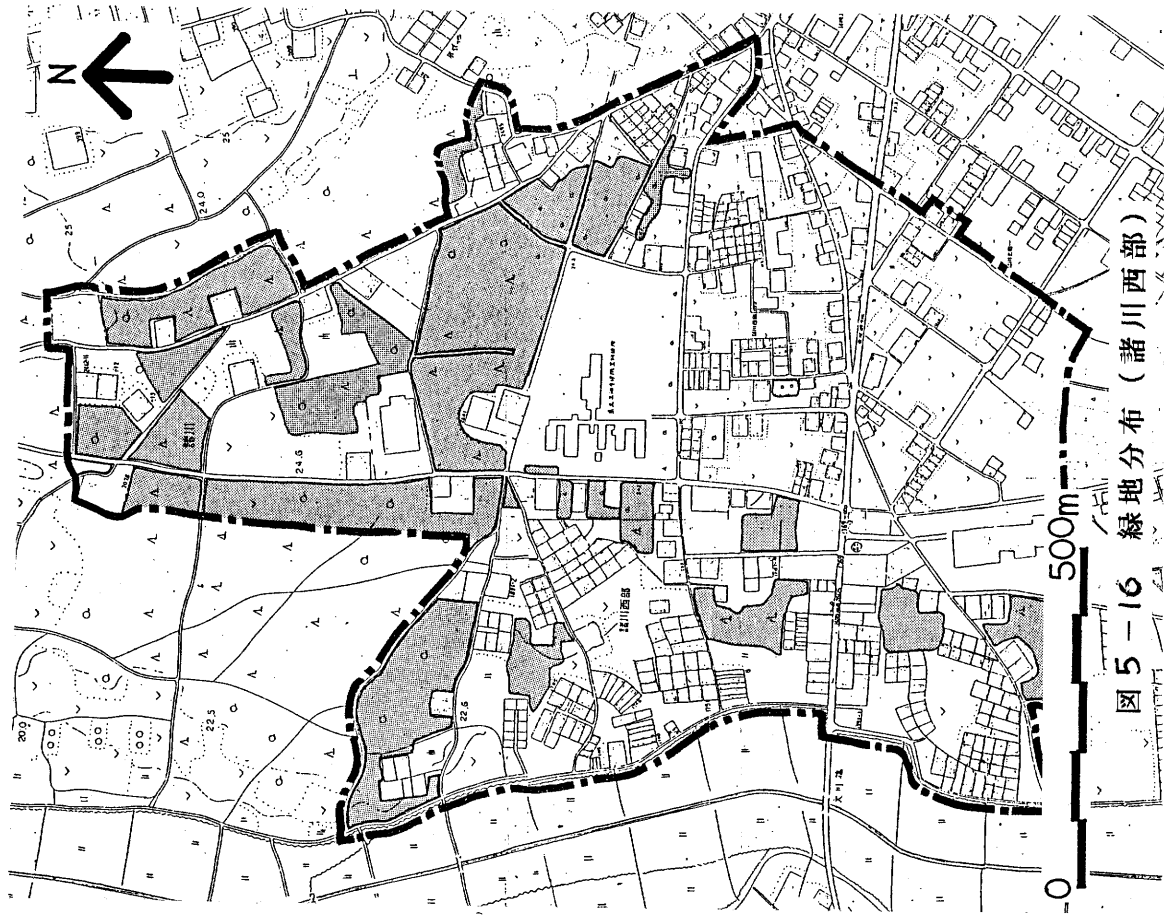


图 5-13 地形現況 (高崎・城山)



新住民の住宅群がならぶ（図5-16参照）。旧住民（特に農家）の屋敷林はあるが全体的に被緑地は激減している。新住民住宅の庭においても、この集落では、植え込みが少ない家が多く、景観上も自然的環境が悪化した印象を受ける。緑地の減少は、当然集落の生態系変化に関係する。写真5-4および5は、新住民住宅の側溝及び側溝の端部を示したものであるが、汚れが目立ち、浸透式下水処理を採用しているものの、今では浸透の容量を越え、地下に浸透せず、台地斜面を伝って農用地に流入し、農用水汚染の原因になっている。かつては、各戸とも浸透式の下水処理を行っていたが、住宅密度が低く充分容量の範囲におさまり、かつ周囲の屋敷林、平地林がそれらを吸収し、生態系のバランスを保っていた。現在でも、混住化のあまりすんでいない東諸川の側溝と比較してみると（写真5-6）、汚染の状況は大きく異なる。特に、諸川西部のような台地の端部に立地する集落では、緑地の役割は大きく、生態系保全のためにも、また景観の維持においても重要であり、台地斜面の緑地保全に留意した宅地化が考えられるべきである。このタイプのように散居村で新住民の来住が多い場合には、宅地化が分散的かつ大規模であるために全集落域に自然環境の悪化が広がり、農地が受ける影響も大きい。

4タイプである城山は、もとは隣の高崎集落の領域であり、元城



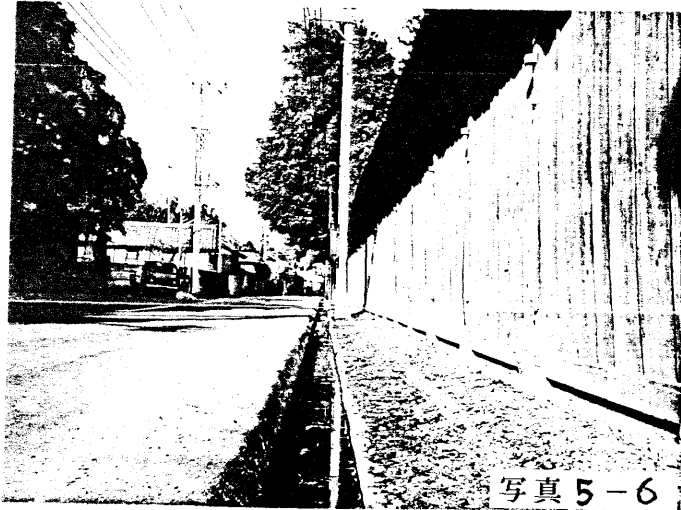


写真5-6



写真5-7

跡である。台地の岬部の先端のなだらかな台地斜面上に位置し、北部、西部、東部に残された斜面緑地と、南部に入り込んだ谷地田に囲まれ、空間的にまとまった印象を受ける（写真5-7）。城山では3タイプと同様に、新住民居住地が台地斜面上に立地しているものの、下水道の整備が行われているため、農用水への悪影響は少ないと考えられる（図5-13、図5-14参照）。このようなタイプでは、空間的にまとまりのあるところに立地しているため団地外部から見ると良好な景観を呈しているが、団地内部はまとまった緑地はなく極めて人工的である。

以上、自然環境条件から判断すると、自然環境の保全には1タイプや1'タイプのような集居村の形式を持つ集落形態が有効であることがわかる。分散的な新旧住民の居住地形態の組合せの集落では混住化の規模が問題になり、混住化の規模が拡大すると自然環境条件も低下する。

（3）施設配置と道路構成

本項では、集落空間における新旧住民の生活といった視点から、調査集落においてそれぞれどのような特徴があるかを主に施設配置（店舗、事業所等も含む）、道路構成等に注目して考察する。さらに、それらの施設や道路構成が今後コミュニティを形成し育成して

いく上で、どのように考えられるべきかに言及する。考察のための資料として、施設等のプロット図、集落の共同活動が行われる「場所」等を用いる。

はじめに、農村部における施設・道路構成についての一般的特徴を整理する。第一にあげられることは、農村部において施設と言われるものの建設が行われたのは、ごく近代に至ってのことであると言うことである。従来、農村の空間利用の特徴は、いろいろなレベルの空間が、機能的に固定化されずに、様々な形で重層的な利用がなされてきた。農村の近代化は農村整備の合い言葉として用いられ、重層的空間利用形態が、施設化の名のもとに機能が単純化され、効率化が計られてきた。これらは、道路整備にも見られる傾向で、「みち」として多様な機能が重層的な利用でなされてきたものが、道路の直線化、拡幅、側溝の三面コンクリート化等にみられるように近代化が進められてきた。第二にあげられることは、農村的な空間は、それぞれのレベルのなかで居住者自らの手で作られ、自ら管理・運営されていたと言うことである。近代化によって、施設化が進められるにしたがって、空間（特に公共的空間）の多くは、居住者の手から離れ、公共団体に移管されていった。これらの一連の傾向は、一面では、農業生産性の向上、資源の効率的利用、空間管理における繁雑さからの開放等の面では改善は計られたものの、一面

では、失われたものも大きく、農村の空間利用の重層性、自然環境と調和した循環的空間利用、集落への愛着感、共同体意識等、様々な局面にマイナス面が表れている。

次に、農村空間に関する特徴を踏まえた上で、新旧住民の居住地形態の組合せ別に施設配置・空間利用について考察する。

1 タイプの山田は、伝統的農村形態が比較的維持されている集落であり、集落の神社・仏閣も格式の高い空間形式をとっている。沿道に幾つかの商店と集落内部に商店があるが、集落内の商店はいずれもよろず屋的な商店（写真5-8）で、単に物品販売に留まらず、近所の人たちの立話しの場・子供のたまり場・情報交換の場等、集落のシンボリック的存在として、コミュニティ形成にも役立っているものと考えられる。集落の神社・寺は、伝統的共同行事の拠点として、重要な空間となっている。さらに、これらに接して公園・ゲートボールコート等が整備され、集落行事の中心となっている（写真5-9）。しかし、神社・寺等の文化的施設は、集落の伝統行事が行われる場として旧住民にとっては重要な空間となっているが、新住民（特に来住新住民）との関連は希薄になっている。公園は、台地斜面を利用して神社境内につくられており、眺望の良いところにある

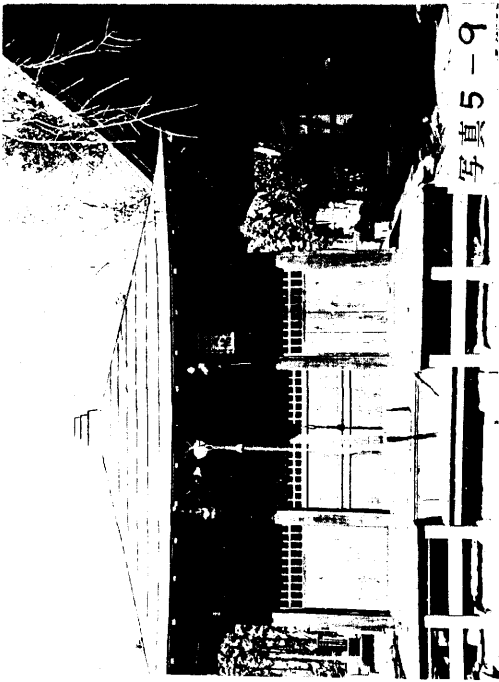
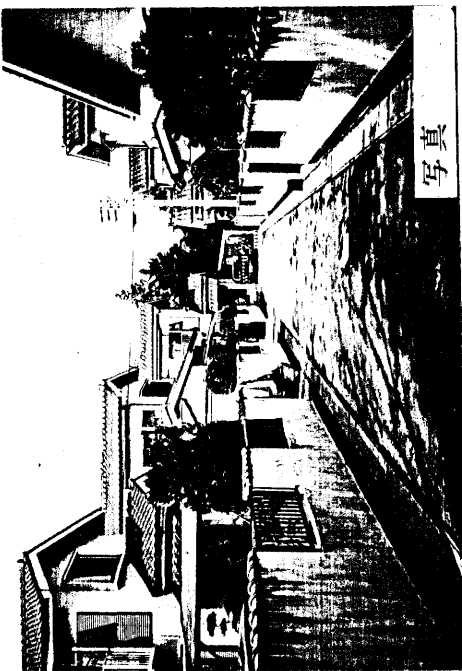


写真5-9



写真5-8



写真



写真5-11

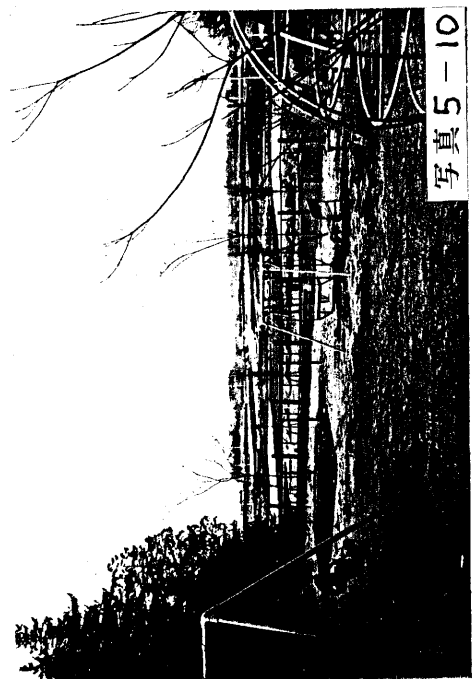


写真5-10

が休日には子供達はこのようなところが遊び場として余り使わず、集落内のみちが遊び場になっていることが観察された（写真5-10、5-11）。集落内の道路は、コミュニティ空間として農村特有の「みち」空間としての役割を持ち、農業生産・老人の散歩の場・子供達の遊び場等、様々な使われ方が観察される。しかし、この集落の場合は、これらの空間的ストックを持ちながら、それらは、新住民にはコミュニティ形成の場としては余り機能していない。新住民住宅は、これらの施設から最も遠い位置にあり、3タイプで観察されるような空間の共有化は難しくなっている（図5-17参照）。

1'タイプの東諸川では公民館と広場が集落の活動の拠点となっている施設で、大部分の共同活動がここでなされている。さらにこの公民館と広場の土地はもともと、集落の共有地であった場所である。公民館建設以前にも共有財産として様々な利用されてきており、住民意識としてもシンボライズされている。この集落には神社があるが現在では祭りのときに集落の役員がお参りに行ったり、神社掃除がなされる程度でコミュニティ形成の場としては役立っていない。以前は、祭りも盛大で集落住民の心の拠り所となる空間であったと聞く（ヒアリングより）。道路構成は、列村であるゆえ道の両側に民家が立ち並び交通量も比較的少ないために落ち着いたたたずまいを形成している（写真5-12）。

- 凡例
- 学校
 - 商店・サービス
 - △ 事業所・医療施設
 - ★ 集会施設
 - 公園・広場
 - ☆ 寺・神社
 - ▲ その他の公共施設

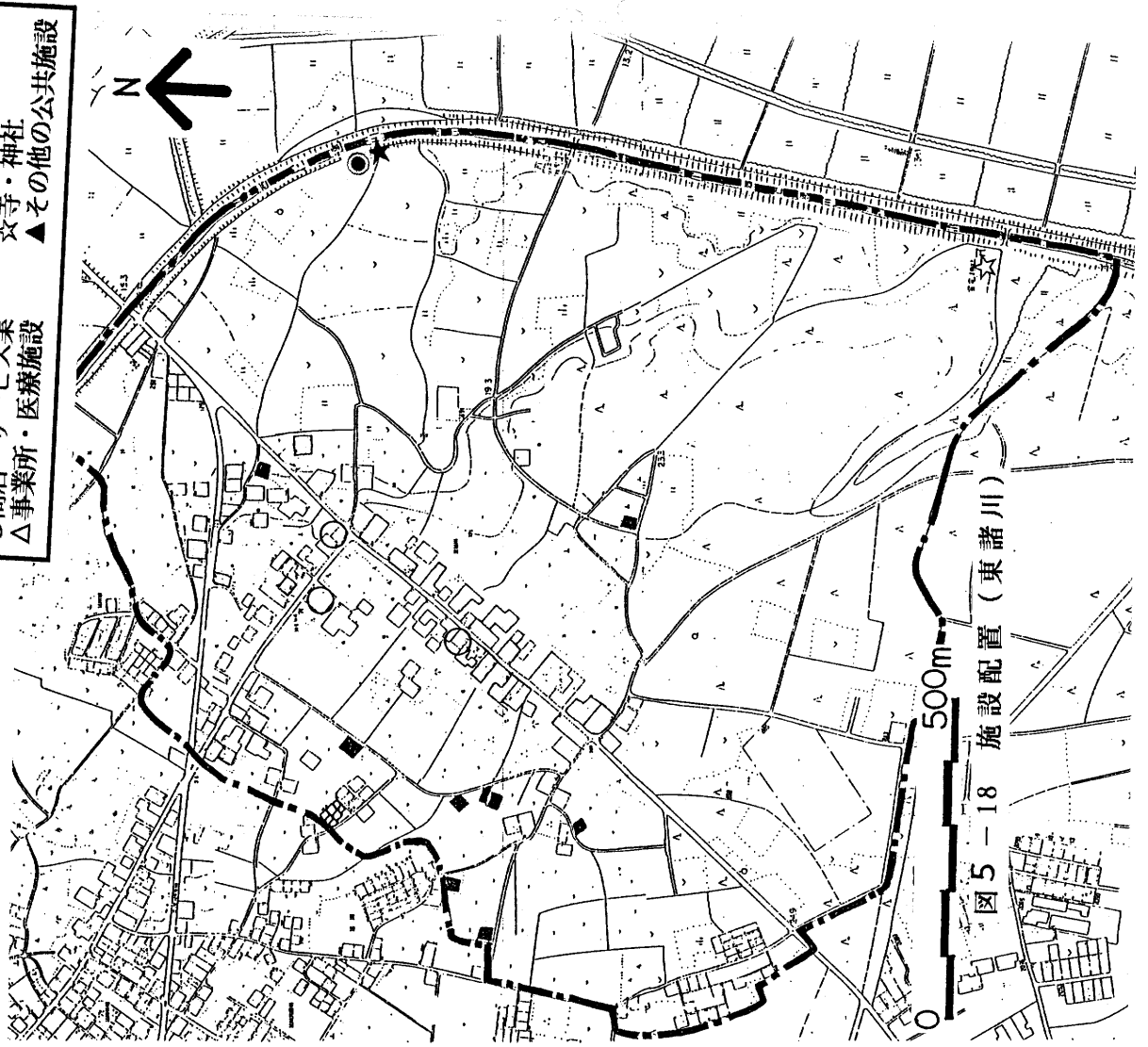


図 5-18 施設配置 (東諸川)

- 凡例
- 学校
 - 商店・サービス
 - △ 事業所・医療施設
 - ★ 集会施設
 - 公園・広場
 - ☆ 寺・神社
 - ▲ その他の公共施設

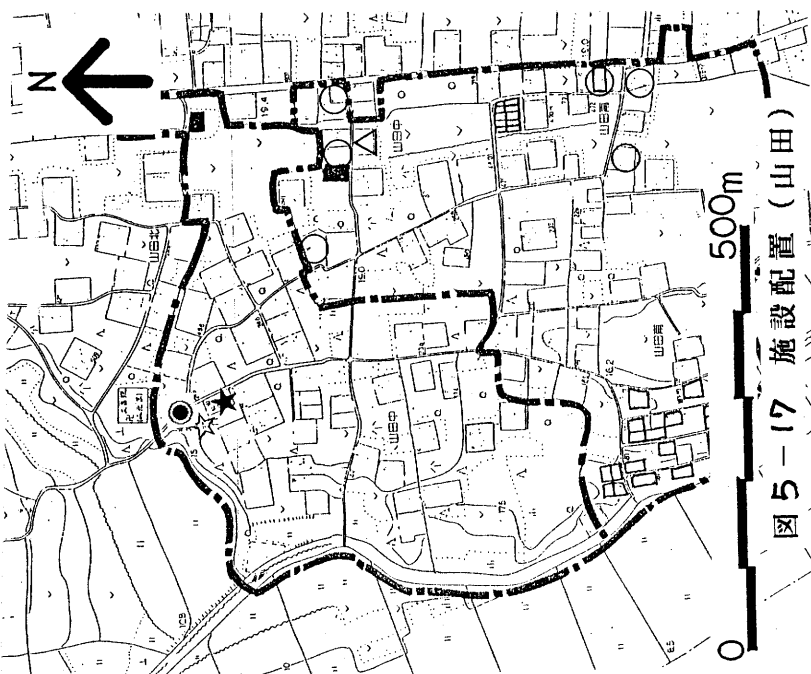


図 5-17 施設配置 (山田)

1' タイプのなかで25軒だけで、母集落である東諸川から自治会を独立させた新東諸川では、独自の集会所や公園等の施設を持つことが出来ない。そのため、集会などは役員の実家や各戸まわりで行い、運動会の練習なども近所の空き地を利用するか、住宅のまわりの道を走る回るなどの工夫をしている。自宅まわりの道は他にもテントを張ってバーベキューパーティーをしたり子供の遊び場になったり、主婦達の立話しの場となる等の重層的な使われ方がなされている（図5-18参照）。

2タイプの間中橋では、北端部に国道が通り、店舗の集積も見られる。公共的な施設としては集会所・集荷所が3箇所、神社、寺等であるが、共同行事においては、それらが巧みに使い分けられ、さらに集落の範囲が広いことを補うために、集落を3つのブロックに分け（それぞれは、元は一つの部落であった。）、それぞれが出荷所を共同行事にしたり、畑を臨時のソフトボールグラウンドにする、個人住宅をもちまわりで利用して、班単位の会合を行う等、複合的な利用形態が見られる。当集落では新旧住民が分散的に分布しているため道路空間においても、他のタイプに比べ共有する部分が多く、新旧交流の場となる機会が多い。さらに新住民の中に、来住新住民ばかりでなく旧住民と血縁的つながりを持つ分家（新宅新住民）が空間的にも分散しており、血縁性を持たない新住民とのパイプ役と

なりコミュニティ形成に重要な役割をもっていると考えられる（図5-19参照）。間中橋と同様に高崎にも似た傾向が認められる。

高崎の場合には街道沿いに商店・小学校・郵便局・集会所等を持ち、比較的利便性に富んだ集落を形成している。高崎の場合には旧住民集落を取り囲むような形で小規模な新住民の集団が張り付いているが、間中橋と同様に血縁新住民と来住新住民が入り混じった形態をとっている場合が多い。このような空間配置は、新旧住民の交流あるいは血縁新住民と非血縁新住民とが集落空間を共有することが可能であり、新たに新旧住民の地縁性を再構成していく上で一つのポイントになると考えられる（図5-20参照）。

3タイプの諸川西部では、集落の中央に国道が通り、またこの集落が町の中心部に隣接していることもあり、道路沿いには商店が並ぶ。他に集会所・広場・幼稚園・職業訓練校があるが集会所は諸川西部の総戸数（481戸）を考えると余りに規模が小さく、自治会全体の活動の拠点とはなり得ず、総戸数の中の1割程度である旧住民が中心的に利用しているにすぎない（ヒアリングによる）。子供の遊び場としては、主に訓練校の校庭が使われ、複合的利用（学校側は正式には認めていない）が行われており、新住民、旧住民の子供達が入り混ざって遊んでいる。道路構成は、中央に走る国道・南北に走る道路とも大部分が通過交通であり、コミュニティは分断さ

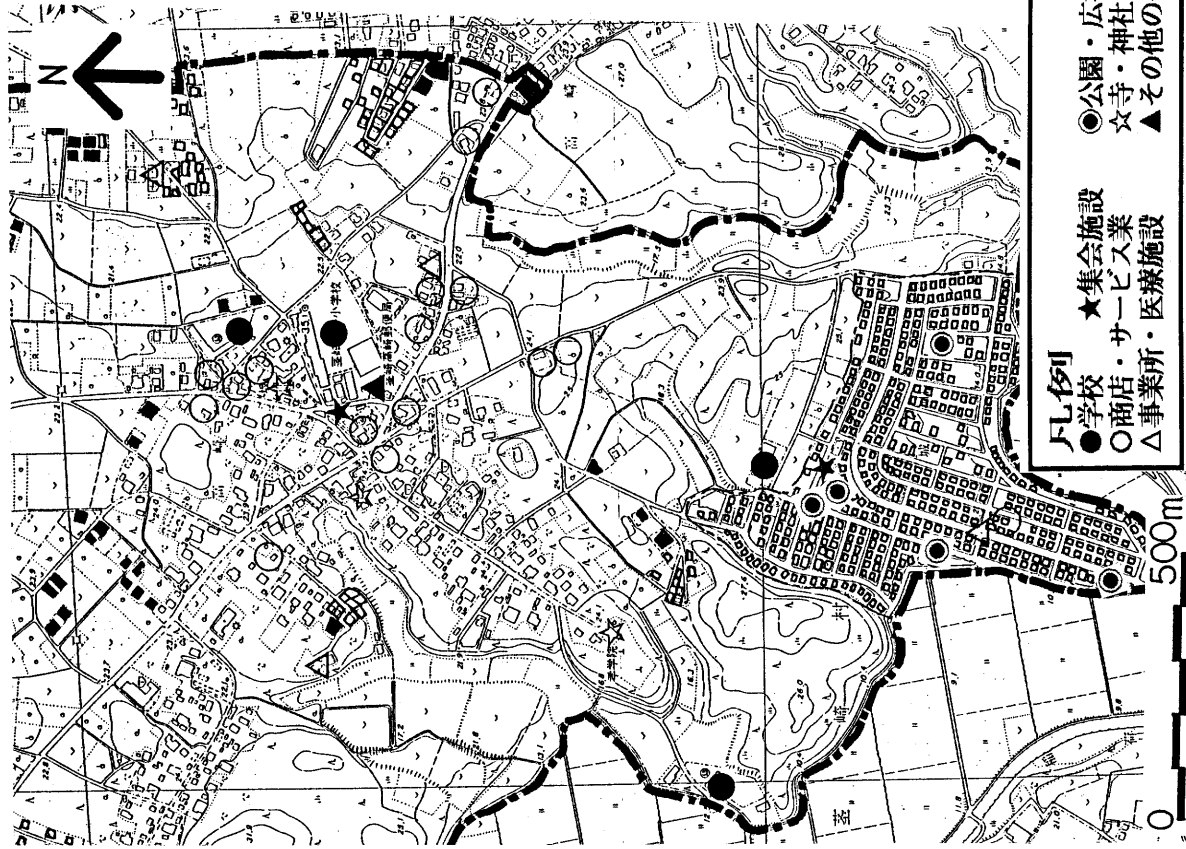


図5-20 施設配置 (高崎・城山)

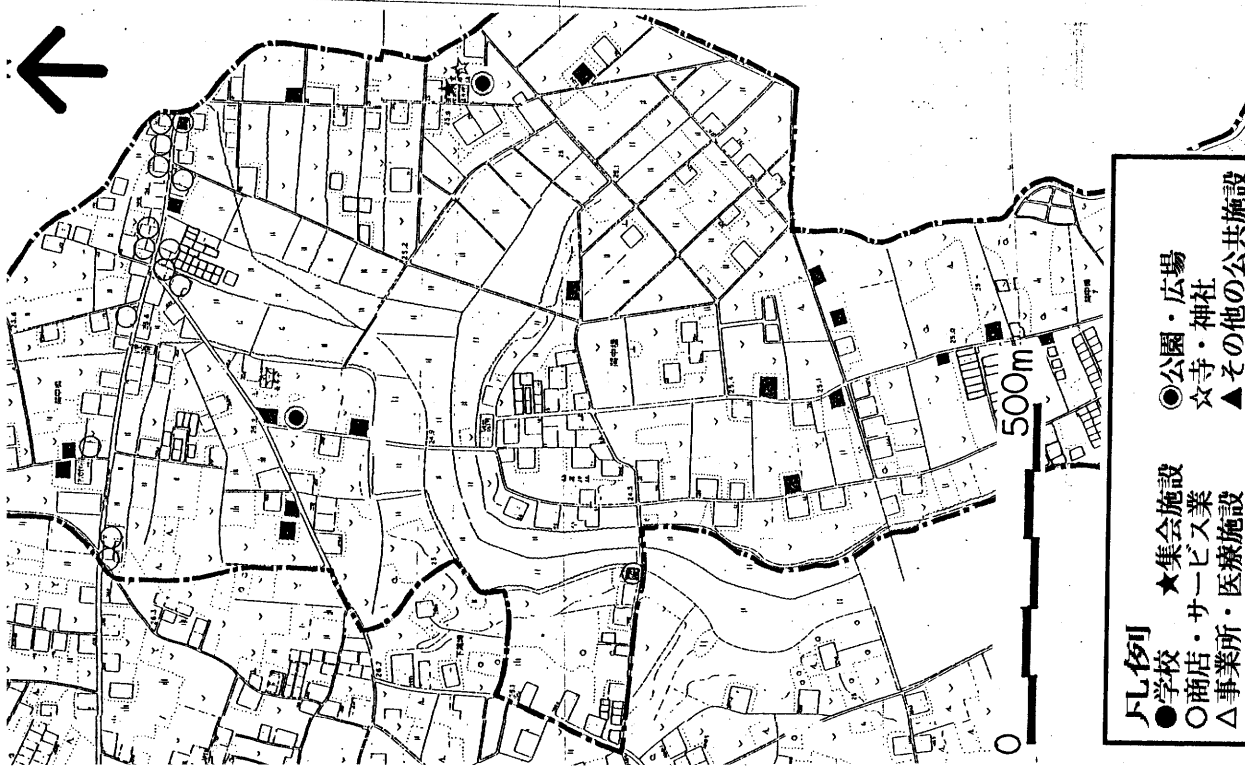


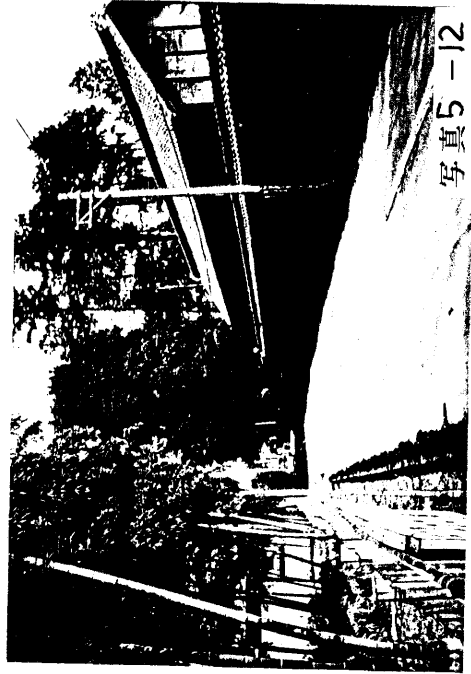
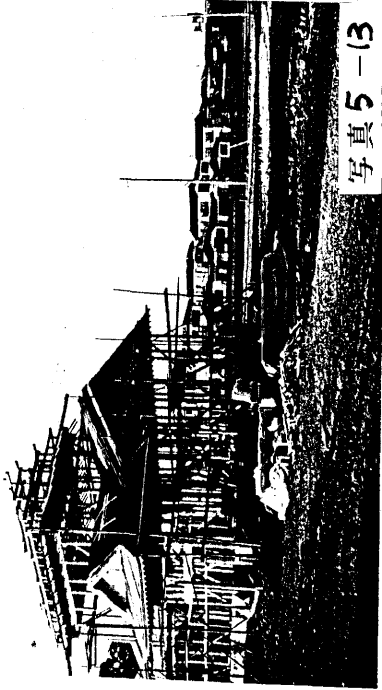
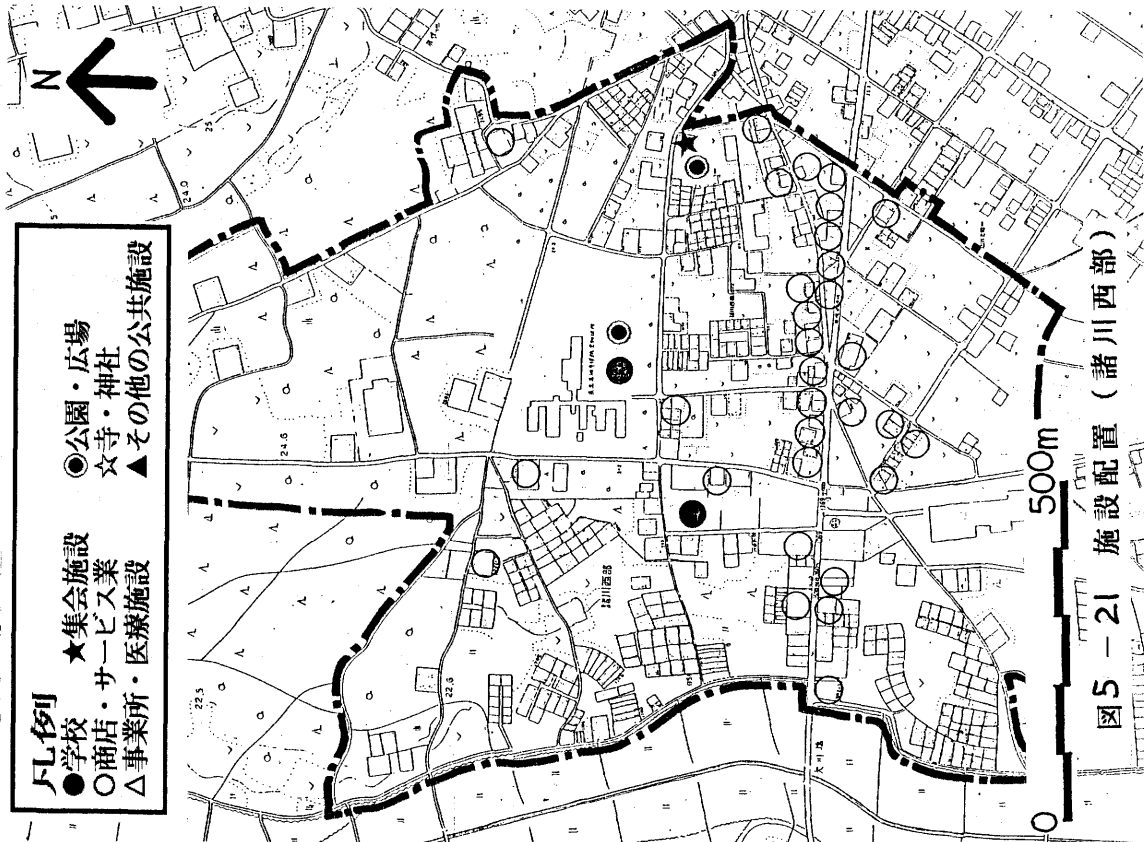
図5-19 施設配置 (間中橋)

れている。通過交通の裏側の道は、新旧住民に空間的に共有された空間であり（写真5-13）、コミュニティ形成上有効な空間になり得ると考えられる（図5-21参照）。

4タイプの城山では、公園・集会所は計画的に配置されており、それぞれ有効に使われている。団地周辺の集落との関連はほとんどなく周辺の農村的景観を楽しむことを除いては、空間的ストックの活用とはなっていない。しかし、子供達は周辺の集落にも遠征し、集落の中で新旧住民の子供達が入り混じって遊んでいる姿も見受けられる（写真5-14、5-15）。

本項では、幾つかの事例を通じて、施設配置・道路構成を中心にコミュニティのなかでの利用状況を見てきたが、新旧住民の居住地形態の組合せとの関わりから見ると、新旧住民の施設の利用状況が高まるのは、2タイプの分散的な形態の組み合わせによる場合である。しかし、3タイプのように分散的形態でも大規模に混住化が進展すると施設利用は急激な変化に対応できず混乱する傾向にある。

1、1'タイプのように母集落の形態が集居村の場合はこれらの施設は旧住民には有効に機能するが新住民では余り生かされない。4タイプのような団地型の場合には周辺集落のもつ空間的ストックはほとんど活用されない、ことが明らかになった。



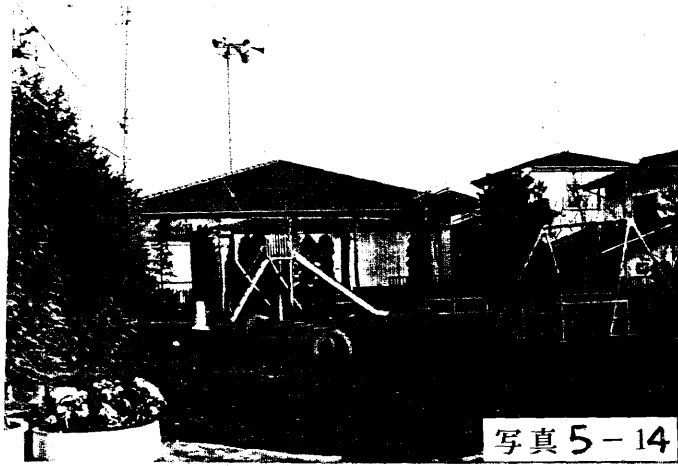


写真 5-14



写真 5-15

以上、本節では各項の分析から集落形態が空間的ストック指標として、新旧住民の居住地形態の組合せの傾向把握、自然環境の維持、施設利用の効率の把握の面からみても有効であることが確認された。

注・参考文献

1) ここでは新住民居住地形態から見て、より典型的な集落に限りて分析した。

2) アンケートはそれぞれの項目についての評価を「満足」「やや満足」「やや不満足」「不満足」の4段階で聞いており、表5-3では、調査対象者の中で肯定的な回答をした（「満足」と「やや満足」の評価をした）人の割合を示している。

3) 集落形態については第1章の先行研究でも述べたが、ここでは「矢嶋仁吉、日本の集落、古今書院、1967」「柳沢永一、集落形態と混住化の動向、筑波大学修士論文、1981」から主な知見を得ている。

第6章 混住化集落における居住環境整備について

第6章 混住化集落における居住環境整備について

1、各類型の相互関係

以上、各章においていくつかの混住化にかんする類型が検証されたが、ここではそれぞれの類型の相互関係を考察し、計画論としての位置づけを行う。

はじめに、今までで検証された各類型をもう一度、計画論的側面から整理すると次のようになる。

①広域レベルでは「地域社会類型」から、各市町村におけるそれぞれの類型の特性や問題点が整理され、計画論的に見ると、広域での混住化地域の評価が可能になり、市町村の選定（計画対象の決定）が可能になる。

②次に広域レベルで選定された市町村内部の各集落の問題に移る。集落レベルでは、4種類の類型を設定しているが、それぞれの意味を、計画論的に位置づけると、ストック指標である「むら柄」と「集落形態」は、混住化の受け入れ側を整理する指標と考えることができる。すなわち、この二つの指標を組み合わせることで、混住化の受け入れ側の評価が可能となり、集落の選定（計画対象の決定）

が可能になる。つまり「むら柄」によって集落（都市住民の受け入れ側）の総合的な社会集団の評価が可能となり、「集落形態」により居住環境条件の総合的な評価が可能になる。

③ 実態指標である「地域社会類型」と「新住民居住地形態」は、新住民が集落に流入する際の混在方法（整備方式や政策）を整理する指標と考えることができる。すなわち、この二つの指標を組み合わせることで、混在方法の評価が可能となり、整備方式の選定が可能になる。つまり「地域社会類型」によって流入する新住民とそれを受け入れる旧住民の社会集団の相性とも言うべきものの評価が可能になり、また「新住民居住地形態」により空間の混在形態の評価が可能になる。

④ 以上の手続きから、各集落に適合した整備手法が選定される。すなわち1)広域レベルで市町村を選定し広域での計画課題を整理する。2)集落レベルでは、第1に受け入れ側である集落の条件を整理し集落の選定を行う。3)第2に整備手法の選定を行う。4)以上から、選定された集落に適合した（空間的、社会的ストックをいかした）、整備手法が選択される。

これらの一連の流れを、本論で実際に得られた類型で示すと図6-1のようになる。

広域レベルでの評価
(市町村選定)

旧住民型	各タイプ混合型	新住民集団型
農家・新住民型		

受け入れ側の評価
(集落選定)

集落形態
(集居)

混在方法の評価
(整備方式選定)

新住民居住地形態
(集合)

(展開性大)

(展開性小) ちり柄

(各タイプ混合型)

地域社会類型
(農家・新住民型)

(散居)

(分散)

整備手法の選択

<p>展開大・集居</p> <table border="1"> <tr> <td>各タイプ集合</td> <td>農・新集合</td> </tr> <tr> <td>各タイプ分散</td> <td>農・新分散</td> </tr> </table>	各タイプ集合	農・新集合	各タイプ分散	農・新分散	<p>展開小・集居</p> <table border="1"> <tr> <td>各タイプ集合</td> <td>農・新集合</td> </tr> <tr> <td>各タイプ分散</td> <td>農・新分散</td> </tr> </table>	各タイプ集合	農・新集合	各タイプ分散	農・新分散
各タイプ集合	農・新集合								
各タイプ分散	農・新分散								
各タイプ集合	農・新集合								
各タイプ分散	農・新分散								
<p>展開大・散居</p> <table border="1"> <tr> <td>各タイプ集合</td> <td>農・新集合</td> </tr> <tr> <td>各タイプ分散</td> <td>農・新分散</td> </tr> </table>	各タイプ集合	農・新集合	各タイプ分散	農・新分散	<p>展開小・散居</p> <table border="1"> <tr> <td>各タイプ集合</td> <td>農・新集合</td> </tr> <tr> <td>各タイプ分散</td> <td>農・新分散</td> </tr> </table>	各タイプ集合	農・新集合	各タイプ分散	農・新分散
各タイプ集合	農・新集合								
各タイプ分散	農・新分散								
各タイプ集合	農・新集合								
各タイプ分散	農・新分散								

図6-1 各類型の相互関係

① 広域レベルにおいて「旧住民型」「各タイプ混合型」「新住民集団型」の市町村がそれぞれ選定され、空間的・社会的計画課題が示される。

② 集落レベルでは、「むら柄」を「展開性が大きい集落」「展開性が小さい集落」の2類型、集落形態を「集居村」「散居村」の2類型とすると、「集居×展開性大」「集居×展開性小」「散居×展開性大」「散居×展開性小」の4つの組み合わせができる。そして、このそれぞれから混住化に適した集落を選定し、またはその集落にふさわしい混住化の在り方を考える。

③ 「新住民居住地形態」を「集合型」「分散型」「団地型」の3類型、「地域社会類型」を来住タイプの類型だけに着目して「各タイプ混合型」「農家・新住民型」の2類型とすると、その組み合わせは、「団地型」は「各タイプ混合型」「農家・新住民型」に共通した類型であるから、「集合型×各タイプ混合型」「集合型×農家・新住民型」「分散型×各タイプ混合型」「分散型×農家・新住民型」「団地型」の5つの組み合わせができる。このそれぞれから整備方式を選定する。

④ ②で選定されたそれぞれの集落に③で選定された整備方式をあてはめると、5類型のなかから適合した類型を選択することができる。

以下の各節においては、集落レベルにおける、②～④の具体的な

各類型の適合を試みる。

2、実態指標からみた整備方式

ここでは、地域交流、コミュニティ意識の両面から分類の妥当性が確認された実態指標である「地域社会類型」と「新住民居住地形態分類」を用いて混住化集落における計画的住宅地整備の基礎的条件について考察を加える。

混住化集落を整備対象地域としてみた場合、「地域社会類型」・「新住民居住地形態」分類の組み合わせで混住化集落の計画を検討することは整備手法を整理する上で有効である。特に集落外部からの新住民の来住が伴う場合には、集落内部の人間関係の質的変化、居住環境の変容に与える影響は甚大である。以下、来住新住民と旧住民の関係が、最も中心的課題になる各タイプ混合型と農家・新住民型に絞って、新住民居住地形態別に整備計画上の留意点を整理する（表6-1）。

各タイプ混合型の場合では、来住新、血縁新のいずれもが、表面的には、多数を占める旧住民に歩調を合わせるが、旧住民の主導性が強く、また、旧住民の間でも、コミュニティ意識から見るかぎり農家旧住民は、追従的傾向を示しており、農家旧住民と非農家旧住民の分化が確認され、旧住民間においてもコミュニティは弱体化し

表6-1 集落類型・空間形態分類による開発計画上の留意点

「地域社会類型」 新住民居住地形態	各タイプ混合型	農家・新住民型
集合型	<p>開発可能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母集落と若干離れた、空間的なまとまりのある場所に、独立的な新住民集団をつくる。 ・血縁新住民を来住新住民の中に混ぜる。 ・新住民間のコミュニティは形成されやすいが、旧住民との関係は疎遠になる。 	<p>開発可能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・過大な新住民の来住は不適。空間的には、新住民は独立的な集団でなくてもよい。 ・血縁新住民を来住新住民の中に混ぜる。 ・新住民間のコミュニティは形成されやすいが、旧住民との積極的な交流は生かされない。
分散型	<p>開発不適</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新住民間の交流が少なくなり旧住民との交流も少なくなことから意識面でも、疎外感を持ちやすい。 ・政策的対応としては新住民をコーディネートするような社会計画が有効。 	<p>開発可能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・過大な新住民の来住は不適。新旧住民の数を拮抗させる。 ・旧住民を核とし、そのまわりに血縁新住民と来住新住民を分散的に配置する。 ・農村生活を楽しむようなライフスタイルを持つ来住新住民が好ましく、混住コミュニティ形成の可能性はある。
団地型	<p>各タイプ混合型、血縁・来住新住民型のどちらも開発可能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ある程度大規模な新住民の来住が可能。しかし、コミュニティ形成のためには、団地の規模、居住単位の大きさを検討すべき。 ・新住民のイニシアティブのもとで、旧住民を取り込んでの新しいコミュニティ形成の可能性はある。 ・団地住民による母集落の空間ストックの活用と旧住民による団地開発利益の享受を考えるべき。 	

ていると言える。新住民にとっても意識の面では不満も多い。空間の形態の面から考えれば、非農家旧住民が多いことから集落内農地の放棄、遊休化が進み農地の宅地転用が進む場合が多くなると考えられ、このような場合には新住民の住宅地の形態は集落内で分散的になる傾向が強まると考えられる。このタイプの集落で分散的な形態を取ると、新住民間の交流は限定され、旧住民との交流も形成されにくいことから意識面でも疎外感を持つことになる。従って、このタイプでは、できるだけ既存集落とは独立させ、新住民居住者同志が集合的形態を持つように配置し、新住民間の連帯性を高めるように考えるべきであろう。この際、血縁新住民を来住新住民の中に混入させることは、旧住民との仲介役として有効であろう。やむをえず分散的な形態を取る場合には、政策的対応として、新住民集団内の自治性を部分的にしる認める等の新住民集団をコーディネートするような社会計画が有効となると考えられる。また、このタイプは、旧住民が多いこともあり旧来からのしきたりが遵守され、新規来住新住民には合理的説明がつかない場合が多い。旧住民側でも集落のしきたりなどの不透明感を排除するような方策が必要であろう。

農家・新住民型の場合では、集落内部の非農家が比較的少ないタイプである。従って、各タイプ混合型のように旧住民が農家と非農家に分化していることがなく、来住新住民の参入を契期にして双方

を含む新たなコミュニティを形成しやすい。特に新旧の数が拮抗しているような場合には、農家は行動、意識の両面から見てコミュニティ志向が強く、血縁新住民や来住新住民でも意識の面では連帯性をもつことからコミュニティ形成の可能性はある。新住民居住地形態から見ると、旧住民では農家が多いことから農地の宅地化が急激にすすむとは考えられず、計画的にも対応しやすいタイプである。分散的である場合には、旧住民、特に農家との交流が進み、農家の対応に協調性がある場合では、農業の発展を期待しつつ新住民の住宅地も形成されると言う好ましいコミュニティ形成が可能となる。また、このタイプでも血縁新住民が適当に配置されることは、新旧住民の仲介役として有効に機能すると考えられる。この場合、新住民は農家及び農業に対する理解が必要で、農村生活を楽しむことのできるライフスタイルを志向する居住者の場合には、好結果が期待される。このタイプでも、混住化が過度に進展し新住民が量的に圧倒的な数を占めるようになると、農家が相対的に不活性化し協調性を欠き、コミュニティも形成されにくいと言う状況になる。また、農業に対する無理解と不満から新住民との圧れきが増し、農業の生産環境も悪化しやすい。このようなタイプで集合型になると、新住民間のコミュニティは形成されやすい反面、旧住民との積極的な交流は生かされず対立感情のみが強調されやすいと考えられる。

新住民居住地形態が団地型の場合は、旧住民との交流は少ないものの団地内部での地域交流やコミュニティ意識は他の形態に比べて良好で、各タイプ混合型、農家・新住民型の何れにも適応可能である。集落内の既存の空間的ストックを活用できないため整備費用が増大し、居住者の負担は大きくなるが、このことがかえって経済的に余裕のある新住民を選択的に迎え入れることになりコミュニティ形成にはプラスになるという面も考えられる。

3、ストック指標からみた集落の評価と住宅地整備

前節では、実態指標として「地域社会類型」と「新住民居住地形態」を用いて住宅地整備計画の基礎的条件について考察した。ここでは新旧住民の定住の諸条件を整理したうえで、ストック指標として「むら柄」と「集落形態」から受け入れ側としての集落の評価を行い、さらに具体的な住宅地整備の方法について試論的に示した。

(1) 旧住民から新住民への期待

①集落の「むら柄」による違いはあるものの一般には、来住新住民に対して、一定の範囲内で、伝統的な地域の慣習（しきたり又はルール）への協力、理解が求められている。そうした了解なしに開始された従来の新住民の流入は、結果として、（例外的なケースを除き）どちらかがやむを得ず我慢するかトラブルを起こすかのいずれかになっている。

②ただし、集落自体の内部にも、厳しい慣習の遵守に対しては、意識面での拮抗が増大しつつあるので、慣習そのものの柔軟化が進行するものと思われる。新住民の地域への参加がその方向への推進力になるとすれば、むしろ集落の再活性化へとつながることが期待される。したがって、参加しつつ改善する、という姿勢が何より求められるものである。

③現状での（今回の調査対象集団についての）新住民の多くは、地

域での活動、コミュニティへの参加に関して、経済的、時間的にあまりに制約がありすぎる。もっと余裕のある新住民、独自の生活スタイルをもった新住民の流入が求められる。

(2) 新住民側の期待

1) 地域の生活環境についての条件

①多くの新住民は、決して高度な都市的生活環境を求めている訳ではない。むしろそれらの点はある程度あきらめており、逆に田園風景や自然環境の良さといった、都市部では得られない要素に期待をしているのである。したがって、自らはこの地域に流入するとしても、それが大量の開発につながって、自然景観等が破壊されるのでは全く救いのないことになってしまう。田園（農業）や自然（山林）の適切な保存が整備と同時に計られる必要は大きい。

②しかし、最初は生活の便利さに大きな期待はかけていないとしても、しばらく住むにつれて、やはり不便さが身にこたえてくる。この不便さと、次項で述べる付き合いの重苦しさが、転出を決意させる大きな理由のひとつなのである。したがって、急激で大規模な開発は前述したように新住民にとってもマイナスであるが、少しずつ便利になっていく、という実感が求められており、少量、長期の整備戦略が必要とされる（補論B参照）。

2) 新住民の多様な生活スタイルに適合した整備の条件

①現在、混住地域に居住する新住民のマジョリティは、他の条件は犠牲にして、自らの経済的能力のギリギリの所で1戸建て住宅を求めてきた人々である。この人々は、やむを得ずこの地域に来住したのであって、ここで豊かな地域生活を営むことが可能かどうかは一概にはいえない。むしろ一般的には、困難が予想され、定着に結びつかない場合が多いことが予想される。

②しかし、少数ではあるが、中には自分なりの明確な生活のイメージをもって、選択的に来住している人もいる。たとえば、退職後、趣味の創作活動に没頭するために流入してきた人、自然環境との結びつきを求めててくる人、余裕のある子育てを考えて来住する人などである。しかるに、混住地域の現状は、これらの地域にとって本来歓迎すべき人たちの希望や期待に応える方法をもっていない。したがって、この人たちは新住民の中でも孤立し、下手をすると挫折感を味わっていることさえある。

③このような意図的な新住民に対して、例えば創作的志向の人たちを複数まとめて行う整備とか、土を求める人たちのための菜園の用意や農協での受入れ、指導体勢の協力とかのようなきめの細かい対応を、自治体・農協・ディベロッパー等が間に立って行うことが大切である。

3) 新住民からの旧住民への希望

①新住民の多くは、必ずしも旧住民との交流を嫌っている訳ではない。むしろ交流によって利益を得ること（地域での生活に必要な情報、厚い人情に触れること、農産物の入手など）の方が多い。混住地域では、旧住民の方が圧倒的に持てる者なのである。それにも関わらず交流が大きなものに発展しないのは、それが地域の慣習にまき込まれるという危惧の念が強いからである。旧住民が考える以上に、新住民にとっては、慣習的な地域の行事やメンバー間の儀礼的付き合いは重荷なのである。この点の柔軟な対応がない限り、一体としてのコミュニティの形成は期待薄といわざるを得ない。

②集落には、公民館、寺、神社、墓、入会地としての林地など、共有（旧住民）の空間的ストックが豊かである。しかしこれらが新住民に開放されることは例外的と言える程少ない。もともと旧住民に比較すれば極端に狭い敷地と住宅しか持たない新住民にとって、共有の空間が公共的空間として開放されることは大きなメリットである（補論B参照）。しかし、そのためには、新住民側も何らかの空間の提供が必要になろう。整備はこの辺の所を十分考慮に入れる必要がある。

（3）「むら柄」による条件の違い

①農村集落にとって、混住化することがそのまま「むらの崩壊」につながるものではなく、集落の社会的体質「むら柄」に適合した整

備の条件を考えれば、それを契機として「むらの活性化」に結び付く可能性がある。

② 4章で、「むら柄」は拘束力、展開性、協調性で把握できることを述べたが、整備の可能性と結びつけて考える場合には、主として展開性で「むら柄」を表すのが適切である。拘束力は何れの集落もある程度高く、協調性は現実に新住民が流入してはじめて測定可能である。展開性は新しい状況に対する集落の柔軟な対応力を表し、混住化という局面で見れば、その大小は開放性、閉鎖性を表すと言える。

③ 展開性のある集落は新旧住民間の摩擦が相対的に少ない。旧住民の働きかけで新旧一体となったコミュニティを形成する可能性がある。一方、展開性がなく閉鎖的な「むら柄」の集落は 村の活力に乏しく、混住化には適さない。

(4) 「集落形態」による条件の違い

① 農村集落はその立地条件形成要因、成立時期などによって多様な空間形態を示すことは既に述べたが、空間的ストックとしての特徴は、マクロにその集散の形態で表すことができる。すなわち集居村と散居村である。集居村は塊状または列状の比較的コンパクトな集落で、居住領域内に農地や村地などは大きく残っていない。成立時期の古いものが多く、台地と低地の接続部分または低地内の微高地

に立地している場合が多い。農業は主として水田稲作である。一方散居村は、分散的で一戸単位または数戸単位の居住領域からなり、その間に広い農地や林地を持っている。成立時期は比較的新しく、台地上部に立地するものが多く、農業も畑作を中心としている。

②この集落形態は、混住の起こり方に大きな制約条件となる。集居村では、既往の居住領域内に新住民が混合して居住することは事実上不可能であり、その外周部または離れた場所に新しい居住領域を形成するしかない。一方散居村の場合、農業者と農業を破壊しないかぎり、大きくまとまった整備は不可能であり、既往の小単位の居住領域の間にはめ込むように、小規模な整備を行うことが現実的である。

③平坦部に混住化がすすむ場合は、ミニ開発タイプの小規模な宅地化がすすみやすい。この場合、ミニ開発住宅を、従来の集落における「坪」のようなイメージで捉え、周辺農村の景観と調和するような形態・色彩を選び、ひとつのミニ開発住宅地を単位として屋敷林を残す等の工夫が必要である。また、住宅においては、農家住宅の要素を取り入れ、小さな土間、フレキシブルな間取り・縁側などのセッティングを考える。

④集落から独立した住宅地の整備を進めるときは、地形的にまとまった単位を選ぶことが、空間としての一体感をもたせ、また過度の

スプロールを防ぐ面からも望ましい。

(5) 「むら柄」と「集落形態」による集落の評価と整備方法

最後に、混住化地域における計画的住宅地整備の方法について考察を加える。整備は特定の地域空間を対象に行われるものであるから、まず整備の受け皿としての地域側の条件、ここでは集落の条件を問題にしなければならない。実際に存在する集落は、1つ1つが独自性をもつ個性的な存在であるが、整備対象地域としてみた場合、「むら柄」と「集落形態」との2つの条件の重ね合わせによって、以下に示すような4つの基本類型（プロトタイプ）を考えるのが適切であろう。この受入れ側集落のプロトタイプによって、そこでの整備の可否、整備の規模や位置、流入新住民についての条件（ライフスタイル）新・旧の混合・分離のしかた、旧住民の役割などがほぼ規定されるものと考えられる。

<むら柄> <集落形態>

集居村 ----- 開放的集居村

開放的集落

(展開性大) 散居村 ----- 開放的散居村

集居村 ----- 閉鎖的集居村

閉鎖的集落

(展開性小) 散居村 ----- 閉鎖的散居村

表6-2は、タイプ毎の整備条件について、2節における実態指標における整備方式の検討結果を組み合わせて試案的にまとめたものである。また、図6-2はその空間的イメージをモデル的に示したものである。各プロトタイプと前節における実態指標による整備方法の組み合わせは基本的には図6-3に示すとおり（図中で黒枠で示した類型が適合する整備方式）である。

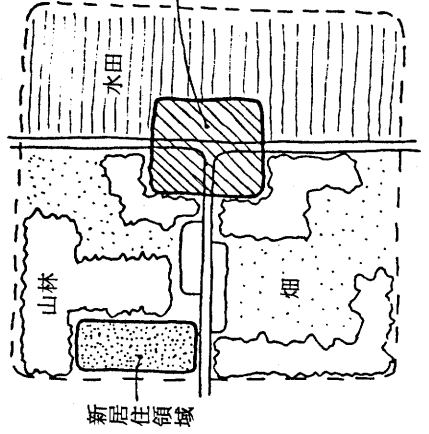
1) 開放的集居集落

この場合、既存集落内部に來住新住民が混合的に居住することは現実には考えられない。集落外側に保有する山林または畑作耕地に、比較的まとまった新住民の新集落を整備するのが適當である。こ

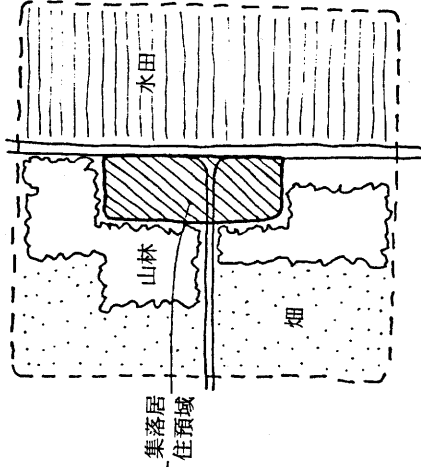
表6-2 集落プロトタイプによる開発条件・開発方式

むら柄 集落形態	展開性 大 開放的 (村落共同体意識)	展開性 小 閉鎖的 (伝統的アノミー意識)
集居村 (塊村 街村)	<ul style="list-style-type: none"> ・まとまった独立した新住民による新コミュニティをつくる。 ・血縁新住民をこの中に含ませる。 ・現集落と若干離れた、空間的なまとまりのある場所に。 ・規模は区(50~100戸)を形成する程度。(独立) ・新・旧集落は併存して、相互に影響し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・開発不可。 ・どんな方法をとっても、開発は新旧の間にトラブルをひき起し、どちらにとっても良好なコミュニティを形成する可能性は小さい。 ・第1、第2タイプの混住の自然な進捗と地域農業の活性化の努力によって、展開性が大きくなるのを待つしかない。
散居村 (散村 ハムレット 開拓集落)	<ul style="list-style-type: none"> ・きめの細かい混住によって、新旧両方を含む新しいコミュニティの形成を考える。 ・新住民については、特定のライフスタイルの農村居住希望者に限る。 ・1単位は組(10~20戸)を形成する程度で、中に血縁新住民を含む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・比較的全域を開発。 (開発方式は土地区画整理) ・新住民のイニシアティブのもとで、旧住民をとり込んだの新しいコミュニティ形成。 ・旧住民は貸農園、観光農業などによって参加。 ・新住民のタイプについては、それほど特定しなくてもよい。

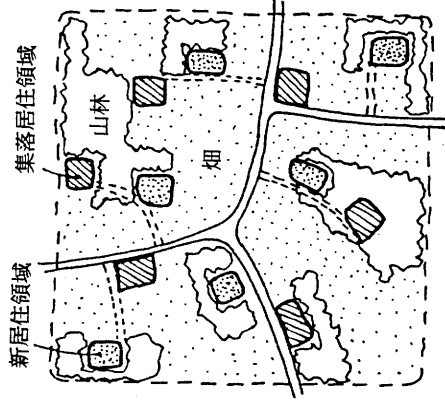
<開放的集居村>



<閉鎖的集居村>



<開放的散居村>



<閉鎖的散居村>

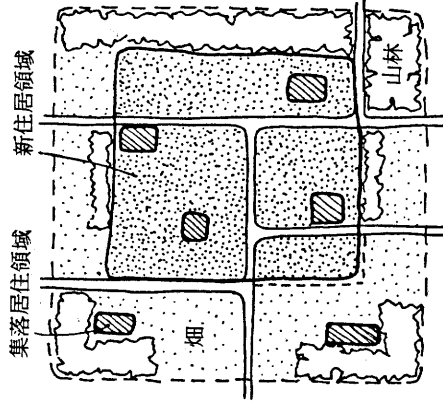


図6-2 集落プロトタイプによる集落形態モデル

	展開性大	展開性小												
集 居 村	<table border="1"> <tr> <td>各タイプ 混合型× 集合</td> <td>農家・新 住民型× 集合</td> </tr> <tr> <td>各タイプ 混合型× 分散</td> <td>農家・新 住民型× 分散</td> </tr> <tr> <td colspan="2">団地型</td> </tr> </table>	各タイプ 混合型× 集合	農家・新 住民型× 集合	各タイプ 混合型× 分散	農家・新 住民型× 分散	団地型		<p>開発不適</p> <table border="1"> <tr> <td>各タイプ 混合型× 集合</td> <td>農家・新 住民型× 集合</td> </tr> <tr> <td>各タイプ 混合型× 分散</td> <td>農家・新 住民型× 分散</td> </tr> <tr> <td colspan="2">団地型</td> </tr> </table>	各タイプ 混合型× 集合	農家・新 住民型× 集合	各タイプ 混合型× 分散	農家・新 住民型× 分散	団地型	
	各タイプ 混合型× 集合	農家・新 住民型× 集合												
各タイプ 混合型× 分散	農家・新 住民型× 分散													
団地型														
各タイプ 混合型× 集合	農家・新 住民型× 集合													
各タイプ 混合型× 分散	農家・新 住民型× 分散													
団地型														
散 居 村	<table border="1"> <tr> <td>各タイプ 混合型× 集合</td> <td>農家・新 住民型× 集合</td> </tr> <tr> <td>各タイプ 混合型× 分散</td> <td>農家・新 住民型× 分散</td> </tr> <tr> <td colspan="2">団地型</td> </tr> </table>	各タイプ 混合型× 集合	農家・新 住民型× 集合	各タイプ 混合型× 分散	農家・新 住民型× 分散	団地型		<table border="1"> <tr> <td>各タイプ 混合型× 集合</td> <td>農家・新 住民型× 集合</td> </tr> <tr> <td>各タイプ 混合型× 分散</td> <td>農家・新 住民型× 分散</td> </tr> <tr> <td colspan="2">団地型</td> </tr> </table>	各タイプ 混合型× 集合	農家・新 住民型× 集合	各タイプ 混合型× 分散	農家・新 住民型× 分散	団地型	
	各タイプ 混合型× 集合	農家・新 住民型× 集合												
各タイプ 混合型× 分散	農家・新 住民型× 分散													
団地型														
各タイプ 混合型× 集合	農家・新 住民型× 集合													
各タイプ 混合型× 分散	農家・新 住民型× 分散													
団地型														

図6-3 プロトタイプと実態指標の組み合わせ

れまでの整備でも、このような方法は一般的であるが、本研究でも明らかにしたように、こうして整備された新住民のコミュニティと旧住民の集落との交流は自然に生まれるものではなく、互いに無関係に併存していることが多い。末端の生活単位（自治単位）レベルでは新住民だけのコミュニティを形成し、その上のレベルでは近隣の既存集落と適切な交流関係を発展させるような方針が有効である。そのためにはためには、以下のいくつかの計画原則をたてる必要がある。

①規模が大きすぎると新住民間の結びつきが弱くなるだけでなく、近隣集落との良好な関係が生じる機会も減少するので、在来集落におけるひとつの区（一般的には自治会の単位）程度が適当な規模と思われる。戸数では50～150戸程度である。空間的には、地形や林地によってひとつのまとまりを視覚的にも感じさせることが望まれる。

②さらに重要なのは、この新集落に、近隣旧集落の血縁、地縁を持つ新住民を計画的に混在させることである。この新集落と旧集落の中間に、子供の遊び場を中心とした共同利用施設や日曜菜園の用意が欲しいところである。このタイプの場合、流入新住民については、とくに限定する必要はないが、比較的余裕のある生活をできるような中程度以上の所得階層であることが望ましい。

2) 開放的散居集落

散居村は、台地上で畑作の占めるウェイトが大きく、比較的歴史の浅い集落が多い。畑作の場合に必要な農業経営の近代化の要請と、歴史が浅いために比較的強くない伝統的しきたりの束縛力とから、散居村の場合は開放的な体質の集落が多い。

この場合は、集落の内部に広大な林地や耕地があるので、ここに新住民を計画的に流入させる方法が考えられる。しかし、このような空間的な末端のレベルで新旧の混住を行うには、きわめてデリケートな配慮が必要である。

まずここに流入する新住民は、特定のライフスタイルの農村居住希望者が適する。そして住宅地は、それぞれのライフスタイルに適した条件、たとえば小菜園付き住宅とか広い敷地の住宅とかの条件を満たす、水準の高いものが不可欠である。住宅地は大きくてはならず、逆に1戸1戸バラバラでも適当でない。ひとつの班または組を形成できる程度の規模、戸数にして10～20戸程度が良いと思われる。これは、ヨーロッパにおける小村（Hamlet＝ハムレット）が相当する規模である。したがってこの方式をハムレット方式と呼んでもよい。ハムレットはひとつの集落の中にいくつか整備されるが、それぞれ特色を持つことが望ましく、その特色はそこに流入する新住民のスタイルによって決定されたり、血縁新住民中心

のハムレットであったりすることが望ましい。

こうして、意欲的な農民と意図をもった新住民とが、異質を前提に協力して新しいコミュニティを形成していくとすれば、最も質の高い混住コミュニティが形成される可能性が大きい。

3) 閉鎖的密居集落

このタイプの集落では、住宅地整備を行うこと自体が不適當と思われる。どんな方法をとっても整備は新旧住民の間にトラブルを生じ、どちらにとっても良好なコミュニティを形成することに結びつかないからである。このような集落では内部からの混住および血縁新住民の混住が自然に進行することによる変化と、農業サイドの近代化の努力によって、開放性が徐々に強まるのを待つしかない。

4) 閉鎖的散居集落

このタイプの集落では、すでに旧住民としての実態的なコミュニティは脆弱なものとなっていることが予想されるので、これを中核にして地域像を考えるのは不適切と思われる。むしろ新住民のイニシアティブのもとで、旧住民を取り込んだ新しい地域を形成することが課題となる。従って、原則的には、集落の全域を対象とする面的な整備方法、例えば、農住型土地区画整理事業などが適していると思われる。旧住民は、貸し農園、観光農業などの質的転換によって新コミュニティに参画することが望ましい。この場合には、新住

民のタイプについては、一般的な宅地需要層が想定される。

補論 A 都市-農村計画の系譜

補論A 都市－農村計画の系譜

1、ハワードの田園都市とその前後の展開

都市－農村系のありかたを変革、再編することによって新たな社会を構築しようという構想は、3つの潮流を成している。渡辺¹⁾は次のようにまとめている。

- ①都市と農村との矛盾・対立を資本主義社会における基本的矛盾として捉え、革命による社会主義の実現により解決しようとする試み。
- ②資本制社会の枠内における解決策で都市・農村それぞれの欠陥を除去し、長所を結合した新しい第三の生活空間を創造することによって、両者の矛盾を一挙に解決しようとする田園都市の試み。
- ③資本主義・社会主義を、ともに近代工業化社会の体制として捉え都市化が両者に共通した方向である以上、その解決は近代工業化社会そのものの根本的変革の中から展望される新しいパラダイムの構築によって達成しようという思想。

第一の社会主義的都市農村対立の揚棄は、これまでの社会主義諸国では実現されていない。第二の田園都市論の系譜は豊富な実践の系譜がある。第三の新しいパラダイムの構築による解決は、近年台頭してきたもので新たな社会システムの構想として、様々な議論を

展開している。ここでは西欧における第二の田園都市の系譜を整理することにより、それらの計画や計画論にみられる理念について考察する。

田園都市論についてはエベネーザー・ハワード²⁾のGARDEN CITYがはじめて体系的にまとめたものとしては代表的なものである。しかし、ハワードの田園都市以前にも、ユートピア思想の系譜と実際に彼自身のヒントにもなったと言われる19世紀における実験的な田園都市の先駆的試みが見られる。それらを以下に示すと³⁾、

●レオナルド・ダ・ビンチの田園都市案

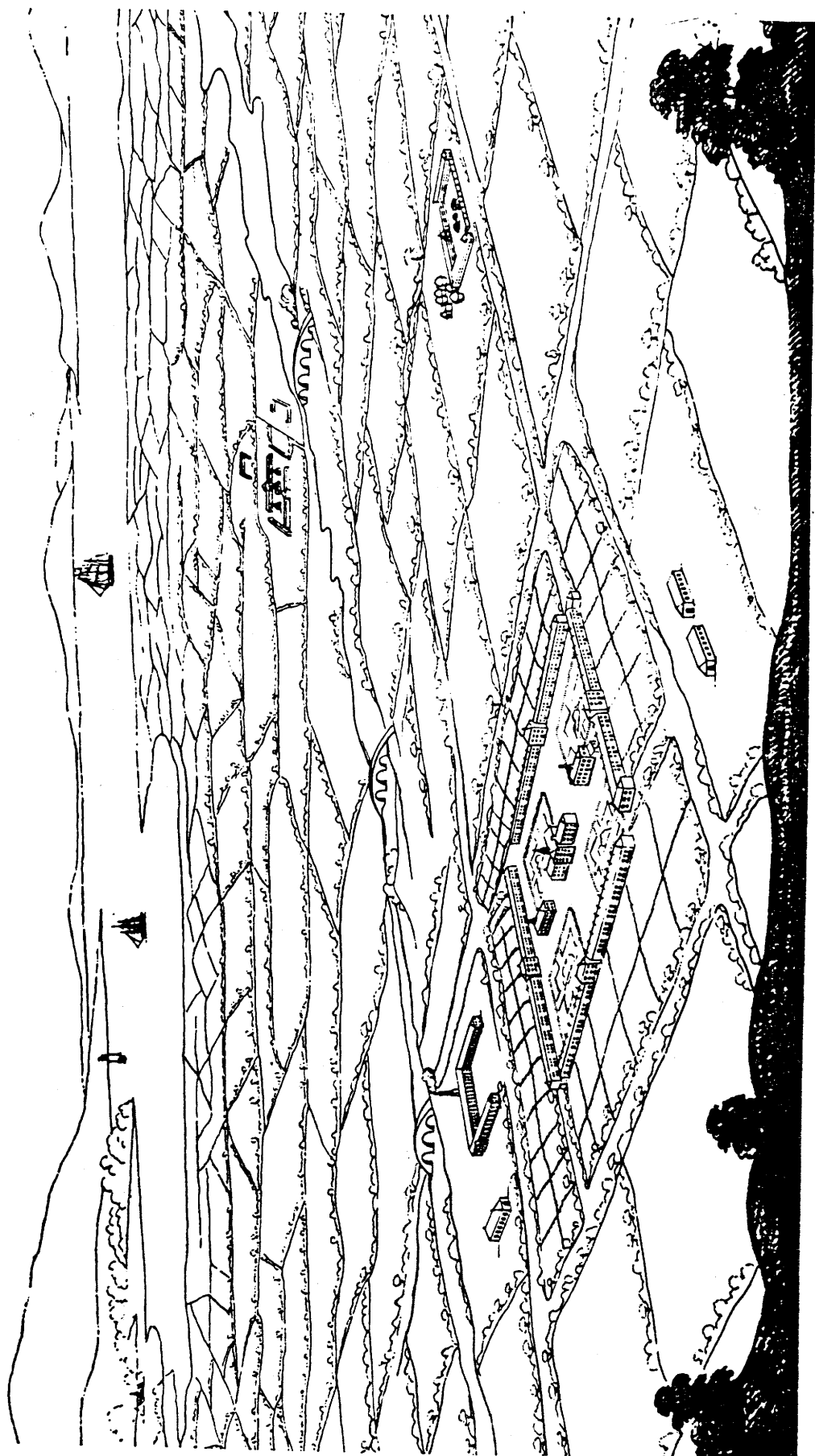
大都市の環境悪化を除去するために、人口3万人の小都市を田園地域に分散させて建設する計画。

●ロバート・オーエンの工場村案（1816年、イギリス）

労働者の自給自足的共同生活の実現を目指しており、その概要は中心に学校、子供用宿舎、共同調理所などがある労働者の居住区を設け、それをとりまく周辺を農地にして労働者に分割したものであった（図A-1参照）。

●ジェームス・シルク・バッキンガムのビクトリアの建設計画案
（1849年、イギリス）

中心部の土地に住宅・商店・工場・倉庫・学校・教会などを建設しそれを農地で囲む樹型の都市で農業コミュニティと工業コミュニテ



図A-1 オーエンのコミュニティ構想(1817年)

イの結合をはかった。

●クルップの職工農村（1865年、ドイツ）

クルップが経営する職工とその家族6万人のために、広大な名地区に工場を移転し、収入に応じた職工家屋の建設、各種学校、慰安院、図書館、共同販売店などをもうけたものである。

●アレキサンダー・T・スチュワートの田園都市（1869年、アメリカ）

労働者のための模範的な住宅地をつくり、公園・クラブハウス・並木街等を持つ理想都市として、これをGARDEN CITYと呼んだ。これは田園都市という言葉が始めて使われた例である。

これら一連の欧米諸国の動きは、スラム等都市労働者の劣悪な生活環境を改善しようという機運のなかで発生したものと位置付けられる。また、ロバート・オーエンやバッキンガムの計画案等の諸説や動向はハワードにとっても有力なヒントになっており、ハワードの田園都市論はこれらの集大成として位置付けられる。

エベネザー・ハワードは1898年、*Tomorrow; A Peaceful path to Real Reform*の中で田園都市の建設を提案した（図A-2参照）。

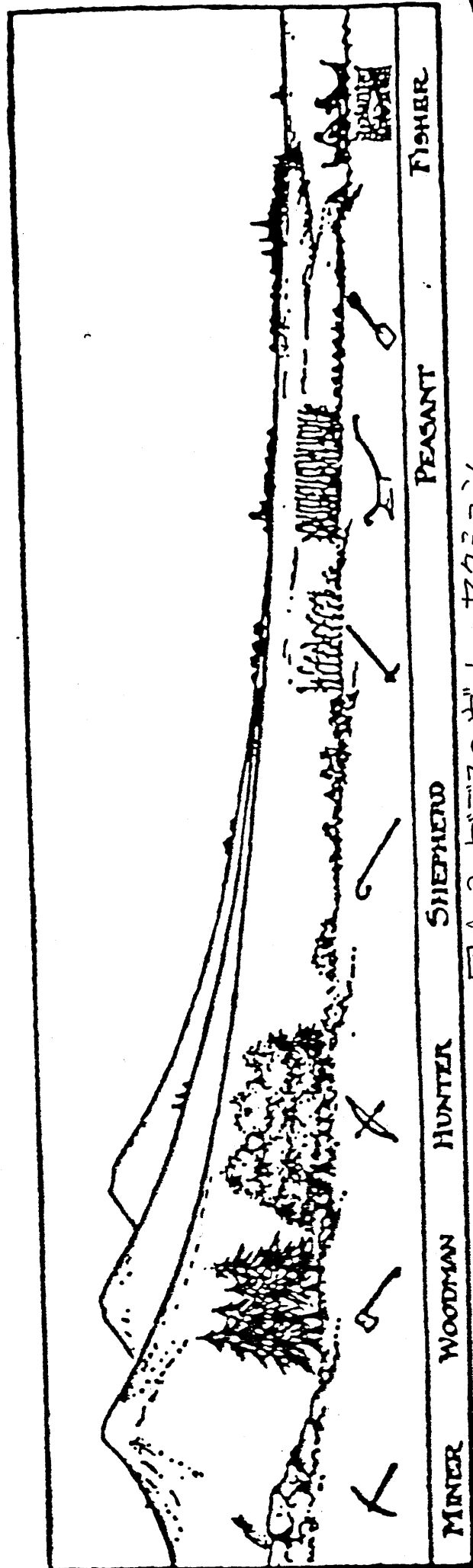
この中で彼はフィジカルなパターンが成立するための経済的条件としての空間機能的な面の論及に比べ田園都市が成立するための条件の追及に主眼が注がれていたと思われる。著書の中ではその多くの

部分に建設費用、コミュニティの経営財政運営などの問題が取り上げられている。彼自身の言葉によるとこの計画は①アルフレッド・マーシャル等の組織的人口移住運動に対する提案、②ハーバート・スペンサーの土地保有の組織に関する提案、③バッキンガムのモデル都市、の3つの提案の結合によって生まれたと言っている。ルイス・マンフォードはこれらの独特の統合こそハウードの独創性であると言っているが⁴⁾、ハウードの実際の評価は、後継者によって田園都市運動が方法論的に科学的アプローチがとられたという点と、ハウード自身が実際に田園都市建設にあたり、これを完成させたという点の2点によって成される可言える。1899年田園都市協会が設立され1903年に最初の田園都市レッチワースの着工がされた。レッチワースは基本的な考え方はハウードのアイデアであったが、ハウードの理念よりも実際に設計にあたったR. アンウィンらの設計技法のほうが重視されるようになった。レッチワースに引き続きウェルウィンが建設されたがレッチワースより様々な点で成功していると言われている。

ハウードの田園都市論とその実現はその後の欧米諸国の都市計画に大きな影響を与えた。フランク・ロイド・ライトの理想都市ブロードエーカー・シティ⁵⁾、C. A. ペリーの近隣住区理論⁶⁾とその実現としてのラドバーン計画等もハウードの都市分散論に立脚した

提案である。これらのユートピア的な方法を転換させたのはパトリック・ゲデスである。ゲデスもハウードの田園都市論から示唆を受けたが、彼の方法は都市の正確な分析に基づいて計画を推進するというアプローチをとった。彼は地理学、生物学、社会科学の素養があり、都市を人間とその社会の環境として把握しようという理念から都市計画の準備段階として都市の分析的調査が優先すべきだと主張した。今日の建築計画、都市計画の研究者の多くが都市の調査分析を重視する態度もゲデスに始まったと言える。ゲデスの思想が最も明確に表れたのは、1911年に始まる「都市と都市計画の展覧会⁷⁾」である。この展覧会の内容は、バレー・セクション、計画の起源、中世の都市、ルネサンスの都市、大首都、田園都市、の6部門で構成されていた。都市史でも計画的視点をもって説明された斬新なものであったが、この展覧会の特徴はバレーセクションによく表れている。バレー・セクション（図A-3参照）はヨーロッパの谷間の地域のコミュニティ構造を示したものであるが、この中で都市計画における地理学的コントロールの原理の重要性、コミュニティと職業の関わり、歴史性と社会環境の関わりなど、人間の生活が多次元なものとして把握されている。さらに分析的アプローチをとりながらも、無機的にならず有機的な構成で分析を進めるのが特徴である。

以上のように20世紀前半の都市計画の実践と理論においてハワ



ードの田園都市論の及ぼした影響は大きい。しかし、一方では彼の真意は曲解されて伝わることになる。つまり「田園」という言葉のニュアンスだけが強調されて郊外のベッドタウンが田園都市であるかのような錯覚が広まって一般に定着してしまったのである⁸⁾。職場が遠く離れていたのではコミュニティが成立しにくいのは当然である。また住居を中心とした郊外都市のほうが職住併合の都市より計画するのは容易であることから、交通機関の発達にともない都市のスプロール現象が助長され、ニュータウン時代の到来を迎えることになる。ハウードの田園都市論は、都市と農村を結合して新しい地域を作り出そうとした点では、まさに混住地域計画の元祖とみることができるが、彼はこれを都市の側から一方的に見ており、それが置かれる農村の農村の側からの視点が完全に欠落している。その証拠に、農地は市民のものであり、土地の入手が困難になると真先に削られることになった。それはウェルインでより顕著である。

ゲデスの理論は、混住化という視点から見れば地域の構造を多面的に分析し評価しており、地域のストックの活用を計っているという点では画期的なことである。これはハウードの理論には見られない視点である。しかし、彼の理論は、ハウード程の実現性を考慮した計画論ではなく、時代的背景もあり既存の地域に新たな居住地を計画することは現実には受け入れられなかった。

2、日本における都市－農村の関係の系譜

ここでは、近世における都市と農村の関係、我が国における田園都市論の影響とその後の展開について整理する。

近世になると農民たちは、あらゆる機会を捉えて貨幣獲得に努力し始める。都市は華やかな消費文化と多種多様な所得機会を提供する。そうした都市のもたらす中で農村はさまざまな対応を迫られる。その対応の形態は多岐にわたるが大きく分ければ2つの方向を指向する。第一は、農業部門の労働を縮小または放棄して他部門の労働につく脱農化、第二は、農業経営を拡充して商品作物等を主体に集約的な商業的農業になること、である。古代から中世にかけて都市発展の影響を徐々に受けてきた畿内の農村は近世に入って京都・大阪の近郊農村として一層農業の集約化を進めてきた⁹⁾。一方、関東では、江戸が急激に都市の規模が増大したため、近郊農村ではそのテンポに追いつかずに全面的な粗放化が進んだ。そのような零細農の多くは都市へと流出する例も多かった。原則的には貢租体系下に置かれ、専ら「農耕専一」であるべきことを強制されていた農民にとって、本業とは貢租生産のための稲作や自給食料のための穀作のことであり、そのほかはすべて「農間余業」「農間渡世」に位置付けられた。しかし現実には多種多様な余業が農業経営と結びついて

行われていたのであり、特に都市的需要が増大した近郊農村で著しく見られた。このように都市との接触が多く、都市へ出やすい地域ほど都市への人口流出は著しい傾向がある。激しい人家減少の結果は、益々、田畑の荒廃を招くことになる。都市においては、都市の拡大、町場化の進行や強制移転等で農業が続けられなくなった農民たちが次第に脱農化して小商人になる一方、所持する田畑を利用して地主、家持化していった。近世における日本の都市は、多くが軍事上の理由で出来たものであるが、武士や奉公人を除くと他の多数は町にいる村民といったイメージが強く、また町づくり自体が農村の事業の一つでもあり、西欧の都市とは異なり都市と農村を対立する関係ではなく都市と農村の連続した関係であったことが認められる。

近郊農村以外の場合は、一般に都市への流出は少なく、村外との交流は限られていた。村の生活はともすれば閉鎖的に捉えられやすいが実は村外との交流は村の生活にとっても重要であった。木村¹⁰)は村外との交流のセッティングを整理している。主なものを取りあげると、年貢の津出し・市場へ行く・奉公に出る・寺社参拝・巡礼・湯治などである。反対に村に入ってくる者もいたが、いずれも旅の者であり村に定着するものはなかった。柳田国男は「村に入り来る者」として、修験者・札売り・春駒・大黒舞・神楽・万歳・猿

まわし・巡礼・芝居・鍛冶屋・屋根葺・木地屋などをあげている。

以上のように近世における村では、近郊農村を中心として農村側から都市へ流出することや、新田集落などようにの新たな村に流出するようなことはあるが、都市側から農村に入るケースは、一過的なものはあるものの、村に定住する例はほとんどなかった。

幕末から明治期にはいると明治維新の変革により、士農工商の身分制度の撤廃、職業・移転の自由などの施策と産業構造の転換等により、農村からの人口流出、都市への集中がはじまった。特に産業資本の確立期と言われる明治30年代は農村人口の大規模な都市集中が進行し、都市が発展しはじめた時代である。都市労働者の生活が社会問題化する一方、農村の側でも農民流出の激化、農村の荒廃が始まっていた。このような社会的背景のもとに、明治40年前後に田園都市論が紹介された。当時、ハウードの著書を始め、数多くの欧米の田園都市論とその実例が紹介された¹¹⁾。その中の代表的なものに内務省地方局有志によって刊行された「田園都市」がある¹²⁾。この著書の中では西欧の経験に日本の文化も考慮しながら、当時の田園都市の最初の動きを詳細に分析、紹介している。この著作の中には単に西欧の事例をそのまま紹介しているだけでなく、例えば「つとに泰西人士の唱道せる田園都市、花園農村に比してむ

しろ優れることありとも、決して劣るところなきをみるべし。いわんやわが同胞の田園生活を尊ぶことは、つとに歴史の存するありて、田園の趣味そのものが、わが祖先伝来の心裡に深き印象を留めたること、由来のすでに久きものにあるにおいてや」¹³⁾等、日本の農村の再評価がなされ、日本における田園都市の適応について考察されている。この中で都市・農村の調和を目指す田園都市計画は2つの方向で考えられていた。「其の理想とせる所二あり、清新なる農村の趣味を活用して現都市を改良し、又は新都市を造りて、大都会に免れ難きの弊風を絶たんとすること其一なり。健全なる田園生活を尊重して、之に加味するに都市各般の文明事業を以てし益々農村の培養と其改良を図らんとすること其二なり。」とあるように、都市改良型あるいは新都市建設型と農村に都市的な要素を加えることの2つが田園都市のイメージとして考えられていた。都市や工業の側からは、前者の都市改良型あるいは新都市建設型の田園都市が考えられ、そこでは、何よりも資本・労働関係の安定化と工業の能率向上が主眼になっていた。農業の側での田園都市論は、農村に都市の長所をもたらすことであつた。また、都市住民を農村に迎え入れる場合には「もし卒然として都会の人士を新農村に送り、ここに烏合の団体を造りたらんには、かならずや精神の結合をまっとうしえざるべし。もしその精神にして自助の一点を欠くことあらんか、事

業の成功を望むは、むしろ不可能のことたるべし」¹⁴⁾とあるように慎重に対応することを注意している。以上のように、田園都市の日本への導入にあたっては、既成の農村を田園都市に再生することが加えられ、これはハウードの田園都市論には見られない独特の考え方である。

このように各方面から田園都市建設の必要が強調され、具体的提案もなされたが我が国においては田園都市的なものは実現されなかった。その後、田園都市の思想は我が国においてもそのロマンティックな面だけが強調され、郊外住宅地の開発を促した。日本の郊外田園住宅地の開発は、ほとんどが郊外電鉄会社によって行われた。この現象は1922年頃から関西方面で始まり続いて東京近郊でも行われるようになった。これらは、当時としては必ずしも富裕な階層の住宅地ではなかった¹⁵⁾。

3、現代における混住化への過程と課題

ここでは、現代の日本の混住化の状況を整理し、混住化への過程と混住化に対する認識について考察する。

我が国では、戦後の農地改革によって土地所有構造は寄生地主的土地所有から自作農的土地所有に大きく変わったものの、農業経営構造は零細規模の米麦中心の多角的経営組織を持った家族小農経営

として基本的には変化が少なかった。所得倍増計画（1960年）に、はじまる高度経済成長の過程で、社会経済の構造が2次・3次産業を中心に変貌するのに伴って、農業、農村も土地や労働力をはじめとして生産物の内容・生産技術・流通機構、さらには農村の生活様式に至るまで激しい変化を生じた。農業・農村の変化の基本的背景は、2次産業の発展が3次産業の発展を促し、都市的人口を増大させ、地域差はあるものの全国に都市化の影響をもたらしてきた。一方、工業の発展は貿易の拡大を軸として経済の国際化を進めた。農村の都市化としては、都市人口の増大により大都市近郊における宅地化の現象は以前からもみられたがそれに拍車がかかり、また、かならずしも都市近郊ではない地域にも、交通網、交通手段の発達、工業の地方分散、情報網の発達、3次産業の発展等に象徴されるような都市化のインパクトを受けた地域は多い。その結果、非農家の増大による農村内部からの混住化が進む一方、農家の次三男のUターン、Jターン現象に加え、都市住民が農村へ来住する場合も、地価高騰に伴う住宅取得の困難さから農村部に住宅を求めるケース、老後の生活を自然環境が豊かな農村部で送ろうとするケース、新しいライフスタイルを求めて農村に居住するケース等、極めて多様な状況を呈しつつある。混住化が政策的課題として意識され始めたのは昭和45年前後であり、はじめは農村地域における農家と非農家

の都市的機能と農村的機能の混在であった。農村地域の来住混住が問題になりだしたのは近年のことである。人類の社会発展史の中でみると、第一に産業革命以来空間的に分離してきた都市と農村が、重なり合った共通の地域を持つにいたったこと。第二に従来対立的に捉えられてきた都市と農村の關係に共存の構造が出来たこと。これらは、はじめての経験といえることである。

つぎにこれらの趨勢の基盤となってきた戦後の国土開発の経過をみると¹⁶⁾、3次にわたる全国総合開発計画の開発方式は、①一全総の拠点開発、②新全総の交通・通信ネットワーク、③三全総の定住圏整備、のように点・線・面へと拡大されてきた。一全総では、地方開発都市の整備を進めることによってその影響が周辺の農山漁村へと拡大し、新たな経済圏を形成することを想定していた。一全総では産業の配置・発展を重視する国土計画であったが、農山漁村を生活の場として考えることは軽視されていた。新全総では、開発戦略にプロジェクト方式を用いたこと、広域市町村圏を設定し交通通信ネットワークの形成を通じて、都市・農村のすべてにわたってナショナルミニマムを進めたことが2つの大きな柱になっている。農山漁村については、従来生産振興が中心であって、総合的な計画が欠けていたとの反省から、日常生活の広域化に対応した生産・生活を通じた統一的な計画策定と施設整備が進められた。三全総にな

ると、新全総において具体的な対策に欠けていたとされる広域生活圏にかわって、定住構想によって新しい生活圏を確立することが重要課題であるとされた。農山漁村地域の生活圏は、住民の生活や生産に応じて多様化しているとの位置付けのもとに、日常生活の拠点である集落段階（居住区）での生活環境が基本をなしているとし、都市に比べ立ち遅れている集落段階での施設整備を重視している。

4 全総の方針では、分散型社会への潮流変化と自立・調和型社会の形成を展望しつつ、21世紀に向けた国土計画の基本コンセプトとして「共生・ネットワーク型国土の創生」が示されている。今までの都市と農村の二分法的発想を超え、地域の特性を生かした都市と周辺農山漁村との多様な共生と交流のネットワーク関係を形成することである。このような文脈において、都市と農村の連帯と補完の関係を強め、新しい田園型社会への展望が開かれることを意図している。具体的な展開としては、第一に混住化を積極的に評価して居住と生産の場が田園の中に展開していくこと。第二に都市から農村に移り住む人や、都市と農村の両方に住宅を持つ人が出現する可能性があること。第三に都市の居住者は都市では満たされないニーズを農山漁村に求めるなど、都市と農村の相互交流に拍車がかかること。等が考えられている。しかし、農村と都市の良好な関係は、このような総論的なメニューだけで実現するものではない。特に都市

住民がリゾートや観光など短期的に農村と関連を持つ時は問題は少ないが、混住化のように都市住民が定住する場合は、農村側の論理、都市側の論理を理解した上で、より具体的な対応が必要である。先般、集落地域整備法が国会を通過したが、この法律も理念的には混在を指向することがうたわれているが現実的対応は未解決の状況である。

4、まとめ

本章では、欧米におけるハウードの田園都市論の前後の都市－農村系の系譜、日本における近世から現代の混住化現象に至るまでの都市－農村関係の系譜についてみてきた。

以上のおおよその検討からもわかるように、欧米及び日本のどちらにおいてもハウードの果たした影響は大きい。前述したようにハウードの業績は、①時代的な計画の必要性に極めて適合していたこと。②ハウード以前の成果を統合することで自分自身の創造性を発揮したこと。③彼の田園都市論そのものが、単なる理論の書でなく具体的でフィージビリティがあったこと。④彼以上に彼の後継者たちが方法論的な面で理論化を進め、結果的にハウードの田園都市論を展開し近代都市計画の先駆的役割を果たしたこと。⑤レッチワースとウェルウィンという2つの田園都市が実際に建設されたこと。

の5点に集約できる。しかし、彼の理論はレッチワースの実際の建設に当たり、①工業の発展に対する予測が不十分で工場地域の計画がうまくいかなかったこと。②他の農業地帯との競合関係により、農業地の大部分が果樹園や牧場とされ、期待した近郊野菜の栽培が行われなかったこと。など具体的な欠点も露呈しているが、これらの欠点を発生させる原因ともなったもっとも基本的な点で欠けていた視座は、第一に結果としてロンドンの衛星都市のようになり、孤立封鎖的社会を想定していたために大都市との地理的關係を推定できなかつたこと。第二に都市と農村の關係を単なる平面的な地域關係として捉えて空間的に統合したために、都市と農村の構造的な社會關係を読み取れず生産と分配の方式をそのままにしながら、住という消費の方式だけを変えようとしたものであつたこと。の2点である。ハワード以降ではゲデスの成果が注目される。ハワードの田園都市論が全くの新しい都市に人口移住を進めるのに対して、ゲデスは地域とのかかわりを強調し、コミュニティと職業の關係・歴史性と社會環境の果たす役割など多次元に分析している。そこには、計画に先立って分析を重視する立場・地域のストックを生かし、人間と環境系を重視する立場が読み取れる。

その後の田園都市計画は、産業の効率化が図られたため職住分離が進み居住地だけのニュータウン開発がすすんだ。住宅地だけのコ

コミュニティ開発という面では、様々な計画論、洗練された計画案が輩出し、そこにおいては、コミュニティの形成は計画されたが職住一体のバランスの取れた計画論としてはハワードから後退し、また調査分析が重視されたことを除いてゲデスの理論もほとんど生かされていない。

日本における都市－農村の関係は、近世の場合は、近郊農村から都市に移住する例、農村部が市街地に組み込まれる例（町場化）が観察される。また、都市自体にも多くの農民がおり、西欧の都市とは異なり都市と農村は一体的なものとして捉えられていた。

田園都市が日本に紹介されるにあたって、当時、新都市を建設することと既存農村に都市的要素を取り入れることの2案が考えられていた。既存農村を田園都市にするような発想はハワードにはないことから、単に田園都市論をそのまま取り入れるのではなく、我が国特有の受け止め方をしていたことがわかる。その時点において歴史的経過からみた都市と農村の関係、日本における国土条件を考えたときの新都市建設の困難さがよく認識されていたことが伺われる。また農村に都市住民を受け入れるにあたっては農民と都会の人々が新しいコミュニティをつくることの難しさや農村の自然環境に対する配慮も指摘されていた。この当時でもすでに、こうした都市と農村の一体性、地域ストックの活用、人間と環境系の関わりが意識さ

れていたことは、それが実現されなかったとはいえ今日の郊外化住宅、近郊農村のミニ開発などと比べて比較にならない程豊かな発想であった。しかし、その後の日本は工業の発展に伴い世界的趨勢と同様に産業の効率化が図られ 職住分離が進み居住地だけのニュータウン化がすすめられた。国土開発にもその発想が端的に表れており、1全総、新全総、3全総と徐々に農村の立場が重要視されてきたが依然として都市整備中心の国土開発であった。4全総にいたり初めて本格的に都市と農村を一体化した多極分散型の国土計画が歌われたのである。内務省の「田園都市」が刊行されてから80年であるが、都市と農村の関係はようやく当時の言葉を使えば「健全なる田園生活を尊重して、之に加味するに都市各般の文明事業を以てし益々農村の培養と其改良を図らんとすること」タイプの国土開発の計画がその途に付いたのである。しかしそれが単にユートピアを目指すだけで終わらないためには、都市と農村の特性を考慮したより具体的な手法が検討されなければならない。

以上、諸外国及び日本における都市と農村関係の系譜を概観してきたが、これらの結果から改めて本研究での基本的認識である ①均質化から個性化へむけた計画論の重視 ②実態分析とストック分析の組み合わせの重視 ③空間レベルの段階性 ④人間-環境系としての接近 の意義が再確認されるのである。

注

- 1) 参考文献* 1, p 6 参照。
- 2) 参考文献* 2 参照。
- 3) 参考文献* 3 の p 15 ~ 49 を要約した。
- 4) 参考文献* 4 参照。
- 5) 参考文献* 5 参照。
- 6) 参考文献* 6 参照。
- 7) Cities and Town Planning Exhibition
- 8) 参考文献* 3, p 89 ~ 91 参照。
- 9) 参考文献* 1, p 138 ~ 145, 参考文献* 7
- 10) 参考文献* 8, p 178 ~ 194 参照。
- 11) 参考文献* 1, p 20 に詳しい。
- 12) 原著は「田園都市」(1907年)であるが参考文献* 9 に再出版されている。
- 13) 参考文献* 9, p 348 参照。
- 14) 参考文献* 9, p 43 参照。
- 15) 参考文献* 3, p 101 参照。
- 16) 参考文献* 10, p 13 ~ p 154 参照。
- 17) 参考文献* 10, * 11, * 12等参照。

18) 参考文献 * 13参照。

参考文献

- * 1 渡辺善次郎、都市近郊農業史論、都市と農村の間、論創社
1983
- * 2 The Garden City, E.Haward (「明日の田園都市」長素
連訳、SD選書、1968)
- * 3 佐々木宏、コミュニティ計画の系譜、SD選書、1971
- * 4 L.Munford The City in History (「都市の文化」生田
勉、森田茂介訳)
- * 5 F.L.Wright, The Living City (「ライトの都市論」谷川
正己訳、1968)
- * 6 C.A.ペリー、近隣住区論・新しいコミュニティ計画のために、
鹿島出版会
- * 7 松本四郎、日本近世都市論、東京大学出版会、1983
- * 8 木村 礎、村の語る日本の歴史近世編②、そしえて文庫、
1983
- * 9 内務省地方局有志、田園都市と日本人、講談社学術文庫、
1980
- * 10 長瀬要石他、田園型社会の展望、筑波書房、1987
- * 11 石見 尚、日本型田園都市論、柏書房、1985

*12 根岸卓郎、新しい国づくりを目指して、春秋社、1985

*13 Howard Newby International Perspectives in Rural
Sociology.1978

*14 石見 尚、混住社会化にともなう農村集落の遷移過程、農業
経済研究、第49巻4号、1978

*15 菅原辰幸、混住社会化する農村地域開発のための基礎研究、
広島工業大学研究報告集、1979

*16 富田祥之、変貌する農村、現代のエスプリ・変貌する農村

補論B 混住化コミュニティと空間形成

補論B 混住化コミュニティと空間形成

1、混住化の空間認識と空間構造

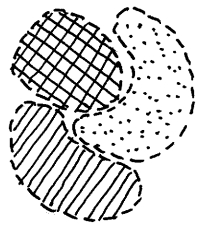
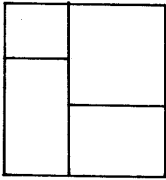
混住化を一つの混在現象と考えると、混在は異なる事象の組み合わせの状況として捉えることができる。混住地域の混在の状況を、空間と人間という2つの要素に分けたならば、人間対人間の関係、人間対空間の関係、空間対空間の関係、の3通りの組み合わせが考えられる。具体的にいうならば人間は新住民と旧住民、空間では都市的空間と農村的空間ということができるから、異質なものの組み合わせは①新住民対旧住民、②新住民対農村的空間、新住民対都市的空間、③農村的空間対都市的空間、ということになる。①の関係は一般にコミュニティとして捉えられるが、②や③の場合は、適当な用語は存在しない。ここで②の関係を「場」、③の関係を「接触空間」という名を与えることにすると、混住地域の計画にとってコミュニティ形成はもちろん、「場」や「接触空間」も重要な概念である。いずれも要素として都市的空間と農村的空間が関わってくる。ここで農村的空間と都市的空間の特質を考えてみよう。

農村的空間、都市的空間といってもそれはいろいろな意味を含ん

だ複合的な対立概念である。農村的空間で連想される概念は、伝統的・自然的・複合的等々、一方、都市的空間で連想される概念は、近代的・人工的・機能的等々があげられる。しかし、語彙の概念規定にとらわれずに、抽象レベルのままで空間構成を比較すると、本研究における空間構成の分析からも明らかなように農村的空間は、自然立地形態であり、自然環境（風土）や自然環境から派生した基礎的な社会環境（風俗）に強く影響をうけた形態を取る。結果的に自然的条件、基礎的な社会条件が空間形態を規定し、形態が風土・風俗（地域）の場所性を表すようになる。空間の単位は自然（例えば地形）の単位となり周辺に対して固有な識別性をもち、必然的に空間の領域が形成される。一方、都市的空間は、人工的機能的形態であり、空間は人為的につくられる。そのため空間は機能的になり機能的要件が空間形態を規定する。人間が構築する空間は自然的条件ほど多様性がないため空間は均質的になる。空間は人工的に意味付けられた単位に区切られ、境界も人為的に設定される（図B-1参照）。

ここで人間と空間の関係を捉えるために、空間に対する認識を仮設的に以下の4つに規定する。

①「私」⇒エゴイステイクな自己的空間としての認識。利益動機に支えられる。所有としての意識が強く働く。

	形態	特徴	空間規定条件	接触空間 (境界)
農村的空間		固有な識別性	自然的条件・基礎的社会条件によって場所が選択される	境界は連続的
都市的空間		均質性	空間が人為的・意図的に機能的意味を与えられ区切られる	境界は明確

図B-1 農村的空間と都市的空間

②「個」→パブリックの一部としての自己的空間としての認識。共
属動機に支えられる。使用としての意識が強く働く。

③「共」→共同化された意識の総体として、集団的人格をもった空
間認識。

④「公」→第3者から与えられたものとして、人格化していない空
間認識。

これらの空間認識の分類にしたがって農村的伝統的共同体的空間
の構造と都市的近代合理主義的空間の構造モデルを考えると、

農村的伝統的共同体的空間の構造→「個」と「共」で構成され、相
互に重なる部分がある。

都市的近代合理主義的空間の構造→「私」と「公」で構成され、相
互に重なることはない。

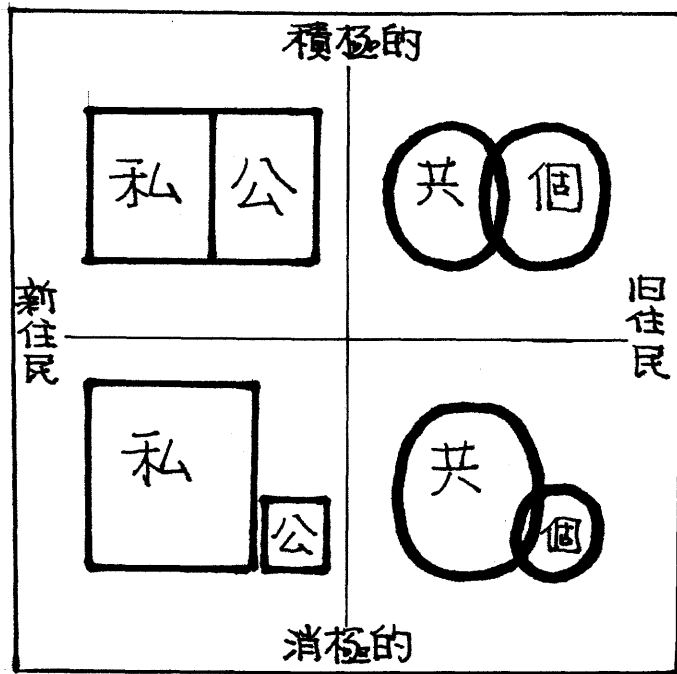
のように捉えることができる。これは空間認識と空間利用の関係か
らも確認される。旧住民が認識する農村的空間は「個」的認識で形
成される「個」的空間と、「共」的認識で形成される「共」的空間
によって構成されていると考えられる。旧住民は、「個」的空間で
は「個」的な利用のほかに「共」的な利用がなされ、「共」的な空
間では「共」的な利用のほかに「個」的な利用も行われる。一方、

新住民が認識する都市的空間では「私」的認識から形成される「私」的空間と「公」的認識から形成される「公」的空間で構成される。新住民は「私」的空間では「私」的利用は行うが、「公」的利用は行われない。「公」的空間は「公」的利用だけに限られる。例えば農村的空間では、農家住宅のような一つの「個」を考えてみても、それは私有のものでありながら、村人が集まるような場合があり、そのまま「共」的空間にもなる。反対に集落内のみちのような場合は、「共」的空間であっても、個人の農作業の場として使うような場合があり、「個」的空間になる。このように「個」と「共」が様々な空間レベルで重なり、未分化な状況が農村的空間構成の特徴である。都市的空間では、新住民の住宅を考えると、個人の住宅が公的な集まりの場になるようなことはほとんどない。反対に公民館のように「公」的空間は、個人の空間になることはなく、「公」と「私」が重合せず明確に別れていることが特徴である。このように空間認識の違いにより空間の利用形態は異なる。

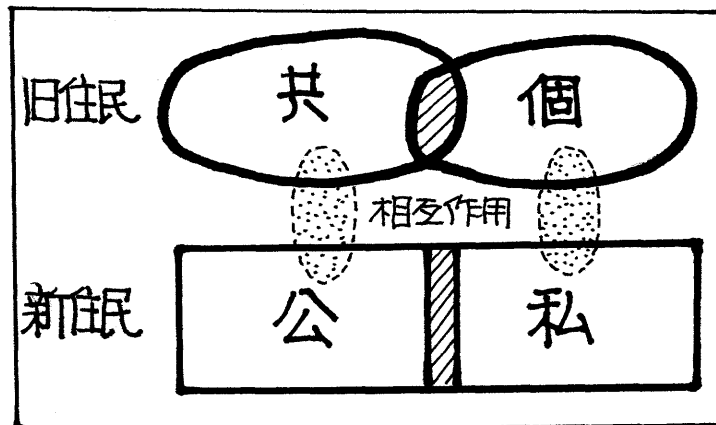
つぎに集団の社会性と空間認識の関係を考察するために、コミュニティ意識の分析によって得られた消極的－積極的の軸と、新住民－旧住民の居住者分類を用いて整理する(図B-2参照)。空間認識については空間の利用状況の傾向から総体的に判断する。

第1象限の「積極的・旧住民」の場合の空間認識は、「個」と「

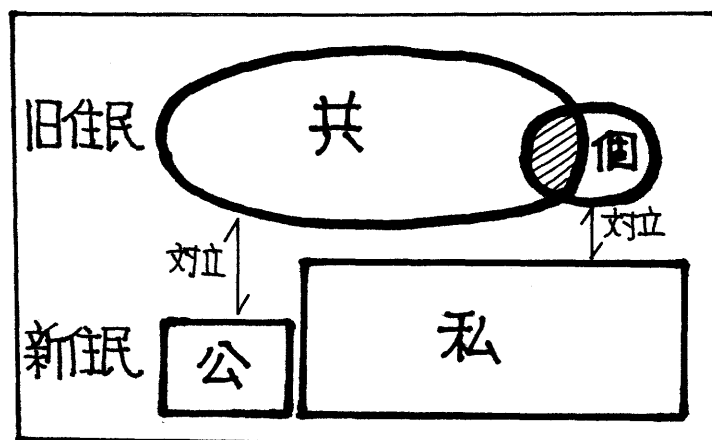
共」からなる。重合部分があるが柔軟に変化する。両方の関係は動的でバランスよく調和する。第2象限の「積極的・新住民」の場合では、「私」と「公」からなり、重合部分はなく明確にわかれる。両者の関係は、動的であり、「私」と「公」のバランスはとれている。第3象限の「消極的・新住民」の場合は、「私」と「公」からなり、「積極的・新住民」の場合と同じであるが両者の関係は異なり、「私」が拡大し「公」は縮小する。第4象限の「消極的・旧住民」の場合は、「個」と「共」からなるが、両者は静的関係となり、「共」が拡大し「個」は「共」の中に埋没するようなかたちとなる。実際には混住化は新旧住民が混在することであるから、空間認識も混在することになる。一般的には、新住民は、旧住民の「個」「共」空間がそのまま、「私」「公」的空間として認識され、反対に新住民の「私」「公」的空間が、旧住民には「個」「共」的空間として認識される。その結果、前者の場合は問題は少なく、むしろ新旧住民の関係がうまくいっている場合には、新住民は旧住民の「個」「共」のいずれに対しても開放的な印象を受ける。しかし、後者の場合には旧住民は新住民の「私」が開放的であることを当然と考え、「公」についても個人的利用に対しても開放することを当然と考える。その結果、新旧住民に意思の疎通がない場合には、新住民は不満を抱くようになり、旧住民も新住民が閉鎖的であり続けることに



図B-2 コミュニティ意識と空間認識



図B-3 (A) 新旧住民が積極的な場合



図B-3 (B) 新旧住民が消極的な場合

不満を抱き、結局、旧住民側の空間も新住民に対しては閉鎖的になるという図式である。しかし、それは集団の社会性によっては様相が異なる。図B-3(A)のように新旧住民とも積極的な場合には、上述の図式は若干異なる。すなわち旧住民の空間認識は「共」が弱まり「個」が強まる。一方、新住民では「私」が弱まり「公」が強まる。すなわちこのような場合には「個」と「私」、「共」と「公」の間に相互作用（すり合わせ）が行われる。「私」はコミュニティの連帯性が強まるにつれて「個」に近づき、「個」はプライバシーの獲得につれて「私」に近づくのである。「共」は平等性の高まりと調整の繁雑化につれて「公」に近づき、「公」は自立性が強まるにつれて「共」に近づくのである。その結果、新旧住民の空間認識は類似するようになり両者の関係は改善される方向に進む。図B-3(B)のように新旧住民が消極的である場合には、旧住民の「共」は強く「個」は弱い。新住民は「私」が強く「公」が弱い。両者はいずれも静的であるため、相互作用を及ぼすこともなく、空間の認識はまったく噛み合わない。

以上のようにコミュニティ意識のような集団の社会性が、空間の認識にも重要な影響を及ぼすことがわかる。

このように農村的空間と都市的空間では、実態としての空間構成・空間利用の形態・居住者の空間認識のいずれをみても、その構成

原理がまったく異なる。特にコミュニティ意識との関連でみたように集団の社会的状況により、空間に対する認識の程度が異なってくる。さらに、空間に対する認識が異なれば実際の空間利用も異なる。本論で示したような「集落類型」「むら柄」といった社会的類型の相違が直接に空間認識のパターン、ひいては空間の利用形態に大きく影響することがわかる。

以上、空間構成、空間の認識、空間利用の構造の基本的違いを理解することは混住地域の開発を進める上で極めて重要である。もしこのような相違点を理解することがなければ、たとえ、表面的に空間が整備されたとしても、それらは実際には居住者から受け入れられず、コミュニティにおける混乱、空間利用上の混乱を招くことにつながる。しかし、実際には、混住地域ではこれらの相矛盾するものが一体となるわけである。そのときに問題になるのは①最初からできるだけ矛盾が発生しにくい組み合わせを選ぶこと。②矛盾点のある組み合わせであってもそれを打ち消すような方策を考えること。の2点である。本論で想定している混住化は、あくまで農村地域に新住民が入ることを前提としており、また地域の固有なものを生かすことを基本的理念としている。そのためには農村側の固有性をよみとり、農村側に合わせた混住化を考えることが基本になる。本論では、社会的な立場に加え、空間的な立場から固有性を想定した。

またそれぞれの立場において、現状分析的な面とストック分析的な面を組み合わせ、類型化を設定している。これらの類型による組み合わせで、適切な組み合わせを検出することができ、また矛盾点がある場合においてもその問題点の把握に有効な手段になると考えられる。

2、混住化集落における空間的ストックの活用とコミュニティ形成

ここでは、本論で述べた空間構成の様々な側面を概括的にとらえ、それを開発し活用するための条件について考察する。

従来農村地域に新住民の住宅地が開発される時はほとんどが新住民側の条件だけで建設が進められてきた。そのような場合は集落側の持つ空間的ストックはほとんど生かされることがない。また、集落側の論理だけでは新旧住民が混在した形態は実現されない。そこでこれらの双方の視点を欠かさないためには新住民側の空間形態を評価する方法、旧住民側の空間形態を評価する方法の組み合わせによる評価が有効であると考えられる。

混住地域の環境計画を考えるには、これらの2つの面からの検討が必要である。そのために本論では、第一に新住民の空間形態による行動パターンや居住環境に対する評価を知るために、その指標として空間形態分類を考え、新住民の住宅群の集合状況によりそれら

の傾向が異なることを確認した。第二に旧住民側の空間ストックを評価する指標として集落形態が有効であることを確認した。

従来集落形態が論じられる場合は、画一的に散村、塊村あるいは山村、平地村といった農村内部の論理としての扱われ方が中心で混住化形態との関連性について論じられた例は少ない。混住化を考える場合、特に空間的許容量を知ることが最も重要な課題となってくるが、この場合空間的ストック利用の条件として基本となるのは自然環境条件と人工的ストックとしての集落既存の施設の条件であると考えられる。自然環境条件においては特に地形立地との関係が重要で、集落が発達した歴史的過程、なぜそのような地形が選択されたか、そしてその地形立地をどのように資源として活用してきたか等の歴史を読んだ上で可能な許容量と開発条件を見出すことが理想である。何故なら、農村の特性として生産ばかりではなく、生活環境においても自然環境を活用し生態系のバランスのうえで成立してきたものであり、それが最も基本となるストック活用の見本になるからである。人工的ストックでは、集落における特殊条件が大きいものであるが、空間的ストックの活用の観点からすれば、それらを画一的に整備することを考えることより、今ある資源をどのように活用していくか、どのような改良を加えたらより活用しやすくなるか、といった視点が考えられなければならない。また、これらの

空間ストックの活用は、空間だけの改良だけでは活用につながらない。前述したように、新住民集団と「むら柄」の相性を考えた上でそれらがいかなるセッティングのもとにコミュニティ形成が可能であるかという点を把握した上で、空間の使われ方をセッティングする必要があると考えられる。集落形態はこれらの諸条件を総合的にしかも簡便に把握するためには有効な指標となるのである。

次に、コミュニティ形成のための空間のしつらえについて述べる。空間には様々なレベルが存在する。以上述べたように、集落全体のレベルで語るだけでなく様々なレベルからの検討が必要である。本論ではそれぞれのレベルの評価の方法については言及していないが、ここではレベルを住宅レベル・敷地レベル・宅地回りレベル・集落レベルの4段階に分けて空間のしつらえを考え、問題の存在を確認する。図B-4は、4つのレベルにおいて農家とミニ開発の新住民住宅を比較したものである。図ではそれぞれのレベルのなかでは、両者のスケールをほぼ合わせている。空間レベルでは、まず規模による違いが顕著であるが、空間の要素にはそれ程大きな違いはない。コミュニティ形成のためのしつらえを比較してみると次のような点があげられる。

① 農家の間取りが開放的であるのに対してミニ開発住宅では固定的、閉鎖的傾向が顕著である。

	旧住民の空間	新住民の空間
住宅レベル		
敷地レベル		
宅地まわりレベル		
集落レベル		

図B-4 各空間レベルにおける新旧住民空間の比較

②農家では、土間、縁側、表座敷などのコミュニケーションのしつ
らえが段階的に見られるが、ミニ開発住宅では画一的な応接間があ
るていどである。

③敷地レベル、宅地回りレベルでは、農家では隣地との境界が開放
的であり、宅地の裏側も裏道でつながりコミュニティ形成の場を提
供する。ミニ開発住宅では住宅は極めて近接して建設されているも
ののその空間は壁と壁に挟まれた空間であり閉鎖的である。敷地境
界はブロック塀などで固定的に仕切られておりそれぞれの宅地を前
面の道路でのみつながるだけである。

3、宅地開発パターンとコミュニティ形成

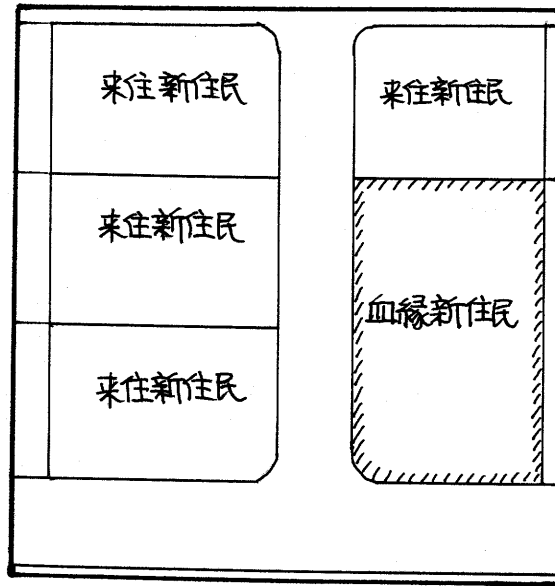
ここでは宅地開発パターンとコミュニティの関係について考察す
る。

はじめに土地売買を通じての住民交流に注目する。農地や林地が
地主の手から離れて住民のものになるプロセスとして2つの場合が
考えられる。一つは土地の売買が直接、地主と新住民の間でなされ
た場合で、もう一つは地主と新住民の間に土地ブローカー、開発業
者等の中間業者が介在する場合である。前者では、新旧住民が直接
面接し、相互に知り合うため、事前に集落のしきたりなども新住民
に伝わりやすく、新住民にとっては来住時に戸惑うことが比較的少

なく、また、元地主に相談をもちかけやすいため、地主との関係が新旧住民交流の萌芽となる場合がある。。しかし、後者では、中間業者が複雑に入り込む程、購入者である新住民と地主が接触する機会がなくなり、新住民は地主が誰であるか分からず、地主側も誰に売られたのかを知ることが殆どできない。また、新住民に中間業者から集落のしきたりなどの情報が伝わることもないため、相互に無知と無理解に陥りやすく、土地を介在した新旧住民の交流は殆ど期待できない。現実には、旧住民にとって購入者の情報を把握するのが難しいことから直接土地を売買することは稀である。そのことが一層、新旧住民の交流の機会をなくし、トラブルを招くことにつながっている。また、旧住民、特に農家の場合においては、土地を売却する行為その物が恥じるべき行為であるとする意識が強く、一度、他の手に渡ると元地主が誰であるかと言うようなことは殆ど知ることができず、土地を介在とした交流はますます不可能になる。

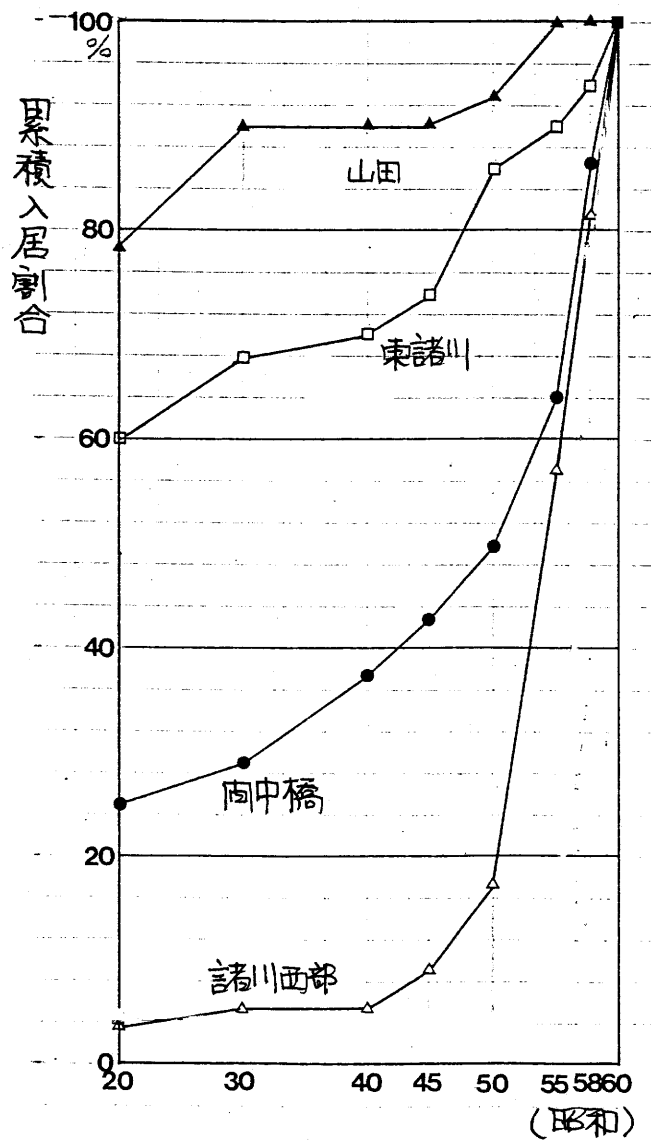
血縁新住民の果たす役割については、血縁新住民住宅を建設するときに、宅地の周辺を来住新住民に、その収入の一部を血縁新住民の建設資金にしている例がみられる。この場合、血縁新住民と来住新住民の交流が契機となって元地主である旧住民との交流が始まっている例も見られる（図B-5）。

次に宅地開発の速度とコミュニティとの関係について考察する。



図B-5

血縁新住民と来住新住民を組み合わせた例 (高山集落)



図B-6 累積入居割合

宅地開発速度はアンケート調査による入居時期の項目で得られた資料を用いる。図B-6に集落別の累積入居割合を示した。諸川西部は、もともとの集落形態は散居村であったが、昭和50～54年にかけて急激に戸数の増加が見られ開発速度は最も速い。急激な宅地化が進んだことにより現在では元の集落形態は読み取れない。新旧住民の関係は前述したようにこの集落は旧住民の新住民に対する支配構造が顕著であることが確認されている。間中橋も散居村であるが50年以降は急激な増加を見せるが50～54年、55～57年、58年以降でみると15～20%で段階的な増加傾向になっており、諸川西部と異なり旧住民の戸数が多かったこともあり40年代では緩やかに50年代にはいると段階的に宅地化が進んでいったことを示している。この集落は新旧住民の関係が比較的良好な関係を保っており、開発速度だけがその要因であるとは断定できないが開発が段階的であったために新旧住民がなじんでいく時間的ゆとりがあったことも大きく影響していると考えられる。東諸川と山田の変化は類似しており、ゆっくりと新住民の開発が進んでいった。どちらも集落形態は塊村で住民構成の多くは戦前から居住する旧住民で占められている。新旧住民の関係は山田、東諸川のどちらも問題を生じている。以上のように宅地開発の速度を新旧住民との関係から観察すると、散居村のような場合は開発速度がコミュニティ形成にも

影響し、急激な開発は旧住民との摩擦を招きやすい。しかし塊村のような場合には、開発速度が急激でなくても新住民の来住そのものが直接、新旧住民の関係を緊張させることにつながると考えられる。散居型の集落では開発速度が遅い場合には集落自体に空間的広がりがあるために新住民が個別に少しずつ入ってくるという印象を受けやすい。しかし、塊村の場合は、新住民を受け入れる空間が少なく住居が密集していることから、たとえ少ない新住民の来住であってもかなりまとまった集団としての印象を受けやすい。これらの印象が新旧住民の関係にも何らかの影響を与えるものと考えられる。

付録資料

① 調査地域概要

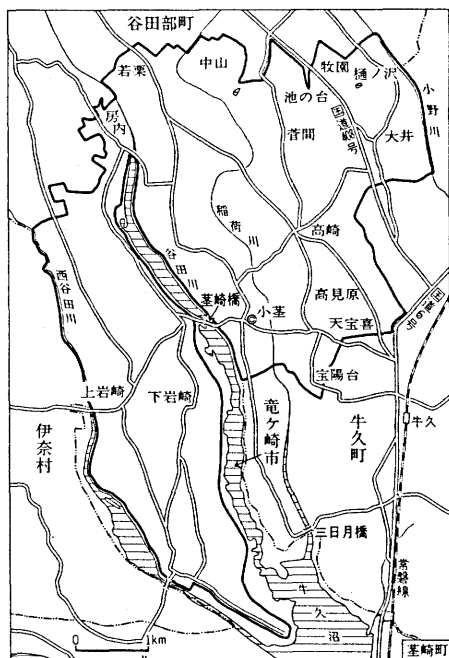
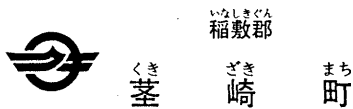
- 荃崎町の現況と沿革
- 三和町の現況と沿革

② アンケート調査票

- 対象集落選定のための調査票
- コミュニティ把握のための調査票
- 集落の社会的体質把握のための調査票

③ 調査データ

- 「コミュニティ調査」プログラム
- 「コミュニティ調査」データ



現況

〔成立〕昭和58年(1983)1月1日、荖崎村に町制施行して成立〔面積〕27.88km²〔人口〕1万6,856人〔地形図〕土浦・龍ヶ崎〔町役場〕〒300-12 茨城県稲敷郡荖崎町大字小荖288番地〔町名の由来〕明治22年の合併の際、比較的大きかった小荖・高崎・上岩崎・下岩崎各村の村名を折衷したことによる。

立地

稲敷台地と牛久沼 県の南部、稲敷郡の最西端に位置し、東は牛久町、西は筑波郡伊奈村、南は竜ヶ崎、北は筑波郡谷田部に接する。中央部を谷田川(東谷田川)、西端を西谷田川が南流して牛久沼に注ぐ。稲敷台地に含まれ、東部は標高24mの高見原の平坦地からなり、近年宅地開発や工場の進出など都市化が進んでいる。牛久沼と谷田川・西谷田川に囲まれた南西部は水田が開かれ、米・蔬菜類が生産されている。牛久沼沿岸の耕地は県営土地改良事業として特殊圃場整備が行われた。北部は筑波研究学園都市地域に入り、開発が進められている。

沿革

〔原始・古代〕小山台貝塚 牛久沼の西岸と北岸の台地上には縄文時代の遺跡が多い。牛久沼西岸には、庄兵衛新田遺跡・ノ切遺跡・館山貝塚・千泥貝塚・上岩崎貝塚・小山台貝塚がある。北岸の台地上には、天寶喜西遺跡・孝学寺遺跡・高見原遺跡・同A遺跡・小荖北遺跡・小荖貝塚などがある。このうち小山台貝塚は下岩崎の西谷田川に面する台地上にあり、昭和49年に発掘調査が行われた。先土器時代のフレイクや縄文前期から後期にかけての遺物の出土をみている。竪穴住居跡34、人骨33個体、シカ・イノシシなどの骨、縄文前・中期の土器が多数出土した。弥生時代の遺跡には、九万坪遺跡・小荖南遺跡・下大井遺跡があり、竪穴住居跡や土器も発見されている。古墳は、小野川右岸の大井地区の五十塚古墳群に前方後円墳2基・円墳11基がある。牛久沼沿岸の台地に、下岩崎古墳群・稲荷様古墳・宮本古墳群・郷中塚古墳群・稲荷山古墳群がある。小荖の稲荷山古墳群(円墳5基)からは埴輪・直刀が出土している。六斗遺跡や大井遺跡では土師器や須恵器が出土する。なお、律令制下の当町域は常陸国河内郡に属し、「和名抄」に見える河内郷に比定される。

〔中世〕大井荘 中世に入ると当町東域には大井荘が立荘される。弘安2年(1279)の田文には「大井庄 七十二丁一段」とあり、ほかに公田として大井・小荖が見える(税所文書)。嘉元4年(1306)の田文にも大井荘は「河内郡内也」として同数値で記載されている(所三男氏所蔵文書)。大井荘は河内郡の北部から菅間郷、大井のあたりに存在したと推定されるが、成立や支配など不明な点が多い。

泊崎城 牛久沼に突き出た泊崎の丘に、応永3年(1396)小田治朝の子岡野宮内少輔康朝が泊崎城を築いたという。昭和54年の発掘調査により内濠・外濠・土塁に囲まれた連郭式の平山城で、本丸跡・濠・土塁などが解明された。康朝は山城国の貴布禰神社を勧請して下岩崎の貴船神社を創建したと伝える。

岡見氏の居城 戦国期になると、牛久・足高(伊奈村)・谷田部に勢力を有した岡見氏が当町域をも支配した。泊崎城には只越入道善久、高崎城には佐野内善、若栗城には栗林義長が入った。岡見氏は小田原の北条氏と結んだ小田氏の麾下にあったが、天正18年(1590)までにいずれも佐竹氏に滅ぼされている。

〔近世〕江戸期の村々 慶長7年(1602)、佐竹氏が秋田に移封となり、当町域はほぼ幕府領となった。「天保郷帳」には、上岩崎・下岩崎・房内・天寶喜・小荖・若栗・菅間・樋沢(樋ノ沢)・大井・高崎の10か村が見える。ほかに庄兵衛新田の一部も含まれていた。「旧高簿」によれば、大井村は上大井村・下大井村とあり、房内新田(房内村のうち)・中山村(若栗村のうち)が見え、房内・小荖など8か村が谷田部藩領、天寶喜・高崎の2か村が牛久藩領、上岩崎・菅間の2か村が旗本知行地、下岩崎村は上野前橋藩と旗本の相給、庄兵衛新田は前橋藩領であった。

牛久宿定助郷 天寶喜・高崎・小荖・六斗蒔(小荖村のうち)の4か村は、水戸街道牛久宿の定助郷を課

せられた。助郷高は天寶喜村80石・高崎村154石・小荖村93石・六斗蒔村17石であった。また大井村・若栗村は加助郷村であった。文化元年(1804)の牛久宿助郷一揆に、若栗村・菅間村・上大井村・下大井村が参加し、過料を取られている。

老中駕籠訴事件 天保6年(1835)から7年にかけて秣場入会争論が起こった。牛久藩領小荖村・高崎村・天寶喜村・六斗蒔村の4か村の入会秣場(草刈場)の秣採取権をめぐる、天寶喜村が他の3か村を相手取って牛久藩に訴え出たが却下されたため、老中への駕籠訴を断行した。文政3年(1820)の4か村の約定では非常時の備えと窮民の救済にす目的で、稲荷原などの入会地の立木を売り、それを元金にして21年目から関係4か村へ1割の利息で貸し付け、立木伐採跡地は4か村の入会草刈場と決められた。ところが高崎・小荖・六斗蒔の3か村はこの約定を無視し、藩役人となれあい、立木を伐採して売却した。天寶喜村では、天保6年10月小前惣代儀兵衛が老中水野忠邦に駕籠訴に及んだが、訴えは無視され儀兵衛は村預の処分を受けた。翌7年2月平次郎が駕籠訴、これも黙殺され、さらに3月儀兵衛が再び駕籠訴したが、捕えられ入牢、続いて源右衛門が駕籠訴、ようやく訴願は取り上げられ、天保8年10月4か村の間で示談が成立した。

勤王志士建部建一郎 文久3年(1863)京都で起こった足利3代將軍木像梟首事件に小荖村の建部建一郎が参加した。建部建一郎は、小荖村で代々酒造業を営み、組頭を勤めた中村家に生まれ、国学を学んで尊王攘夷運動に加わっている。

月読神社と念向寺 樋ノ沢の月読神社は天慶8年(945)の建立と伝え、平将門の護持仏勢至菩薩を本尊とし、神仏習合で護摩修行も行われていた。明治の神仏分離令により月読神社と改め、16か村の村社となった。若栗の時宗智光山定正院念向寺の創建は大同元年(806)と伝え、天正年間(1595)に岡見氏・多賀谷氏の戦いに遭い焼失、文禄4年(1595)に再建された。下岩崎の曹洞宗岩崎山守徳寺は天文3年(1534)岩崎勘解由が開基と伝え、岩崎氏滅亡後は牛久に入った由良氏の菩提寺となっている。大井に残る天明2年(1782)と同4年の石碑のうち4年のものには「奉十九夜講中、男女八十五人」と刻まれ、天明の大飢饉の餓死者の成仏を願って建立されたものと思われる。

〔近現代〕 行政区画の変遷 明治維新後、当町域の旗本知行地は安房上総知事事の管轄を経て明治2年宮谷谷県となるが、のち上岩崎村・菅間村・下岩崎村（一部）は谷田部藩に編入。同3年支配地の遠近統廃合により樋ノ沢村は土浦藩領となり、同じころ房内新田は宮谷県、小荖村は牛久藩に編入。同4年1月谷田部藩は藩庁を下野島茂木郷に移し、茂木藩となる。同年7月土浦藩領・茨木藩領・牛久藩領・前橋藩領はそれぞれ土浦県・茂木県・牛久県・前橋県の所屬となり、同年11月町域はすべて新治谷県所屬となる。同8年茨城県に編入され、大区小区制の改正で第9大区6～7小区に属し、同17年の改正連合村では牛久村・高崎村・赤塚村の各連合村に所屬。同22年市制町村制施行により上岩崎・下岩崎・房内・天宝喜・小荖・若栗・菅間・樋ノ沢・大井・高崎の10か村と庄

兵衛新田の一部が合併して河内郡荖崎村となる。同29年郡界変更により稲敷郡に所屬。昭和58年町制施行により荖崎町となる。

高見原開拓と牛久沼干拓事業 明治28年、筑波郡谷原村の草間喜右衛門は、高崎の東部、高見原の原野を開墾した。事業は関文太郎に引き継がれ、入植者も多く耕地・宅地の造成が進んだ。小荖高下から六斗時下の牛久沼の干拓事業は、昭和20年から同24年にかけて株木政一・佐々木喜二郎らの手で進められ、水田38haが造成された。

農村と学園都市の調和 当町の主産業は農業が中心であり、水稻・麦・甘藷栽培から、落花生・蔬菜・果実の園芸農業に変わってきた。スイカ・白菜は県内でも有数の産地となっている。近年都市化の傾向が著しく、農業のほか牛久町に接する東部に宅地・工場が進出している。牛久沼沿岸の耕地は特殊圃場整備が行われている。昭和36年農業センター、同37年日本農業研究所、さらに農林水産省の林業試験所や畜産試験場も設立された。北部は筑波研究学園都市の建設地に含まれており、農村と学園都市との調和が図られている。

史跡・文化財・文化施設

県文化財に絹本著色蓮系織串六字名号（若栗、念向寺）がある。

あまほうき 天宝喜 千300-12〔世帯〕171〔人口〕698 ▷町の南東部。東は牛久町に接する。稲作・スイカ栽培を主とする農業地域。東部の明神地区は国鉄常磐線牛久駅（牛久町）に近く近年宅地開発が進んでいる。中央部を主要地方道牛久守谷線が東西に、東縁を県道谷田部牛久線が南北に通じる。電子機器の日本メクトロンや殿島神社がある。

あまほうき 天宝喜〈荖崎町〉

稲荷川中流左岸の台地に位置する。縄文時代の天宝喜貝塚・天宝喜西遺跡・天宝喜C遺跡がある。

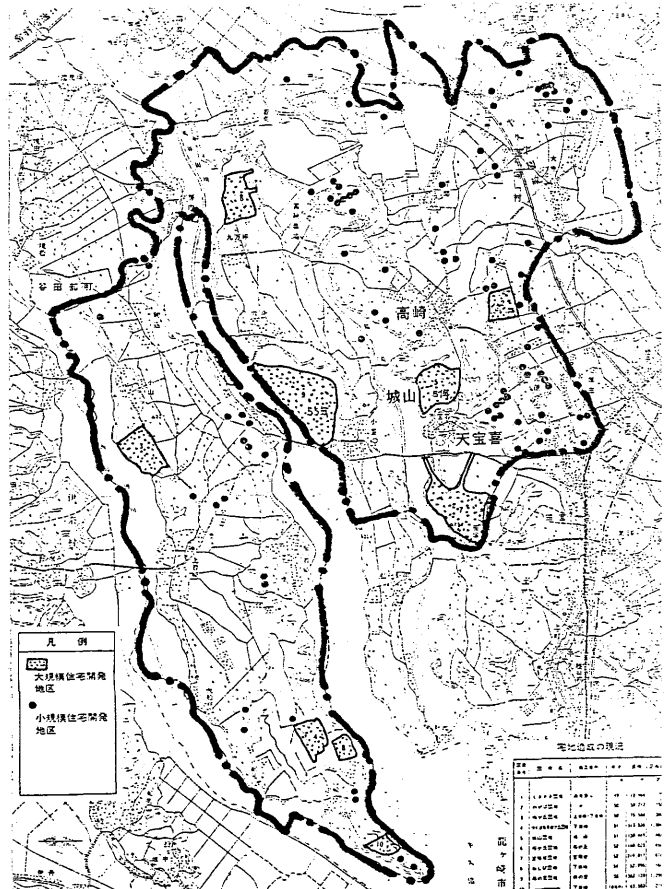
〔近世〕 天宝喜村 江戸期～明治22年の村名。常陸国河内郡のうち。元禄年間・幕末期ともに牛久藩領。村高は、「元禄郷帳」117石余、「天保郷帳」118石余、「旧高簿」148石余。牛久宿の助郷村で助郷高は80石、ただし、文化2年から文政10年までの助郷高は65石（茨城百姓一揆）。天保6～7年にかけて牛久藩領の高崎・小荖・六斗時（小荖村のうち）の3か村は当村と入会株場の採取権をめぐる争っていたが、ついに当村の百姓は3か村を相手どって老中に駕籠訴し、天保8年4か村で示談が成立。物成米は文化元年166俵、文政10年164俵余。元和年間創建の殿島神社がある。明治8年茨城県、同11年河内郡に所屬。明治22年荖崎村の大字となる。

〔近代〕 天宝喜 明治22年～現在の大字名。はじめ荖崎村、昭和58年からは荖崎町の大字。明治24年の戸数33・人口187、厩14。昭和50年一部が宝陽台となる。

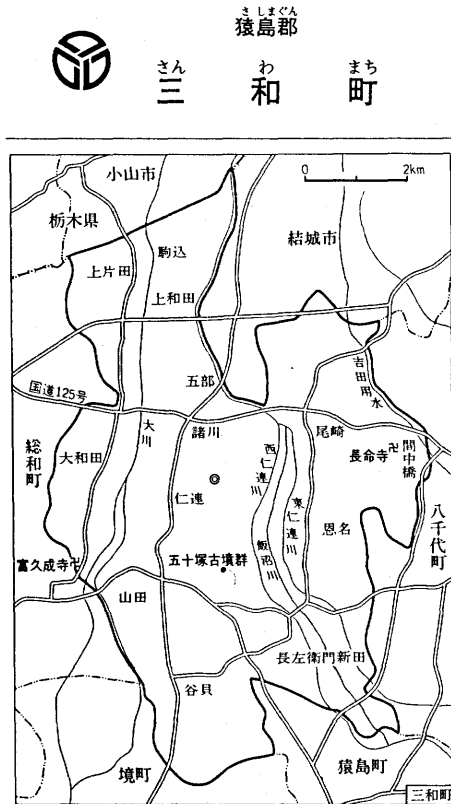
たかさき 高崎 千300-12〔世帯〕1,234〔人口〕4,544 ▷町の東部。東は牛久町に接する。住宅・商店が混在する農業地域。南東縁を国道6号が南北にかすめ、同道から分岐した県道館野牛久線が東部を北上し、県道谷田部牛久線が北西に向かう。また北東端を国道408号が南北に通る。東部の高見原は近年宅地開発が進み、人口が急増している。荖崎第一小学校・荖崎高崎郵便局・高崎公民館・日本農業研究所・共立商事中央研究所・八坂神社・曹洞宗孝学院・延命地藏堂・高崎城跡がある。

しろやま 城山 千300-12〔世帯〕410〔人口〕154 1▷町の南東部。新興住宅地域。稲荷川左岸の台地に立地する。

開発現況図



● 三和町の現況と沿革



現況

〔成立〕昭和44年(1969)1月1日、三和村に町制施行して成立〔面積〕50.16km²〔人口〕2万4,701人〔地形図〕小山・水海道〔町役場〕〒306-01 茨城県猿島郡三和町大字仁連2065番地〔町名の由来〕昭和30年に三和村が成立した際、旧3か村が融和提携して新村を建設しようという意味をこめて命名。

立地

アンテナの立つ台地と谷田 県の西部、北関東の平野部に位置し、西は総和町、南は境町・猿島町、東は結城郡八千代町、北は結城市および栃木県小山市に接する。集落の散在する台地は北部で標高23m、南部で17m前後。北上する飯沼跡(現在水田)東の結城台地と西の猿島台地に二分され、それぞれの台地に南から飯沼支谷・長井戸支谷(ともに現在水田)が深く侵入する。台地上の下尾崎・東山田には国際電信電話会社の送信所があり、海外向け送信用のアンテナが林立する。江戸期には飯沼干拓事業の一環として、吉田用水・東仁連川・飯沼川が開削され、その後西仁連川も開削された。特に東を流れる吉田用水は県西最大の用水で、当町を含む3市4町の水田に水を引く。町の中央やや北部を東西に国道125号が貫通し、国鉄東北本線古河駅まで西へ約10kmの農村地帯。明治期境河岸が活気を失うまでは日光東街道を中心に南北交通もにぎわった。現在は主要地方道結城野田線となり、諸川で国道125号と交差する。東京から50km圏にあるため、自動車輸送の発達に伴い近郊農業化が進み、台地上では白菜・スイカ・メロンをはじめとする施設園芸が盛ん。近年、古河・総和工業地域のベッドタウン化の傾向が一段と進み、分譲住宅の建築とそれに伴う生活環境の整備、小・中学校の増改築などが緊急の課題となっている。

沿革

〔原始・古代〕破壊された遺跡群 東仁連川東岸台地上には、尾崎本田山・尾崎大日社付近から結城郡石下町鴻ノ山に至る数kmに及ぶ縄文時代から古墳時代の遺跡群があったが、高度成長期の採土と東仁連川改修工事によって大半が破壊された。この中で、わずかに破壊から取り残された部分を

中心に、昭和54年夏に北下山遺跡(恩名)の発掘調査が実施された。縄文時代から古墳時代に至る住居跡4・墓跡4が確認され、切小玉・勾玉・耳飾り・石斧、多数の黒曜石の鎌を含む石器と各期にわたる多くの土器を出土した(三和町文化財調査報告1)。昭和46年から翌47年にかけて、国道4号のバイパス工事に関連して緊急発掘調査が行われた二十五里寺遺跡(大和田)でも、縄文後期から弥生時代にかけての住居跡が確認され、石鎌・石斧・石錘・石皿・石棒・独鈷石などの石器多数と、後期から晩期にわたる縄文土器が多数出土した(総和町道沢氏報告書)。西仁連川西岸台地上の五十塚古墳群(東山田)は昭和25年5月当時には23基が残存していたが、現在は2基を残すのみである。尾崎本田山・大日社古墳群も1基を残すにすぎない。そのほか、縄文中期から晩期の遺跡4か所、弥生時代の遺跡(縄文時代との複合を含む)6か所、古墳時代の遺跡9か所が確認されている(三和郷土史ほか)。

古墳群・製鉄遺跡と将門伝説 広河之江(のちの飯沼)北部には五十塚古墳群(東山田)、尾崎本田山・大日社古墳群(尾崎)、七五三場(結城市)南部舌状台地(現在採土のため破壊)上の古墳など、後期と考えられる古墳があった。また新立(恩名)・大網(東山田)には、かなくそ山とよばれる鉄滓を出土する製鉄遺跡がある。律令制下の当町域は、下総国猿嶋郡に属し、「和名抄」に見える八侯郷に比定される。「下総国旧事考」によれば、八侯郷は八侯郷で現在の東山田・北山田・谷貝を含む地域(旧八侯村)に比定され、ほかに余戸郷を仁連御辺・諸川五部に比定している。また「延喜式」兵部省に見える本島鳥牧を駒込に比定している。

承平7年(937)8月、平将門は下大方郷堀越(堀津)の渡(現八千代町仁江戸)で伯父良兼軍に大敗し、「陸閑の岸」に一両日隠れたが、ここが平塚六軒(八千代町)に比定され、隣接する恩名の台地南端部にあった「君の御前塚」は将門の妻ゆかりの遺跡と伝えられる。尾崎の倉本家には「本皇」と大書した職が伝存し、江戸期の国学者色川三中也も注目している。

諸川城と山田城 下河辺氏の分流幸島四郎行時以来、幸島氏が幸島荘司で、寛元2年(1244)幸島次郎時村の時、源頼朝の配下に入った。正応4年(1291)には、谷貝の遍照寺はすでに存在していたらしく、この年に建てられた板碑(三和町最古)や元弘2年(1332)・永和3年(1377)銘のものが境内にある。嘉元元年(1303)、大輪田(大和田)の地頭児矢野公重は日蓮の孫弟子日尊に帰依して福城寺(現富久成寺)を建て、その大檀越となったという(北下総地方史)。永享12年(1440)からの結城合戦では諸川城主甘露寺信濃守が戦死している。また天文23年(1554)3月小山朝政が柳橋城に拠る柳橋豊前を攻めた柳橋合戦には山田城主山田大蔵忠政が麾下として戦っている(東国開戦見聞私記)。山田氏は山田と矢貝(谷貝)を支配し、山田の曹洞宗久昌院は、もと城内にあったと伝えられる(三和郷土史)。戦国末期には当町域は古河公方領となり、小田原北条氏の勢力との拠点となった。天正2年(1574)の芳春院周興・昌寿連署書状写に、谷貝・山田・仁連・五部・片田の各郷が見える(喜連川家料所記)。この頃から北条氏の支配するところとなった。戦国期の板碑としては、天文7年または同10年といわれる久昌院境内の「二十一仏板碑」があるが、武蔵型板碑分布圏の最北端に位置するといわれ注目される。これは山王権現に対する強い信仰を示すものと考えられ、五霞村の本寺東昌寺が山王山と号するのと符合するものといわれる。天正18年小田原北条氏が滅びると、豊臣秀吉は同年9月に山川晴重に大和田・駒込・諸川・尾崎・仁連・山田・恩名の幸島郷内の各村を充行っている(越前山川文書)。

〔近世〕江戸期の村々 佐竹氏の秋田移封後、当町域は幕府領となる。享保2年(1717)の支配関係は、下片田・大和田・新和田・山田の4か村が下野野王生藩領、上片田・北山田・東山田・谷貝の4か村が関宿藩領、駒込村が古河藩領、仁連村が山川藩領、ほかは幕府領・旗本知行地であった(壬生藩充領地目録・仁連村年貢割付状)。「天保郷帳」に見える当町域の村々は、猿島郡の諸川・五部・上片田・下片田・大和田・上和田・駒籠(駒込)・新和田・仁連・北山田・山田・東山田・長左衛門新田・谷貝、結城郡の恩名・恩名村新田・長左衛門新田・尾崎・尾崎村新田・江口新田の20か村を数えた。「旧高簿」では諸川・仁連・谷貝は町として見え、仁連町新田・東山田村新田・東山田村新田吉佐衛門受・下尾崎村(下尾崎村組・加下間組・下内組)・水口村新田などが加わる。支配関係は、五部・北山田の2か村が旗本知行地、下片田・大和田・山田・江口新田の4か村が壬生藩領、上片田・駒込の2か村が古河藩領、谷貝町が関宿藩領、上和田村が関宿藩と丹後峯山藩の相給、新和田村が幕府と壬生藩の相給、ほかは幕府領であった。

日光東街道 古河町から間々田宿(栃木県)を通過する日光街道に対して、江戸期を通じて境河岸から谷貝村・仁連村(仁連町)・諸川町を通過して、結城町から下野雀宮に至る日光東街道があった。同街道もかなりのにぎわいをみせ、谷貝宿の間屋初見家には諸大名が宿泊の際掲げた木札「松平周防守様宿」「土井大炊頭様御休」(文政2年)が残り、仁連宿の間屋鈴木家にも「松平伊豆守様御休」(寛政10年)、「井伊掃部頭様御休」(天保14年)がある。また諸川宿間屋村家には、この街道関係文書が伝存する。元禄13年(1700)3月、仁連町では日光東街道の人馬継立だけでも大変なところへ、「日光御通りに付、壬生飯塚町之詰伝馬」を仰せつけられ、とても出せないと惣百姓連印で「何方迄も御訴訟成され下さる可く候」と徹底交渉を依頼し、寛延3年(1750)にも「仁連町外四ヶ宿増助郷救免願」を出している。

飯沼千拓と新田の誕生(宝永3年(1706)7月、仁連町ほか16か村名主の連印で、飯沼開発についての取替証文が作成された。もとの悪水落し堀の途中から新しく堀を掘って、鬼怒川の悪水落し口を1里あまり下流に移そうという計画であったが、大口村など古堀周辺の村々からの強い反対で実現せず、結局、飯沼の開発は、享保7年(1722)岡田郡尾崎村(現八千代町)の名主左平太を中心とする18か村名主の運動から本格化する。享保9年幕府は紀州流の治水技術者井沢為永を派遣し、同10年正月から工事を始めて、13年には検地を終了。享保10年3月の絵図面上で分地された各村への面積のうち、東山田村は112町7反、仁連村は92町5反、恩名村は88町9反であった。しかし、工事費のために幕府から借用した1万両の返済は困難をきわめ、分地された水田を売り渡し、負担を肩代りする村も現われた。仁連町の場合は70町歩を野州間中村名主長左衛門に売却し、猿島郡長左衛門新田となり、残り26町歩は名主善右衛門の個人請新田となった(飯沼新発記)。これが名崎小学校東の通称千本嶽(字千本野)で、明治17年の参謀本部製作の2万分の1地形図には、「善右衛門新田」と見える。この時、渡呂賦原(渡呂)の中に長左衛門が買い取った27町歩が結城郡長左衛門新田(間中橋)である。同じ間中橋の水口村新田も宝暦4年(1754)には存在し(奉納御神灯銘)、享保期頃の開発と思われ、隣接する恩名村新田(間中橋)も享保期の開発であるから、これらは、享保10年7月に開削がなった吉田用水から取水して成立した新田であろう。同じ頃、渡呂賦原内に成立した新田に八千代町の弥四郎新田(のち成田新田)・大戸新田があり、前三者と合わせて「五新田」とよばれ、すべて幕府領であった。

新田の荒廃(天明3年(1783)浅間山の噴火と、それに続く天候異変は、農村への商品経済化の波及と相まって、潰百姓を多数生み出した。長左衛門新田福田家の「廢歷」によると、「天明年中信濃国浅間岳噴火シ、砂ヲ降ラシ塵ヲ飛バシ地ヲ埋ムル数寸……百姓モ飢寒ニ迫リ」とあり、夫婦親子は四方に離散してしまい、3、4戸を残すのみになってしまったという。開発後の最盛期には、戸数37・人数133であったというから、大変な荒廃ぶりであった。このため、長左衛門新田では寛政4年(1792)から翌5年にかけて、復興

のために、30人、23人と北陸農民の入百姓を迎え入れることになった。これは享保の開発時に続く、第2の大規模な入植政策であった。文化3年(1806)にはさらに、「人少にて手入行き届き兼ねると「越後より引越百姓」の世話を藤岡役所に嘆願している。そして、天保8年(1837)までの間に、19家・47人以上が入植したが、その大部分は天保初年の加賀藩領からの入植者であった(地方史研究142)。同様に、渡呂賦原内の五新田にも入植が行われた。また、幕府は心学の普及とその講談による教化にも力を入れた。寛政6年(1794)9月17日から翌18日まで、尾崎村万福寺では昼夜「心学御講談」を行い、尾崎村4組のほか、近隣の幕府領、旗本知行地から農民たちを多数かり出して、聴聞させている(八千代町兵庫田辺家文書)。

寄場組合と農民の抵抗 弘化2年(1845)8月、恩名村では弥平次騒立一件が起こった。組頭弥平次を指導者とする恩名村の百姓61人が無住の地福院に集合して、名主又兵衛の退役を要求した。又兵衛は江戸の勝田代官所へ連絡、やがて鎮圧され、弥平次は投獄された。しかし、百姓たちは3年後に組頭吉兵衛を頭にたち上り、翌6年又兵衛を退役し追いこんでしまった。その後又兵衛(長五郎)は憎悪吉に名主役を譲り、円二ほか数人の下人をつれて恩名村新田に隠居した(同志社大学経済学論叢5-4・6)。安政5年(1858)には尾崎村4組のうち下尾崎組でも、前の名主治郎右衛門の死去後、名主不正追及の村方騒動が起こっている。このような農民の活発な動きに、幕府は名主たちを関東取締出役下の取締組合村として位置づけ、治安の維持にあたってきた。諸川新宿大組合47か村には、諸川町・元尾崎組・水口村・菅谷村・瀬戸井村・新宿村・大木町の7小組合が置かれていた(北下総地方史)。しかし、元治元年(1864)の天狗党の乱の際は大惣代の三郎兵衛自身が、天狗党に資金の協力をしており、この頃になると幕府の支配機構そのものが空洞化しつつあった。それでも、9月に入ってから、水海道(水海道)方面から逃れて来た天狗残党を追いつめ、清水(東山田)の山林で1人捕え、山田村で2人、仁連町で1人、それぞれ討ちとっている(甲子見聞記)。天保9年(1838)農間渡世書上帳によると、恩名村の場合、日光東街道谷貝宿・仁連宿からもともに1里の距離にある純農村であったが、戸数97のうち、18戸が「農間商ひ並に諸職人渡世」をしており、それぞれ居酒渡世、煮売渡世、荒物小間物渡世、菓子打卸、穀物商売、傘拵商い、剣道稽古をしていた。

〔近現代〕行政区画の変遷 明治維新後、当町域の幕府領・旗本知行地は常陸知県事(結城郡)・下総知県事(猿島郡)の管轄を経て明治2年それぞれ若森県・葛飾県となる。同4年7月関宿藩領・峯山藩領・壬生藩領・古河藩領はそれぞれ関宿県・峯山県・壬生県・古河県所属。同年11月町域はすべて印旛郡、同6年千葉県を経て同8年茨城県に編入され、大区小区制の改正で第7大区4小区・第8大区1小区に属す。この間、仁連町新田は仁連町に合併。同14年江口新田を江口村と改称。同17年改正連合村では諸川町・谷貝町・水口村・田間村の各連合村に所属。同22年市制町村制施行により猿島郡幸島村(諸川・仁連の2町と五部・上和田・諸川新田・下片田・大和田・上片田・駒込・新和田の8か村)・八俣村(北山田・山田・東山田・長左衛門新田の4か村と谷貝町)、結城郡名崎村(恩名・長左衛門新田・水口村新田・尾崎村新田・江口・尾崎の6か村と現八千代町の1か村)が成立。昭和30年名崎村の一部を八千代町に編入。同年3か村が合併して猿島郡三和村となる。同44年町制施行、同日三和村と改称し現在に至る。

自由民権から郷有林奪還へ 新政府の画一的・強圧的な政策に対する民衆の不満が爆発したのが自由民権運動であった。明治13年2月15日、国会開設請願のための筑波山の会が開かれた。この中心になったのが、豊田郡の同舟社であったが、会合以後、県西を中心に請願運動が展開された。この運動の中で、猿島郡にも中山三郎を中心とした嗜鳴社(岩井市)、知久義之助らを中心とした茶話会(諸川)が結成された。しかし、知久義之助・斎藤万助・小林政助らを県会に送った以外は、みるべき成果はなく、自然消滅していく。これを引き継いで、大きな前進を示したのが、東山田郷有林松下げの行政訴訟であった。東山田村には、江戸期を通して「御林」と呼ばれた100町歩弱の

入会林があった。これが地租改正の際、国有財産に繰り入れられたので、払い下げるために農商務省を相手どり、行政訴訟を起こし、明治42年に勝訴した。この闘争で大きな役割を果たしたのは、東山田出身の衆議院議員初見八郎であった。初見八郎は中江兆民の仏学塾を卒業、自らもその教授となり、その後兆民が死ぬまで私淑した。

大地主村の出現と農地改革 明治10年代後半の松方デフレ政策以来、自由民権運動を支えてきた県西の豪農商層は、急速に寄生地主化し、自由民権運動から離れた。大正13年の農商務省調査による50町歩以上地主県内105人のうち、幸島村だけで7人を数え、県内有数の地主村となっていた。八俣村の1人は初見八郎を出した初見家であり、名崎村には1人もなかった。これらの地主を経済的に支えたのは飯沼北部、長井戸沼北部の水田地帯であった。しかし間欠的に起こる大洪水の被害は、小作農だけでなく、地主にとっても困ることであった。特に明治43年、昭和13年、同16年の出水は大被害をもたらした。このため、同18年より第2次大戦後にかけて、飯沼北部では幸江崎耕地整理組合を結成、工事にかかり、同24年完成をみた。しかし、組合長、評議員など指導的地位の者は、寄生地主が多かったため、やっと完成した美田を手離さなければならなかった。逆に勢いを得た小作農たちは幸島村では山林解放も要求し、同30年頃まで闘争は長びいた。この結果、幸島村では農地改革前の昭和16年に農家戸数1,036戸のうち、小作農・小自作農は合わせて642戸を超過していたが、改革後の同30年合併時の三和村は総農家数2,485戸で、小作農・小自作農合わせてわずかに124戸に激減している(県史市町村編Ⅱ)。

新しい地方文化を求めて このような中で、村や家の封建遺制の追及が課題として若者たちに意識され、「若菜」(名崎村)、「村」(幸島村)、「竹の子」(幸島村)、「流浪」(三和村)などの文化サークルが簇生した。それらの運動も、やがて高度経済成長期に入り、行きつまりをみせ、特に若者たちの農村離れが、それを決定的にした。この頃から神輿の出ない地区が多くなり、青年会さえ結成されないうちが多くなっていった。第2次大戦後の事件として昭和44年8月23日のたつまきがあげられる。突然東部の間中橋・加下間を襲ったたつまきは、一瞬のうちに全壊4戸・半壊18戸・負傷者6・被害世帯21を出して北へ走り去った。現在三和町は、総和・古河工業地域のベッドタウン化と首都圏の近郊農業地域として激しく変貌しつつある。

史跡・文化財・文化施設

県無形民俗文化財に三和祇園ばやしがある。

まなかぼし 間中橋 〒306-01〔世帯〕148〔人口〕856▷町の東端。東は南東流する吉田用水を境に八千代町に接する。水稲のほか、施設園芸によるメロン・スイカ・白菜などを栽培する農業地域。町内では長左衛門新田、尾崎北部の加下間とともに専業農家の多い地域であったが、現在は分譲住宅がちはじている。北部を国道125号が東西に貫通し、西へ約13kmで国鉄東北本線古河駅(古河市)、東へは吉田用水に架かる間中橋を渡って八千代町に至る。旧大字長左衛門新田に愛宕神社、旧大字尾崎新田北部に咳不動、南部に稲荷神社がある。中央部には、住民の大半が門徒であるため、明治末期に現在の総和町駒羽根から招致した浄土真宗本願寺派長命寺がある。

〔近代〕昭和30年～現在の大字名。はじめ三和村、昭和44年からは三和町の大字。もとは名崎村長左衛門新田・水口新田・尾崎新田。地名の由来は、吉田用水の対岸結城郡八千代町柏礼間にかかる間中橋が乗合バスの停留所であったことがあり、停留所名が自然にその付近一帯を指す地名として用いられていたことによる。明治期以来長左衛門新田・水口新田・恩名新田・成田新田・大戸新田は五新田と称され、同22年下結城村に編入された大戸新田を除いて四箇新田、また長左衛門新田・水口新田・恩名新田は三新田とよばれ「平間太鼓に大戸そば」のことわざも残るほど協調関係は強かった。農地改革後は町内最大の専業農家地域を形成している。

やまた 山田<三和町>

旧長井戸沼北部の支谷東岸の台地に位置する。西部の台地縁辺部に古い集落がある。北山田・東山田に対し大山田ともいう。古墳時代の古新田遺跡・十二塚古墳群がある。三河内・東ノ門・西ノ門・城正寺などの小字があり、山田館の名残を留めている。

〔古代〕八俣郷 平安期に見える郷名。「和名抄」下総国猿嶋郡七郷の1つ。八俣は八俣の誤りと考えられる。「新撰姓氏録」未定雑姓に「八俣部、百済国人多地多郎卿之後也」とあり、百済国の帰化人氏族八俣部との関連が想定される(地理志料)。「下総国史考」は「今大山田村<岩井ノ庄ト云フ>。東山田村。北山田村。谷貝村等ノ村アリ。是ナルベシ」とし、山田をヤマタといい、ヤマタといわないのは八俣としての読み方が残ったことによるという。「地名辞書」は、旧八俣村・逆井村・幸島村にあてる。三和町東山田に五十塚古墳群、同町山田に十二塚古墳群、同町仁連に八幡塚古墳、同町諸川に諸川八幡塚古墳、同町東諸川に大塚古墳群、同町上和田に遠宮古墳群、同町谷貝に五丁塚古墳、同町駒込に後円山古墳群などがある。現在の三和町一帯に比定される。

〔中世〕山太郷 戦国期に見える郷名。下総国上幸島郡のうち。天文24年と推定される3月6日の足利義氏充行状写に「改而為御恩賞、長谷郷、泉田郷、山太郷、同中里分指副被下之候」と見え(古文書/古河市史)、豊前左京亮に充行われている。天正2年と推定される12月2日の堺和康忠充芳春院周興・昌寿連署書状写に「山太 豊前左衛門尉」と見える(喜連川家料所記/古河市史)。豊前氏の知行地であった。豊前氏は古河公方家臣であり、特に永禄年間以降、小田原北条氏との間に介在し政治的活動を行っている。天正18年9月20日の山川晴重充豊臣秀吉知行充行状に「幸嶋郷之内」として「拾八貫文 山田」と見える(越前山川文書/結城市史)。

〔近世〕山田村 江戸期～明治22年の村名。下総国猿島郡のうち。寛文年間からは下野孫生藩領。村高は、「元禄郷帳」468石余、「天保郷帳」「旧高旧領」ともに787石余、「旧高簿」785石余。曹洞宗久昌院は天文18年天翁英公の開山と伝え、はじめ平城寺に寺基を置いたが、安永4年春10世禪灯の時、字北新田に移転したという。字古新田にある香取神社は明治5年現在地に移転したものという。明治8年次城界、同11年猿島郡に所属。明治22年八俣村の大字となる。

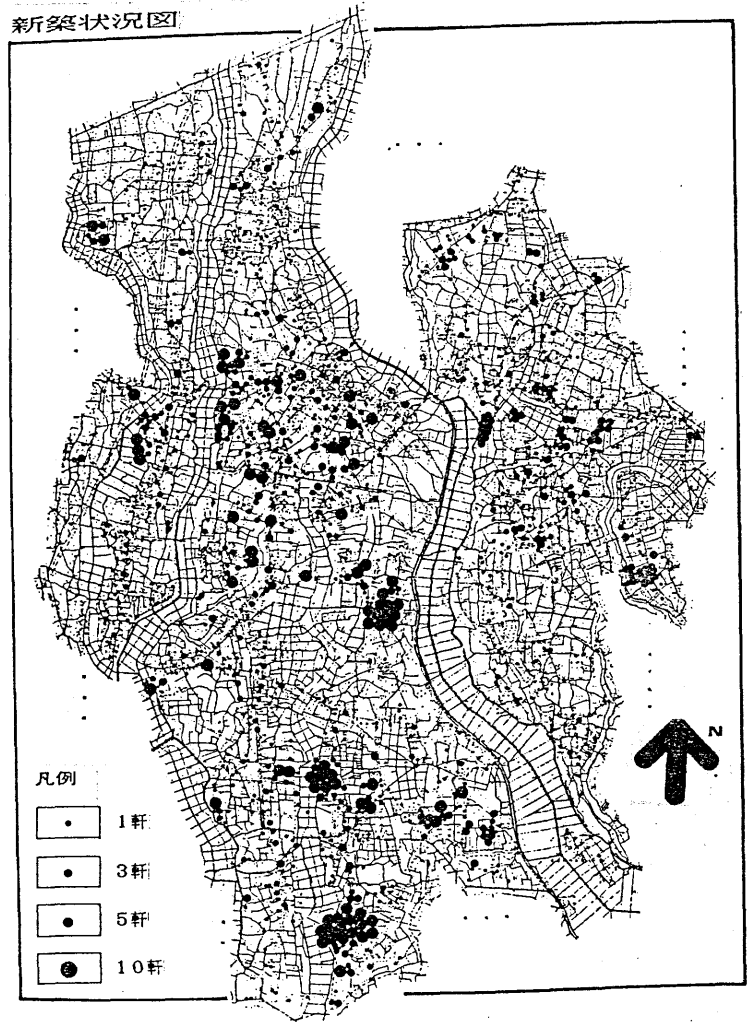
〔近代〕八俣村 明治22年～昭和30年の猿島郡の自治体名。北山田・山田・東山田・谷貝・長左衛門新田の5か村が合併して成立。旧村名を継承した5大字を編成。役場を東山田に設置。村名は、古代の八俣郷(八俣郷)による。明治24年の戸数328・人口2,741、船54。世帯・人口は、大正9年652・4,197、昭和10年730・4,680、同25年1,018・6,347。昭和6年長田村と境界変更。同16年海外放送専用局として八俣送信所が放送を開始、同18年対欧通信のほか青島・バンドンとも通信を始め、第2次大戦後は主に対米通話・対米特別放送などを行った。昭和30年三和村の一部となり、5大字は同村の大字に継承。

〔近代〕山田 明治22年～現在の大字名。はじめ八俣村、昭和30年三和村、同44年からは三和町の大字。明治24年の戸数70・人口459、船27。

もろかわ 諸川 〒306-01〔世帯〕1,427〔人口〕5,504 ▷町の中央部。北東は南東流する江川（西仁連川）を境に結城市、西は南流する大川を境に下片田に接する。江川西岸台地上に位置し、大部分が農業地域であるが、北東部の集落は江戸期に日光東街道の諸川宿として栄えた。現在これに沿って、主要地方道結城野田線（旧日光東街道）が南北に貫通し、中央部で東西に貫通する国道125号と交差する。国道・県道沿いに商店街が形成され、常陽銀行三和支店・結城信用金庫三和支店などの金融機関やスーパーなどがたち、町内商業の中心地。周辺には分譲住宅・工場も多くみられる。国道のやや北に県立三和高等技能専門学校、旧国道沿いには町農協幸島支所があり、県道沿いには諸川小学校・諸川郵便局・町メディカルセンターがある。旧国道沿い農協支所隣には真言宗豊山派宝蔵寺、道路を挟んだ向かい側に長宮神社がある。また県道北側には時宗向竜寺がある。江川には結城市七五三場と間の主要地方道に宝来橋が架かり、付近のエノキの大木下に昭和16年の大洪水の水位を記録した碑と幸江崎耕地整理組合記念碑がたつ。

ひがしもろかわ 東諸川 〒306-01〔世帯〕110〔人口〕502 ▷町の中央部。北は南東流する西仁連川を境に結城市、東は南流する飯沼川を境に尾崎に接する。現在は水田となっている飯沼跡の西岸台地上に位置する農業地域。東部の台地下を西仁連川が南流し、付近には平地林が残る。北部は分譲住宅がたち並び、南東部西仁連川沿いの森林の中に雷電神社がある。

新築状況図



	三和町	荃崎町	茨城県
道路舗装率 (%)	29.4%	84.3%	31.0%
一人あたり都市公園面積 (㎡/人口)	0.0㎡	0.3㎡	3.7㎡
し尿処理施設衛生処理率 (%)	89.2%	41.7%	81.3%
ごみ処理施設焼却処理率 (%)	24.6%	31.1%	49.4%
上水道普及率 (%)	33.4%	58.4%	71.7%
保育所収容率 (%)	36.6%	100%	
幼稚園収容率 (%)	85.5%	73.6%	
小学校児童一人あたり校舎面積 (㎡/人)	5.3㎡	5.3㎡	6.4㎡
中学校生徒一人あたり校舎面積 (㎡/人)	3.7㎡	5.2㎡	7.1㎡
診療所数	12	3	

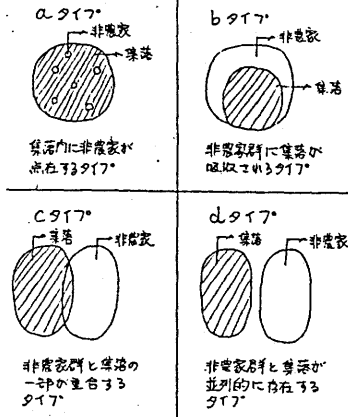
● 対象集落選定のための調査票

以下の項目について、総合的かつ選別的に集落の現況を評価して下さい。

A 混住化の程度

1 ほとんどない	2 やや少ない	3 少ない	4 やや多い	5 多い
-------------	------------	----------	-----------	---------

B 非農家の分布のしかた



C コミュニティ

1) 新旧住民間の個人的交流

1 ほとんどない	2 やや少ない	3 少ない	4 やや多い	5 多い
-------------	------------	----------	-----------	---------

2) 新住民間の個人的交流

1 ほとんどない	2 やや少ない	3 少ない	4 やや多い	5 多い
-------------	------------	----------	-----------	---------

3) 住民活動
(組織や集団による活動)

1 ほとんどない	2 やや少ない	3 少ない	4 やや多い	5 多い
-------------	------------	----------	-----------	---------

4) 新旧住民間のトラブル

1 あか る り	2 あ や る や	3 い う	4 あ い う	5 あ い わ い あ う
-------------------	-----------------------	-------------	------------------	---------------------------------

5) 集落のまとまり

1 弱 い	2 あ や い や	3 い う	4 あ い う	5 あ い わ い あ う
-------------	-----------------------	-------------	------------------	---------------------------------

6) コミュニティ全体

1 弱 い	2 あ や い や	3 い う	4 あ い う	5 あ い わ い あ う
-------------	-----------------------	-------------	------------------	---------------------------------

D 住生活環境

1) 生活の利便性(服薬・医療)

1 弱 い	2 あ や い や	3 い う	4 あ い う	5 あ い わ い あ う
-------------	-----------------------	-------------	------------------	---------------------------------

2) 農村的景観の維持

1 弱 い	2 あ や い や	3 い う	4 あ い う	5 あ い わ い あ う
-------------	-----------------------	-------------	------------------	---------------------------------

3) 集落空間の活用
(中心部とよそな場所の活用)

1 弱 い	2 あ や い や	3 い う	4 あ い う	5 あ い わ い あ う
-------------	-----------------------	-------------	------------------	---------------------------------

4) 公害の発生

1 あ か ら ず	2 あ や う	3 い う	4 あ い う	5 あ い わ い あ う
-----------------------	------------------	-------------	------------------	---------------------------------

5) 住生活環境全体

1 弱 い	2 あ や い や	3 い う	4 あ い う	5 あ い わ い あ う
-------------	-----------------------	-------------	------------------	---------------------------------

E 生産環境

1) 営農意欲

1 弱 い	2 あ や い や	3 い う	4 あ い う	5 あ い わ い あ う
-------------	-----------------------	-------------	------------------	---------------------------------

2) 農地保全状況

1 弱 い	2 あ や い や	3 い う	4 あ い う	5 あ い わ い あ う
-------------	-----------------------	-------------	------------------	---------------------------------

3) 農業後継者

1 弱 い	2 あ や い や	3 い う	4 あ い う	5 あ い わ い あ う
-------------	-----------------------	-------------	------------------	---------------------------------

4) 農業収入

1 弱 い	2 あ や い や	3 い う	4 あ い う	5 あ い わ い あ う
-------------	-----------------------	-------------	------------------	---------------------------------

5) 生産環境全体

1 弱 い	2 あ や い や	3 い う	4 あ い う	5 あ い わ い あ う
-------------	-----------------------	-------------	------------------	---------------------------------

RCS-84

1									

都市周辺農村地域におけるコミュニティ に関する調査についてのお願い

都市周辺の農村地域では、最近、都市化がすすみ、新しい住民の皆さんがたくさん転入されてきております。この調査は、こうした地域の生活環境や住民交流、住民の皆さんの考え方などについておうかがいし、今後のよりよい街づくり、村づくりに役立てようとするものです。お忙しいところ恐縮ですが、ぜひご協力下さるよう、お願いいたします。なお、御記入はできるだけ主婦の方をお願いいたします。

ご記入上の注意

- * 1 調査は調査票によるアンケート方式です。お願いする調査票にもれなく、御記入ください。
- * 2 調査票は、調査員が下記の日時にいただきに伺いますので、その時にお渡しく下さい。御不在の場合には、調査員のみつけやすいところに調査票をおいて下さい。
- * 3 調査結果は統計的に処理いたしますので、御迷惑のかかるようなことは絶対にありません。
- * 4 もし、不明・不審な点がありましたら、調査員もしくは下記連絡先まで御連絡ください。

回収予定日	月	日	時頃
-------	---	---	----

昭和59年11月

筑波大学・宇都宮大学・農林水産省 環境研究チーム
 研究代表者：土肥博至（筑波大学芸術学系教授）
 連絡先：筑波大学環境デザイン研究室
 TEL 0298-53-2857
 （担当 鎌田）

質問3. 質問2で1の「おつとめ」に○印をつけた方におたずねします。

1) その方の職種は何ですか。あてはまる番号に○印をつけて下さい。

1. 事務職 2. 販売・サービス職 3. 労務職 4. 専門技術職
5. 経営管理職 6. 公務員 7. その他 ()

51

2) その方の勤務先は次のどこですか。あてはまる番号に○印をつけて下さい。

1. 同じ地区内 2. この町のなか (1を除く)
3. 2を除く茨城県内 (具体的に _____ 市・郡) 4. 東京都
5. その他 (具体的に _____ 県 _____ 市・郡)

52

3) その通勤先まで片道どのくらい時間がかかりますか。

あてはまる番号に○印をつけて下さい。

1. 15分以内 2. 30分以内 3. 1時間以内
4. 1時間半以内 5. 2時間以内 6. 2時間以上

53

質問4. お宅のお住まいは、次のうち、どれにあたりますか。あてはまるものに○印をつけて下さい。

1. 持地持家 2. 借地持家 3. 借家 4. 社宅・寮 5. その他

54

質問5. 質問4で1, 2に○印をつけた方に、おたずねします。

1) お宅の住宅の広さはどのくらいですか。坪または㎡のどちらで、お答えになってもけっこうです。

約 _____ ㎡又は、約 _____ 坪

55 57

2) お宅の敷地の広さはどのくらいですか。坪または㎡のどちらで、お答えになってもけっこうです。

約 _____ ㎡又は、約 _____ 坪

58

質問 6. お宅が、現在の場所に入居されたのはいつですか。あてはまる番号に○印をつけて下さい。

32

1. 戦前（昭和20年以前）から
2. 昭和20年～29年
3. 昭和30年～39年
4. 昭和40年～44年
5. 昭和45年～49年
6. 昭和50年～54年
7. 昭和55年～57年
8. 昭和58年以降

質問 7. 質問 6 で 4～8 に○印をつけた方（昭和40年以降に現住所に来られた方）におたずねします。

1～3 に○印をつけた方は、質問 9 におすすみ下さい。

33

1) この場所に入居される直前のお住まいは、次のどちらですか。あてはまる番号に○印をつけて下さい。

1. 同じ地区内
2. この町のなか（1を除く）
3. 2を除く茨城県内（具体的に_____市・郡）
4. 東京都
5. その他（具体的に_____県_____市・郡）

64

2) お宅は、この町に親やご兄弟が住んでいらっしゃいますか。どちらかに○印をつけて下さい。

1. いる 2. いない

65

3) 上の質問で、「いない」と答えられた方におたずねします。

66

当時、お宅が今の場所にお住まいを決められた主な理由は何でしたか。近いと思われるもの2つに○印をつけて下さい。

1. 親・兄弟以外の親戚や知人が多かったから
2. 通勤に比較的便利だったから（または、職場が近いから）
3. 老後に住む環境としてふさわしいと思ったから
4. 子供を育てる環境としてふさわしいと思ったから
5. 他の地域にくらべ比較的広い敷地や住宅を得られたから
6. 将来、自分の財産として価値が上がると思ったから
7. その他（具体的に_____）

質問 8. 質問 6 で 4～8 に○印をつけた方（昭和40年以降に現住所に来られた方）に
おたずねします。

1) あなたは、自宅やこの町内会のなかでの暮らしについてどのようにお考えで
すか。こちらに住む前に考えていたこと（左欄）と、現在考えていること
（右欄）の両方について、あてはまる番号に○印をつけて下さい。

	こちらに住む前に考えていたこと				現在、考えていること			
	おて おいた に 期待し	や いや た 期 待 し て	ほ し て い な か っ た 期 待 し	ま つ た い な か っ た 期 待 し	満 足	ど ち ら か と い え	ど ち ら か と い え	不 満 足
1. 近所の新住民間どうしのつきあい	1	2	3	4	1	2	3	4
2. 農家などとの人情深いつきあい	1	2	3	4	1	2	3	4
3. スポーツや余暇活動を行う	1	2	3	4	1	2	3	4
4. 家庭菜園・土いじりなどの趣味をいかす	1	2	3	4	1	2	3	4
5. 田園風景や自然環境に親しむ	1	2	3	4	1	2	3	4
6. 子供のあそび場	1	2	3	4	1	2	3	4
7. 自宅周辺での暮らし全般について	1	2	3	4	1	2	3	4

1
3
5
7

8
10
12
14
16
18
20

2) あなたは、この町全体の生活環境についてどのようにお考えですか。こちら
に住む前に考えていたこと（左欄）と、現在考えていること（右欄）の両方
について、あてはまる番号に○印をつけて下さい。

22

	こちらに住む前に考えていたこと				現在、考えていること			
	おて おいた に 期待し	や いや た 期 待 し て	ほ し て い な か っ た 期 待 し	ま つ た い な か っ た 期 待 し	満 足	ど ち ら か と い え	ど ち ら か と い え	不 満 足
1. 交通の便利さ	1	2	3	4	1	2	3	4
2. 日常の買物の便利さ	1	2	3	4	1	2	3	4
3. 医療施設・医療サービス	1	2	3	4	1	2	3	4
4. スポーツ・娯楽施設	1	2	3	4	1	2	3	4
5. 教育施設	1	2	3	4	1	2	3	4
6. 公園・緑地の整備	1	2	3	4	1	2	3	4
7. この町の生活環境全般について	1	2	3	4	1	2	3	4

2
2
2
2
2
2
2

7

質問9. あなたが、下記の目的で外出なさる時、主にどこへ行きますか。店及び医院の名前と、その所在地を御記入下さい。

3

① 日常の食料品を買うとき
主に利用する店名 () 所在地 ()

3

② 高価な衣料品を買うとき
主に利用する店名 () 所在地 ()

3

③ 美容院に行くとき
主に利用する店名 () 所在地 ()

1

④ 内科の医者にかかるとき
主に利用する医院名 () 所在地 ()

3

質問10. あなたやあなたの御家族の方は、下記のような地域の活動にどの程度参加していますか。あてはまる番号に○印をつけて下さい。

地 域 の 活 動	よく参加する	ときどき参加する	ほとんど参加しない
<input type="checkbox"/> どぶさらい・草むしりなどの地区内の共同作業	1	2	3
<input type="checkbox"/> 町内会・区会・自治会などの総会や常会	1	2	3
<input type="checkbox"/> 町内会・区会・自治会などのまつりや運動会等の行事	1	2	3
<input type="checkbox"/> テニス・ゲートボール・バレーなどのスポーツクラブ	1	2	3
<input type="checkbox"/> 音楽・芸術などの趣味の集まり	1	2	3
<input type="checkbox"/> 社会教育・ボランティア活動などの集まり	1	2	3
<input type="checkbox"/> PTAなどの子供に関する集まり	1	2	3

質問11. 仮に、町内会・区会などの役員がまわってきたら、あなたはどのようになるとお考えですか。あてはまる番号に○印をつけて下さい。

1. すすんでひきうける。
2. ひきうけてもよいと思う。
3. しかたなくひきうける。
4. できればことわりしたい。

質問12. 仮に、あなたの家の前に浅い側溝があるとして、そこにゴミや泥がたまっていた場合、あなたはどのようにしようと思いますか。次のうちからあなたの考えに最も近いものを1つ選んで○印をつけて下さい。

1. 自分で、自分の家の前だけのゴミや泥を取る。
2. 自分で、できるだけ広い範囲のゴミや泥を取る。
3. 近所の人達に声をかけ、いっしょにゴミや泥を取る。
4. 班長か町内会長などに連絡し、みんなによびかけてもらう。
5. 自分で役場などに直接電話して、役場で処理してもらう。
6. 班長か町内会長などを通して、役場で処理してもらう。
7. 誰かがやるだろうから、そのままにしておく。

51

質問13. あなたは、今の場所に住むことについてどのようにお考えですか。次のうちからあなたの考え方に最も近いものを1つ選んで○印をつけて下さい。

1. ずっと住み続けたい。
2. 住み続けてもよいと思う。
3. あまり住みつづけたいとは思わない。
4. すぐにでも移転したい。

52

質問14. 質問13で3, 4に○印をつけた方におたずねします。

あなたが、今の場所に住みたくない理由について、最も近いもの1つに○印をつけて下さい。

1. 買物・医療など、生活が不便である。
2. 下水道・道路・公園などの都市的基盤が未整備である。
3. 通勤の便がわるい。
4. スポーツや趣味の活動などを楽しめる場が少ない。
5. 子供の教育環境がわるい。
6. 住宅・宅地が狭い。
7. 知り合いが少ない。
8. 近所のつきあいやしきたりがめんどうである。
9. その他

53

7	

質問15. 近所の人たちとのつきあいについておたずねいたします。次のような場合に、つきあっている家がありますか。あてはまる番号に○印をつけて下さい。

1) あなたが、道で会った時に、あいさつをする程度の知り合いの人

ア. この近所の農家の人の中に何人位いますか。

1. いない	2. 1～3人	3. 4～6人
4. 7～9人	5. 10～20人	6. 21人以上

8	
---	--

イ. 最近10年位の間はこの近所に入ってきた人の中に何人位いますか。

1. いない	2. 1～3人	3. 4～6人
4. 7～9人	5. 10～20人	6. 21人以上

9	
---	--

2) 子供の教育や家庭のことなどで相談をする人

ア. 近所の農家で相談をする人がいますか。

1. いる	2. いない
-------	--------

10	
----	--

イ. 最近10年位の間はこの近所に入ってきた家で相談をする人がいますか。

1. いる	2. いない
-------	--------

11	
----	--

3) お子さん(中学生以下)のいらっしゃる方だけお答え下さい。

お宅のお子さんの遊び相手について

ア. 近所の農家の子供で遊び相手はいますか。

1. いる	2. いない
-------	--------

12	
----	--

イ. 最近10年位の間はこの近所に入ってきた家の子供で遊び相手はいますか。

1. いる	2. いない
-------	--------

13	
----	--

4) お宅に急病人が出た時など、困った時に頼りにしている家

ア. 近所の農家で頼りにしている家がありますか。

1. ある	2. ない
-------	-------

14	
----	--

イ. 最近10年位の間はこの近所に入ってきた家で頼りにしている家がありますか。

1. ある	2. ない
-------	-------

15	
----	--

5) 葬式の時など、手伝いに行く家

ア. 近所の農家で手伝いに行く家がありますか。

1. ある	2. ない
-------	-------

16	
----	--

イ. 最近10年位の間はこの近所に入ってきた家で手伝いに行く家がありますか。

1. ある	2. ない
-------	-------

17	
----	--

質問16. あなたは地域社会との関わり合いに関する次のような意見に対して、どのような考えをお持ちですか。各意見ごとにあなたの考え方と最も近い番号に○印をつけて下さい。

18

意見	1 そう だと思	2 ま あ と 思 う だ	3 い え な い ど ち ら と も	4 な い と 思 う ま あ そ う で は	5 い と 思 う そ う で は な
1. 地域社会の中で生活していくには長いものにまかれるしかない	1	2	3	4	5
2. 地域社会は住民が協力して住みよくするように心がけるべきだ	1	2	3	4	5
3. 地域社会は自分の生活のよりどころである	1	2	3	4	5
4. 今住んでいる地域はたまたま生活しているにすぎない	1	2	3	4	5
5. 住民は生活防衛のために連帯すべきだ	1	2	3	4	5
6. 地域社会は一定の自治性を持つべきだ	1	2	3	4	5
7. 各自が自己の身分をわきまえてもめごとのないよう心がけるべきだ	1	2	3	4	5
8. 自己の生活と地域社会とは別の問題だ	1	2	3	4	5
9. 自分の生活上の不満や要求はできるだけ行政に働きかけるべきだ	1	2	3	4	5
10. 人と人との和は大切にすべきだ	1	2	3	4	5
11. 近隣とのつきあいは面倒だ	1	2	3	4	5
12. 地域的な問題は自分がかかわらなくても誰れかがよくしてくれるだろう	1	2	3	4	5
13. 個々人のプライバシーは充分に守るべきだ	1	2	3	4	5
14. 旧来からのしきたりを大切にすべきだ	1	2	3	4	5
15. 今住んでいる地域には関心や愛着はない	1	2	3	4	5
16. 住みよい地域社会にするために自ら進んで活動をしようと思う	1	2	3	4	5
17. 町内会または区会などのつきあいはやめたほうがよい	1	2	3	4	5
18. 近隣関係などは何の意味もない	1	2	3	4	5

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

以上です。ご協力ありがとうございました。

住みよいむらづくり活動に関するアンケートのお願い

都市周辺の農村地域では、最近、都市化がすすみ、新しい住民の皆さんがたくさん転入されてきております。この調査は、こうした地域の自治会や区会の運営、及び地域活動等について、各行政区の区長さんにおうかがいし、今後のよりよい街づくり、むらづくりに役立てようとするものです。

日頃、多忙な活動に皆さんが携われていることを、十分承知しており、極めて恐縮とは存じますが、ぜひご協力下さるよう、お願いいたします。

ご記入上の注意

- * 1 調査は調査票によるアンケート方式です。該当する()枠にご記入、あるいは該当する番号に○印をおつけ下さい。
- * 2 ご記入は、原則として区長さんをお願いいたします。
- * 3 調査結果は統計的に処理いたしますので、あなたの行政区にご迷惑をおかけすることは一切ございません。
- * 4 もし不明・不審な点がありましたら、下記連絡先までご連絡下さい。

なお、回収は、11月4日ごろまでに、役場のほうへご提出下さい。

昭和60年10月

筑波大学 芸術学系 環境デザイン研究室
宇都宮大学 建築工学科 建築計画研究室
農林水産省 農業土木試験場 生産施設第一研究室
(協力) 三和町役場 企画課

連絡先：筑波大学環境デザイン研究室

TEL 0298-53-2857

(担当 鎌田)

質問1. あなたの行政区と、行政区の所属する集落の名称をご記入下さい。もし、同じ場合は、同じ名称をお書き下さい。

行政区の名称 () 集落の名称 ()

質問2. あなたの行政区はいくつの班(組)に分かれていますか。 () 班

質問3. あなたの行政区の戸数について下記の欄をうめてください。

- 1) 総戸数 → () 戸
- 2) 農家戸数 → () 戸
- 3) ここ10年間に他地域から転入した戸数 → () 戸
- 4) ここ10年間に旧住民の新宅として建設された戸数 → () 戸

質問4. あなたの行政区は、下記の4つのタイプの中で、どのタイプに一番ちかいですか。該当する項目1つだけに○印をつけてください。

1) 古くから住んでいる人(旧住民)の中に、最近10年くらいの間にも新宅として出た家や、集落の外から転入して来た家(新住民)がバラバラとまじっている。



2) 旧住民の中に新住民の小規模な集団が、はりついている。



3) 旧住民を取り囲むように、新住民がかなりの戸数で、はりついている。



4) 旧住民に隣接して、新住民の集団がはりついている。



質問5. あなたの行政区では、新住民(ここ10年間の間の他地域からの転入者)と旧住民の関係は、どのようなものですか。該当するものに○印をつけてください。

1) 新住民とは特に『つきあい』はない。

2) 双方ともかなりうまくやっていると思う。

3) 時々、問題が生じる。

4) 現在、大きな問題が生じている。

(具体的に)

質問6. 自治会（区会・集落会）についておたずねします。該当する番号に○印をつけて下さい。

-
- 1)区長の選出方法 ①選挙 ②輪番制 ③役員会で相談・互選
-
- 2)役員の交代 ①毎年変わる ② 2～3 年で変わる
 ③ 4～5 年で変わる④ほとんど変わらない
-
- 3)区費 ①均等割（年 円） ②反別割 ③所得税割
（自治会費の徴収） ④固定資産割 ⑤人頭割 ⑥その他
-
- 4)集会回数（年間） 総会（ ）回 常会（役員会）（ ）回
-
- 5)総会への参加の程度 ①90%以上 ②80～90% ③70～80%
（新旧住民合わせて） ④50～70% ⑤50%未満
-
- 6)総会への参加の程度 ①90%以上 ②80～90% ③70～80%
（新住民だけの場合） ④50～70% ⑤50%未満
-
- 7)新住民の方で ①いる ②いない
区会や自治会の
役員をしている人
-

質問7. 草むしり・空カンひろい・神社、寺などの共同作業についておたずねします。

該当する番号に○をつけてください。

-
- 1)それらの共同作業への参加の程度は新旧住民合わせてどのくらいですか。
①90%以上 ②80～90% ③70～80% ④50～70% ⑤50%未満
-
- 2)新住民だけをとった場合、参加の程度はどのくらいですか。
①90%以上 ②80～90% ③70～80% ④50～70% ⑤50%未満
-
- 3)それらの共同作業に出られないお宅には、お茶代、または出不足金等の名目で、
お金を徴収しますか。
①しない。 ②する。（1回につき 円）
-

質問8. 行政区または集落の住民のなかで活発な活動はなんですか。行政区全体ではどうですか。
また、特に新住民についてはどうですか。該当する番号にそれぞれ○をつけて下さい。

	行政区全体			新住民		
	ほとんどやらない	やや活発	活発	ほとんどやらない	やや活発	活発
まつりや運動会などの行政区の行事やその練習	1	2	3	1	2	3
ダンス・料理・盆栽など、いろいろな趣味のあつまり	1	2	3	1	2	3
社会教育・ボランティア活動などのあつまり	1	2	3	1	2	3
野球・ソフト・バレーなどのスポーツのあつまり	1	2	3	1	2	3
ゲートボール・老人会などの老人のあつまり	1	2	3	1	2	3
P T A などの子供に関するあつまり	1	2	3	1	2	3
檀家・氏子・講などのあつまり	1	2	3	1	2	3
婦人会・若妻会などの主婦のあつまり	1	2	3	1	2	3
隣組（班や組）での、お茶のみ、雑談などの寄り合い	1	2	3	1	2	3
農業生産に関するあつまり	1	2	3	1	2	3

質問9. あなたの集落にある各組織の活動状況についておたずねします。

該当の所に○印をつけてください。

	衛生組合	納税組合	土地集積区組織	農地改良区組織	体育活動区組織	文化活動区組織	増家総代会	中学校PTA	小学校PTA	趣味の会	各種講座	子供会	世帯主会	長男会	青年団	農協青年部	生活改善グループ	首妻会	婦人会	農協婦人部	老人会	交通安全会	消防団	
1) 今ある組織 →																								
2) 新住民も加わっている組織 →																								
3) 活発な活動をしている組織 →																								

質問10. あなたの行政区、または集落のしきたりやならわしについて、おしえてください。

該当する番号に○印をつけてください。

1) あなたの行政区では、自治会・集落会の機構、役員、運営方法などについて、文章にした規約をつくっていますか。

- ①つくっていない。 ②つくっている。

2) 祝いごと・まつりごと・葬式などについて申し合わせがありますか。

- ①特にない。
 ②むかしからきめられており、文章にはなっていない。
 ③最近は合理的になったが、文章にはなっていない。
 ④文章になった規約がある。

3) 新しく新住民が入ってきた時、むらの「しきたり」や「ならわし」について説明をなさいますか。

- ①特にしない。
 ②求められれば説明する。
 ③できるだけ説明するようにしている。

4)まつりや盆おどりなどの伝統行事の日程は、どのようにきめますか。

- ①むかしからきめられた月のきめられた日に行なっている。
- ②つとめに出ている農家や新住民のことを考えて、日曜や祭日、または平日の夜などに行なうようにしている。
- ③その年によっていろいろ。
- ④その他（具体的に)

5)葬式の時の手伝いの範囲についておしえて下さい。

- ①行政区または集落の役員が中心となっで行なう。
- ②となり近所（班や組）の人たちが中心となっで行なう。
- ③親類・縁者が中心となっで行なう。
- ④行政区または集落全体で行なう。
- ⑤当番制
- ⑥その他

6)葬式の時の手伝いについておしえて下さい。

- ①大切な事だから、できるだけ手伝わなければいけない。
- ②つとめなどがある場合には、手伝えなくてもしかたがない。
- ③特に強制はしない。各自の判断にまかせる。

7)葬式の手伝いの時の新住民のあつかいについておしえてください。

- ①新住民も旧住民と同じようにあつかい、特に区別しない。
 - ②新住民でも新宅（農家の2,3 男）については旧住民と同じようにあつかうが、外から来た新住民は別にあつかう。
 - ③新住民は、新宅、外から来た新住民、どちらも別にあつかう。
-

質問11. 行政区または集落で主催した主な年中行事について例にならって記入してください。

まず、それぞれの月に行事名を書き、つぎに集まる日は平日だったら①、休日だったら②を記入して下さい。同様に時間・場所・集まる人たち・出席率にもあてはまる番号を記入して下さい。このページは、例です。記入欄は、つぎのページです。

例

	行事名	集まる日	時間	集まる場所	集まる人たち	出席率
		①平日 ②休日	① 昼 ② 夜	① 近 ② 所 ③ 当 ④ 集 ⑤ 神 ⑥ 集 ⑦ 集 ⑧ 集 ⑨ 集 ⑩ 所	① 家 ② 家 ③ 家 ④ 家 ⑤ 家 ⑥ 家 ⑦ 家 ⑧ 家 ⑨ 家 ⑩ 家	① 役 ② 員 ③ 員 ④ 員 ⑤ 員 ⑥ 員 ⑦ 員 ⑧ 員 ⑨ 員 ⑩ 員
一月	行政区新年会	②	①	③	②	②
	観音講	①	③	④	③	①
	班長会議	①	②	②	①	③
	おちやのみ会	①	②	③	⑥	①
二月	公民館花まつり	②	①	③	②	②
	満ちらい	②	①	⑧	②	③
	班長会議	①	②	②	①	③
三月	シバヤキ	①	①	⑥	⑤	②
	報恩講	①	②	④	①	③
	ソフトボール大会	②	①	⑨	⑦(青年団)	①
四月	おちやのみ会	①	②	③	⑥	①
	班長会議 花見	① ②	② ①	② ⑤	① ②	③ ②
十月	秋まつり	②		⑤	②	①
	二百十日	③	②	③	③	②
	甘酒会	①	①	②	③	③
十一月	運動会の練習	①	②	⑦	②	①
	運動会	②	①	①	②	②
	神社清掃	①	①	④	⑦	①
十二月	レントゲン	①	①	③	③	③
	おちやのみ会	①	②	⑤	⑥	①
十二月	行政区総会	②	②	③	②	①
	おのれ忘年会					

記入欄

	行事名	集まる日	時間	集まる場所	集まる人たち	出席率
		①平日 ②休日	① 昼 ② 夜	① 近所の家・公民館 ② 当番の場や・寺 ③ 集社や・公園 ④ 神広場や ⑤ 集落の河 ⑥ 集落の公 ⑦ 集落の公 ⑧ 集落の公 ⑨ 集落の公 ⑩ その他	① 役員の住所 ② 役員の住所 ③ 役員の住所 ④ 役員の住所 ⑤ 役員の住所 ⑥ 役員の住所 ⑦ 役員の住所 ⑧ 役員の住所 ⑨ 役員の住所 ⑩ 役員の住所	① 悪い ② やや悪い ③ ややいい ④ いい
一月						
二月						
三月						
四月						
五月						
六月						
七月						
八月						
九月						
十月						
十一月						
十二月						

● 「コミュニティ調査」プログラム

TSS UTILITY COMMAND V10L20 LIST DATE 87.12.09 TIME

DATA SET NAME : A201007.RCSANA1.CNTL

```

00010 //RCS0303 JOB A201007,PASSWORD=DOHITRAN,MSGCLASS=0
00020 // EXEC ANALYST,REG=1024K,LABEL=40,MDDE=JEF,WORK=200
00030 //FT06F001 DD DCB=(LRECL=308,BLKSIZE=312,OPTCD=U)
00040 //MYDATA DD DSN=A201007.RCSCPL.DATA,UNIT=DISK,DISP=SHR
00050 //SYSIN DD *
00060 *****
00070 *
00080 * RCS
00090 *
00100 * 都市周辺農村地域におけるコミュニティに関する調査
00110 *
00120 *****
00130 SET JTTITLE=('都市周辺農村地域におけるコミュニティに関する調査'),
00140 MDDE(JEF)ノJC(NC)
00150 *
00160 DATA INPUT=(USER)
00170 *
00180 VARIABLE AREA GROUP FAMILY F1 AGE1
00190 SEX1 JOB11 JOB12 F2 AGE2
00200 SEX2 JOB21 JOB22 F3 AGE3
00210 SEX3 JOB31 JOB32 F4 AGE4
00220 SEX4 JOB41 JOB42 F5 AGE5
00230 SEX5 JOB51 JOB52 F6 AGE6
00240 SEX6 JOB61 JOB62 F7 AGE7
00250 SEX7 JOB71 JOB72 Q02 Q0301
00260 Q0302 Q0303 Q04 Q0501 Q0502
00270 Q06 Q0701 Q0702 Q070301 Q070302
00280 FTYPE NINZU
00290 AREA2 GROUP2 FAMILY2 Q080101L Q080101R
00300 Q080102L Q080102R Q080103L Q080103R Q080104L
00310 Q080104R Q080105L Q080105R Q080106L Q080106R
00320 Q080107L Q080107R Q080201L Q080201R Q080202L
00330 Q080202R Q080203L Q080203R Q080204L Q080204R
00340 Q080205L Q080205R Q080206L Q080206R Q080207L
00350 Q080207R Q0901 Q0902 Q0903 Q0904
00360 Q1001 Q1002 Q1003 Q1004 Q1005
00370 Q1006 Q1007 Q11 Q12 Q13
00380 Q14
00390 AREA3 GROUP3 FAMILY3 Q150101 Q150102
00400 Q150201 Q150202 Q150301 Q150302 Q150401
00410 Q150402 Q150501 Q150502 Q1601 Q1602
00420 Q1603 Q1604 Q1605 Q1606 Q1607
00430 Q1608 Q1609 Q1610 Q1611 Q1612
00440 Q1613 Q1614 Q1615 Q1616 Q1617
00450 Q1618
00460 *
00470 *
00480 *
00490 FORMAT FIXED('11,12,13,1X,7(11,12,311),511,13,14,511,11,12/
00500 11,12,13,1X,1411,1X,1411,1X,411,1X,1111/
00510 11,12,13,1X,1011,1X,1811')
00520 *
00530 *
00540 *
00550 TRANS NEWOLD=9
00560 TRANS IF(Q06.GE.1.AND.Q06.LE.3) NEWOLD=1

00570 TRANS IF(Q06.GE.4.AND.Q06.LE.5.AND.Q0702.EQ.1) NEWOLD=2
00580 TRANS IF(Q06.GE.4.AND.Q06.LE.5.AND.Q0702.EQ.2) NEWOLD=3
00590 TRANS IF(Q06.GE.6.AND.Q06.LE.8.AND.Q0702.EQ.1) NEWOLD=4
00600 TRANS IF(Q06.GE.6.AND.Q06.LE.8.AND.Q0702.EQ.2) NEWOLD=5
00610 *
00620 TRANS IF(GROUP.GE.6.AND.GROUP.LE.10) GROUP2=GROUP2-1
00630 TRANS IF(GROUP.GE.11.AND.GROUP.LE.15) GROUP2=GROUP2-2
00640 *
00650 TRANS GR=GROUP
00660 TRANS IF(GROUP.GE.6.AND.GROUP.LE.10) GR=GR-1
00670 TRANS IF(GROUP.GE.11.AND.GROUP.LE.15) GR=GR-2
00680 *
00690 TRANS NINZUC=NINZU
00700 TRANS IF(NINZUC.GE.7.AND.NINZUC.LE.98) NINZUC=8
00710 TRANS IF(NINZUC.EQ.99) NINZUC=9
00720 *
00730 REPEAT A1=1,20,30,40,50,60,998,999/
00740 A2=20,30,40,50,60,997,998,999/
00750 A3=1,6,8,9
00760 TRANS IF(Q0501.GE.A1.AND.Q0501.LT.A2) Q0501C=A3
00770 TERM
00780 *
00790 REPEAT B1=1,50,60,100,150,200,400,9998,9999/
00800 B2=50,60,100,150,200,400,9997,9998,9999/
00810 B3=1:9
00820 TRANS IF(Q0502.GE.B1.AND.Q0502.LT.B2)Q0502C=B3
00830 TERM
00840 *
00850 *
00860 *
00870 JLABEL AREA,AREA2,AREA3 = 町名
00880 (1=三和町/
00890 2=猿島町/
00900 3=谷田部町/
00910 4=荻野町);
00920 =振藩名
00930 GROUP (1=堀川西部/
00940 2=東堀川/
00950 3=新堀川/
00960 4=間中橋/
00970 5=山田中/
00980 6=山田南/
00990 7=北生子/
01000 8=井岡/
01010 9=西村北/
01020 10=福田坪(一)/
01030 11=福田坪(二)/
01040 12=ミヌキ団地/
01050 13=天笠/
01060 14=城山/
01070 15=高崎);
01080 =振藩名
01090 GROUP2 (1=堀川西部/
01100 2=東堀川/
01110 3=新堀川/
01120 4=間中橋/

```

TSS UTILITY COMMAND V10L20 LIST DATE 87.12.09

DATA SET NAME : A201007.RCSANA1.CNTL

```

5=山田/
6=北生子/
7=井岡/
8=西村北/
9=福田坪/
10=ミヌキ団地/
11=天笠/
12=城山/
13=高崎);
FAMILY,FAMILY2,FAMILY3= 世帯番号;
F1,F2,F3,F4,F5,F6,F7 = 続柄
(1=世帯主/
2=配偶者/
3=世帯主の子ども/
4=世帯主の子どもの配偶者/
5=世帯主の孫/
6=世帯主の親/
7=血縁のある同居人/
8=血縁のない同居人/
9=不明);
AGE1,AGE2,AGE3,AGE4,AGE5,AGE6,AGE7 = 年齢;
SEX1,SEX2,SEX3,SEX4,SEX5,SEX6,SEX7 = 性別
(1=男/2=女/9=不明);
JOB11,JOB12,JOB21,JOB22,JOB31,JOB32,JOB41,JOB42,
JOB51,JOB52,JOB61,JOB62,JOB71,JOB72 = 就業状況
(1=通勤をしている人/
2=自営にかかわっている人/
3=日雇い・パートをしている人/
4=内職をしている人/
5=主に農作業をしている人/
6=通学をしている人/
7=その他/
9=不明);
Q02 = 家計を主に支えている者の職業
(1=つとめ/
2=農業・林業/
3=商工自営業/
4=その他/
9=不明);
Q0301 = 家計を主に支えている者の職業(通勤者のみ)
(1=事務職/
2=販売・サービス職/
3=労務職/
4=専門技術職/
5=経営管理職/
6=公務員/
7=その他/
9=不明);
Q0302 = 通勤先(家計を主に支えている者)
(1=同じ地区内/
2=同じ町内/
3=2を除く茨城県内/
4=東京都/
5=その他/
9=不明);
Q0303 = 通勤時間(家計を主に支えている者)
(1=15分以内/
2=30分以内/
3=1時間以内/
4=1時間半以内/
5=2時間以内/
6=2時間以上/
9=不明);
Q04 = 住居の種類
(1=持地持家/
2=借地持家/
3=借家/
4=社宅・寮/
5=その他/
9=不明);
Q0501 = 住居規模(持家のみ) 単位:坪;
Q0501C = 住居規模(持家のみ)
(1=20坪未満/
2=20~30坪/
3=30~40坪/
4=40~50坪/
5=50~60坪/
6=60坪以上/
9=不明);
Q0502 = 敷地規模(持家のみ) 単位:坪;
Q0502C = 敷地規模(持家のみ)
(1=50坪未満/
2=50~60坪/
3=60~100坪/
4=100~150坪/
5=150~200坪/
6=200~400坪/
7=400坪以上/
9=不明);
Q06 = 入居時期
(1=就職から/
2=昭和20~29年/
3=昭和30~39年/
4=昭和40~44年/
5=昭和45~49年/
6=昭和50~54年/
7=昭和55~57年/
8=昭和58年以降/
9=不明);
NEWOLD =新旧の区分
(1=昭和~昭和39年/
2=昭和40年~昭和49年(血縁あり)/
3=昭和40年~昭和49年(血縁なし)/
4=昭和50年以降(血縁あり)/
5=昭和50年以降(血縁なし)/
9=不明);
Q0701 = 前住地(昭和40年以降の来住者)
(1=同じ地区内/
2=同じ町内/
3=2を除く茨城県内/
4=東京都/
5=その他/

```

DATA SET NAME : A201007.RCSANA1.CNTL

DATA SET NAME : A201007.RCSANA1.CNTL

02250 9=不明) ;

02260 Q0702 =

02270 同一町内にすむ親・兄弟の有無 (昭和40年以降の来住者)

02280 (1=いる /

02290 2=いない /

02300 9=不明) ;

02310 Q070301,Q070302 =

02320 (1=親戚や知人が多い /

02330 2=運動に便利 /

02340 3=老後にすむ環境に良い /

02350 4=子育ての環境に良い /

02360 5=他地域に比べ広い敷地・住宅 /

02370 6=財産として価値 /

02380 7=その他) ;

02390 Q070301 = 来住理由 (昭和40年以降の来住者で、+

02400 同一町内に親・兄弟が住んでいない者) MA(+) ;

02410 Q070302 = 来住理由 (昭和40年以降の来住者で、+

02420 同一町内に親・兄弟が住んでいない者) MA(+) ;

02430 FTYPE = 家族構成

02440 (1=単独家族 (夫婦のみ) /

02450 2=単独家族 (長子0~3歳) /

02460 3=単独家族 (長子4~6歳) /

02470 4=単独家族 (長子7~15歳) /

02480 5=単独家族 (長子16歳~) /

02490 6=単独家族 (長子年齢不明) /

02500 7=2世帯家族 /

02510 8=3世帯家族 /

02520 9=単身者 /

02530 0=不明) ;

02540 NINZUC = 家族人数

02550 (1=1人 /

02560 2=2人 /

02570 3=3人 /

02580 4=4人 /

02590 5=5人 /

02600 6=6人 /

02610 7=7人以上 /

02620 9=不明) ;

02630 Q080101L,Q080102L,Q080103L,Q080104L,Q080105L,

02640 Q080106L,Q080107L =

02650 (1=まったく期待していなかった /

02660 2=ほとんど期待していなかった /

02670 3=やや期待していた /

02680 4=おおいに期待していた /

02690 9=不明) ;

02700 Q080101R,Q080102R,Q080103R,Q080104R,Q080105R,

02710 Q080106R,Q080107R =

02720 (1=不満足 /

02730 2=どちらかといえば不満足 /

02740 3=どちらかといえば満足 /

02750 4=満足 /

02760 9=不明) ;

02770 Q080101L = 近所の新住民間どうしのつきあい (住前の期待感) (*) ;

02780 Q080101R = 近所の新住民間どうしのつきあい (現在の満足感) (*) ;

02790 Q080102L = 農家などとの人柄深いつきあい (住前の期待感) (*) ;

02800 Q080102R = 農家などとの人柄深いつきあい (現在の満足感) (*) ;

02810 Q080103L = スポーツや余暇活動を行う (住前の期待感) (*) ;

02820 Q080103R = スポーツや余暇活動を行う (現在の満足感) (*) ;

02830 Q080104L = 家庭菜園・土いじりなどの趣味をいかす (住前の期待感) (*) ;

02840 Q080104R = 家庭菜園・土いじりなどの趣味をいかす (現在の満足感) (*) ;

02850 Q080105L = 田圃風土や自然環境に親しむ (住前の期待感) (*) ;

02860 Q080105R = 田圃風土や自然環境に親しむ (現在の満足感) (*) ;

02870 Q080106L = 子どものあそび場 (住前の期待感) (*) ;

02880 Q080106R = 子どものあそび場 (現在の満足感) (*) ;

02890 Q080107L = 自宅周辺での暮らし全般について (住前の期待感) (*) ;

02900 Q080107R = 自宅周辺での暮らし全般について (現在の満足感) (*) ;

02910 Q080201R,Q080202R,Q080203R,Q080204R,Q080205R,

02920 Q080206R,Q080207R =

02930 (1=まったく期待していなかった /

02940 2=ほとんど期待していなかった /

02950 3=やや期待していた /

02960 4=おおいに期待していた /

02970 9=不明) ;

02980 Q080201L,Q080202L,Q080203L,Q080204L,Q080205L,

02990 Q080206L,Q080207L =

03000 (1=不満足 /

03010 2=どちらかといえば不満足 /

03020 3=どちらかといえば満足 /

03030 4=満足 /

03040 9=不明) ;

03050 Q090201R = 交通の便利さ (住前の期待感) (*) ;

03060 Q090201L = 交通の便利さ (現在の満足感) (*) ;

03070 Q090202R = 日常の買い物便利さ (住前の期待感) (*) ;

03080 Q090202L = 日常の買い物便利さ (現在の満足感) (*) ;

03090 Q090203R = 医療施設・医療サービス (住前の期待感) (*) ;

03100 Q090203L = 医療施設・医療サービス (現在の満足感) (*) ;

03110 Q090204R = スポーツ・娯楽施設 (住前の期待感) (*) ;

03120 Q090204L = スポーツ・娯楽施設 (現在の満足感) (*) ;

03130 Q090205R = 教育施設 (住前の期待感) (*) ;

03140 Q090205L = 教育施設 (現在の満足感) (*) ;

03150 Q090206R = 公園・緑地の整備 (住前の期待感) (*) ;

03160 Q090206L = 公園・緑地の整備 (現在の満足感) (*) ;

03170 Q090207R = この町の生活環境全般について (住前の期待感) (*) ;

03180 Q090207L = この町の生活環境全般について (現在の満足感) (*) ;

03190 Q0901,Q0902,Q0903,Q0904 =

03200 (1=地区内 /

03210 2=町内 /

03220 3=2を除く茨城県内 /

03230 4=千葉県 /

03240 5=その他 /

03250 9=不明) ;

03260 Q0901 = 日常の食料品を扱う場所 (*) ;

03270 Q0902 = 高価な衣料品を扱う場所 (*) ;

03280 Q0903 = 利用する美容院の場所 (*) ;

03290 Q0904 = かかる内料の場所 (*) ;

03300 Q1001:Q1007 = (1=ほとんど参加しない /

03310 2=ときどき参加する /

03320 3=よく参加する /

03330 9=不明) ;

03340 Q1001 = どぶさらい・草むしりなどの地区内の共同作業 (*) ;

03350 Q1002 = 町内会・区会・自治会などの総会や常会 (*) ;

03360 Q1003 = 町内会・区会・自治会などのまつりや運動会等の行事 (*) ;

03370 Q1004 = テニス・ゲートボール・バレーなどのスポーツクラブ (*) ;

03380 Q1005 = 音楽・芸術などの趣味の集まり (*) ;

03390 Q1006 = 社会教育・ボランティア活動などの集まり (*) ;

03400 Q1007 = PTAなどの子どもにの集まり (*) ;

03410 Q11 = 町内会・区会などの役員に対する積極性

03420 (1=できればこわりたい /

03430 2=しかななくひきうける /

03440 3=ひきうけてもよいと思う /

03450 4=すすんでひきうける /

03460 9=不明) ;

03470 Q12 = コミュニティへの参加態度+

03480 (振りに、あなたの家の前...) ;

03490 (1=そのまましておく /

03500 2=粗長等を避け後で処理 /

03510 3=自分で電線を処理して後で処理 /

03520 4=粗長等を避け後で処理 /

03530 5=自分で呼びかけ後で処理 /

03540 6=自分で広い範囲を処理 /

03550 7=自分で自分の家の前のみ処理 /

03560 9=不明) ;

03570 Q13 = 定住志向

03580 (1=すくなくでも移住したい /

03590 2=あまり住み続けたいとは思わない /

03600 3=住み続けてもよいと思う /

03610 4=ずっと住み続けたい /

03620 9=不明) ;

03630 Q14 = 住みたくない理由

03640 (1=生活が不便 /

03650 2=環境騒音が迷惑 /

03660 3=運動の便が悪い /

03670 4=スポーツ等の活動の場が少ない /

03680 5=教育環境が悪い /

03690 6=住居・宅地が狭い /

03700 7=知り合いが少ない /

03710 8=つきあひ・しまりがめんどう /

03720 9=その他 /

03730 0=不明) ;

03740 Q150101 = 知人数 (農家の人の中の)

03750 (1=いない /

03760 2=1~3人 /

03770 3=4~6人 /

03780 4=7~9人 /

03790 5=10~20人 /

03800 6=21人以上 /

03810 9=不明) ;

03820 Q150102 = 知人数 (新しく入ってきた人の中の)

03830 (1=いない /

03840 2=1~3人 /

03850 3=4~6人 /

03860 4=7~9人 /

03870 5=10~20人 /

03880 6=21人以上 /

03890 9=不明) ;

03900 Q150201=子どもの教育や家庭のことなどで相談をする人の有無+

03910 (農家の人の中の)

03920 (1=いる /

03930 2=いない /

03940 9=不明) ;

03950 Q150202=子どもの教育や家庭のことなどで相談をする人の有無+

03960 (新しく入ってきた人の中の)

03970 (1=いる /

03980 2=いない /

03990 9=不明) ;

04000 Q150301=子どもの遊び相手の有無 (農家の子どもの中の)

04010 (1=いる /

04020 2=いない /

04030 9=不明) ;

04040 Q150302=子どもの遊び相手の有無 (新しく入ってきた家の子どものの中の)

04050 (1=いる /

04060 2=いない /

04070 9=不明) ;

04080 Q150401=困った時に頼りにしている家の有無 (農家の人の中の)

04090 (1=ある /

04100 2=ない /

04110 9=不明) ;

04120 Q150402=困った時に頼りにしている家の有無 (新しく入ってきた人の中の)

04130 (1=ある /

04140 2=ない /

04150 9=不明) ;

04160 Q150501=葬式の時など、手伝いに行く家の有無 (農家の人の中の)

04170 (1=ある /

04180 2=ない /

04190 9=不明) ;

04200 Q150502=葬式の時など、手伝いに行く家の有無 (新しく入ってきた人の中

04210 での)

04220 (1=ある /

04230 2=ない /

04240 9=不明) ;

04250 Q1601:Q1618=(1=そうではないと思う /

04260 2=まあそうではないと思う /

04270 3=どちらともいえない /

04280 4=まあそうだと思う /

04290 5=そうだと思う /

04300 9=不明) ;

04310 Q1601 = 地域社会の中で生活していくには長いものにまかれるしかない (*) ;

04320 Q1602 = 地域社会は住民が協力して住みやすくするように心がけるべきだ (*) ;

04330 (*) ;

04340 Q1603 = 地域社会は自分の生活のよりどころである (*) ;

04350 Q1604 = 今住んでいる地域はたまたま生活しているにすぎない (*) ;

04360 Q1605 = 住民は生活防衛のため進退すべきだ (*) ;

04370 Q1606 = 地域社会は一定の自治性をもつべきだ (*) ;

04380 Q1607 = 各自が自己の身分をおきまえてもめごとのないよう心がけるべきだ (*) ;

04390 (*) ;

04400 Q1608 = 自己の生活と地域社会との関係はべつだ (*) ;

04410 Q1609 = 自己の生活上の不満や要求はできるだけ行政に働きかけるべきだ (*) ;

04420 (*) ;

04430 Q1610 = 人と人の和は大切にすべきだ (*) ;

04440 Q1611 = 近隣のつきあひは面倒だ (*) ;

04450 Q1612 = 地域的な問題は自分がかかわらなくても誰かがよくしてくれるだろう (*) ;

04460 (*) ;

04470 Q1613 = 個々人のプライバシーは十分に守るべきだ (*) ;

04480 Q1614 = 旧来からのしきたりを大切にすべきだ (*) ;

04490 Q1615 = 今住んでいる地域には関心や愛着はない (*) ;

04500 Q1616 = 住みよい地域社会にするために自ら進んで活動しようと思う (*) ;

04510 Q1617 = 町内会または区会などのつきあひはやめたほうがよい (*) ;

04520 Q1618 = 近隣関係などは何の意味もない (*) ;

DATA SET NAME : A201007.RCSCPL.DATA

Table with columns for record number, status, and data values. Includes records 02250 through 02800.

Table with columns for record number, status, and data values. Includes records 02810 through 03360.

DATA SET NAME : A201007.RCSCPL.DAT4

Table with columns for record number, status, and data values. Includes records 03370 through 03920.

Table with columns for record number, status, and data values. Includes records 03930 through 04800.

TSS UTILITY COMMAND V10L20 LIST DATE 87.12.09 TIME 21.32.
DATA SET NAME : A201007.RCSCPL.DATA

22410 2 7 29 5322122212 343433344424513342
22420 2 7 30 157999256159325259322119924199 99999 999928881 25 10018888 5
22430 2 7 30 88888888888888888888888888888888 2522 31111139240
22440 2 7 30 6921992111 35433333332344533
22450 2 7 31 147119242996732793172693132499 99999 999913111999999918887 5
22460 2 7 31 88888888888888888888888888888888 2322 33333333630
22470 2 7 31 442211211 34431541351252311
22480 2 7 32 1321292302393 61699 99999 99999 99999 999938881 23 50988883 3
22490 2 7 32 88888888888888888888888888888888 3999 33311131440
22500 2 7 32 622212211 45155545551152111
22510 2 7 33 1361292352793132693101696651799 99999 999938881 60 90188887 5
22520 2 7 33 88888888888888888888888888888888 3913 33333333141
22530 2 7 33 6311911111 959999999999999999999
22540 2 7 34 156119258279351194332135 91695 71699 999914311 40 270188887 6
22550 2 7 34 88888888888888888888888888888888 9999 33313131119
22560 2 7 34 612211919 959999999999999999999
22570 2 7 35 14712524722332121919726931726967119966829928881
22580 2 7 35 88888888888888888888888888888888 2992 33311122140
22590 2 7 35 112991212 45144423512441411
22600 2 7 36 1391592372593 71696741796682299 99999 999928881 48 580188887 5
22610 2 7 36 88888888888888888888888888888888 1311 33331133440
22620 2 7 36 631211211 35232353132531311
22630 2 7 37 1679999 99999 99999 99999 99999 99999 999913111 50 300388889 1
22640 2 7 37 88888888888888888888888888888888 1392 33323333230
22650 2 7 37 6423452 37 351612
22660 2 7 38 1311199 99999 99999 99999 99999 999917531 26 150188887 6
22670 2 7 38 88888888888888888888888888888888 2222 99339992440
22680 2 7 38 6119991919 951155595511551511
22690 2 7 39 1492393171193162199 99999 99999 99999 999913322 14 90388885 3
22700 2 7 39 88888888888888888888888888888888 1222 23312111123
22710 2 7 39 3212991211 5443355355255121
22720 2 7 40 14459225293172693152696682299 99999 999928881 55 300188887 5
22730 2 7 40 88888888888888888888888888888888 9999 29999991400
22740 2 7 40 6999991919 499999999999999999999
22750 2 7 41 1231292202293 12799 99999 99999 99999 999938881999999911992 3 10
22760 2 7 41 3221111113131 31312131313131 2595 11211111140
22770 2 7 41 4122221212 3443355355355151
22780 2 7 42 1511925259317269317696732599 99999 99999 999928881400 400188887 4
22790 2 7 42 88888888888888888888888888888888 1491 32212112340
22800 2 7 42 9999999999 999999999999999999999
22810 2 7 43 1711192629593442943111951811951626951416916111 32 300188887 7
22820 2 7 43 88888888888888888888888888888888 2322 33312123230
22830 2 7 43 6511111111 355155535531234441
22840 2 7 44 1291192262193 32799 99999 99999 99999 999912111 9 150711992 3
22850 2 7 44 4434243444443 2332424344433 2933 23312231240
22860 2 7 44 6411111111 55544444433443331
22870 2 7 45 1481292522499 99793181699 99999 99999 99999 999948881 20 200388885 4
22880 2 7 45 88888888888888888888888888888888 2393 33333393940
22890 2 7 45 6319991911 454545425115151511
22900 2 7 46 1391192370261114262799 99999 99999 999913211 45 150288887 4
22910 2 7 46 88888888888888888888888888888888 3923 33311111240
22920 2 7 46 6622991212 5545555155151511
22930 2 7 47 160129252293291293251299 99999 99999 999948881 95 700188884 5
22940 2 7 47 88888888888888888888888888888888 2222 33399993240
22950 2 7 47 6311991111 15515553551551511
22960 2 7 48 1321192312196562793 32993 12999 99999 999916211 54 520188887 5

22970 2 7 48 88888888888888888888888888888888 3333 33331312230
22980 2 7 48 5212221211 55324455512532311
22990 2 7 49 1481192502793251199 99999 99999 99999 999917211 34 360188885 3
23000 2 7 49 88888888888888888888888888888888 1992 33399993300
23010 2 7 49 6312991212 452444533422442321
23020 2 7 50 160159256259319119332129427195 11799 999928881 62 458188887 6
23030 2 7 50 88888888888888888888888888888888 1111 33331293140
23040 2 7 51 159159258259310194282195 91695 726968827913321 30 180188887 7
23050 2 7 51 88888888888888888888888888888888 2392 33322221240
23060 2 7 51 6411111911 54544443433491331
23070 2 7 52 155199248293201993192999 99999 99999 999913311 50 650188885 4
23080 2 7 52 88888888888888888888888888888888 9999 33999993340
23090 2 7 52 6619991911 999999999999999999999
23100 2 7 53 132119232193 82693 42799 99999 99999 999911221 28 45711994 4
23110 2 7 53 3231143434331 3111111111121 3323 33311234128
23120 2 7 53 652211212 35514211533512211
23130 2 7 54 1401192402121693 92696442799 99999 999911321 45 900988887 5
23140 2 7 54 88888888888888888888888888888888 1911 33333333440
23150 2 7 54 652211212 2531555355151111
23160 2 7 55 1401192342293116893 92699 99999 99999 99991321 26 150591994 4
23170 2 7 55 3232331413134 313333312232 3411 32221132128
23180 2 7 55 422211212 34243333513333323
23190 2 7 56 133129232793 91693 61699 99999 99999 999938881 30 180511994 4
23200 2 7 56 44449493939494 41414223432333 3323 23311133421
23210 2 7 56 1222222112 2544444442533311
23220 2 7 57 6619991911 999999999999999999999
23230 2 7 57 1351192312193 92693 5279672299 99999 999914311 44 270188887 5
23240 2 7 58 88888888888888888888888888888888 9999 3332334240
23250 2 7 57 6511111111 155155515515151511
23260 2 7 58 1621292632293321294322295102695 517968717938881 60 600188888 7
23270 2 7 58 88888888888888888888888888888888 1113 33339933540
23280 2 7 58 6912111111 45499999519551511
23290 2 7 59 1351192342493 42995 42999 99999 99999 999916212 359999621993 4
23300 2 7 59 332333232323 21212121212121 3599 33331232128
23310 2 7 59 6621111111 5334444444444444
23320 2 7 60 1621999 99999 99999 99999 99999 99999 999938881 70 620421999 1
23330 2 7 60 9499999999999999 9199999999999999 3992 33211992140
23340 2 7 60 6929221212 999999999999999999999
23350 2 7 61 1271192262793 42995 42999 99999 99999 999912313988998711993 4
23360 2 7 61 2323131923232 222932233323 3311 21211111330
23370 2 61 2929292919 14343443343453332
23380 2 7 62 178129348194648229521699 99999 99999 999916212 58 136188887 4
23390 2 7 62 88888888888888888888888888888888 1122 33332213140
23400 2 7 62 6312991212 35515451253231311
23410 2 7 63 16011926027935129433229512695121699 999938881 35 100288887 6
23420 2 7 63 88888888888888888888888888888888 9999 29999931540
23430 2 7 63 5999191911 244999999999999999999
23440 2 7 64 1471192472499 99999 99999 99999 99999 999916211 22 90541991 2
23450 2 7 64 4299999999999999 3199999999999999 1313 99299991400
23460 2 7 64 6699991111 999999999999999999999
23470 2 7 65 1431192382493121693102699 99999 99999 999913321 47 320531994 4
23480 2 7 65 433343333433 212223232332 1313 33322133440
23490 2 7 65 6512111111 34445431452131511
23500 2 7 66 1471299 99999 99999 99999 99999 99999 999938881 27 118531994 5
23510 2 7 66 4231233232331 31313133332321 1553 22211993221
23520 2 7 66 6522992211 154345124511532421

TSS UTILITY COMMAND V10L20 LIST DATE 87.12.09 TIME 21.32.27
DATA SET NAME : A201007.RCSCPL.DATA

23530 2 7 67 9 99999 99999 99999 99999 99999 99999 999948881 38 50028888099
23540 2 7 67 88888888888888888888888888888888 3322 22112191310
23550 2 7 67 4599999191 55355555359534333
23560 2 7 68 9 99999 99999 99999 99999 99999 99999 999914331 30 5083114099
23570 2 7 68 9999999999999999 9999999999999999 9999 99999994232
23580 2 7 68 3219991919 999999999999999999999
23590 2 7 69 9 99999 99999 99999 99999 99999 99999 9999938881 45 20064239099
23600 2 7 69 9999999999999999 9999999999999999 9999 99999991430
23610 2 7 69 392292211 359999999999999999999
23620 2 7 70 9 99999 99999 99999 99999 99999 99999 9999999888999998888099
23630 2 7 70 88888888888888888888888888888888 1323 3321913440
23640 2 7 70 9911991111 35443344554455544
23650 2 7 71 192999 92999 99999 99999 99999 99999 99999 999948881 30 450188880 2
23660 2 7 71 88888888888888888888888888888888 9999 33339394340
23670 2 7 71 4212991211 35515553551551514
23680 2 7 72 9 99999 99999 99999 99999 99999 99999 99999916211 26 2652199099
23690 2 7 72 4444341434444 33333333333333 1999 3322223440
23700 2 7 72 6512991211 15915551551151511
23710 2 8 1 15115925259329159323296782799 99999 999928881 50 620188887 5
23720 2 8 1 88888888888888888888888888888888 9999 33319991140
23730 2 8 1 4212991211 35515553551551514
23740 2 8 2 131159232593 81693 51696552199 99999 999928881 40 300988887 5
23750 2 8 2 88888888888888888888888888888888 9999 999933140
23760 2 8 2 6199191919 45519554513551311
23770 2 8 3 157119252793311193302194 41795 917952611916211 34 150421997 7
23780 2 8 3 3333234342223 1111111111122 3321 32231191310
23790 2 8 3 4312221212 555455515155444
23800 2 8 4 1591592582593301594312595 52695 32795 117928881 53 600188887 7
23810 2 8 4 88888888888888888888888888888888 2211 3333332340
23820 2 8 4 6219991911 15593451452551411
23830 2 8 5 157159256259329139326119324196802799 999928881 48 300188887 6
23840 2 8 5 88888888888888888888888888888888 3911 33211131310
23850 2 8 5 6312991212 35515551515551511
23860 2 8 6 137159237293111495 8269672799 99999 999928881 40 455188887 5
23870 2 8 6 88888888888888888888888888888888 9999 3321233140
23880 2 8 6 632211212 35413343515131943
23890 2 8 7 15919925629334125442255 91695 61995 119928881 48 350188887 7
23900 2 8 7 88888888888888888888888888888888 1312 3222132140
23910 2 8 7 6322121212 44413511112531311
23920 2 8 8 1561592525933015942995102699 42799 999928881 45 400188887 6
23930 2 8 8 88888888888888888888888888888888 2222 3333934140
23940 2 8 8 9919999999 15995959959595911
23950 2 8 9 141129431293842793271796161697152699 999938881 50 470188887 6
23960 2 8 9 88888888888888888888888888888888 9999 33332339929
23970 2 8 9 9999999999 359959595953551411
23980 2 8 10 148199245299672199722999109391719931319928881 20 300188887 7
23990 2 8 10 88888888888888888888888888888888 1111 39999934240
24000 2 8 10 1919191919 15515551151551511
24010 2 8 11 14719247249322193181199 99999 99999 99999 99991321 43 280188885 4
24020 2 8 11 88888888888888888888888888888888 1221 3333333340
24030 2 8 11 6599991919 255145245115154511
24040 2 8 12 159159252593311194262799 31995 12999 9999288819999999188887 6
24050 2 8 12 88888888888888888888888888888888 9991 29299993340
24060 2 8 12 5119991919 25513494512541511
24070 2 8 13 91199 92499 91699 91999 91999 99999 99991993998998988880 5
24080 2 8 13 88888888888888888888888888888888 3399 39299931221

24090 2 8 13 331111919 9599999999999595399
24100 2 8 14 1591593 91294272195 51695 31699 99999 999938881 19 455188887 5
24110 2 8 14 88888888888888888888888888888888 3393 33211112430
24120 2 8 14 6512991212 45444354251353331
24130 2 8 15 1561299 99999 99999 99999 99999 99999 9999388819999999188899
24140 2 8 15 88888888888888888888888888888888 1311 99299991140
24150 2 8 15 6929991212 35419532512341421
24160 2 8 16 14515925259334259321163182994 91699 999928881 42 450188887 6
24170 2 8 16 88888888888888888888888888888888 1912 99239932140
24180 2 8 16 6412991212 35415555515151911
24190 2 8 17 1 99992721993629944219953823951316991116928881 37 350188887 8
24200 2 8 17 88888888888888888888888888888888 9919 33221232140
24210 2 8 17 4399911919 999999999999999999999
24220 2 8 18 131992329952593 51993 51994 12999 999928881 30 300188887 6
24230 2 8 18 88888888888888888888888888888888 9999 32211121140
24240 2 8 18 6922121211 15515931551151511
24250 2 8 19 157159252593321594332595102699 99999 999928881 50 600188887 5
24260 2 8 19 88888888888888888888888888888888 9999 3339933340
24270 2 8 19 522212211 44135432344231311
24280 2 8 20 14119292293 71693 52995 91999 99999 999917311 30 100288884 5
24290 2 8 20 88888888888888888888888888888888 3923 31213123240
24300 2 8 20 621121111 35434443421551432
24310 2 8 21 162159258259334159433259512695 91695 716928881 54 364188887 7
24320 2 8 21 88888888888888888888888888888888 1111 33333333140
24330 2 8 21 6119191919 25514551551551511
24340 2 8 22 15619925629335296811996822999 99999 999928881999 450188887 5
24350 2 8 22 88888888888888888888888888888888 2223 3331113240
24360 2 8 22 6619991919 955125595151551511
24370 2 8 23 1702999 99999 99999 99999 99999 99999 9999488819999999988889 1
24380 2 8 23 88888888888888888888888888888888 2211 22111111140
24390 2 8 23 6199991212 24444443514433932
24400 2 8 24 1301192272199 99999 99999 9999

TSS UTILITY COMMAND VIOL20 LIST DATE 87.12.09 TIME 21.32.

DATA SET NAME : A201007.RCSCPL.DATA

33610	414	30	1451192432193101693	92699	99999	99999	99999	99999	99999	99999	23	56642454	4		
33620	414	30	232323444444332	21222222222322	1412	33321132130									
33630	414	30	5621212121	31415211352152311											
33640	414	31	1461192422793141693111699	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	32	55652454	4		
33650	414	11	2323233444233	2323332344333	3521	32321131330									
33660	414	11	2621212121	35314454151151311											
33670	414	12	1431192402393171693152699	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	30	68642455	4		
33680	414	12	3434344449434	21212123232323	3434	11111133330									
33690	414	12	4621121291	35315555151531311											
33700	414	13	1411192362193	91693	41799	99999	99999	99999	99999	99999	451	60	22642454	4	
33710	414	13	3433344444241	41444441414141	1532	33313224630									
33720	414	13	3621212121	15515531353151511											
33730	414	14	1431192432393172693152699	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	12451	26	58652595	4	
33740	414	14	4442414343231	31323131313331	1533	32212133330									
33750	414	14	3621992121	4514441135141411											
33760	414	15	1371192372993	82693	42699	99999	99999	99999	99999	99999	99999	1411999	67	6252454	4
33770	414	15	2323233443333	3133312393232	1533	33211933130									
33780	414	15	4621212129	15513442522412311											
33790	414	16	1401192382793112693	92693	21799	99999	99999	99999	99999	99999	16441	24	60642594	5	
33800	414	16	2319232323223	323222222232	2333	32311122229									
33810	414	16	3621292121	355444533533311											
33820	414	17	1401192352493111693	9269682799	99999	99999	99999	99999	99999	99999	13441	23	59642257	5	
33830	414	17	3223233433123	31232112223333	2331	32231222230									
33840	414	17	3222212121	354355453531523411											
33850	414	18	1371192362493112693	81699	99999	99999	99999	99999	99999	99999	16441	27	60742454	4	
33860	414	18	2322232334343	1131111333333	2392	32311131330									
33870	414	18	1391212121	35314453315452331											
33880	414	19	154119221699	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	14451	24	76642593	3
33890	414	19	42429344443231	42424132314241	2423	3211113230									
33900	414	19	4612992121	355154415521532321											
33910	414	20	1401192342493	81693	61799	99999	99999	99999	99999	99999	14441	40	62642454	4	
33920	414	20	24141323434321	21222111223333	2312	33111113621									
33930	414	20	2521212121	343544515514433311											
33940	414	21	1391192342393111693	92699	99999	99999	99999	99999	99999	99999	16441	30	77652594	4	
33950	414	21	2323344223334	11234433232313	1531	32312131322									
33960	414	21	2621212121	15524523251533521											
33970	414	22	1311192292993	41993	21993	91999	99999	99999	99999	99999	99999	98852493	5		
33980	414	22	3424444444494	2323343444434	1392	31331112330									
33990	414	22	1321212221	25454531351333131											
34000	414	23	1451192472931826931526980179474	1799	99999	99999	99999	99999	99999	99999	12451	42	84641997	6	
34010	414	23	4444444444444	323222223333	2433	32321133340									
34020	414	23	4522991111	15414451515154511											
34030	414	24	145119243239312693	313169682799	99999	99999	99999	99999	99999	99999	1451999	67	6522297	2	
34040	414	24	43422329433122	313141424242	2433	33231333130									
34050	414	24	1921992121	4524422513332421											
34060	414	25	14812924722932279312699	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	8881	18	57752595	4
34070	414	25	323133344323	323133133232	1313	21121123230									
34080	414	25	2522212111	1444334543252333											
34090	414	26	143119242239315269312699	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	14441	24	58651994	4
34100	414	26	332323343332	323232323232	1533	32232323230									
34110	414	26	3621121212	155144314511521511											
34120	414	27	1421192342793112693	81696702799	99999	99999	99999	99999	99999	99999	13521	28	55642457	5	
34130	414	27	4434323443232	222222213232	2332	32321333240									
34140	414	27	3621212121	45244315315152421											
34150	414	28	1431192402393141693102699	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	13461	33	69642595	4	
34160	414	28	13331343441112	1111131111131	3333	32311113330									

TSS UTILITY COMMAND VIOL20 LIST DATE 87.12.09 TIME 21.32.27

DATA SET NAME : A201007.RCSCPL.DATA

34730	414	47	33243334339233	22232222223232	2533	22211113330										
34740	414	47	2521992121	3442334352243232												
34750	414	48	1361192352493	32793	31799	99999	99999	99999	99999	99999	99999	12451	20	50642493	4	
34760	414	48	9312223333333	212222223333	2323	32333132130										
34770	414	48	2621212121	35515554515133111												
34780	414	49	1341192342393132693122699	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	12441	35	50622494	4	
34790	414	49	13142333331423	2121212222333	2323	32211121129										
34800	414	49	3522121212	15345554515133311												
34810	414	50	1451192392393152693101693	81699	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	16441	20	57652454	5	
34820	414	50	2242324444232	2111111122222	2321	3333223430										
34830	414	50	3022212121	15515551515133111												
34840	414	51	14211922312993101693	71693	22999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	14451	21	50652594	5	
34850	414	51	34323333344232	1131111213122	2392	32313233310										
34860	414	51	2621212121	4534444451333411												
34870	414	52	1361192322793	71693	51799	99999	99999	99999	99999	99999	99999	12461	20	50651994	4	
34880	414	52	3313333434232	111111113322	2593	22211121123										
34890	414	52	2621212121	15544555151513311												
34900	414	53	1551192522993241199	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	14451	28	61652355	3	
34910	414	53	3432344449943	3242412994433	2522	33393993230										
34920	414	53	3691999191	35955551251151311												
34930	414	54	1511192502393201793141699	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	16441	28	60652595	4	
34940	414	54	3322122349332	313132313332	2423	32211133250										
34950	414	54	5211212121	4444545351523211												
34960	414	55	1421922412993111693	91699	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	8881	23	56652594	4
34970	414	55	3322333333232	1122212232323	2991	21212123230										
34980	414	55	2521212121	3552455352253121												
34990	414	56	1431192382393122699	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	16451	22	64652494	3	
35000	414	56	23123131444441	314141414444	9999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	11124229				
35010	414	56	422222222	35544455153433111												
35020	414	57	1551192452199	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	12451	24	62752351	2
35030	414	57	3431343443233	3233423233343	2332	3211113240										
35040	414	57	3522922122	55513551151513111												
35050	414	58	135119234299311793	12799	99999	99999	99999	99999	99999	99999	99999	16441	24	57742594	4	
35060	414	58	231212234322	212121212222	2593	32211133221										
35070	414	58	112221222	3553355151532311												

TSS DATA COMMAND V10L20 LIST DATE 87.12.09 TIME 21.32.

DATA SET NAME : A201007.RCSCPL.DATA

DATA SET NAME : A201007.RCSCPL.DATA

Table with columns for file number, date, time, and data content. Rows include file numbers like 35850, 35860, 35870, etc., and their corresponding data.

Table with columns for file number, date, time, and data content. Rows include file numbers like 36970, 36980, 36990, etc., and their corresponding data.

Table with columns for file number, date, time, and data content. Rows include file numbers like 36410, 36420, 36430, etc., and their corresponding data.

Table with columns for file number, date, time, and data content. Rows include file numbers like 37530, 37540, 37550, etc., and their corresponding data.

参考文献リスト

- * 高橋 恒、大都市における地域的な生活空間の構造に関する研究、日本工業大学研究報告集第11巻、1981、10
- * 玉城 哲、日本の社会システム、むらと水からの再構成、農文協、1982
- * 山森芳郎、都市化にともなう農村地域構造の再編性に関する地域計画学的研究、学位論文、1983
- * 佐藤洋平、大都市周縁地域の土地利用の課題、農業土木学会誌、第53巻、第7号1985
- * 蓮見音彦、現代農村の社会理論、時潮社、1970、
- * 二宮哲夫他、混住化社会とコミュニティ、御茶の水書房、1985
- * 福武直編、農村社会と農民意識、有斐閣、1972
- * 鈴木栄太郎、日本農村社会学原理、時潮社、1940
- * 日本農民の社会的性格、
- * Howard Newby, International Perspectives in Rural Socio-logy, 1978、
- * 磯村英一他、コミュニティの理論と政策、東海大学出版会、1983
- * 奥田道大他、コミュニティの社会設計、有斐閣選書、1985、
- * 奥田道大、都市コミュニティの理論、東京大学出版会、1983、
- * 磯村英一他編、都市形成の論理と住民、東京大学出版会、1971
- * 鈴木広編、コミュニティ・モラルと社会移動の研究、1978、アカデミア出版会、
- * 木内信蔵他、集落地理講座、第1巻・総論、1957、
- * Demangeon. A la Geographie de l' Habitat Rural Rapport de la Commission de l' Habitat Rural, 1928
- * 矢嶋仁吉、集落地理学、古今書院、1956、
- * 矢嶋仁吉、日本の集落、古今書院、1967
- * 木村 礎、日本村落史、弘文堂、1978、
- * 上野和男他、民俗研究ハンドブック、吉川弘文館、1978、
- * 柳田国男、民俗学辞典、1951、
- * 福田アジオ、歴史学と民俗学・民俗学評論8、三一書房、1972
- * 谷野 陽、都市・農村論と農村整備、明日の都市③、中央法規、1980、
- * 蓮見音彦、混住社会の拡大、明日の都市③、中央法規、1980、
- * 矢口光子、農村地域の混住化とその実態、明日の都市③、中央法規、1980、
- * 相川哲夫他、地域計画・その理論と実験、農林統計協会、1978
- * 青木志郎他、混住社会の形成、特に人々の行動を決定している要因に関する研究、農村生活総合研究センター、1978
- * 相川哲夫他、混住化する農村の整備方策、農村開発企画委員会、1982
- * 相川哲夫他、農村地域における混住化の実態と空間構成にかんする調査報告書、農水省構造改善局、1983
- * 佐藤洋平他、都市周辺農村の居住地形成と住民の生活意識構造（緑農住区開発計画技術調査報告書）、1983

- * 石川英夫他、混住社会の定住構想、農村開発企画委員会、1977
- * 石光研二他、緑農住区開発計画技術調査報告書、1986
- * 鎌田元弘：都市近郊農村地域における環境計画の研究、日本建築学会学術講演梗概集
- * 農林水産省情報統計部：1980年世界農林業センサス茨城県統計書、1982、
- * 日本建築学会農村計画委員会：大都市近郊農村の特質とその計画的課題、昭和55年秋季大会研究協議会資料、1980
- * 滝沢雄三：首都近県混住地域の類型化に関する研究、日本建築学会学術講演梗概集、1986
- * 土肥博至ほか：都市近郊地域におけるコミュニティを保全し、活性化する都市開発条件調査、(社)日本住宅協会、1985
- * Colin Clark: The Conditions of Economic Progress, London, 1940
- * 山崎不二夫ほか：現代日本の都市スプロール問題(下)、大月書店、1978
- * 服部二郎：都市化の地理、古今書院、1973
- * 鎌田元弘、大都市周辺地域の混住化類型とその計画的課題に関する考察、日本建築学会計画系論文報告集、1987
- * 奥田道大、コミュニティ形成の理論と住民意識、磯村英一他、都市形成の理論と住民第Ⅲ章第1節、p139、東大出版会、1971
- * 菱山謙二・岡本行雄、筑波研究学園都市住民の意識調査研究—コミュニティ意識の研究—(下)、都市問題Vol172、No9、1981
- * 重村力他、家族・地域関係からみた農村の混住化と居住者類型、日本建築学会大会学術講演梗概集、1986
- * 鎌田元弘、都市近郊混住化集落の集落類型とその特性に関する考察、その1 地域交流からみた集落の特性、日本建築学会計画系論文報告集、1987
- * 小山智士、ルポ混住列島をゆく、家の光協会、1982
- * 中村俊夫、三和郷土誌、著者発行、1977、を参照
- * 杉山 博他、茨城県地名辞典、角川書店、1983
- * 柳沢永一、集落形態と混住化の動向、筑波大学修士論文、1981
- * 渡辺善次郎、都市近郊農業史論、都市と農村の間、論創社、1983
- * The Garden City, E.Haward (「明日の田園都市」長素 連訳、SD選書、1968)
- * 佐々木宏、コミュニティ計画の系譜、SD選書、1971
- * L.Munford The City in History (「都市の文化」生田 勉、森田茂介訳)
- * F.L.Wright, The Living City (「ライトの都市論」谷川正己訳、1968)
- * C.A.ペリー、近隣住区論・新しいコミュニティ計画のために、鹿島出版会
- * 松本四郎、日本近世都市論、東京大学出版会、1983
- * 木村 礎、村の語る日本の歴史近世編②、そして文庫、1983
- * 内務省地方局有志、田園都市と日本人、講談社学術文庫、1980
- * 長瀬要石他、田園型社会の展望、筑波書房、1987
- * 石見 尚、日本型田園都市論、柏書房、1985
- * 根岸卓郎、新しい国づくりを目指して、春秋社、1985
- * Howard Newby International Perspectives in Rural Sociology.1978

- * 石見 尚、混住社会化にともなう農村集落の遷移過程、農業経済研究、第 49 卷 4 号
1978
- * 菅原辰幸、混住社会化する農村地域開発のための基礎研究、広島工業大学研究報告集
1979
- * 井上和衛、都市化と農業公害、労働科学研究所、1971
- * 山名 元、集落居住区域の画定とその整備について、日本建築学会学術公演梗概集、
1979
- * 富田祥之、変貌する農村、現代のエスプリ・変貌する農村
- * 上笹 恒、筑波研究学園都市の住民意識、都市問題、1982
- * 土肥博至他、住民のコミュニティ意識からみた郊外住宅地の特性に関する考察、昭和
60年度都市計画学術研究論文集、1985
- * 杉山 博他、茨城県地名大辞典、角川書店、1983
- * 中村俊夫、三和郷土史、著者発行、1977

研究業績

1987年3月現在

研究論文

- * 単著・施設園芸農家における生産、生活空間に関する研究 千葉工業大学建築学科卒業論文、1980.3
- * 単著・農村集落における外出行為から見た圏域性に関する考察 筑波大学大学院環境科学研究科修士論文、1982.3
- * 共著・都市近郊商業地域における商業施設に関する研究 日本建築学会地域施設計画研究シンポジウム、地域施設計画研究2、1984.4
- * 単著・大都市周辺地域の混住化類型とその計画的課題に関する考察 日本建築学会計画系論文報告集、1987.5
- * 単著・都市近郊地域における混住化集落の類型化とその特性に関する考察 その1地域交流から見た集落の特性 1987.12

学会発表

- * 共同・農村地域における発生行為量の特性 その1発生行為量の概要 日本建築学会学術講演梗概集、1981.9
- * 共同・農村地域における発生行為量の特性 その2男女別、年齢別特性 日本建築学会学術講演梗概集、1981.9
- * 共同・農村地域における発生行為量の特性 その3生活圏域別特性 日本建築学会学術講演梗概集、1981.9
- * 共同・農村地域における発生行為量の特性3 その1近隣度・発生行為量からみた行為の特性 日本建築学会学術講演梗概集、1982.10
- * 共同・農村地域における発生行為量の特性3 その2圏域別発生行為量の割合からみた行為の特性 日本建築学会学術講演梗概集、1982.10
- * 共同・発生行為量からみた施設・スペースの特性 その1施設・スペースにおける発生行為量の比較 日本建築学会学術講演梗概集、1983.9

- * 共同・発生行為量からみた施設・スペースの特性 その2 施設・スペースの発生行為内容と、施設・スペースの相互関連について 日本建築学会学術講演梗概集、1983.9
- * 共同・都市周辺農村地域における商業環境 その1 商業環境の変遷 日本建築学会大会学術講演梗概集、1984.10
- * 共同・都市周辺農村地域における商業環境 その2 消費者行動から見た商業環境 日本建築学会大会学術講演梗概集、1984.10
- * 共同・都市近郊農村地域における環境計画の研究 その1 混住から見た集落の類型化 日本建築学会大会学術講演梗概集、1985.10
- * 共同・都市近郊農村地域における環境計画の研究 その2 新住民の属性及び期待と評価 日本建築学会大会学術講演梗概集、1985.10
- * 共同・都市近郊農村地域における環境計画の研究 その3 地域活動の実態と住民交流 日本建築学会大会学術講演梗概集、1985.10
- * 共同・都市近郊農村地域における環境計画の研究 その4 混住化形態と集落の空間特性 日本建築学会大会学術講演梗概集、1985.10
- * 共同・都市近郊農村地域における環境計画の研究 農村計画学会学術研究発表要旨集 1986.4
- * 単独・都市近郊農村地域における環境計画の研究 その1 混住から見た首都周縁地域の類型化 日本建築学会大会学術講演梗概集、1985.8

調査報告・研究レポート

- * 共著・古河・岩井地域商業近代化計画岩井地区報告書 古河・岩井地域商業近代化計画策定委員会、1982
- * 共著・岩井の将来都市像と都心型商業空間（岩井市地域小売商業近代化対策調査報告書） 茨城県岩井市商工会、1983.3
- * 共著・農村生活空間の構成 農村生活総合研究センター、生活研究レポート、1984.3
- * 共著・岩井センターモールの実現に向けて（たのしい商店街づくり推進事業報告書） 岩井市商業近代化推進協議会、1985.3
- * 共著・新しい商店街を目指して（三和町地域小売商業近代化対策調査報告書） 三和町商工会、1985.3

- * 共著・菅平高原研究プロジェクト報告書 筑波大学環境デザイン研究室、1985.3
- * 共著・都市近郊農村地域におけるコミュニティを保全し、活性化する都市開発条件調査報告書、(社)日本住宅協会、1985.3

基本計画・設計

- * 共同・茨城県真壁郡協和町、多目的研修集会施設基本計画（新農業構造改善事業）
1981.1
- * 共同・茨城県真壁郡明野町、農業機械修理・研修センター基本計画
（新農業構造改善事業）、1981.2
- * 共同・茨城県真壁郡明野町、農業者健康管理トレーニングセンター基本計画
（新農業構造改善事業）、1981.2
- * 単独・平井邸（住宅の基本計画および実施計画）、群馬県桐生市菱町、1987
- * 単独・増川邸（店舗併用住宅の基本計画および実施計画）、埼玉県本庄市銀座 1987

あとがき

このテーマの研究を始めたのは、1983年頃である。当時、明確な問題意識も形成されておらず、気のおもむくままにスタートして、今日一応のまとめをみることができたのは、終始温かくご鞭撻いただいた筑波大学教授 土肥博至先生のおかげである。特に先生の明確な構成員によるご指導がなければ今日の完成はありえなかった。

思い返せば千葉工大在学中に、私に研究の道を開いてくださったのは、当時の私の指導教官であった宇都宮大学教授 宮沢鉄藏先生、ならびに共同研究をすすめていた当時の東京工業大学教授 青木志郎先生及びその研究室の皆様であった。特に当時の青木研究室の筒井義富氏（現在・農水省農業土木試験場）とは、「農村」という私にとって新鮮なフィールドを走り回った。その後、筑波大学に道を開いてくださった前筑波大学教授 小島重次先生、そして修士課程のときの私の指導教官である筑波大学教授 谷村秀彦先生には、研究者としての厳しさを教えられた。また、谷村先生には、当時、土肥先生を紹介していただき、今年、私を古巣の筑波大学環境科学研究科の技官として研究を続けられるようにしていただいた。いずれの方々も私にとっては大恩人で心から感謝する次第である。

このたび論文をまとめるにあたり、筑波大学芸術学系の吉岡道隆教授、池原謙一郎教授、栗原嘉一郎教授、筑波大学社会工学系の佐藤洋平助教授には大変にお世話になった。また、研究の協力者で私のよき相談相手である筑波大学環境デザイン研究室の諸先生方、先輩、学生の皆さんにも謝意を表するとともに、一応の成果を得た喜びを分かちたいと思う。そして、最後にこの論文の完成を見ずに他界した我が母にも長年の労を感謝したいと思う。

昭和62年師走

鎌田元弘